大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 X

1990年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1997.3

財団法人　大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告X

1997. 3

瓜破遺跡

東南地区のほぼ全域にトレンチを設定して調査した。主な遺構は中～近世の溝・井戸である。

長原遺跡

中央地区で水路を伴う飛鳥時代の水田を検出した。東南地区では古川辺川、長原式土器と石器が投棄された開析谷、弥生時代の導水路などを検出した。

遺物では後期旧石器時代から弥生時代にかけてのサヌカイト製石器が見つかっている。なかでも開析谷からは未製品を含む石鏃・石錐と多量のクサビに関係する資料が出土した。これらは縄文時代晩期の石器生産の実態を知ることのできる良好な資料である。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

X

1990年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1997.3

財団法人　大阪市文化財協会

開析谷出土の石器遺物

長原・瓜破遺跡発掘調査報告X　正誤表

頁	行・位置	誤	正
例言1頁目	4	佐藤隆・高橋工	佐藤隆・櫻井久之・高橋工
2	2	52	53
23	1	経	径
46	11	形成	成形
48	2	平城京Ⅲ期	平城京Ⅲ
62	3	側図	側縁
英文要旨iv	26	official	officiator's
図版27	下右	(番号欠落)	125

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 X

1990年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1997.3

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

本報告書は、1990年度の大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告である。1974年の地下鉄谷町線工事から始まった長原遺跡の発掘調査も今年で23年目を迎え、ここに「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Xを刊行するはこびとなった。報告書10冊に蓄積された成果は必ずや学術研究に寄与し、国民の共有財産である文化遺産を後世に伝えるために重要な役割を果たすであろう。大阪市内において、文化財保護思想の普及と啓発のために今後も必要な発掘調査を行い、さらに検討を加え、研究を深めてゆく所存である。この報告書が広く活用され、歴史研究の一助となれば幸いである。

末筆ながら関係各位に深甚なる感謝の念を捧げて、報告書刊行の挨拶とする。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長　佐治　敬三

例　　言

一、本書は大阪市建設局長吉瓜破地区区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1990年度土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣慎の指揮のもと、調査課藤田幸夫・田中清美佐藤隆・高橋工・小田木富慈美(旧姓田島)・平田洋司が行った。各調査の担当者・面積・期間などは、第Ⅰ章第1節の表1に記した。

一、木製品・金属器の整理および保存については調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、本書の編集は企画調整課松本百合子が行った。執筆は上記調査員と討議の上、第Ⅰ章、第Ⅱ章第1・2節、第Ⅲ章を松本が、第Ⅱ章第3節を田中と松本が担当した。動物遺体については調査課久保和士が執筆した。巻末の英文要旨の作製は調査課岡村勝行とオーストラリア・クィーンズランド大学生Robert Condonが行った。なお、石器遺物の検討については京都大学文学部の山中一郎氏からご教示を賜った。記して感謝する次第である。

一、遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は徳永圀治氏に委託した。

一、地層名は『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵの第Ⅱ章に記した長原遺跡の標準層序に対比したもので、長原○層・・・と表記する。

一、遺構名の表記は、掘立柱建物(SB)・井戸(SE)・ピット(SP)・土壙(SK)・溝(SD)・自然流路(NR)の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を付した。長原7層の遺構にはSK7○○、長原4層の遺構にはSD4○○のように表記した。

一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値に換算した。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中ではTP±○○と表記するが、挿図では省略し、数値のみとする。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

一、発掘調査および資料整理・図表作製などの作業には補助員諸氏の援助を得た。深く感謝の意を表したい。

本 文 目 次

序文

例言

第Ⅰ章　長原・瓜破遺跡の発掘調査 …… 1
　第1節　1990年度の発掘調査と報告書の作製 …… 1
　　1）発掘調査 …… 1
　　2）報告書の作製 …… 2
　第2節　調査の経過と概要 …… 3
　　1）瓜破遺跡東南地区 …… 3
　　2）長原遺跡中央地区 …… 5
　　3）長原遺跡南地区 …… 5
　　4）長原遺跡東南地区 …… 5

第Ⅱ章　調査の結果 …… 7
　第1節　瓜破遺跡東南地区の調査 …… 7
　　1）調査地の層序 …… 7
　　i）はじめに　ii）層序
　　2）各層出土の遺物 …… 12
　　3）弥生時代の遺構と遺物 …… 15
　　i）土壙
　　4）飛鳥時代の遺構と遺物 …… 16
　　i）土壙　ii）溝
　　5）鎌倉時代の遺構と遺物 …… 17
　　i）井戸　ii）柱穴・掘立柱建物
　　iii）土壙　iv）溝
　　6）室町～江戸時代の遺構と遺物 …… 24
　　i）溝　ii）井戸・土壙
　　7）小結 …… 32
　第2節　長原遺跡中央地区の調査 …… 33
　　1）調査地の層序 …… 33
　　i）はじめに　ii）層序
　　2）各層出土の遺物 …… 34

3）古墳時代の遺構と遺物 …… 36
i）溝　ii）土壙
4）飛鳥時代の遺構と遺物 …… 37
i）水田
5）小結 …… 38
第3節　長原遺跡東南地区の調査 …… 39
1）調査地の層序 …… 39
i）はじめに　ii）層序
2）各層出土の遺物 …… 45
3）旧石器～縄文時代中期の遺構と遺物 …… 50
i）Ⅰ区長原13A～12層の石器遺物
ii）流路
4）縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物 …… 57
i）開析谷　ii）開析谷出土の遺物
iii）溝　iv）その他
5）古墳時代の遺構と遺物 …… 78
i）溝　ii）井戸・土壙
6）室町時代の遺構と遺物 …… 81
i）溝　ii）土壙
7）江戸時代の遺構と遺物 …… 86
i）溝
8）小結 …… 86

第Ⅲ章　まとめ …… 89
1）瓜破遺跡東南地区 …… 89
2）長原遺跡中央地区 …… 89
3）長原遺跡東南地区 …… 89

別表 …… 91

引用・参考文献 …… 100

あとがき・索引

英文要旨

報告書抄録

図 版 目 次

1 瓜破遺跡東南地区 地層断面
上：V区 東壁地層断面
下：Ⅵ区 南壁地層断面
2 瓜破遺跡東南地区 弥生・飛鳥時代の遺構
上：Ⅵ区 SK801(南東から)
下：Ⅳ区 SD601(東から)
3 瓜破遺跡東南地区 鎌倉時代の遺構
上左：V区 SK402・403(南から)
上右：Ⅵ区 SK401・SD404(東から)
下：Ⅵ区 SB401(北から)
4 瓜破遺跡東南地区 室町時代の遺構
上：Ⅵ区 SD302(東から)
下：Ⅵ区 SD302断面
5 瓜破遺跡東南地区 江戸時代の遺構
上左：Ⅲ区 SD201(東から)
上右：Ⅳ区 SD202(北から)
下左：Ⅵ区 SD302とSD203(西から)
下右：Ⅵ区 SD203(東から)
6 瓜破遺跡東南地区 江戸時代の遺構
上：Ⅵ区 SD204・205断面
下：Ⅵ区 SD203断面
7 瓜破遺跡東南地区 木樋
上：Ⅵ区 SD203内の木樋(南から)
下：Ⅵ区 SD203内の木樋(東から)
8 長原遺跡中央地区 地層断面・古墳時代の遺構
上：Ⅰ区 東壁地層断面
下：Ⅰ区 SK701(南から)
9 長原遺跡中央地区 古墳・飛鳥時代の遺構
上左：Ⅰ区 SD701検出状態(東から)
上右：Ⅰ区 SR601・SD601(北から)
下：Ⅰ区 SR601・SD601断面
10 長原遺跡東南地区 地層断面
上：Ⅰ区 C地層断面(北から)
下：Ⅰ区 A地層断面(北から)
11 長原遺跡東南地区 地層断面
上：Ⅰ区 D地層断面(南端)
下：Ⅱ区 北壁地層断面
12 長原遺跡東南地区 石器検出状態
上：Ⅰ区 長原13・12層石器検出状態
(南東から)
下：Ⅰ区 長原12層石器検出状態(南から)
13 長原遺跡東南地区 縄文時代の遺構
上：Ⅰ区 NR1201(南東から)
下：Ⅰ区 NR1201内の杭検出状態(西から)
14 長原遺跡東南地区 縄文時代の遺構
上：Ⅰ区 長原9A層上面検出小穴群
(北西から)
下：Ⅰ区 SD901(南東から)
15 長原遺跡東南地区 弥生時代の遺構
上：Ⅰ区 SX801(東から)
下：Ⅰ区 SD801(北西から)
16 長原遺跡東南地区 古墳時代の遺構
上左：Ⅱ区 SD701(西から)
上右：Ⅰ区 長原7層下面の遺構(北西から)
下：Ⅰ区 SE701(南西から)
17 長原遺跡東南地区 古墳時代の遺構
上：Ⅰ区 SP701(西から)
下：Ⅰ区 SK701(南から)
18 長原遺跡東南地区 室町時代の遺構
上左：Ⅰ区 長原3層下面の遺構(北西から)
上右：Ⅰ区 長原3層下面の遺構(南東から)
下：Ⅰ区 SK303・304(北から)
19 瓜破遺跡東南地区 各層出土の遺物
長原2層 長原3層 長原4層 長原6層
20 瓜破遺跡東南地区 各層出土の遺物
長原2層 長原3層 長原4層 長原6層
長原7層
21 瓜破遺跡東南地区 各層と遺構出土の遺物
長原2層 長原3層 SK801 SK601
SD601 SK401 SD302

22 瓜破遺跡東南地区　遺構出土の遺物
SD404　SD301　SD202　SD203　SE211
23 長原遺跡中央地区　各層出土の遺物
長原4A層　長原4Bi層　長原4Biii層
24 長原遺跡中央地区　各層と遺構出土の遺物
長原4A層　長原6Bi層　SK701　SD701
25 長原遺跡東南地区　各層出土の遺物
長原３層　長原４層　長原６層
26 長原遺跡東南地区　各層出土の遺物
長原２層　長原４層　長原６層　長原７層
27 長原遺跡東南地区　各層出土の遺物
長原４層　長原６層
28 長原遺跡東南地区　各層と流路出土の遺物
長原６層　長原８層　長原９層
長原10・11層　長原12A層　NR1201
29 長原遺跡東南地区　各層出土の遺物
ナイフ形石器　剥片　石鏃
30 長原遺跡東南地区　各層と開析谷出土の遺物
剥片　長原式土器
31 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
長原式土器
32 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
長原式土器　未製品を含む石鏃
２次加工がある剥片
33 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
石鏃未製品　２次加工がある剥片
未製品を含む石錐・石鏃
34 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
石錐　直刃削器　クサビ
35 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
クサビ
36 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
クサビ
37 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
クサビ剥片　クサビ
38 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
クサビ剥片
39 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
クサビ剥片
40 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
クサビ　クサビ剥片　調整剥片
41 長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物
接合資料　クサビ
42 長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
SD702　SD703　SE701　SK701
43 長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物
SD301

挿　図　目　次

図１　土地区画整理事業施行範囲と調査地 …… 2
図２　瓜破遺跡東南地区の調査地 …… 3
図３　長原遺跡中央地区の調査地 …… 5
図４　長原遺跡東南地区の調査地 …… 6
図５　Ⅰ・Ⅱ区地層断面 …… 8
図６　Ⅳ区地層断面 …… 9
図７　Ⅴ区地層断面 …… 10
図８　Ⅶ区地層断面 …… 11
図９　Ⅵ区地層断面 …… 12
図10　各層出土の遺物(陶磁器・土器・埴輪) …… 13
図11　各層出土の遺物(瓦) …… 14
図12　各層出土の遺物(鉄器) …… 14
図13　各層出土の遺物(石器) …… 15
図14　Ⅶ区SK801と出土遺物 …… 15
図15　Ⅱ区SK601と出土遺物 …… 15
図16　瓜破遺跡東南地区弥生・飛鳥時代の遺構の配置 …… 16
図17　Ⅳ区SD601と出土遺物 …… 17
図18　瓜破遺跡東南地区鎌倉時代の遺構の配置 …… 18
図19　Ⅰ区SP401・402とⅡ区 …… 19

図20　Ⅵ区SB401 …… 19
図21　Ⅶ区SK401と出土遺物 …… 20
図22　Ⅴ区SK402 …… 21
図23　Ⅴ区SK403 …… 21
図24　Ⅲ区SD401 …… 21
図25　Ⅲ区SD402 …… 21
図26　Ⅲ区SD403 …… 22
図27　Ⅶ区SD404 …… 22
図28　Ⅶ区SD404出土の遺物 …… 22
図29　瓜破遺跡東南地区室町～江戸時代の遺構の配置 …… 23
図30　Ⅲ区SD301と出土遺物 …… 24
図31　Ⅶ区SD302と出土遺物 …… 25
図32　Ⅲ区SD201 …… 26
図33　Ⅳ区SD202と出土遺物 …… 26
図34　Ⅶ区SD203～205と出土遺物 …… 27
図35　Ⅶ区SD203と木樋 …… 28
図36　Ⅶ区SD203出土の木樋 …… 29
図37　木樋の鉄釘 …… 29
図38　Ⅶ区SE201～212とSK201～203 …… 30
図39　Ⅶ区SE211出土の遺物 …… 30
図40　瓜破遺跡東南地区飛鳥時代の遺構の配置 …… 31
図41　Ⅰ区地層断面 …… 33
図42　Ⅰ区各層出土の遺物(土器・埴輪) …… 34
図43　Ⅰ区古墳時代の遺構 …… 35
図44　Ⅰ区SD701と出土遺物 …… 36
図45　Ⅰ区SK701と出土遺物 …… 36
図46　Ⅰ区SR601とSD601の断面 …… 37
図47　Ⅰ区SR601とSD601 …… 37
図48　Ⅰ区周辺の飛鳥時代の遺構 …… 38
図49　Ⅰ区地層断面の位置 …… 39
図50　Ⅰ区地層断面 …… 40
図51　Ⅰ区地層断面 …… 41
図52　Ⅱ区地層断面 …… 42
図53　各層出土の遺物(陶磁器・土器・土製品) …… 44
図54　Ⅰ区出土の石器遺物(長原4・6層) …… 46
図55　Ⅰ区出土の石器遺物(長原8～11層) …… 47
図56　Ⅰ区出土の石器遺物(長原9C層) …… 48
図57　Ⅰ区旧石器～縄文時代中期の遺構と遺物の位置 …… 49
図58　Ⅰ区長原13A層出土の石器遺物 …… 51
図59　Ⅰ区長原12層出土の石器遺物 …… 53
図60　Ⅰ区NR1201と杭 …… 55
図61　Ⅰ区NR1201出土の遺物 …… 55
図62　長原遺跡東南地区縄文時代晩期～弥生時代の遺構の配置 …… 56
図63　Ⅱ区開析谷 …… 57
図64　Ⅱ区開析谷出土の遺物(長原式土器) …… 58
図65　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 60
図66　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 63
図67　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 64
図68　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 66
図69　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 68
図70　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 70
図71　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 71
図72　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物 …… 72
図73　Ⅰ区SD901・SD801・SX801 …… 74
図74　Ⅰ区SD901 …… 75
図75　Ⅰ区SD801の断面 …… 76
図76　Ⅰ区SX801 …… 76
図77　長原遺跡東南地区古墳時代の遺構の配置 …… 77
図78　Ⅱ区SD701 …… 78
図79　Ⅰ区古墳時代の遺構 …… 79
図80　Ⅰ区SD702・703出土の遺物 …… 79
図81　Ⅰ区SE701 …… 80
図82　Ⅰ区SE701出土の遺物 …… 80
図83　Ⅰ区SP701と出土遺物 …… 80
図84　Ⅰ区SK701出土の遺物 …… 80
図85　Ⅰ区SK701 …… 81
図86　Ⅰ区室町時代の遺構 …… 82
図87　Ⅰ区SD301出土の遺物 …… 83
図88　Ⅰ区SK301とSK302 …… 84
図89　Ⅰ区SK303とSK304 …… 85
図90　Ⅰ区SK305 …… 85
図91　Ⅰ区江戸時代の遺構 …… 86

表目次

表1　1990年度土地区画整理事業に伴う発掘調査・1
表2　瓜破遺跡東南地区各層出土の遺物……14
表3　長原遺跡中央地区各層出土の遺物……35
表4　長原遺跡東南地区各層出土の遺物……45
表5　開析谷出土の石器遺物……59

写真目次

写真1　90−54次調査風景……4
写真2　90−36次調査風景……5
写真3　90−26次調査風景……6
写真4　Ⅰ区SE401……17
写真5　Ⅰ区SP401の断面……20
写真6　Ⅶ区SD203出土の弥生土器……28
写真7　Ⅱ区出土のウマの歯……45
写真8　Ⅰ区146の出土状態……52
写真9　SD901のA断面……75

別表

別表1　遺物一覧（陶磁器・土器・埴輪など）…92
別表2　遺物一覧（石器遺物）……96

第Ⅰ章　長原・瓜破遺跡の発掘調査

第1節　1990年度の発掘調査と報告書の作製

1)発掘調査(図1)

1990年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は13件、発掘総面積は3,099㎡であった。うちわけは瓜破東南地区が8件1,747㎡、長原中央地区が1件91㎡、長原南地区が1件240㎡、長原東南地区が3件1,021㎡である。

現場での作業は1990年4月24日に開始し、1991年2月22日に終了した。各調査とも、まず重機を用いて現代盛土と現代作土を除去し、それ以深は原則として人力により掘削した。検出した遺構・遺物は写真や実測図によって記録し、保存処理の必要なものはそのつど処置した。各次調査の担当者・調査面積などは表1のとおりである。

なお、当協会で使用している発掘調査次数は、遺跡略号(「NG」)のあとに年度と開始順の番号を付けている。たとえば、「NG90－5」は「長原遺跡における1990年度の5番目の調査」を表す。本報告書では土地区画整理事業に伴う調査はすべて「NG」を冠するため、これを省略している。ただし、長原・瓜破遺跡では土地区画整理事業以外の調査も行っているため、

表1　1990年度土地区画整理事業に伴う発掘調査

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
NG90－5次	960㎡	平野区長吉川辺3丁目	田中　清美 佐藤　隆	1990年4月24日～1991年1月8日
NG90－24次	172㎡	同　瓜破東8丁目	藤田　幸夫 平田　洋司	1990年6月4日～1990年8月10日
NG90－25次	210㎡	同　瓜破東8丁目	小田木富慈美	1990年6月5日～1990年7月31日
NG90－26次	5㎡	同　長吉川辺3丁目	高橋　工	1990年6月6日～1990年6月7日
NG90－36次	240㎡	同　長吉川辺1丁目	小田木富慈美	1990年8月17日～1990年10月24日
NG90－37次	91㎡	同　長吉長原3丁目	平田　洋司	1990年8月17日～1990年9月28日
NG90－45次	56㎡	同　長吉川辺3丁目	藤田　幸夫	1990年9月25日～1990年11月7日
NG90－46次	618㎡	同　瓜破東8丁目	櫻井　久之	1990年10月3日～1991年1月31日
NG90－49次	421㎡	同　瓜破東8丁目	平田　洋司	1990年10月24日～1991年2月22日
NG90－50次	210㎡	同　瓜破東8丁目	藤田　幸夫	1990年10月31日～1990年12月28日
NG90－53次	30㎡	同　瓜破東8丁目	藤田　幸夫	1990年11月29日～1990年12月6日
NG90－54次	18㎡	同　瓜破東8丁目	櫻井　久之	1990年11月29日～1990年12月7日
NG90－65次	68㎡	同　瓜破東8丁目	藤田　幸夫	1991年1月7日～1991年1月25日

これらを記述するばあいには遺跡略号を付けて呼称する。なお、調査時点ではNG90−24・25・46・49・50・52・54・65次調査は、遺跡地図の上では「瓜破遺跡」に含まれるが、一連の土地区画整理事業に伴うため、「NG」を冠している。

2)報告書の作製

発掘調査は1990年度に終了したが、報告書の作製に伴う図面・遺物の整理作業は1995年度に行った。資料の基本的な整理は発掘調査終了後に直ちに調査担当者が行ったが、報告書作製のための遺物復元や製図作業については担当者が整理期間中に現場作業に当っていたため、主として松本が整理した。

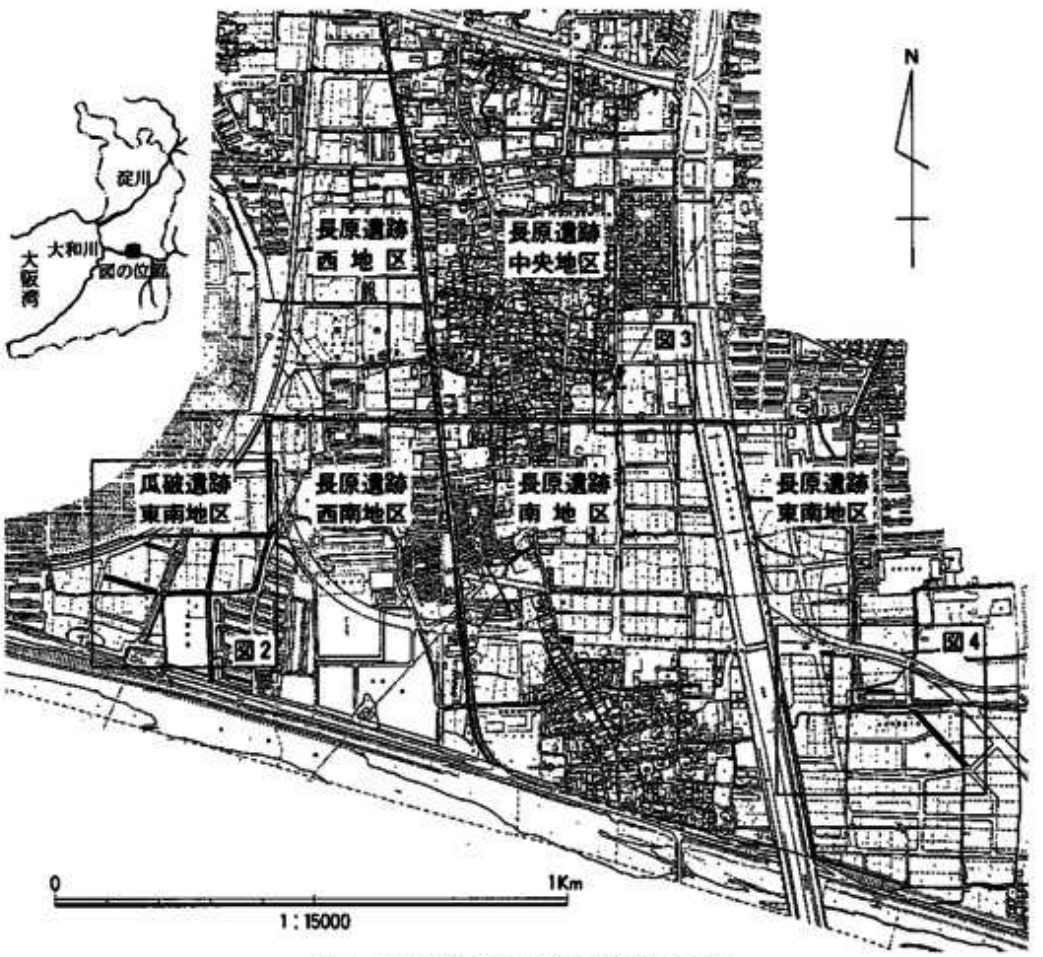


図1　土地区画整理事業施行範囲と調査地

第２節　調査の経過と概要

長原・瓜破遺跡の地区区分は、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ[大阪市文化財協会1990]において６区分されている。本報告書でもこれに従い、第Ⅱ章以下は調査地を地区ごとに分けた上で、調査次数を地区の通し番号Ⅰ～Ⅷに置換えて記述する。

１)瓜破遺跡東南地区(90－24・25・46・49・50・53・54・65)(図２)

大阪市営瓜破霊園の東南で大和川との間に位置する。本年度は８個所を調査した。これまでの調査で、７世紀代の掘立柱建物[南秀雄1987]や柵・井戸[大阪市文化財協会1992]が見つかっており、官衙的な建物群の全貌が明らかになってきている。

ｉ)90－24次調査(Ⅰ区)

1990年度の調査地では西端に位置し、西方に展開している建物群にもっとも近い路線である。北半は1987年度に水道管埋設工事に伴い、全長100m、幅２mの調査(87－64次調査Ａ区)を実施しており、飛鳥時代の遺構が希薄なことがわかっていた。調査区は全長100mであるが、南側の水田の出入口を確保するため８区に分割して調査を進めた。遺構は現代の攪乱によって大半が失われていたため、本文では調査区の東端のみ記載する。

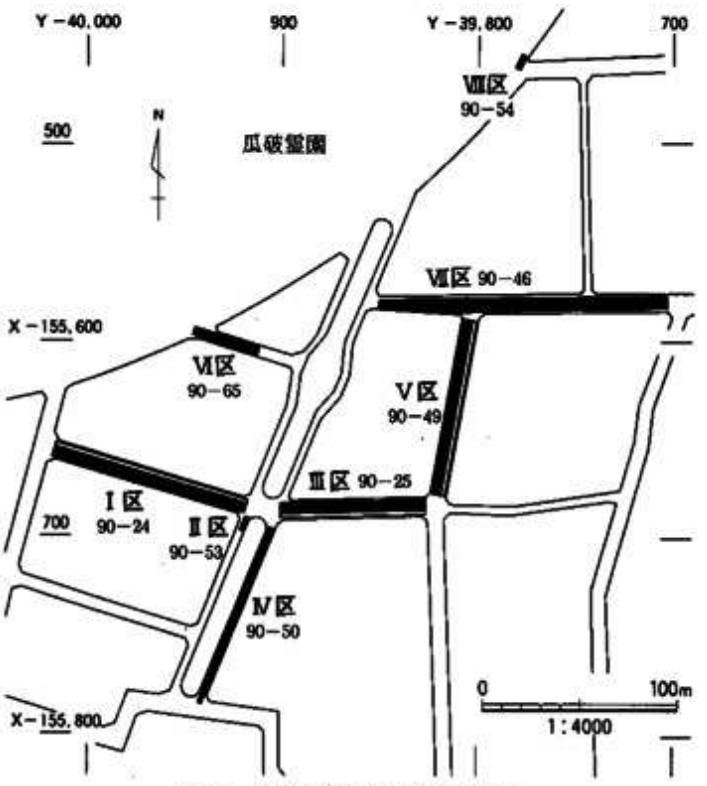


図２　瓜破遺跡東南地区の調査地

写真1　90－54次調査風景

ii)90－25次調査(Ⅲ区)

前記Ⅰ区の東に延びる路線である。全長70mを東西2区に分割し、西区から調査を始めた。路線の南半は1987年度に調査している(87－64次調査B区)。

iii)90－46次調査(Ⅶ区)

東西方向に延びる全長150mの路線である。調査地は通行路を確保するため東・中央・西トレンチに分割し、中央をさらに2分した。調査は東トレンチから行った。路線内の一部は1987年度に調査(87－64次調査D区)し、中世・近世の溝や井戸を確認している。

iv)90－49次調査(Ⅴ区)

南北方向に延びる全長90mの路線である。通行路を確保するために幅2.5m、長さ30～45mのトレンチを4本設定し、南側から順次調査した。路線の東半は1987年度に調査(87－64次調査C区)し、中世・近世の包含層を確認している。

v)90－50次調査(Ⅳ区)

南北方向に延びる全長100mの路線である。狭長な調査地であるため幅2mのトレンチを南北に分割し、南側から調査した。

vi)90－53次調査(Ⅱ区)

調査地は前記Ⅳ区と緑地帯をはさんで西側に並行する、南北方向の路線である。全長は100mであるが、遺構の存在が予想される北端部にトレンチを設定した。

vii)90－54次調査(Ⅷ区)(写真1)

調査地は82－23次調査の第Ⅲ調査地区の北端から北方5mに位置する。下水道管延長工事に伴う調査のため、面積18㎡の小規模調査であった。人力掘削によって長原2層までの作土を確認し、地山の上面を精査したが遺構・遺物は見つからなかった。地山上面の高さはTP+11.1mである。本文では記載を省略する。

viii)90－65次調査(Ⅵ区)

調査地は前記Ⅰ区の一筋北の路線である。全長は50mあるが、西半部のみを調査した。中央に南北方向の用水があるため、さらに調査区を2分割して同時に調査した。

2）長原遺跡中央地区(90－37)(図３)

府道中央環状線から西方に位置する。本年度は１個所を調査した。周辺の調査では弥生時代から室町時代にわたる遺構・遺物が多く見つかっている。なかでもNG85－23次調査では七ノ坪古墳が、NG87－35次調査では奈良時代から平安時代の建物群や高廻り１・２号墳、弥生時代の土壙群が確認されている。

図３　長原遺跡中央地区の調査地

ｉ）90－37次調査（Ⅰ区）

調査地は88－20次調査の３区と４区にはさまれた場所である。調査は下水管埋設に伴うもので、全長22m、幅４mのトレンチを設定した。長原４・６・７層の遺構を検出した。

3）長原遺跡南地区(90－36)

調査地は府道中央環状線の西方に位置し、長原遺跡中央地区の南方に当る。本年度は１個所を調査した。周辺の調査では５世紀の古墳や奈良時代以降の水田・掘立柱建物が見つかっている。

ｉ）90－36次調査(写真２)

調査地は86－28次調査の西南部に当る。86－28次調査では中世・近世の島畠や奈良時代の水田、長原143号墳が見つかっており、本調査でもそれにつながる遺構を検出した。なお、調査の詳細は『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ[大阪市文化財協会1993]で報告済みのため、本文では省略する。

写真２　90－36次調査風景

4）長原遺跡東南地区(90－５・26・45)(図４)

調査地は府道中央環状線の東方に位置する。本年度は３個所を調査した。これまでの調査で旧石器時代の石器製作の場や、縄文時代から古墳時代の溝や谷が見つかっている。

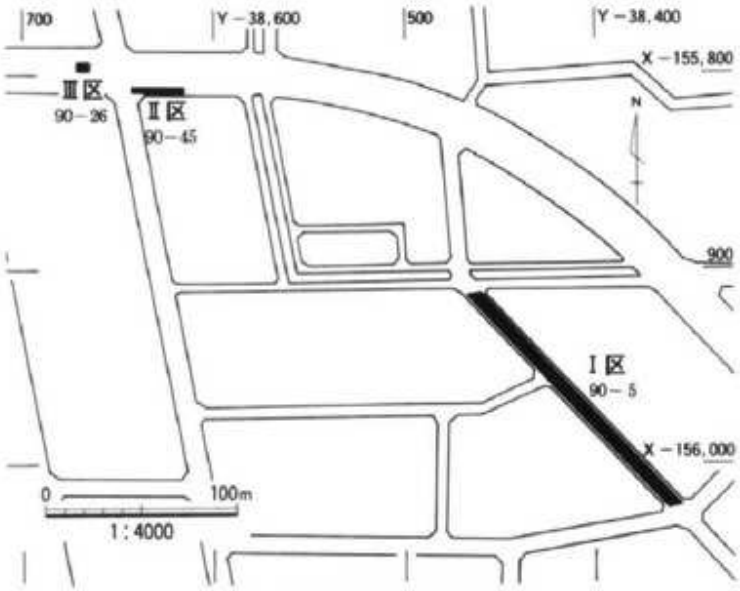


図4　長原遺跡東南地区の調査地

i)90－5次調査(Ⅰ区)

調査地は全長160m、幅9mの路線である。既存の水道管や農地への進入路を確保するため、幅8m、長さ33～60mのトレンチを3本設定し、北側から調査を進めた。南端では旧石器時代の地層が遺存していたために長さ2m、幅2mを拡張して石器調査を行った。さらに掘削土を採集し、水篩選別による遺物捕集につとめた。本調査地は1990年度調査の中でもっとも地層の遺存状況が良好であった。そのため調査対象となる遺構面も多く、9か月に及ぶ長期間の調査となった。

ii)90－26次調査(Ⅲ区)(写真3)

写真3　90－26次調査風景

調査地は市道出戸川辺線と府道中央環状線の交差から50m東方に位置する。電話線埋設のためのマンホール予定地で1.7m×3.0mの範囲に鋼矢板を設置して調査した。調査の結果、長原5・6・9・12・13層を確認した。長原13層上面では石器遺物の検出に努めたが、遺構・遺物ともになかった。本文では報告を省略する。

iii)90－45次調査(Ⅱ区)

調査地は市道出戸川辺線と府道中央環状線の交差から100m東方に位置する。出戸川辺線の道路拡張工事に伴う調査である。調査は3m×23mの範囲に鋼矢板を設置して行い、長原9層までの遺構・包含層を確認した。しかし、鋼矢板の深度との関係から、TP+9.0mまで掘削して調査を終了した。

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　瓜破遺跡東南地区の調査

１）調査地の層序（図５～９、図版１）

ｉ）はじめに

瓜破遺跡東南地区は、南から北に緩やかに下降する瓜破台地の北端に位置する。現地表面の高さはTP+13.0m前後で、水田を主とする耕作地が広がっている。調査対象となる地山以上の地層の遺存状況は南部ほど薄く、攪乱も著しい。そのために現代盛土の直下が地山面になり、近世以前の地層は島状にわずかに残るのみである。北部では中世・近世の地層が厚さ50cmにわたって堆積している。

Ⅰ～Ⅶ区の地層断面は図５～９に示しており、その記述は長原遺跡の標準層序［趙哲済1995］に添って進める。当地区では地層の細分が困難で、長原遺跡と比べて大掴みな層序の把握にとどまっている。

ⅱ）層序

沖積層上部層

長原０層：現代の客土層である。

長原１層：現代の作土層で、層厚は40cm以下である。

長原２層：にぶい黄色（2.5Y6／3）砂質シルトの作土層で、層厚は10～30cmである。近世の染付磁器や陶器を含む。下面でSD201～203や、耕作に伴う東西・南北方向の小溝群を検出した。

長原３層：明黄褐色（10YR6／8）砂質シルトの作土層で、層厚は10～30cmである。室町時代の土器・瓦などを含む。下面でSD301・302や、耕作に伴う小溝を多数検出した。

長原４層：にぶい黄橙色（10YR7／2）砂質シルトの作土層で、層厚は５～20cmである。平安から鎌倉時代にかけての瓦器・土師器を含む。下面でSD401～403やSB401を、基底面でSP401・402、SD404を検出した。

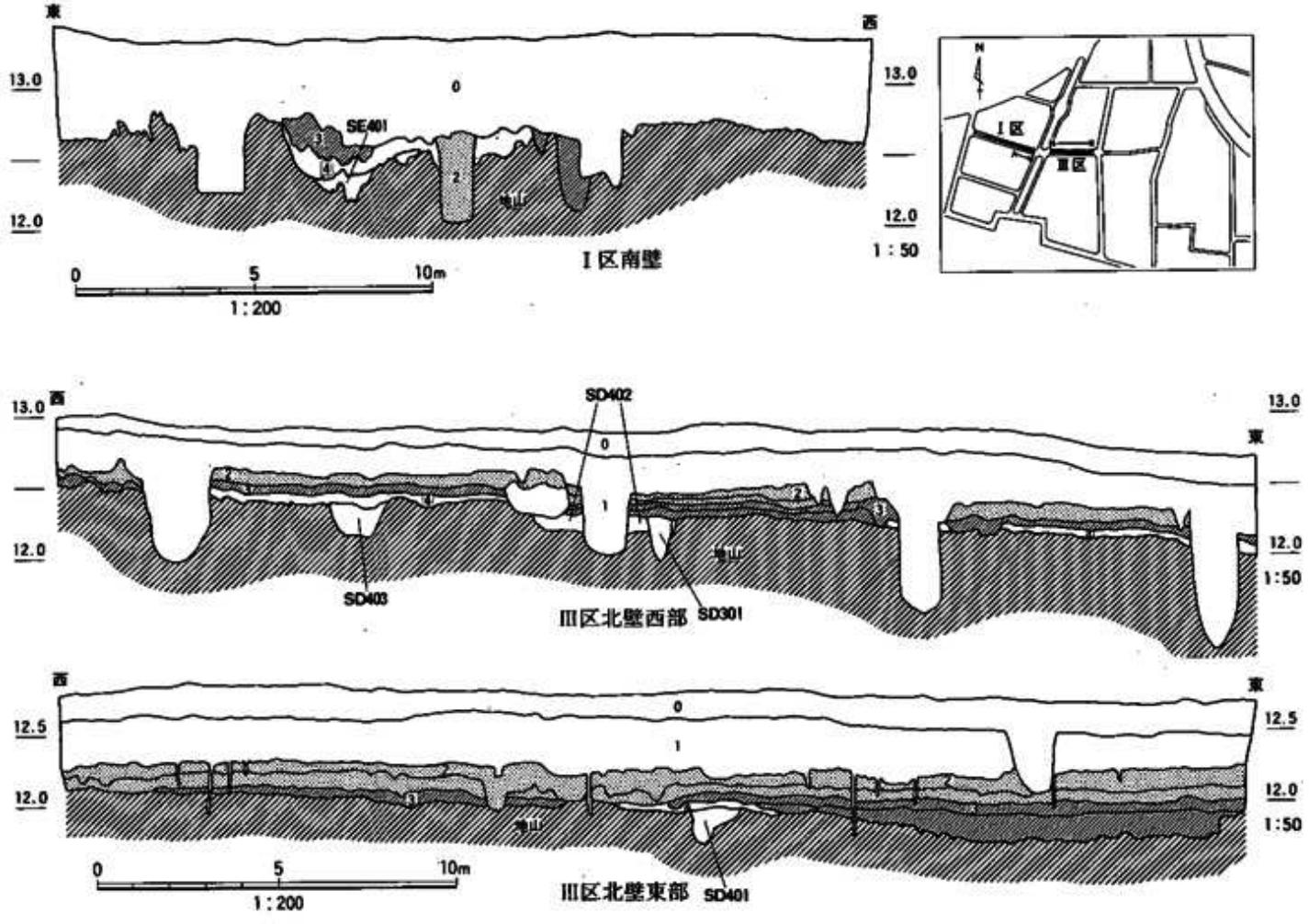

東
西
13.0
12.0
SE401
0
1
2
3
4
地山
0 5 10m
1:200
Ⅰ区南壁
1:50
N
Ⅰ区
Ⅲ区
SD402
SD403
SD301
Ⅲ区北壁西部
12.5
Ⅲ区北壁東部
SD401

図5 Ⅰ・Ⅲ区基層断面

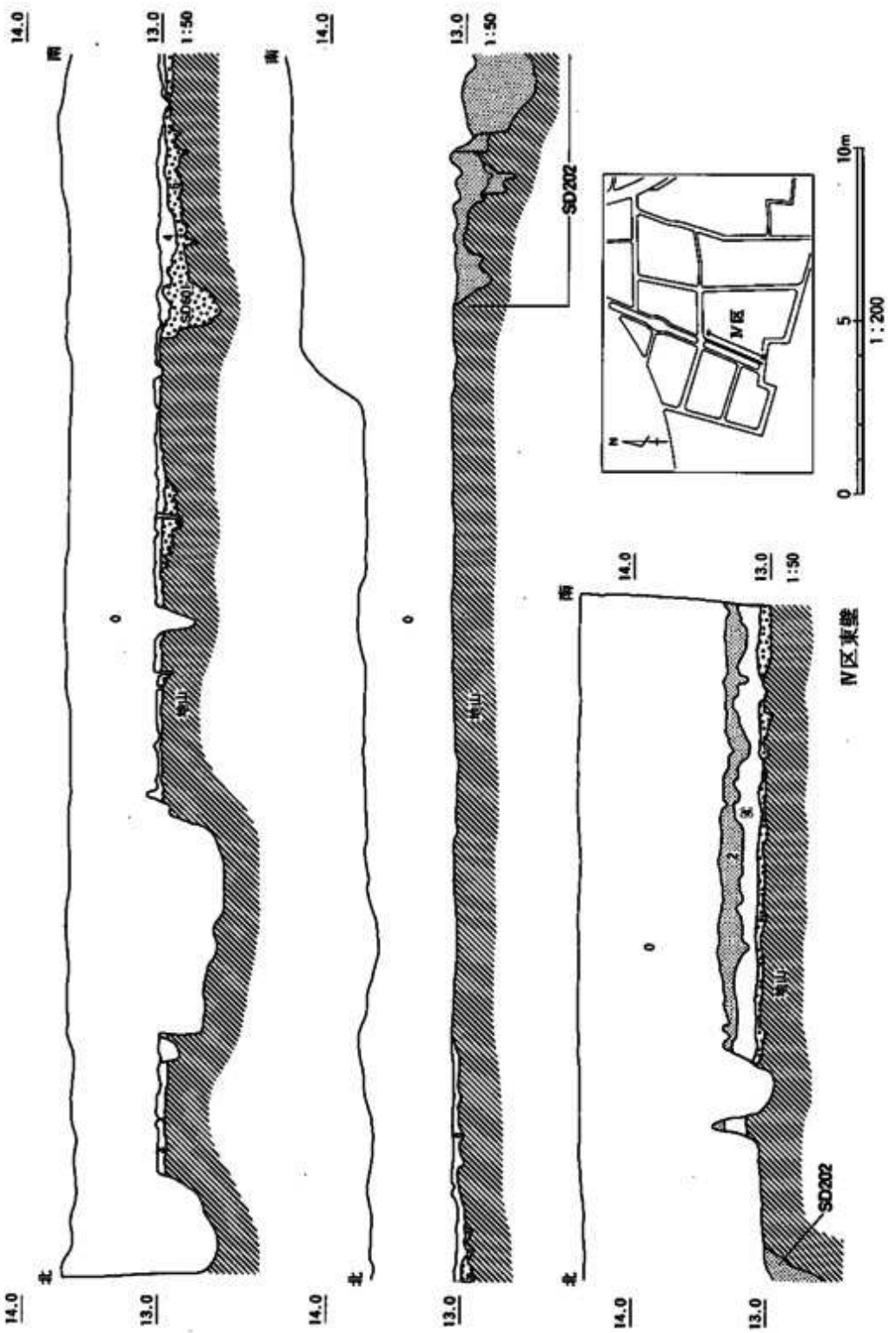


図6　Ⅳ区地層断面

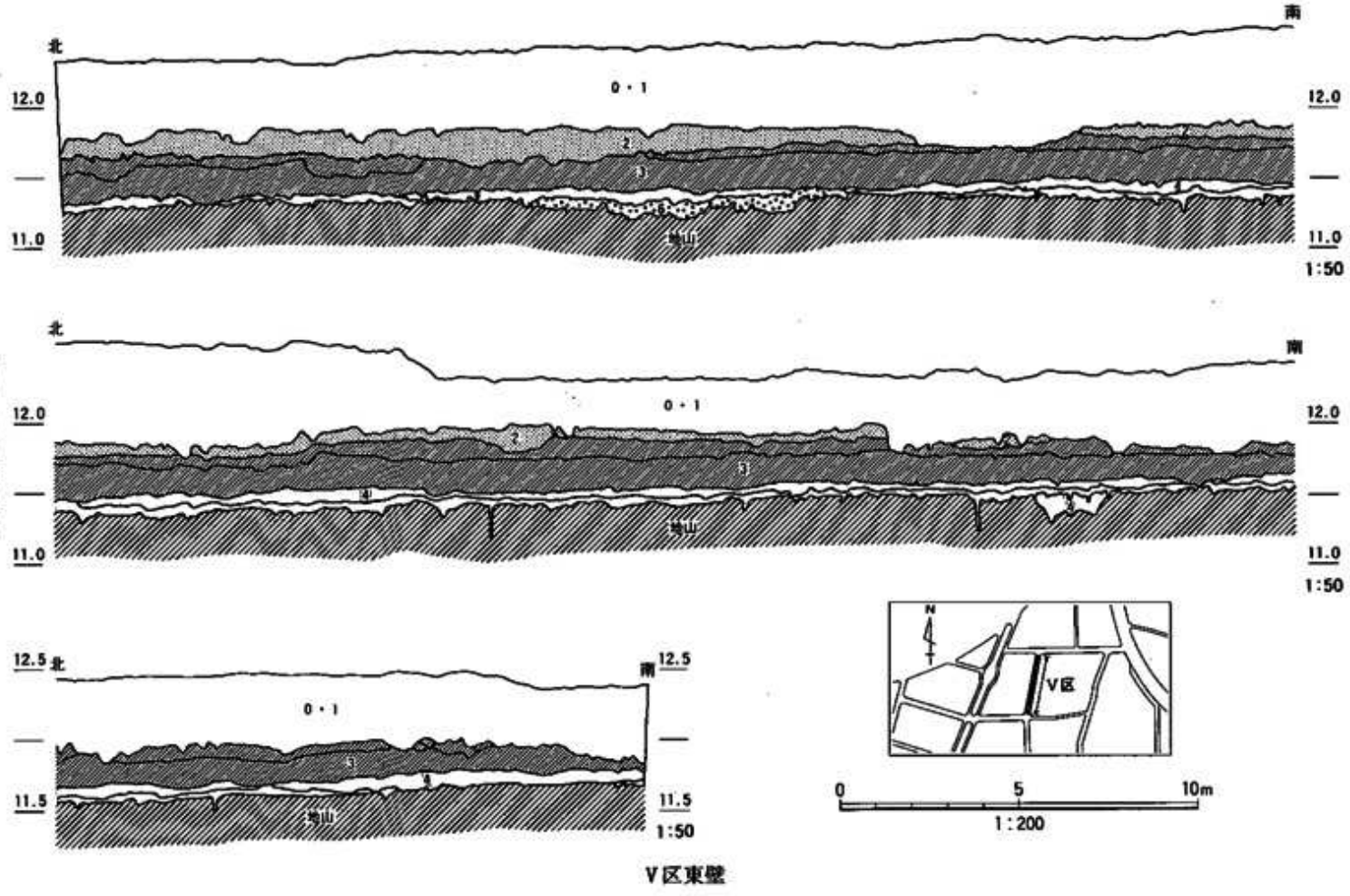


図7　V区地層断面

V区東壁

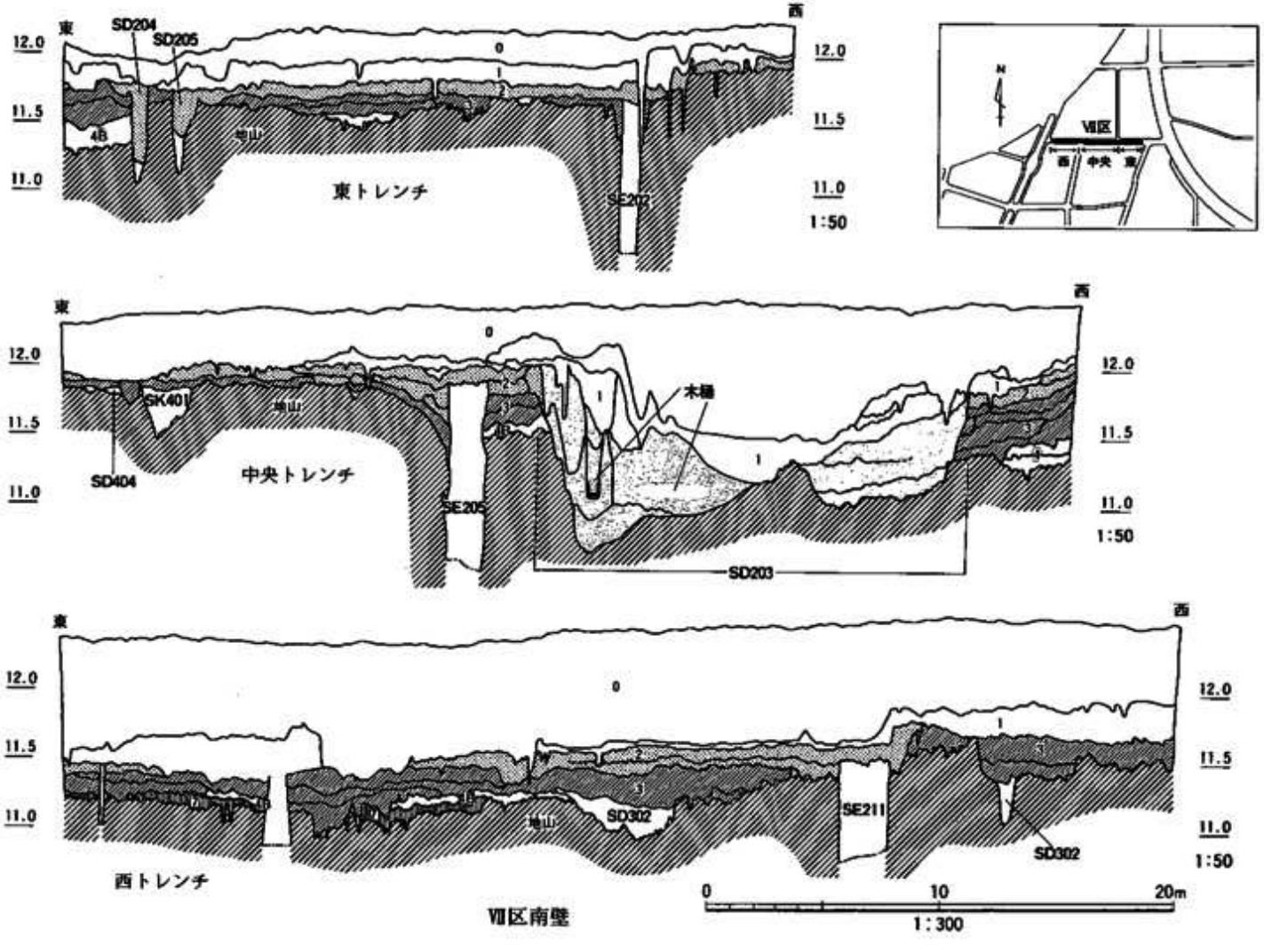

東
西
SD204
SD205
12.0
11.5
11.0
東トレンチ
SE207
1:50
N
Ⅶ区
西
中央
東
SK401
SD404
中央トレンチ
SE205
木根
SD203
西トレンチ
SD302
SE211
0
10
20m
1:300
Ⅶ区南壁

図8 Ⅶ区地層断面

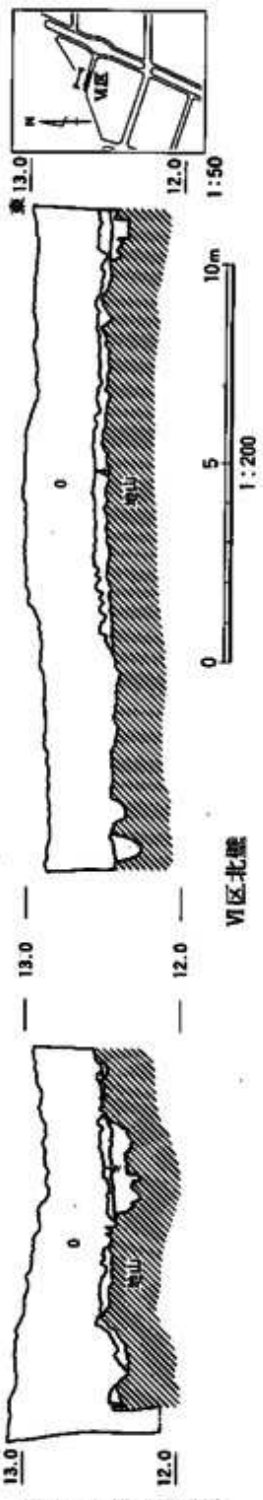


図9　VI区地層断面

長原6層：褐色(10YR4／4)粘土質シルトで、層厚は10cm以下である。Ⅳ・Ⅴ区に分布し、少量の須恵器・土師器を含む。下面でSD601を検出した。

長原7層：黒褐色(2.5Y6／6)粘土で、層厚は10cm以下である。Ⅵ区に分布し、古墳時代の須恵器・土師器を含む。

沖積層下部層(地山層)

地山層：明黄褐色(10YR6／6)粘土である。長原13～15層に相当する。遺物は出土しなかった。

2)各層出土の遺物

瓜破遺跡東南地区では、長原2・3・4・6・7層から土器・陶磁器・瓦・埴輪・石器・鉄器が出土している。ただし、いずれも細片であるため図示できるものは少ない。ここでは主なものを報告し、それぞれの遺物が出土した地区、層位は表2に示す。

長原2層出土遺物(図10・11・13、図版19～21)

1は竜泉窯系の青磁碗の口縁部である。内外面に緑青色の釉が厚くかかる。8は丹波焼の擂鉢である。5は伊万里焼の染付碗である。9は土師器の土風炉である。30は土師器把手付鍋の把手部分で、TK23～TK47型式の須恵器に伴うものである。平面形は半円形で上方へはほとんど屈曲しない。34は近世の平瓦である。長さ27.0cm、幅22.5～24.0cm、厚さ1.5cmで全面をいぶしている。

37・38はサヌカイトの石鏃である。37は基部を欠いているが凹基無茎式とわかる。38は基部が浅い凹基無茎式で、縄文時代晩期のものである。

長原3層出土遺物(図10・12・13、図版19～21)

2は玉縁状の口縁をもつ白磁碗である。外面の釉は全体を覆わず、下半部は露胎である。3は薄手の青磁碗で、内面の口縁付近に浅い片切彫で文様を施す。11・12は瓦器椀である。内外面とも風化のため暗文は認められないが、口縁端部のようすから13世紀ごろのものと考えられる。17は瓦器小皿である。10は瓦質

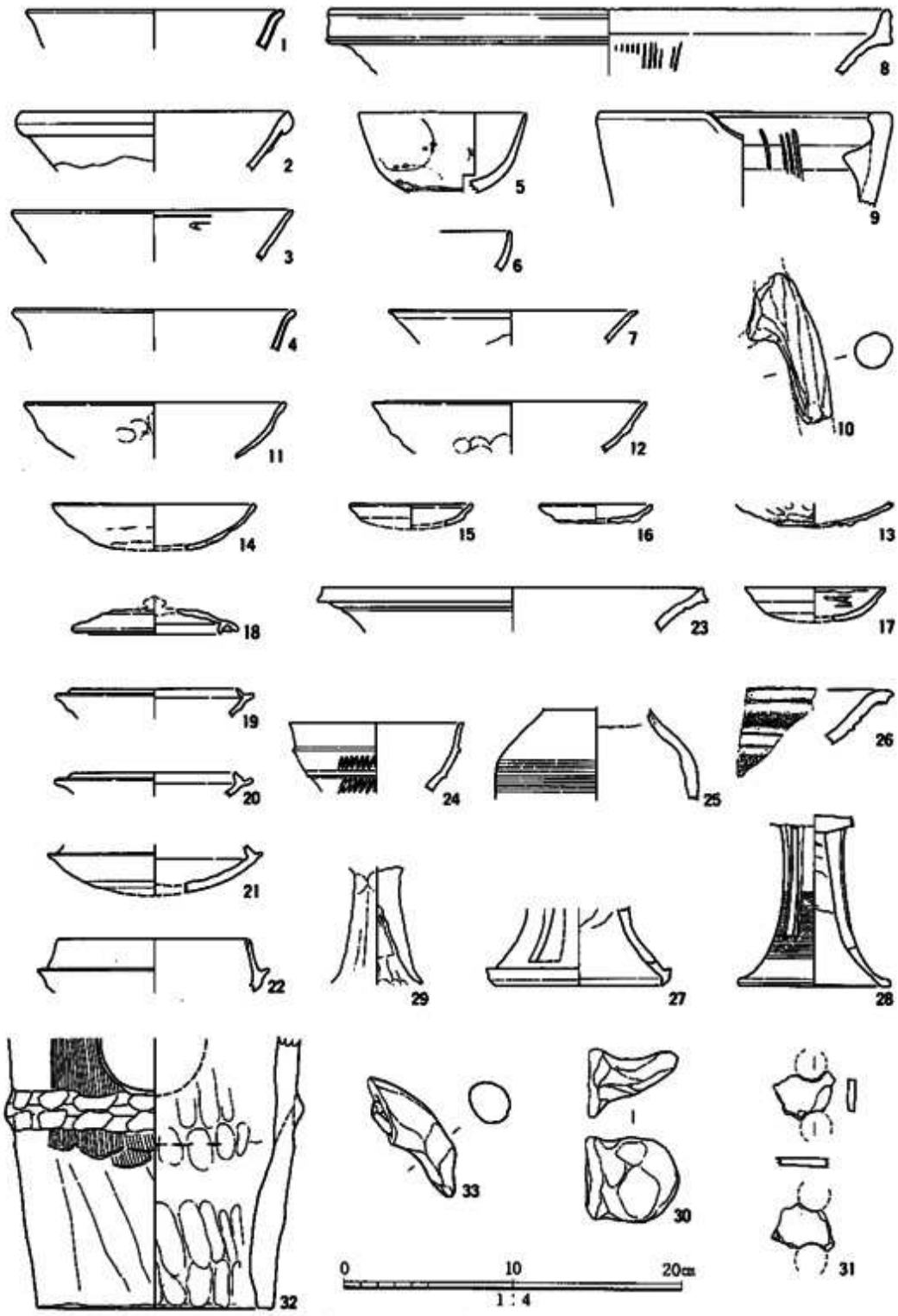


図10　各層出土の遺物(陶磁器・土器・埴輪)

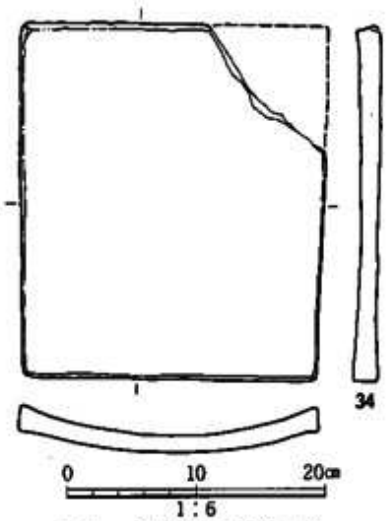


図11　各層出土の遺物(瓦)

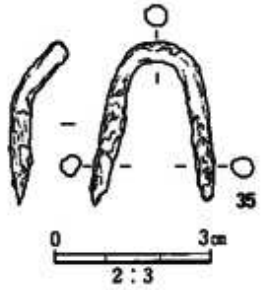


図12　各層出土の遺物(鉄器)

表2　瓜破遺跡東南地区各層出土の遺物

地区	地層	遺物番号
Ⅲ区	長原2層	37
	長原3層	3・10・11・12・35・39
Ⅳ区	長原6層	18・19・20・29・31
Ⅴ区	長原2層	1・8
	長原4層	4・7・13・14・15・16
Ⅵ区	長原2層	5・9・30・34・38
	長原3層	2・17・21・24・36
	長原4層	6・23・27・32・33
	長原7層	22・25・26・28

土器三足釜の足部分である。21はTK209型式の須恵器杯身で、24はTK23～TK47型式の把手付椀である。2段の突帯の中と下に波状文を施している。35は鉄製の鏃である。横断面は円形で両先端は尖っている。

36はサヌカイトの円基無茎式石鏃である。刃部をていねいに鋸歯状に作るが、右図の左下に素材の主剥離面を残している。39は平基無茎式石鏃の未製品である。磨滅が著しい。

長原4層出土遺物(図10、図版19・20)

4は青磁碗である。7は白磁碗で、外面の釉は全体を覆わない。6は12世紀ごろの高麗青磁の盞である。口縁外面に陰刻の雷文が巡る。復元口径は7.5cm、器高は5.0cmで、本来は托を伴うものである[大阪市立東洋陶磁美術館1996]。13は瓦器椀の底部である。14は粘土紐の巻上げ痕が顕著な土師器皿である。15・16は口径が7cm前後の土師器小皿である。口縁端部に強いヨコナデを施すために底部との境に段がある。以上13～16は13世紀ごろのものである。23は須恵器甕の口縁部である。27はTK47型式の須恵器高杯の脚部である。32は川西編年Ⅴ期の円筒埴輪である。最下段の調整は粗いタテハケを施し、その上からタガを貼付けている。タガは断続ナデ技法による。33は人物埴輪の腕部分である。左側面に粘土棒の芯がのぞいている。

長原6層出土遺物(図10、図版19・20)

18は飛鳥Ⅱ期の須恵器杯蓋である。19・20はTK217型式の須恵器杯身で、短いかえりが付く。29は土師器高杯の脚部である。内面に芯棒の穴はない。31は土師器甑の底部である。直径約2cmの蒸気穴が2個所に認められることから、平らな底部に小穴を多数開けるタイプと考えられる。

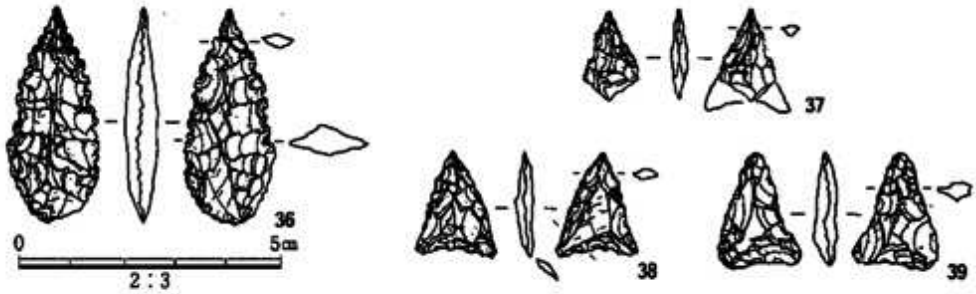


図13　各層出土の遺物(石器)

長原７層出土遺物(図10、図版20)

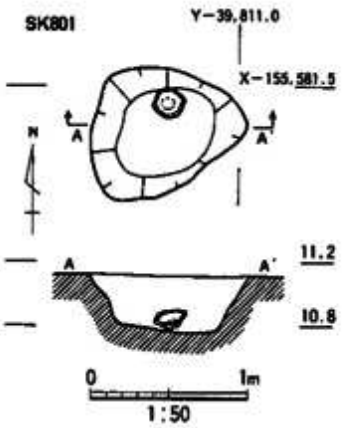
22は須恵器杯身、25は短頸壺の肩部、26は高杯形器台の杯部、28は３方に方形のスカシ孔をもつ無蓋高杯の脚部である。これらはTK23～TK43型式に相当する。

３)弥生時代の遺構と遺物(図16)

ｉ)土壙

SK801(図14、図版２・21)

Ⅶ区の西トレンチ東部で検出した長径1.0m、短径0.8m、深さ0.4mの不整楕円形の土壙



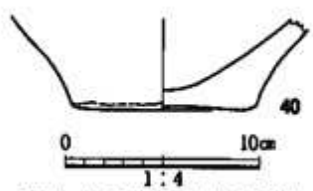
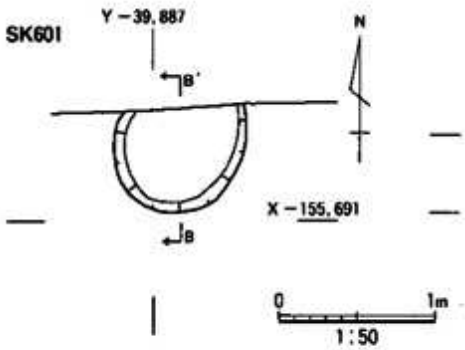


図14　Ⅶ区SK801と出土遺物



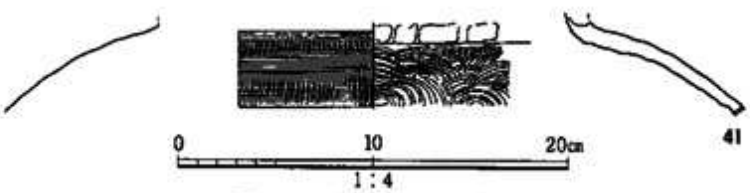


図15　Ⅲ区SK601と出土遺物

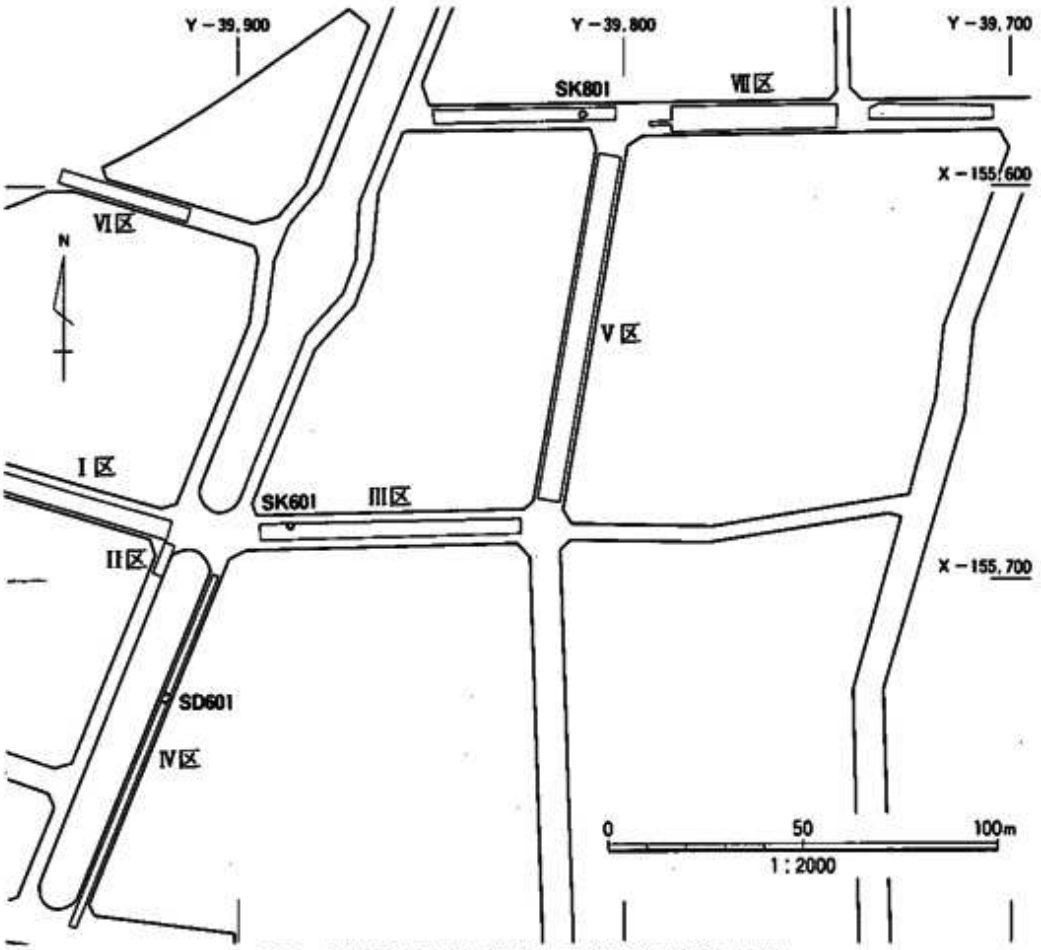


図16　瓜破遺跡東南地区弥生・飛鳥時代の遺構の配置

である。検出面は長原４層基底面であるが、底部の北寄りで弥生土器40が出土したため、弥生時代の遺構と判断した。埋土は浅黄色(2.5Y7／3)砂質シルトである。40は壺の底部である。胎土は粗く、１～５㎜の石英・長石・雲母・チャート粒を多く含む。

４)飛鳥時代の遺構と遺物(図16)

ｉ)土壙

SK601(図15、図版21)

Ⅲ区の西部に位置し、長原４層基底面で検出した直径0.8m、深さ0.1mの浅い土壙である。須恵器甕の肩部41が出土している。内面は同心円文の当て具痕があり、外面は平行タタキメのあと強いカキメ調整を行う。

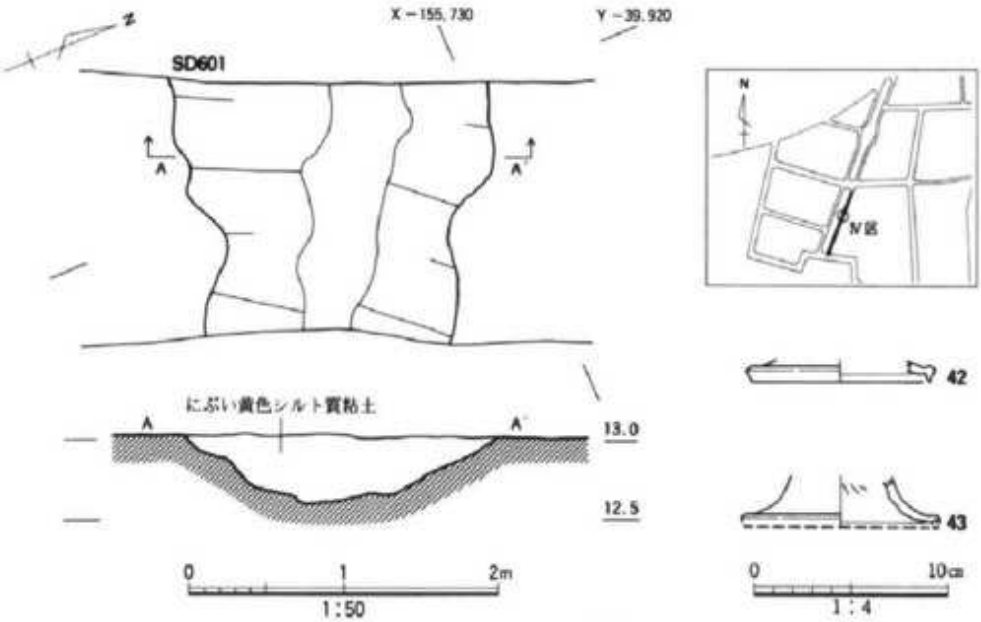


図17　Ⅳ区SD601と出土遺物

ii)溝

SD601(図17、図版2・21)

Ⅳ区の中央に位置し、長原6層下面で検出した幅2.0m、深さ0.5mの溝である。溝の底はやや凹凸がある。北西から南東方向に延びる。埋土はにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粘土である。須恵器無蓋高杯の脚部**42**・**43**が出土している。いずれも底径が約10cmで、飛鳥Ⅴ期のものである。

5)鎌倉時代の遺構と遺物(図18)

i)井戸

SE401(写真4)

Ⅰ区東端の長原4層基底面で検出した円形の素掘り井戸である。83－44次調査で北半を確認したものの続きである。検出面の直径は3.0mで、上から0.8mほど擂鉢状に掘ったあと、垂直に掘下げている。なお、

写真4　Ⅰ区SE401

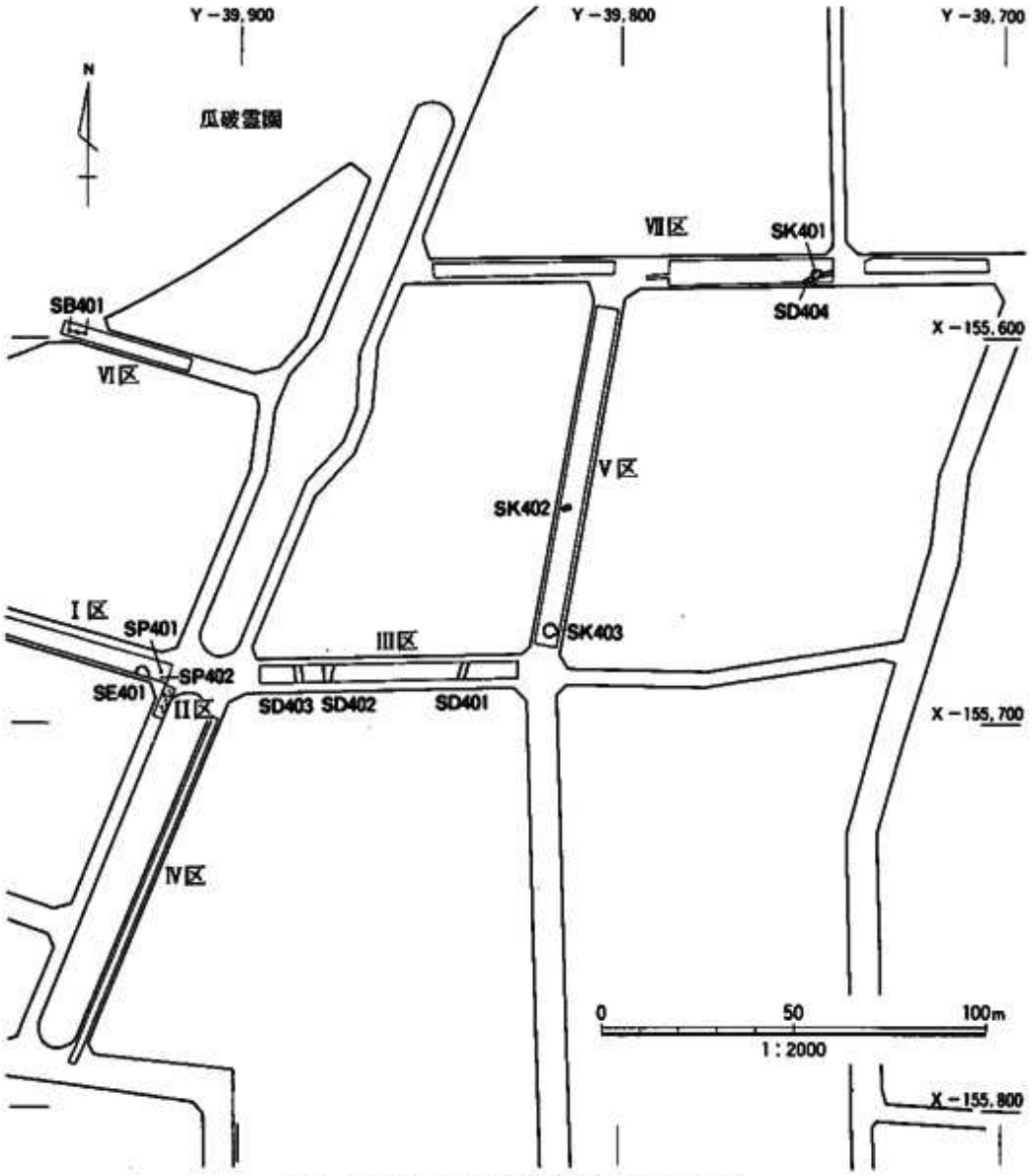


図18　瓜破遺跡東南地区鎌倉時代の遺構の配置

検出面から4.0m掘下げても底は確認できなかった。内部は地山のブロックを含む灰褐色砂礫混りシルトと灰色シルト質粘土によって埋戻されている。瓦器・須恵器・土師器細片が出土している。

ii)柱穴・掘立柱建物

SP401・402(図19、写真5)

Ⅰ区東端の長原4層基底面で検出した柱穴である。掘形はSP401が1辺0.4mの方形、

SP402が直径0.4mの円形である。SP401は直径0.15mの柱痕がある。柱間寸法は1.7mである。SP401の掘形内から時期不明の土師器細片が出土している。

SP401・402は飛鳥時代までさかのぼる可能性もあるが、柱穴の規模や埋土のようすから、鎌倉時代のものと判断した。東隣りのⅡ区では、長原4層下面で小穴を検出したのみで、SP402につながるような柱穴はなかった。

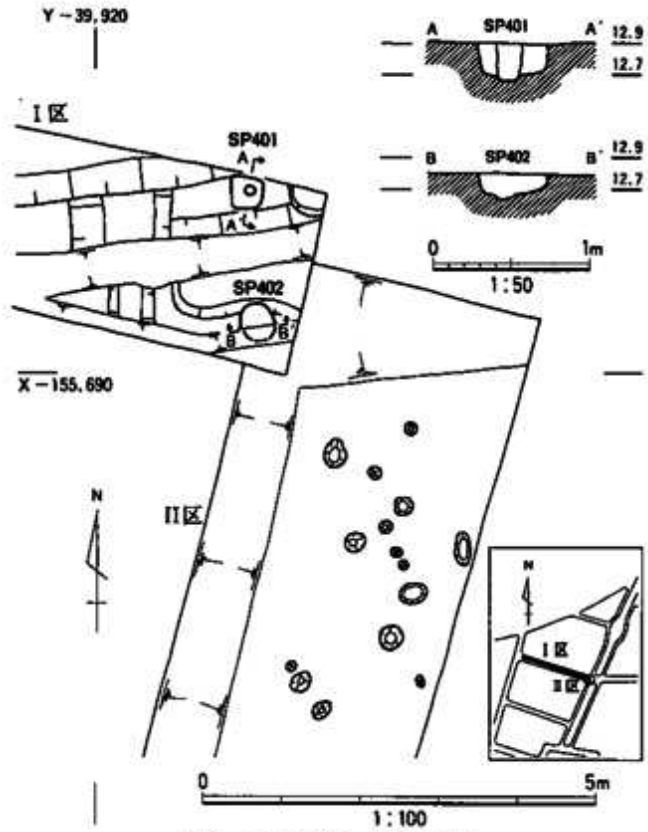


図19　Ⅰ区SP401・402とⅡ区

SB401（図20、図版3）

Ⅵ区西端の長原4層下面で3つの柱穴を検出した。柱穴は直径0.3m、深さ0.3~0.5mで東西方向に並んでいる。柱痕はない。柱間寸法は約2.0mである。

iii）土壙

SK401（図21、図版3・21）

Ⅶ区の中央トレンチ東端に位置し、長原4層基底面で検出した土壙である。平面形は不

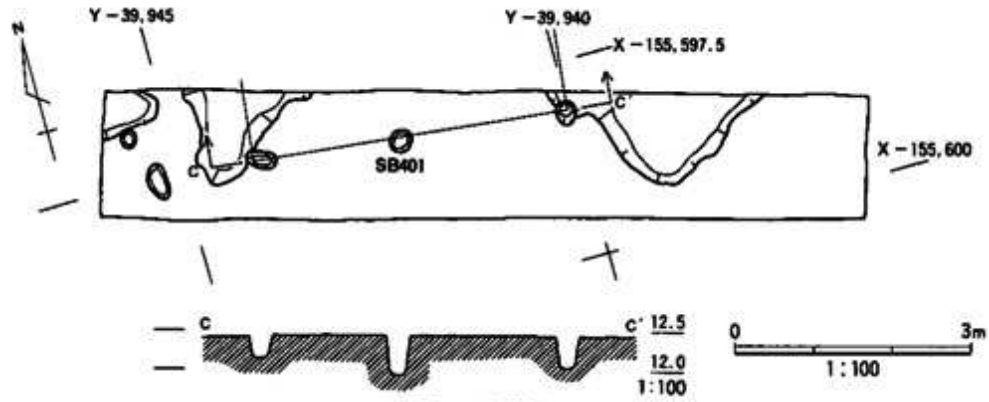


図20　Ⅵ区SB401

写真5　I区SP401の断面

整形で、直径が2.4m、深さは0.3mある。地山のブロックを含む浅黄色(2.5Y7/3)シルトで人為的に埋められている。中世の土師器細片とともに須恵器44・45が出土している。44は壺の口頸部で、断面三角形の突帯をはさんで上下2段に同じ工具で波状文を施している。45は甕の体部である。外面は底部を静止ヘラケズリしたのちユビナデし、径がもっとも大きい部分にカキメを施す。櫛先による連続する刺突文は2条の凹線の上下に施しているが、下は5回刺突しただけでやめている。内面底部に同心円文の当て具痕が複数回残る。44・45ともON46型式である。

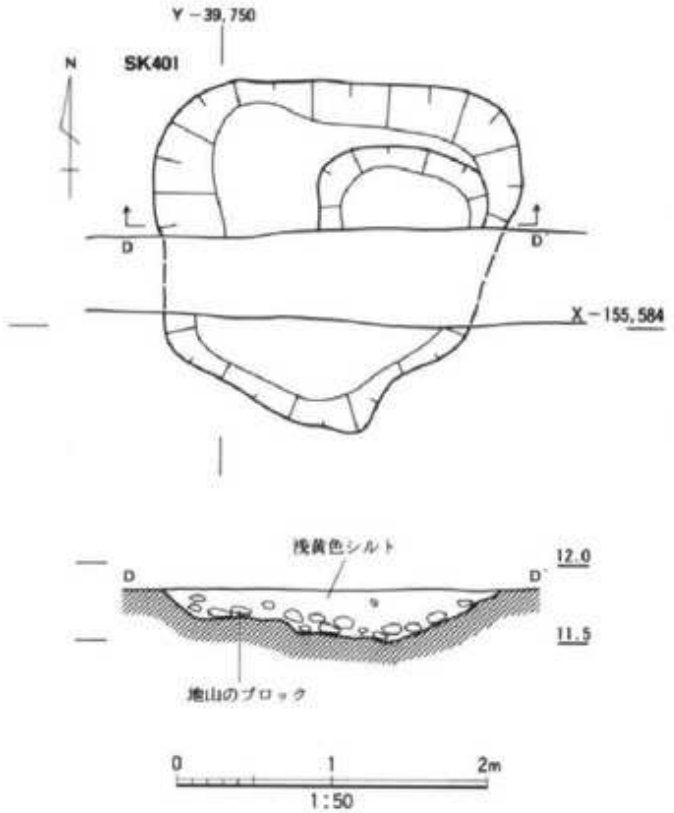


図21　Ⅶ区SK401と出土遺物

SK402(図22、図版3)

V区の中央に位置し、長原4層基底面で検出した浅い土壙である。平面形は楕円形で、長径2.0m、短径0.8m、深さは0.1mある。

SK403(図23、図版3)

V区南端の長原4層基底面で検出した浅い土壙である。直

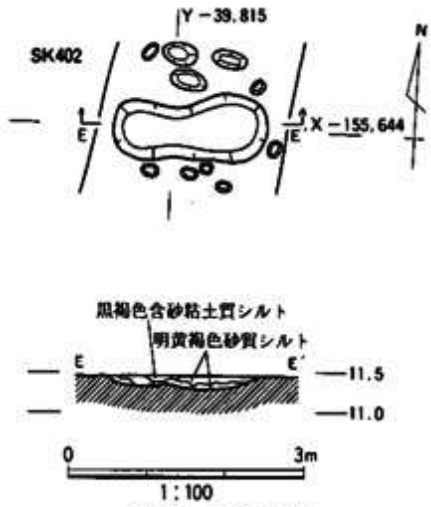


図22　V区SK402

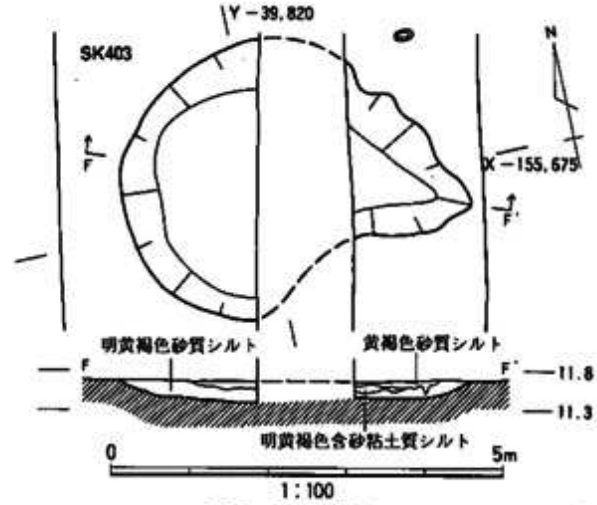


図23　V区SK403

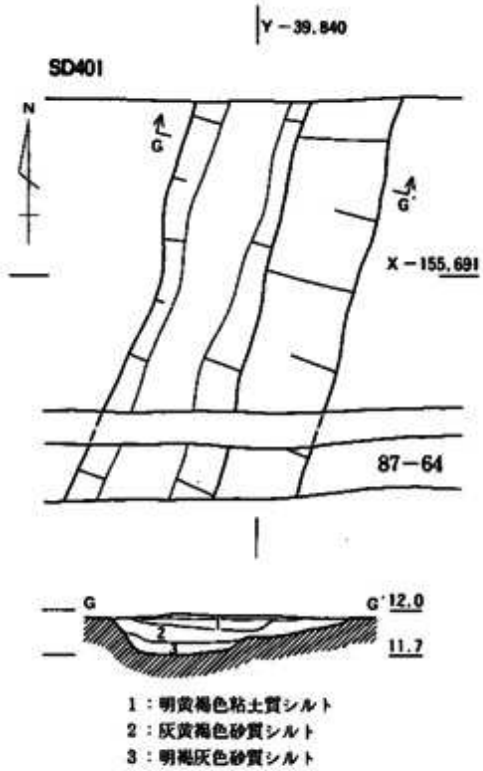


図24　Ⅲ区SD401

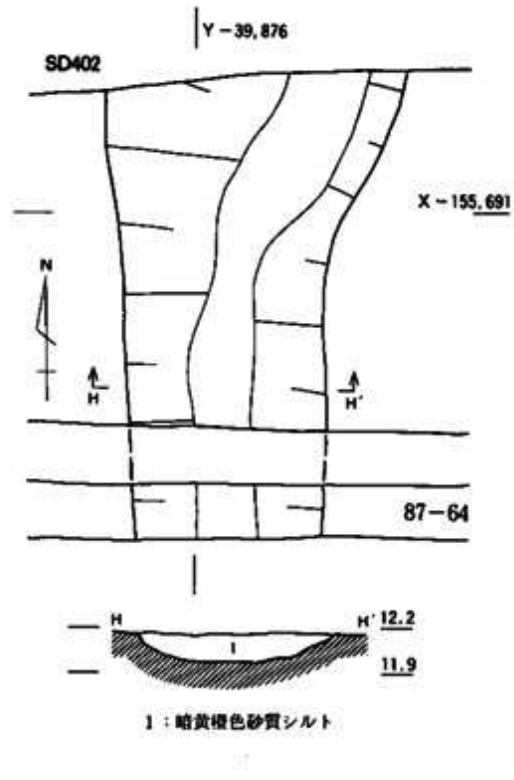


図25　Ⅲ区SD402

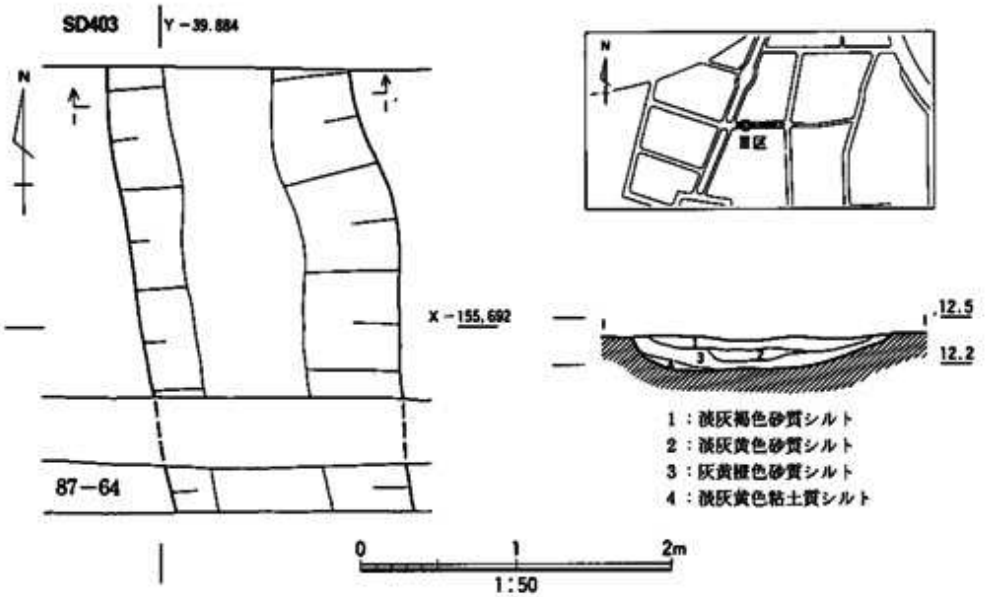


図26　Ⅲ区SD403

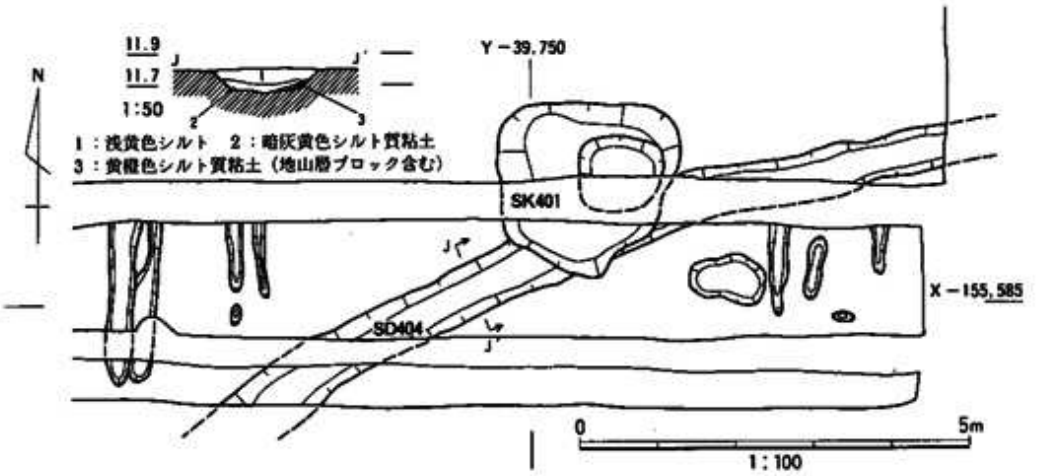


図27　Ⅶ区SD404

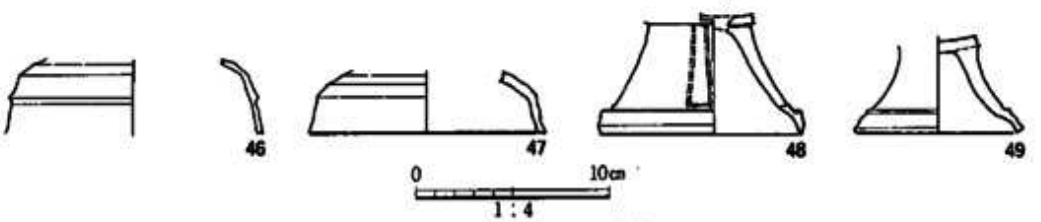


図28　Ⅶ区SD404出土の遺物

経3.5m、深さ0.2mである。土師器細片が出土している。

iv)溝

SD401(図24)

Ⅲ区の東部に位置し、長原4層下面で検出した南北方向の溝である。幅1.5m、深さ0.2~0.4mで、西側を1段深く掘込んでいる。埋土は明黄褐色(10YR6/6)粘土質シルト~明褐灰色(7.5YR7/2)砂質シルトで、最下部には水成の粗粒砂が薄く堆積している。瓦器・土師器の細片が出土している。

SD402(図25)

Ⅲ区の西部に位置し、長原4層下面で検出した南北方向の溝である。幅1.3~1.9m、深さ0.2mで、横断面は皿状である。埋土は暗黄橙色(10YR6/4)砂質シルトで、土師器甕の細片が出土している。

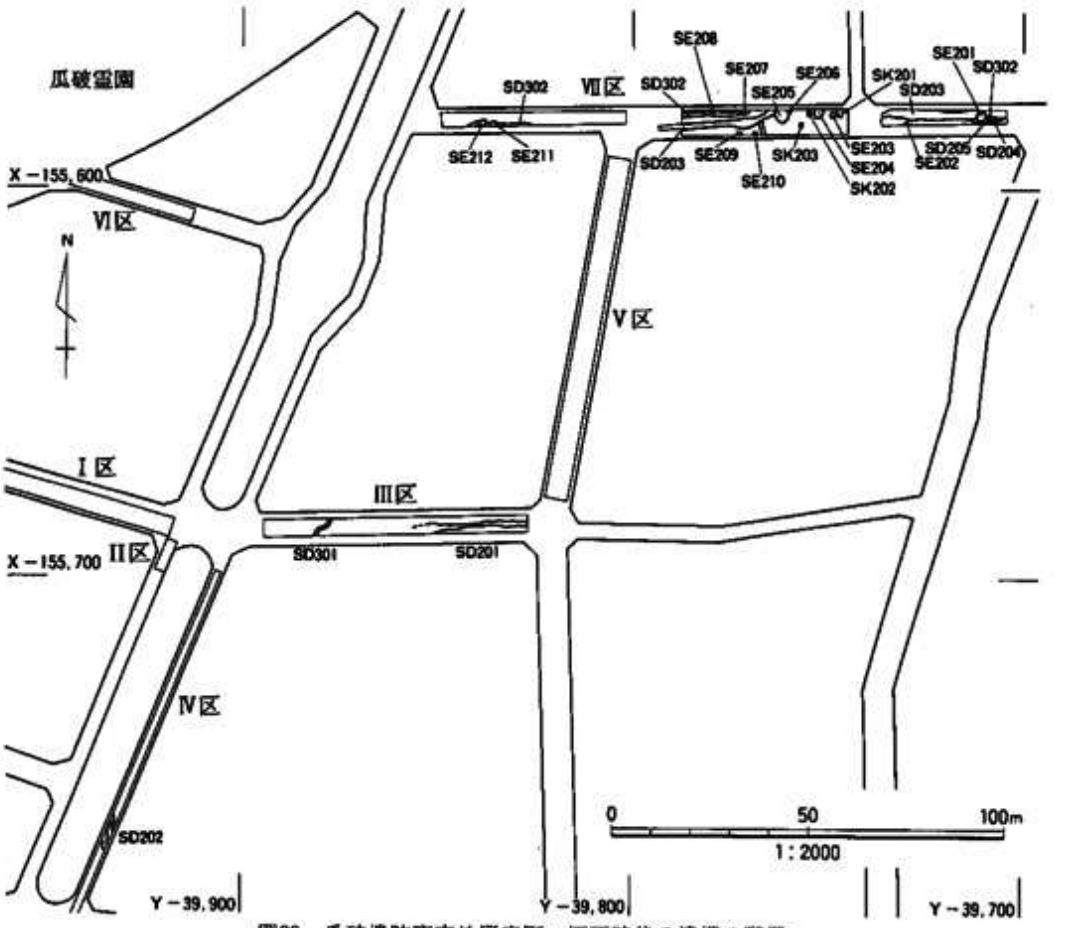


図29　瓜破遺跡東南地区室町~江戸時代の遺構の配置

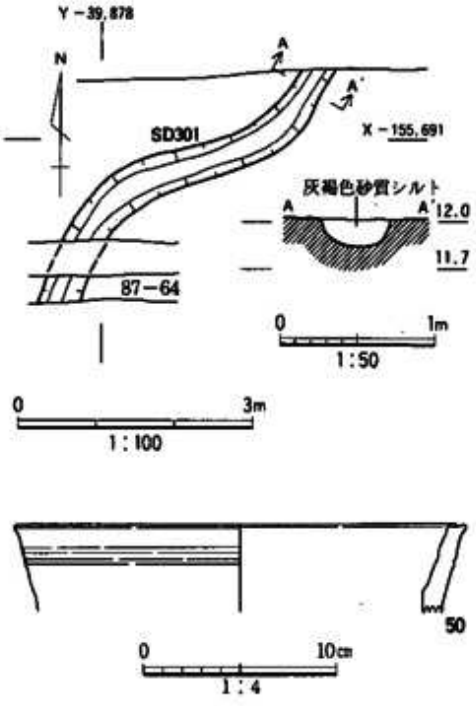


図30　Ⅲ区SD301と出土遺物

SD403(図26)

Ⅲ区西端の長原4層下面で検出した南北方向の溝である。幅1.7m、深さ0.2mで、傾斜は東側の方が緩やかである。埋土は淡灰褐色(10YR6／3)～灰黄橙色(10YR7／3)砂質シルトで、最下部に水成の粗粒砂が堆積している。土師器細片が出土している。

SD404(図27・28、図版3・22)

Ⅶ区の長原4層基底面で検出した北東から南西へ延びる溝である。幅0.7m、深さは0.1mある。少量の土師器細片と須恵器46～49が出土している。46・47は杯蓋である。48・49は高杯の脚部で、48には4方向のスカシ孔がある。TK23～TK47型式に相当する。

6)室町～江戸時代の遺構と遺物(図29)

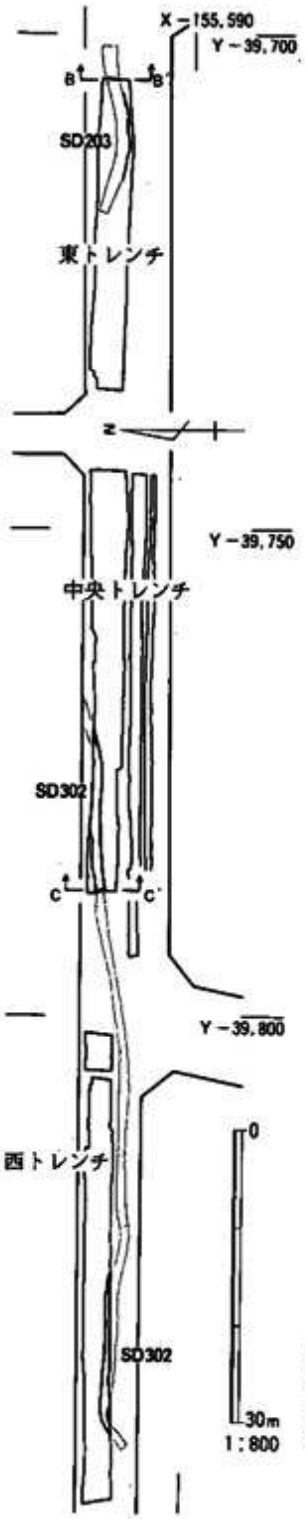
i)溝

SD301(図30、図版22)

Ⅲ区の西部に位置し、長原3層下面で検出した溝である。SD402を切って掘削されている。北東から南西へ蛇行しながら延び、87－64次調査の溝とつながる。幅は0.5m、深さは0.2mである。埋土の最下部には水成の粗粒砂が堆積している。室町時代の土師器や瓦質土器甕の口縁部50が出土している。

SD302(図31、図版4・5・21)

Ⅶ区の東・中央・西トレンチの長原3層下面で検出した東西方向の溝である。蛇行しており、トレンチ間では直接つながらないが、規模や埋土のようすから同じ1本の溝と判断した。総延長は135mである。東トレンチでは江戸時代の溝SD203とほとんど重なっており、底の部分のみ検出した。しかし、中央と西トレンチでは幅1.2m、深さ0.8mで、横断面がU字形の溝が確認できた。底部には粗粒砂を主とする水成層が堆積している。遺物は室町時代の瓦器・土師器細片とともに、古墳時代の土師器51が出土している。51は甑の把手で、



先端を細くして少し上向きに作り、上面の中央にヘラによる浅い切込みを2条施している。

SD201(図32、図版5)

Ⅲ区の長原2層下面で検出した東西方向の溝である。幅0.5～1.2m、深さは0.1mある。埋土は灰褐色砂質シルトである。底面には掘削したときの農具の痕が残る。陶磁器・青磁・瓦器の細片が出土している。

SD202(図33、図版5・22)

Ⅳ区の長原2層下面で検出した南北方向の溝である。幾度か掘直されているため、機能していた一時期の規模は不明だが、現状での幅は3.3m、深さは0.5mある。埋土はにぶい黄色(2.5Y6／3)砂質シルトである。近世の染付磁器とともに唐津焼52・53と白磁54が出土している。52は削り出し高台をもつ皿の底部である。淡緑色の灰釉がかかり、内底面と高台底に3個の砂目が残る。高台内には不明の墨書がある。53は灰釉がかかった碗の底部である。54は皿の底部で、高台はない。いずれも17世紀中ごろのものである。

SD203～205(図34～37、写真6、図版5～7・22)

SD203はⅦ区の長原2層下面で検出した東西方向の溝であ

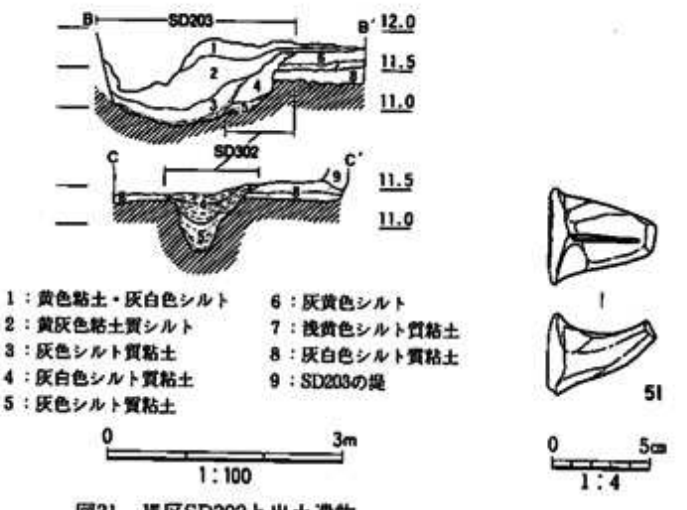


図31　Ⅶ区SD302と出土遺物

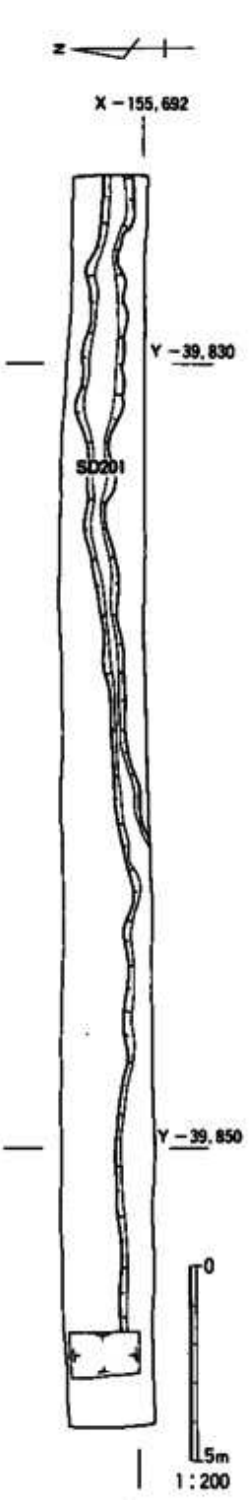


図32　Ⅲ区SD201

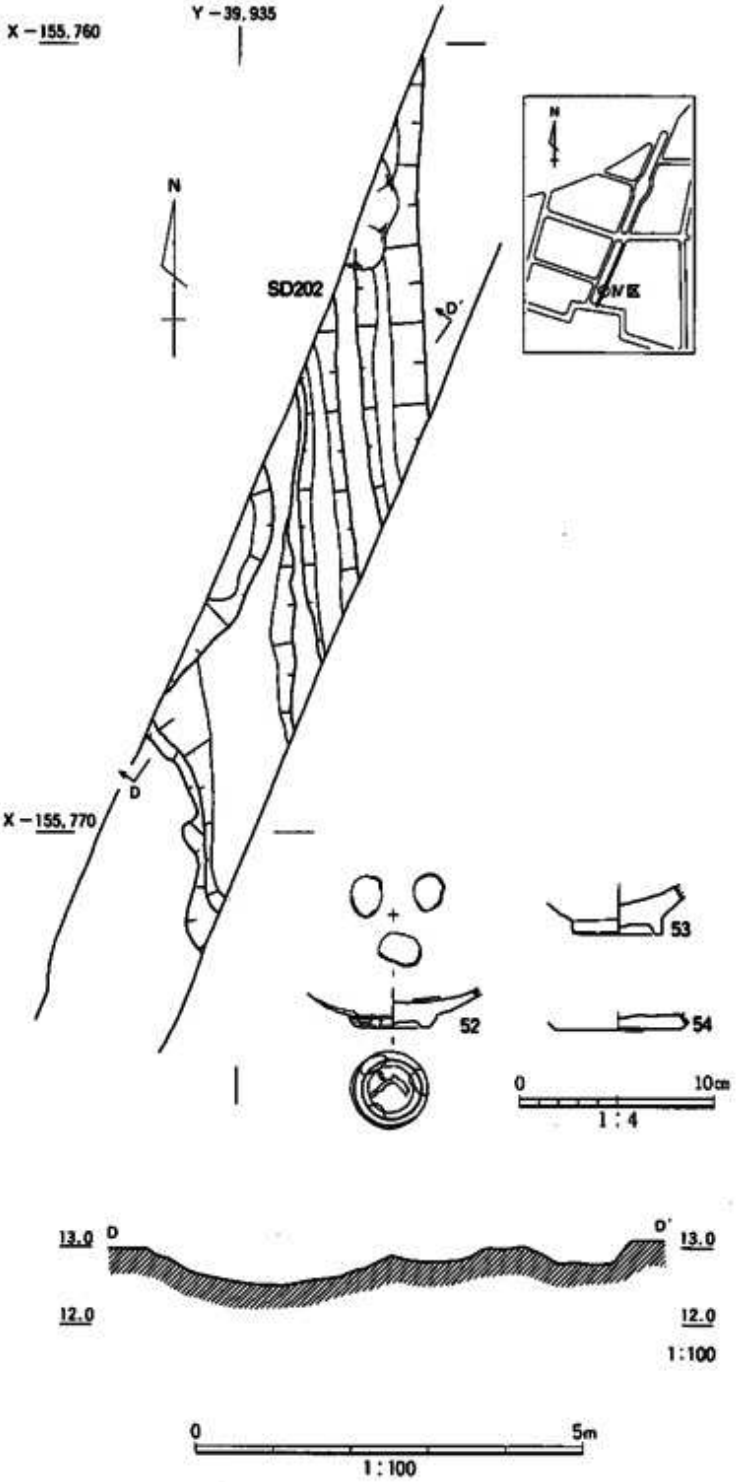
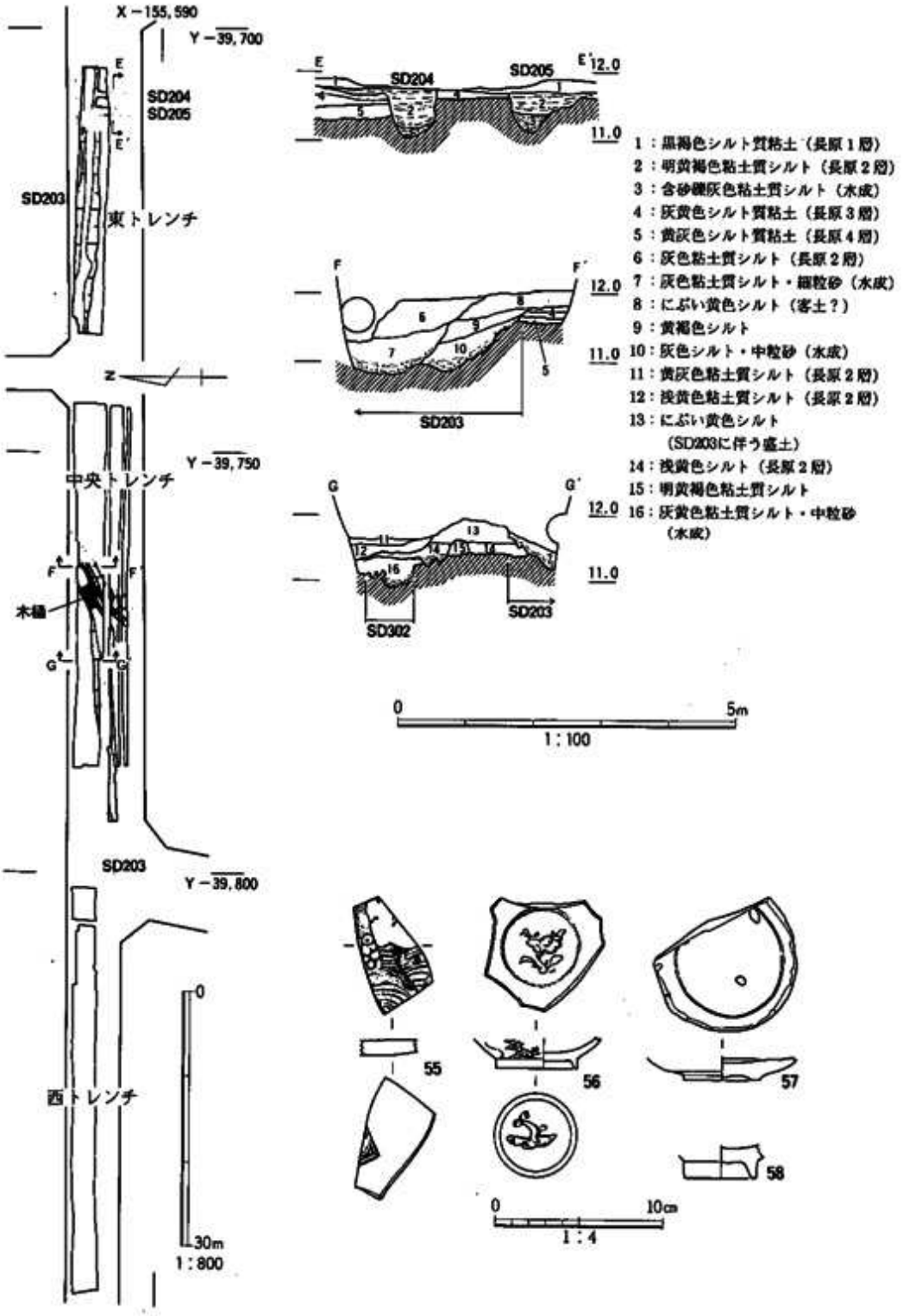


図33　Ⅳ区SD202と出土遺物



1：黒褐色シルト質粘土（長原1層）
2：明黄褐色粘土質シルト（長原2層）
3：含砂礫灰色粘土質シルト（水成）
4：灰黄色シルト質粘土（長原3層）
5：黄灰色シルト質粘土（長原4層）
6：灰色粘土質シルト（長原2層）
7：灰色粘土質シルト・細粒砂（水成）
8：にぶい黄色シルト（客土？）
9：黄褐色シルト
10：灰色シルト・中粒砂（水成）
11：黄灰色粘土質シルト（長原2層）
12：浅黄色粘土質シルト（長原2層）
13：にぶい黄色シルト
（SD203に伴う盛土）
14：浅黄色シルト（長原2層）
15：明黄褐色粘土質シルト
16：灰黄色粘土質シルト・中粒砂
（水成）

図34　Ⅷ区SD203～205と出土遺物

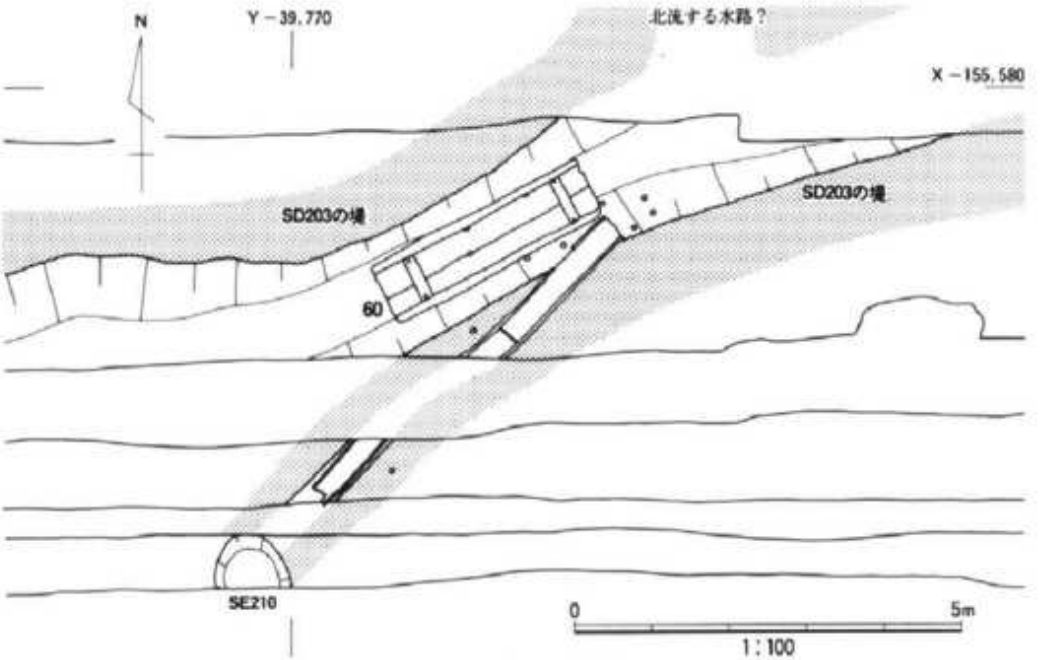


図35　Ⅷ区SD203と木樋

る。幅は1.5～2.5m、深さは1.0mある。東トレンチと中央トレンチの溝は直接つながらないが、規模や埋土のようすから同一の溝と判断した。よって現状での総延長は88mに及ぶ。溝は断面観察によって1回掘直されていることがわかる。最初の開削と掘直しの時期は、出土遺物からみて17～18世紀の間である。埋土の上部は黄褐色粘土質シルトを主体とするが、下部は粗粒砂を主体とする水成層が堆積しており、流水が活発だったことがわかる。底のレベルはTP+10.8mである。

写真6　Ⅷ区SD203出土の弥生土器

中央トレンチではSD203に沿った南北両側で堤状の盛土を検出した。盛土は幅1.3m、高さ0.4mで、たたきしめられたように堅いため、水田畦畔も兼ねていたと思われる。また、SD203が大きく蛇行する場所で、木樋を2種類検出した。ひとつはSD203の底に近い位置で見つかった大型の木樋60である。もうひとつは、それから枝分かれするように南方のSE210に延びる細長い木樋である。細長い木樋は3本

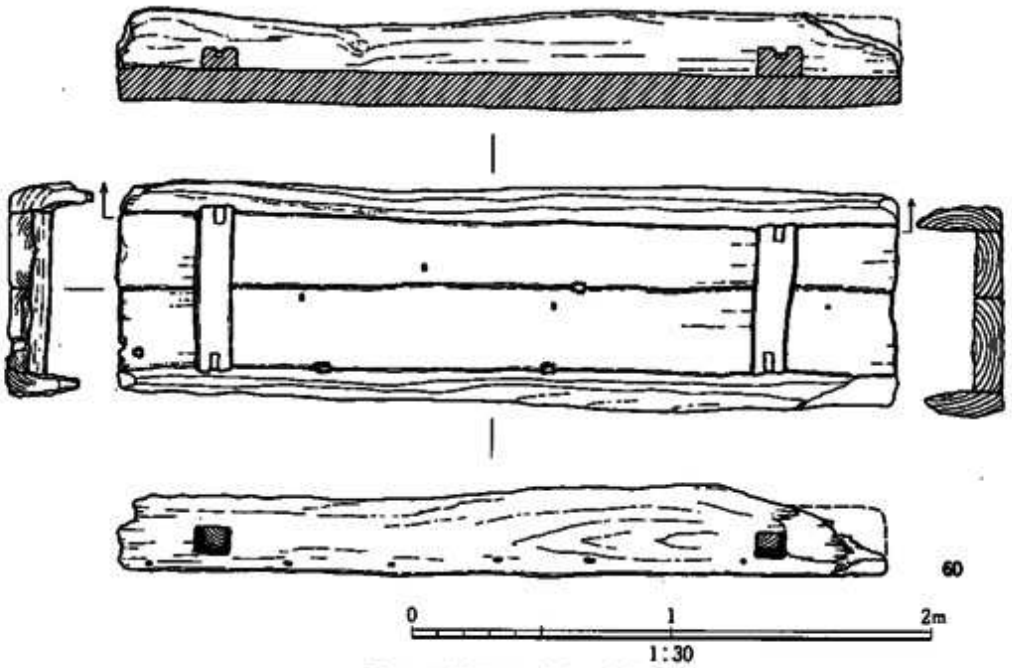


図36　Ⅵ区SD203出土の木樋

つないで全長5.2mの暗渠状の導水施設を形成している。しかし、上部は攪乱のために破壊されており天板もないことから、暗渠として設置されていたという確証はない。大型の木樋60についても同様である。

東トレンチではSD203はほぼ東西方向に延びて横幅いっぱいにトレンチを縦断しており、東端で南北方向の溝SD204・205が直角に取付くことを確認した。SD204は幅0.7m、深さ0.7mで、SD205は幅1.0m、深さ0.6mである。ともに南北方向に並行しており、最下部には粗粒砂を主体とする水成層が堆積している。底はTP＋11.1mでSD203より約0.3m浅い。SD203との接合部で堰の痕跡は発見できなかった。

SD203からは17世紀の青花盤55、伊万里焼染付碗56、３個の目痕を内面にもつ唐津焼皿57、白磁碗58や、沈線が１本施された前期の弥生土器壺の頸部59(写真６)が出土している。

大型の木樋60は外寸法が縦300cm、横80～85cm、深さ25～43cmで、内寸法は縦300cm、横55cm、深さ15～25cmである。構造は２枚の底板を並べて鉄釘で１枚に固定したあと、横に側板を立てて７個所ずつ鉄釘61で側面から固定している。小口には角柱を２本はめ込んで支

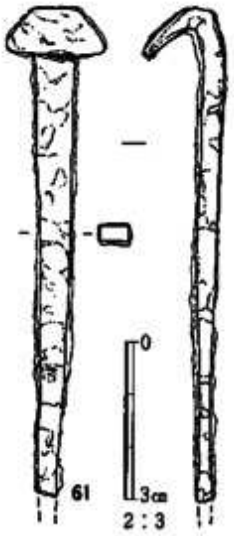


図37　木樋の鉄釘

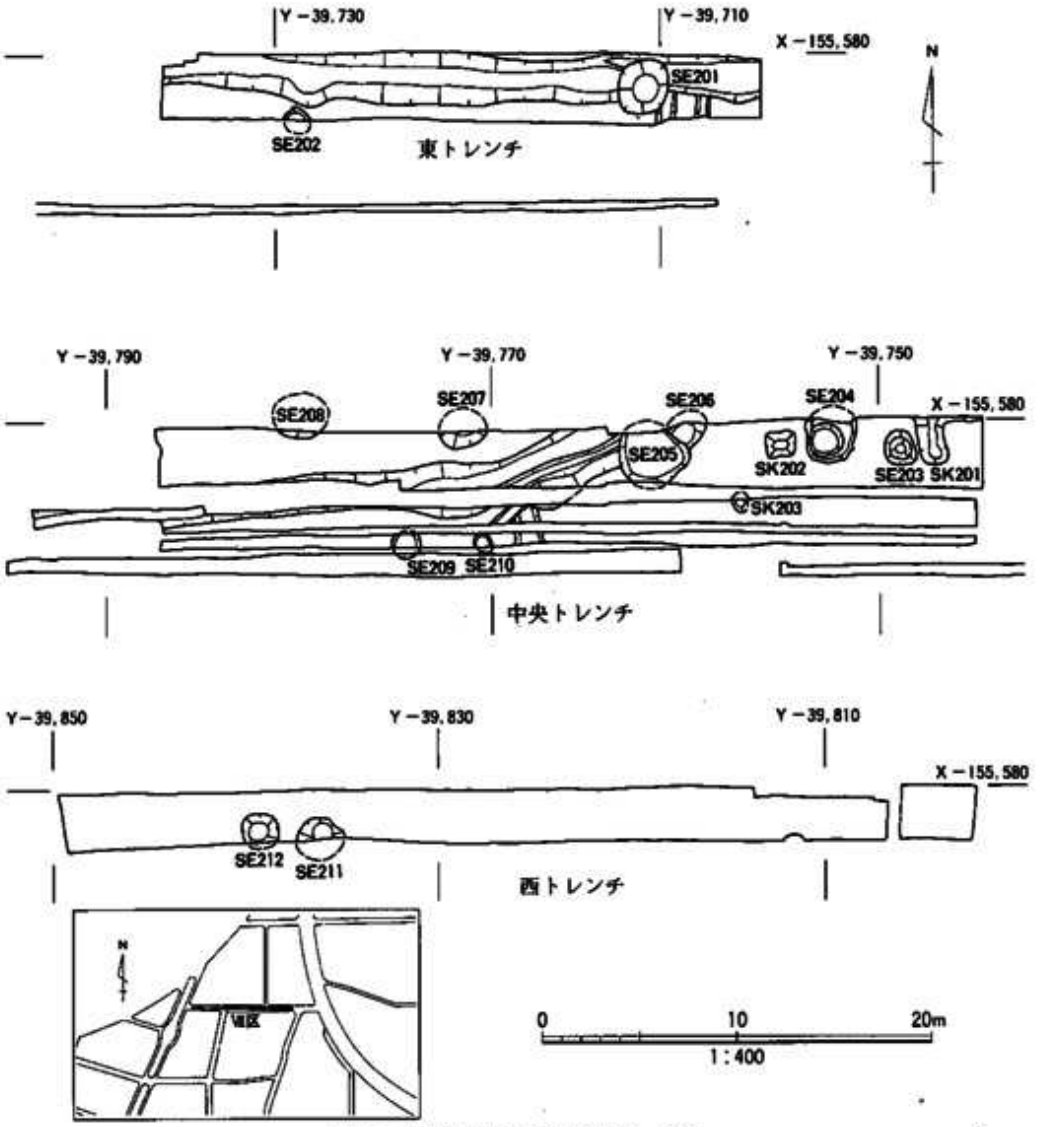


図38　Ⅶ区SE201～212とSK201～203

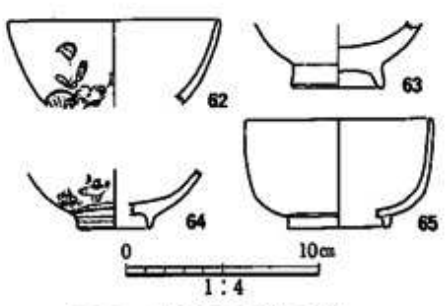


図39　Ⅶ区SE211出土の遺物

えにしている。底板・側板とも厚さ約10cmの板目材を使用しており、材はマツ科である[島地謙・伊東隆夫1982]。使用された鉄釘61は長さ9.4cmの角釘である。頭部は薄く叩き延ばしたのち片側に曲げる一体作りである。

細長い木樋は遺存状態が悪いため現地での観察にとどめた。構造は底板の横に側板を立てて鉄釘

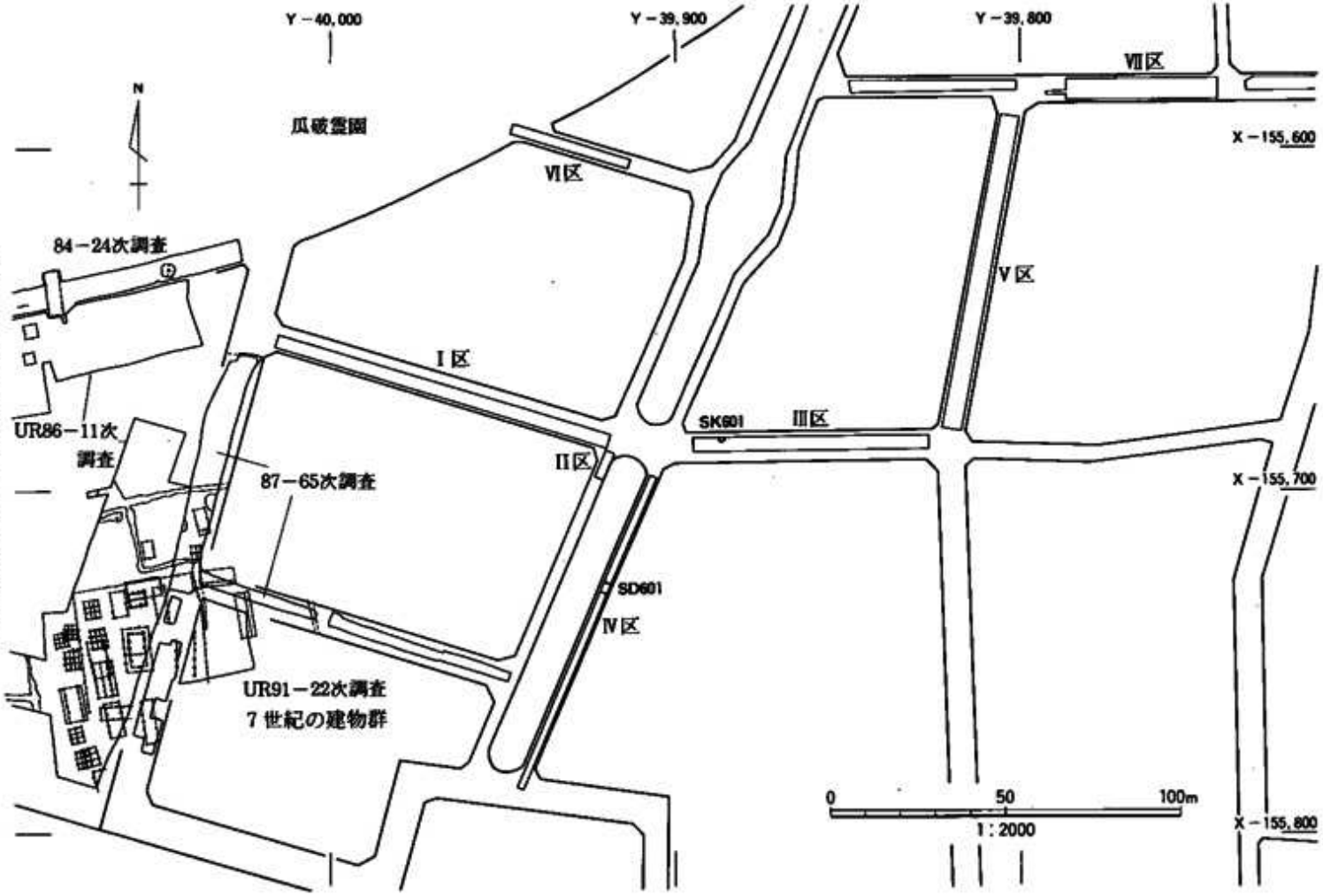


図40　瓜破遺跡東南地区飛鳥時代の遺構の配置

を打ち付けるだけの簡単なもので、材の厚さも3cmと薄い。外寸法はもっとも残りのよい北端のもので、長さ200cm、幅40cm、深さ10cmである。

ii)井戸・土壙

SE201～212(図38・39、図版22)

Ⅶ区の長原2層下面で検出した素掘りの井戸である。中央トレンチでは8基が約5m間隔で密集している。すべて構造は上から深さ0.8mまで擂鉢状に掘ったあと、以下を垂直に掘下げている。直径は1.0～3.5mと大小さまざまである。内部は地山のブロックを多量に含む砂質シルトで埋戻されている。SE211から18世紀ごろの伊万里焼染付碗62・64と京焼碗63・65が出土している。

SK201～203(図38)

Ⅶ区の長原2層下面で検出した土壙である。検出面の形状は井戸に似ているが、深さは0.5m以内と浅い。

7)小結

瓜破遺跡東南地区では、西端のUR86－11次調査によって7世紀の官衙的建物群の存在が明らかになっている(図40)。今回の調査地はそれに隣接する地域であったにもかかわらず、当該時期の遺構がほとんどなかった。地区全体に対するⅠ～Ⅷ区の総調査面積はわずかであるが、それぞれを東西300m、南北350mの範囲に設定したトレンチと考えれば、瓜破新池周辺を除く瓜破遺跡東南地区の全域を網羅できたはずである。遺構面が削平されていることを考慮しても、めだった遺構がないということは、今回の調査区の範囲にはもともと7世紀代の遺構はなかったとしてよかろう。つまり、7世紀の建物群が造営された地域が周囲と比べて際立った空間であったことがわかる。それ以外の地域では生産の場として古代から現代にいたるまで耕作が繰返され、必要な溝や井戸が数多く開削されている。特に井戸は水路を張り巡らすことのできない瓜破台地上にあって、重要な水利施設として近世には盛んに掘られたようである。

SD203内で見つかった木樋60は原位置のものか疑問が残る。しかし、見つかった場所がSD203が唯一大きく蛇行するところであること、また、細長い木樋が横に並んでいたようすから投棄されたものとは考えにくく、SD203の用水を南に振り分けるために設置された暗渠と考えられる。

第２節　長原遺跡中央地区の調査

１）調査地の層序（図41、図版８）

ｉ）はじめに

当調査地は88－20次調査の３区と４区にはさまれた位置にある。出土遺物は少ないが既調査の結果を念頭に置いて地層を細分することができた。

ii）層序

沖積層上部層Ⅰ

長原０層：現代の客土層である。

長原１層：現代の作土層である。

長原２層：灰黄褐色（10YR5／2）砂質シルトの作土層である。層厚は５～35cmで、３層に細分できる。それぞれの下面には東西方向の耕作に伴う小溝を多数検出した。江戸時代の伊万里焼染付を含む。

長原３層：にぶい黄色（2.5Y6／3）中粒砂～シルトの作土層である。層厚は５～20cmで、２層に細分できる。瓦器・瓦質土器を含む。

長原4A層：黄褐色（2.5Y5／3）砂質シルトの作土層である。層厚は20cm以下で調査地の南半部に分布する。瓦器・土師器を含む。

長原4Bi層：灰黄褐色（10YR5／2）砂質シルトの作土層である。層厚は20cmで、瓦器・土師器・須恵器を含む。下面で溝や多数の偶蹄類動物の足跡を検出した。

長原4Biii層：暗灰黄色（2.5Y5／2）粘土質シルトの作土層である。下位層の粗粒砂を多く含んでいる。層厚は10cmで、瓦器・土師器・黒色土器を含む。

長原6Aii層：明黄褐色（2.5Y6／6）～にぶい黄橙色（10YR7／2）粗粒砂～シルトの水成層である。ラミ

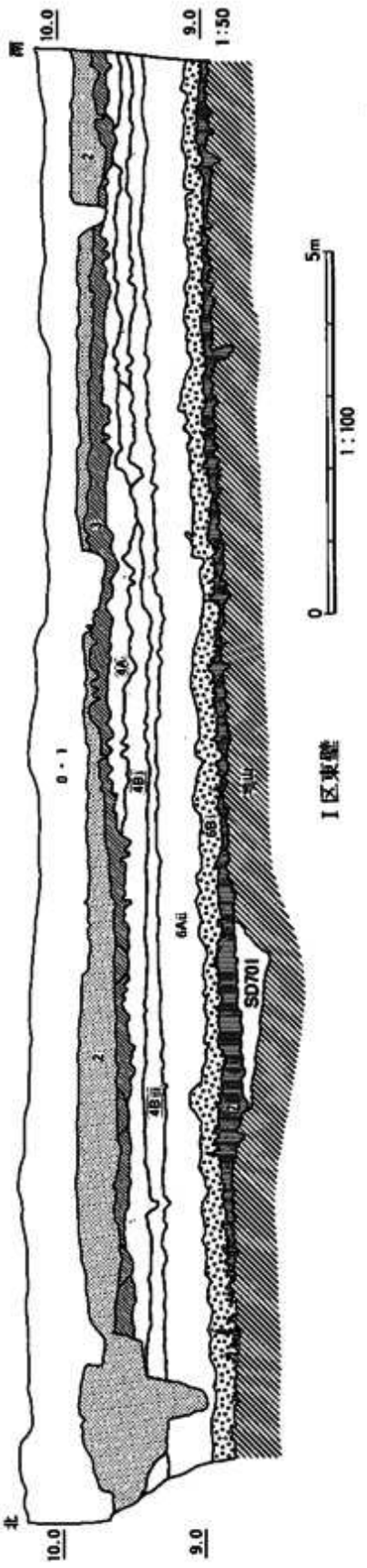


図41　Ⅰ区地層断面

ナが顕著で、下部に長原6Bi層をブロック状に巻き込んで堆積している。層厚は30cmある。

長原6Bi層：黒色(7.5YR2／1)粘土の水田作土層である。層厚は10～20cmで、須恵器・土師器・埴輪を含む。上面で人の足跡や、畦畔SR601・溝SD601を検出した。

沖積層上部層Ⅱ以下

長原７層：黒色(10YR7／1)粘土である。層厚は20cm以下で、古墳時代の須恵器・土師器を含む。下面で溝SD701・土壙SK701を検出した。

長原９～13A層：明褐色(7.5YR7／1)シルト～シルト質粘土である。層理面は明確でなく、全般に火山灰質である。

2)各層出土の遺物

長原4A層出土遺物(図42、図版23・24)

66・70は土師器小皿である。口縁の調整は２段のナデで、12世紀ごろのものである。78

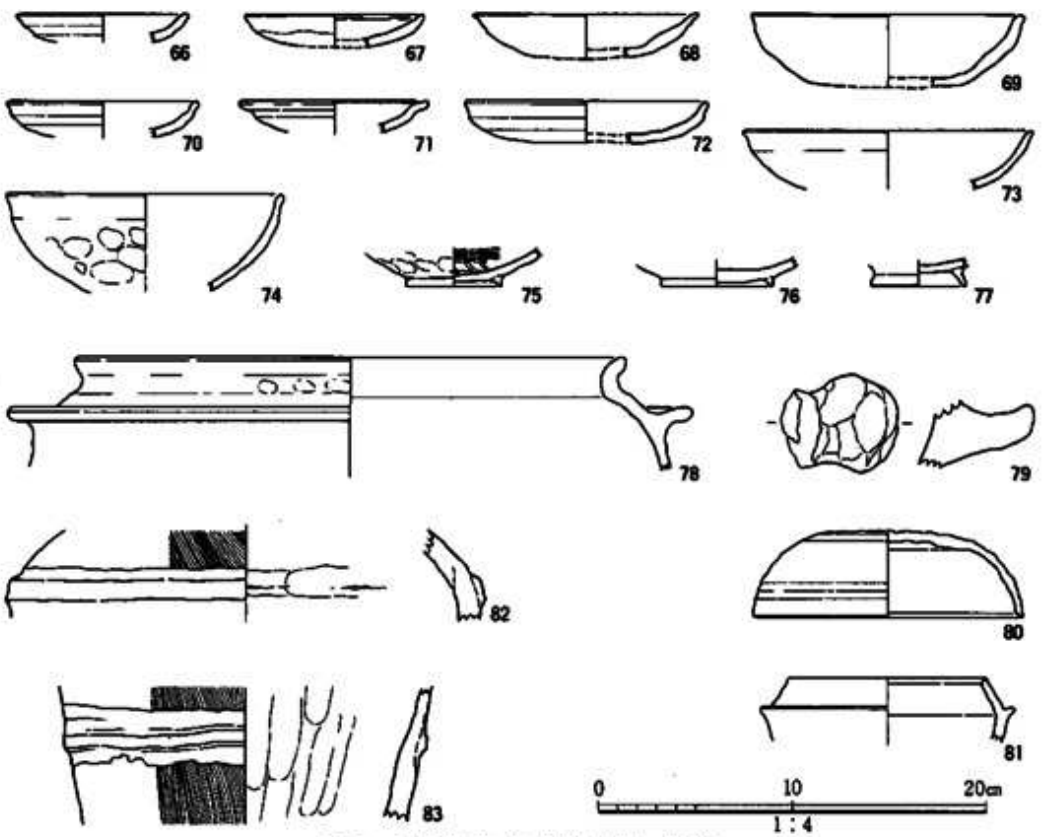


図42　Ⅰ区各層出土の遺物(土器・埴輪)

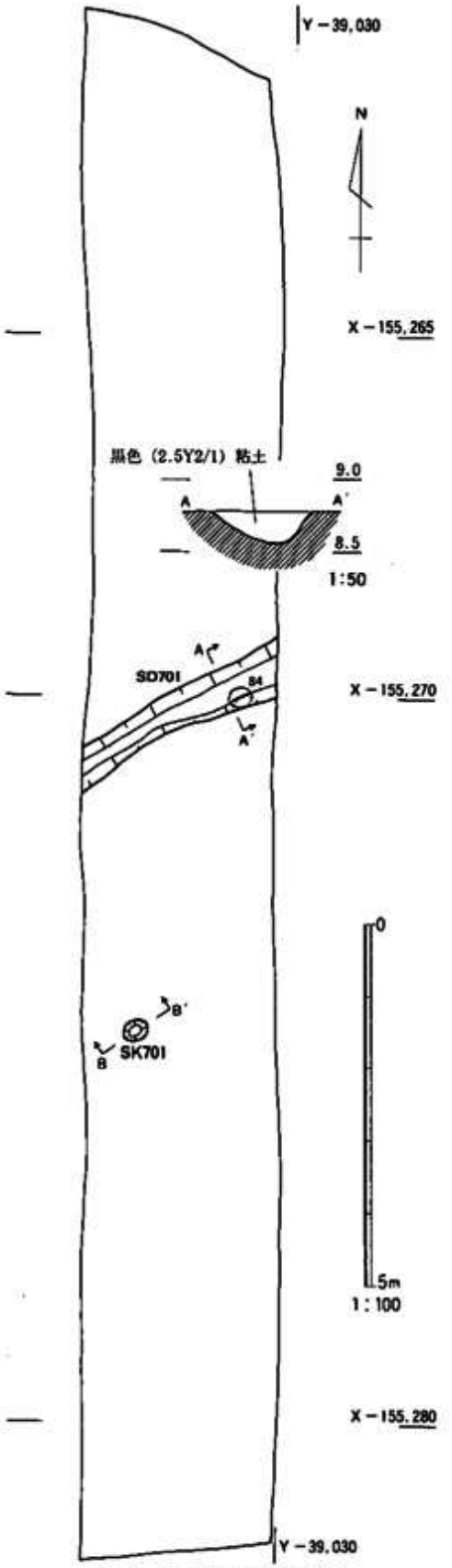


図43　Ⅰ区古墳時代の遺構

は土師器羽釜である。口縁は短く外反し、鍔は口縁端部から4cm下に付く。鍔の幅は2cmで端部はまるい。13世紀前半のものである。ほかに14世紀ごろの瓦器椀細片が出土している。

長原4Bi層出土遺物（図42、図版23）

67・71は土師器小皿である。71は口縁部がて字状である。器厚が4mmと厚いことから11世紀前半のものである。68・69・72は11～13世紀ごろの土師器皿である。68は底部から口縁部が直線的に延びる。69は深手の皿である。外面はユビオサエが顕著で、内面は平滑である。口縁部のヨコナデは弱く、端部は波打っている。72は口縁部に2段のナデを行う。73は口縁端部を細くつまみあげており、底部と口縁部の境がまるいことから、9世紀ごろの土師器椀と考えられる。74～76は13世紀ごろの瓦器椀である。74は体部のみで、磨滅のために内外面の暗文は明らかでない。口縁端部はまるい。75・76は底部である。ともに断面三角形の低い高台を付ける。75は内面に太い斜格子状の暗文を施す。

長原4Biii層出土遺物（図42、図版23）

77は黒色土器椀である。高台は低く直径も5cmと小さく、小型の椀である。11世紀前半のものである。

表3　長原遺跡中央地区各層出土の遺物

地区	地層	遺物番号
Ⅰ区	長原4A層	66・70・78
	長原4Bi層	67・68・69・71・72
		73・74・75・76
	長原4Biii層	77
	長原6Bi層	79・80・81・82・83

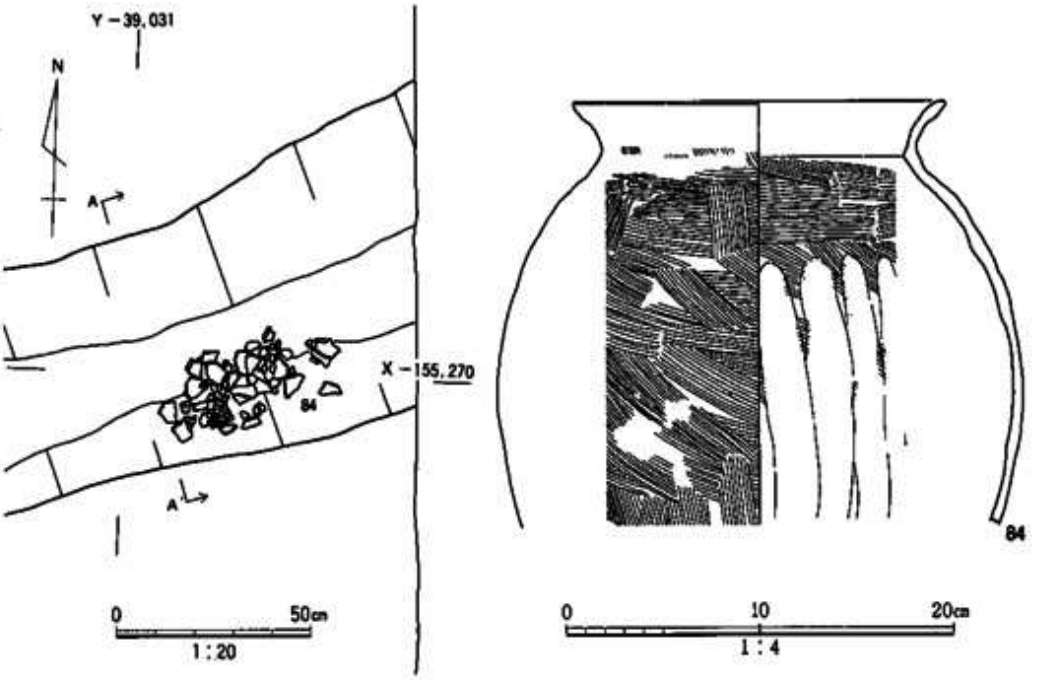


図44　Ⅰ区SD701と出土遺物

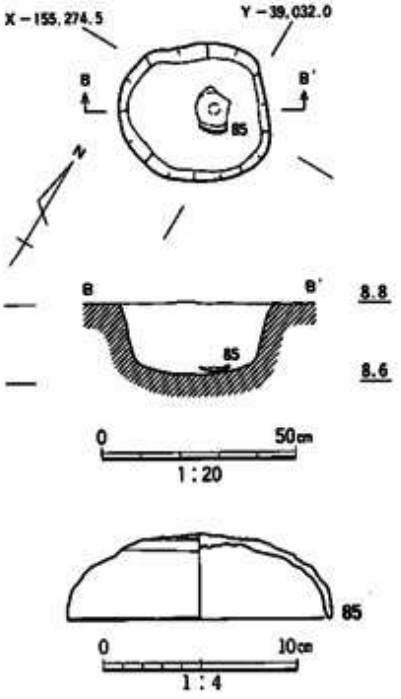


図45　Ⅰ区SK701と出土遺物

長原6Bi層出土遺物(図42、図版24)

79は土師器甑の把手である。平面形は円形に近く、上方に少しそり上がる。5世紀中ごろのものである。80はTK10型式の須恵器杯蓋、81はTK47型式の杯身である。82は朝顔形埴輪の肩部、83は円筒埴輪である。粗いタテハケメとタガのようすから、6世紀中ごろのものと考えられる。

3)古墳時代の遺構と遺物(図43)

i)溝

SD701(図44、図版9・24)

Ⅰ区中央の長原7B層下面で検出した南西から北東に向う溝である。幅は0.5～0.8m、深さは0.2mある。溝の底から土師器甕84が出土した。土圧で押潰されており、復元すると上半部のみであった。体部外面に粗い

ハケメが施されており、内面はハケメのあと縦方向にナデている。口縁部は外反し、端部を肥厚させている。5世紀後半のものである。

ii)土壙

SK701(図45、図版8・24)

Ⅰ区のSD701の南側で検出した土壙である。直径0.4m、深さ0.2mで、黒色(2.5Y2/1)粘土を埋土とする。中央の底から口縁部の大半を欠損した須恵器杯蓋85が仰向けの状態で見つかった。埋土中にほかの破片が見当らないため、割れた状態で埋められたものとわかる。蓋の内面には当て具痕があり、TK209型式である。

4)飛鳥時代の遺構と遺物

i)水田

SR601・SD601(図42・46・47、図版9)

Ⅰ区の長原6Bi層上面で多数の人の足跡と畦畔SR601と溝SD601を検出した。SR601は南北に平行して2条、東西に2条延びる畦畔である。南北の畦畔は、間にSD601を通しているために丈夫に作られている。規模は南北の畦畔が作土面からの高さ0.2m、下幅0.5m、上幅0.3mで、

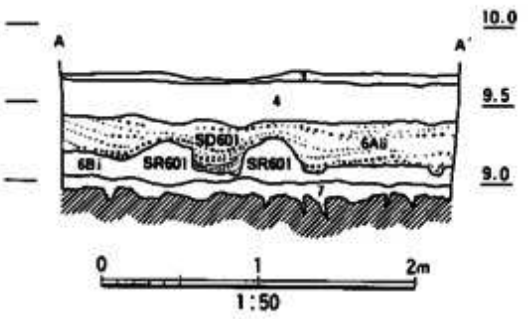


図46　Ⅰ区SR601とSD601の断面

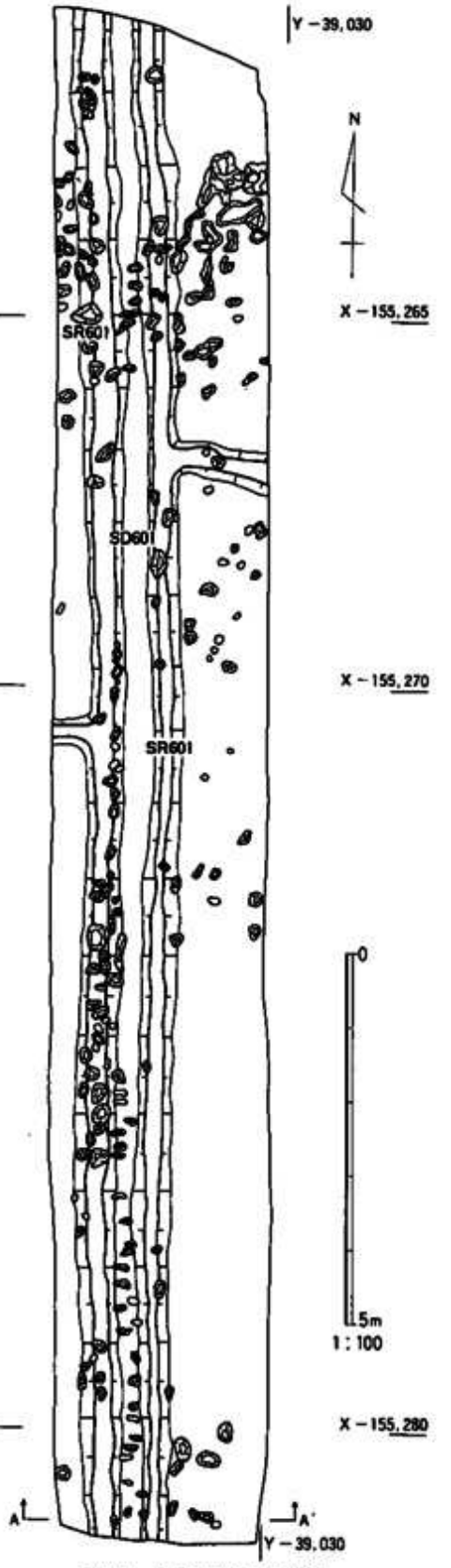


図47　Ⅰ区SR601とSD601

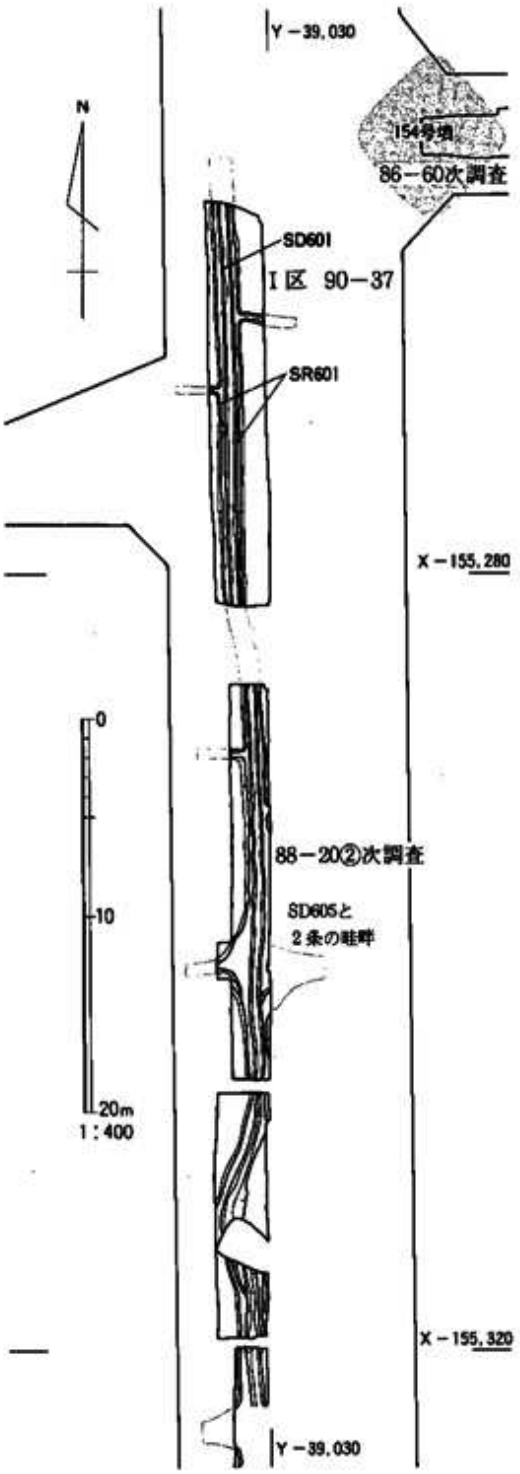


図48　I区周辺の飛鳥時代の遺構

東西方向の畦畔が作土面からの高さ0.2m、下幅0.4m、上部0.2mである。水口はない。SD601は幅0.3m、畦畔の上端からの深さ0.3mの溝である。底は作土面より約10cm深く、掘削した時の農具の痕が並んでいた。埋土はにぶい黄橙色(10YR7／2)粗粒砂であるが、これは長原6Aii層と一連の水成層であるため、大規模な出水によって畦畔や作土面が一気に埋没したことがうかがえる。作土中からは土師器把手79・須恵器杯蓋80・杯身81・埴輪82・83などが出土している。畦畔の中から遺物は出土しなかった。

5)小結

広い面積の調査ではなかったが、88－20次調査の間を埋める資料を得ることができた。つまり、調査区周辺が飛鳥時代以降に水田として利用されていたことが追認できた。88－20②次調査の水路SD605と畦畔が北方に延びて全長が85mになり、大畦畔と同じ重要な区画を意味するようである(図48)。ただし、I区の北東に直交する路線の86－60次調査[大阪市文化財協会1993]では長原5層で埋る長原6Ai層の水田が見つかっているが、長原6Aii層の水成層と、長原6Bi層の水田は検出されていない。これは両調査地の間で地山面の標高が高いことと、長原154号墳の高まりが障害物となって洪水層をせき止めた結果、地層の堆積に変化をもたらしたと考えられる。

第３節　長原遺跡東南地区の調査

調査個所の周辺部では旧石器時代の石器製作の場、弥生時代前期の集落や中期前半の水田などをはじめ、古墳時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が検出されている。本年度は90－5(Ⅰ区)・90－45(Ⅱ区)・90－26(Ⅲ区)の３個所で調査を実施した。

１)調査地の層序(図49～52、図版10・11)

ⅰ)はじめに

調査地は長原遺跡の南部基本層序[趙哲済1995]に対応する地区にある。ここでは調査面積がもっとも広いⅠ区を主として報告する。ただし、長原３層以上は現代の耕作によって撹拌されており、一部を除いて確認できなかったため長原４層以下の堆積状況について述べる。

ⅱ)層序

沖積層上部層

長原４層：灰オリーブ色(5Y6／2)粘土質シルト～砂礫混り粘土質シルトで、層厚は10cm前後ある。ほぼ全域に分布しており、古墳時代後期から平安時代の土器の細片が出土した。本層は長原遺跡の南部基本層序では長原4A～4C層に細分されているが、ここでは長原4B層に相当する耕土以外だけであった。上面では長原２層の鋤溝や用水路が検出されたほか、下面では人や偶蹄類動物の足跡群がみられた。なお、C区南端にある坪境溝SD301は数回の掘直しが行われていたが、このうちの最下層で確認した溝は本層準の遺構と思われる。

長原５層：黄橙色(7.5YR8／8)砂礫～砂質シルトを基調とする水成層で、層厚は５cm以下である。調査個所のごく一部でみられたのみである。

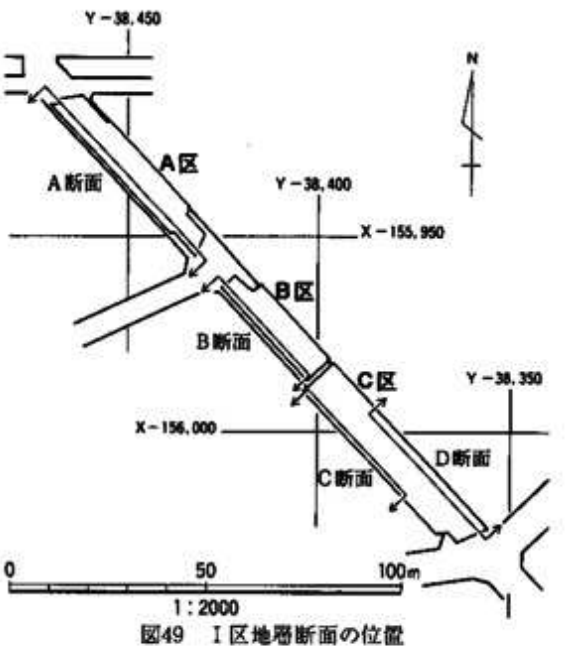
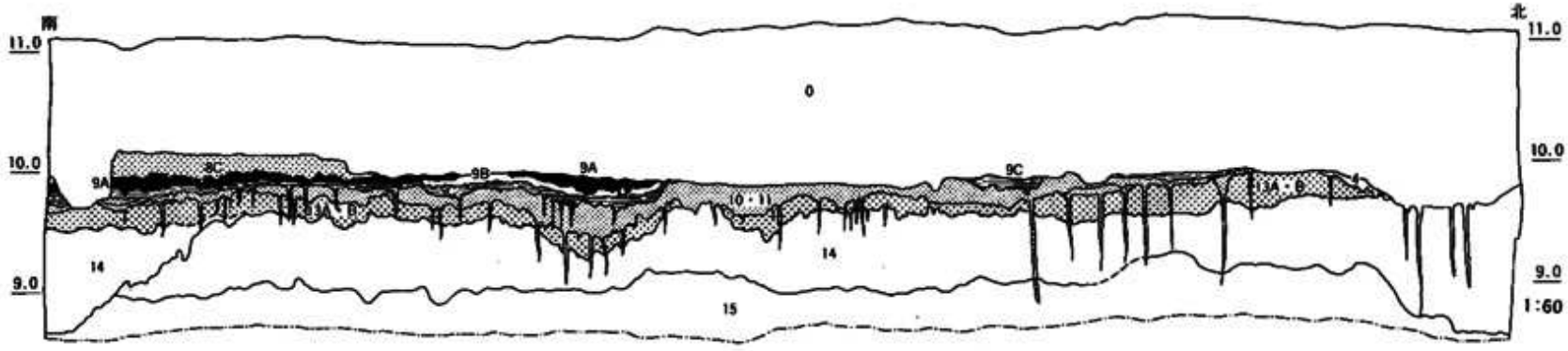
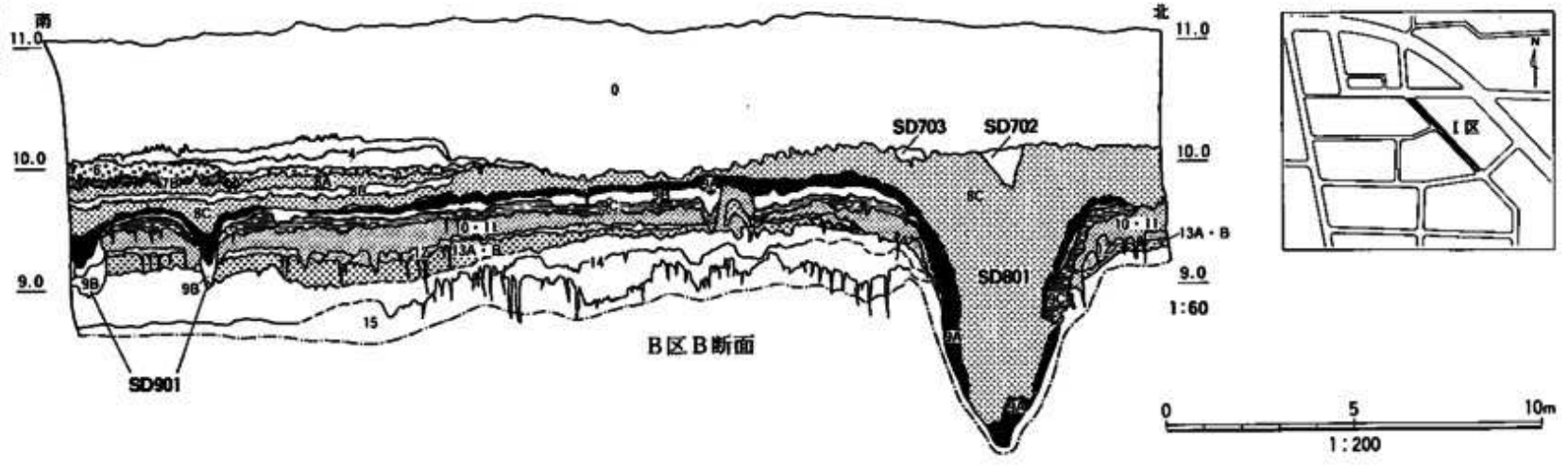


図49　Ⅰ区地層断面の位置



A区A断面



B区B断面

1:60

0 5 10m

1:200

図50 I区地層断面

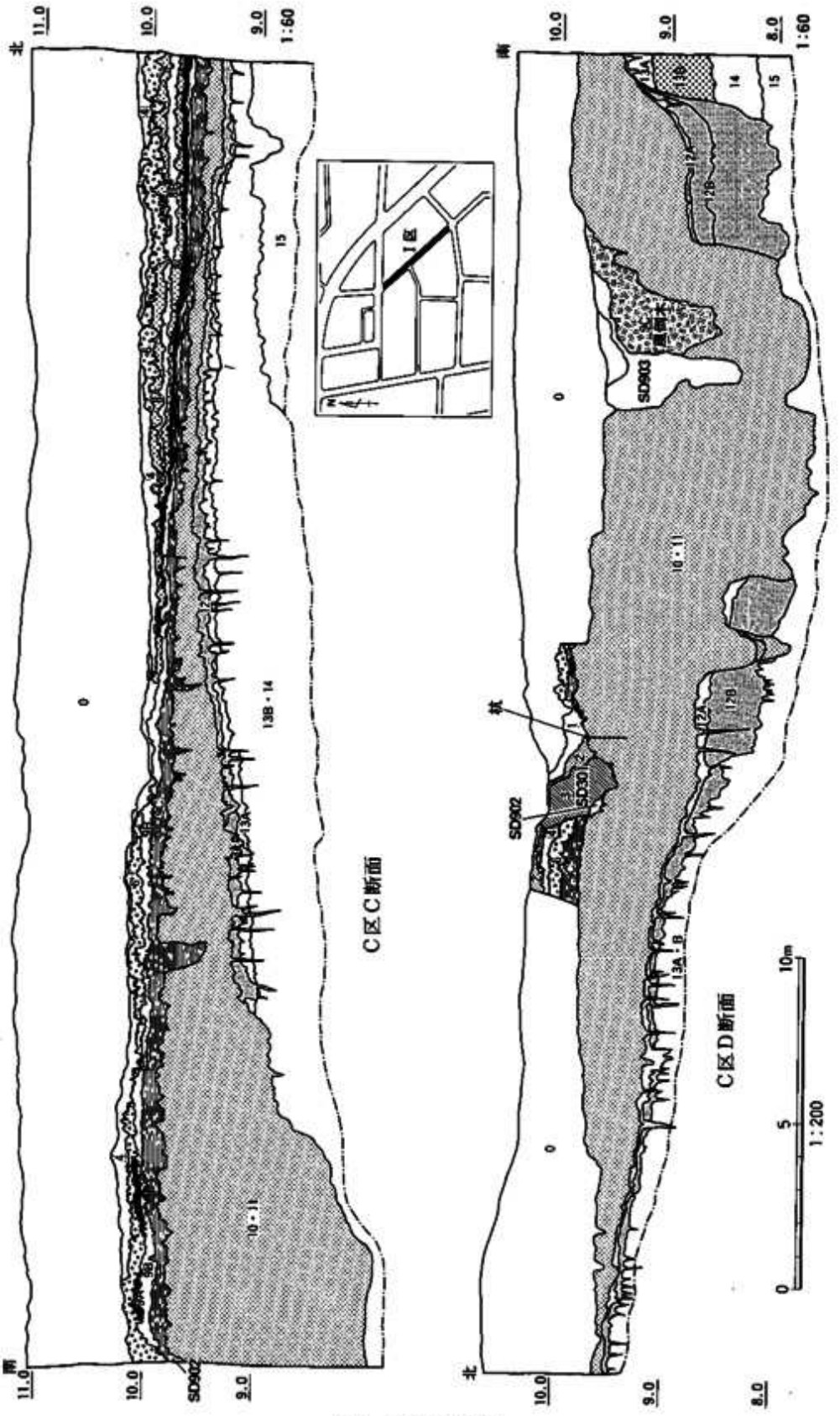


図51　I区地層断面

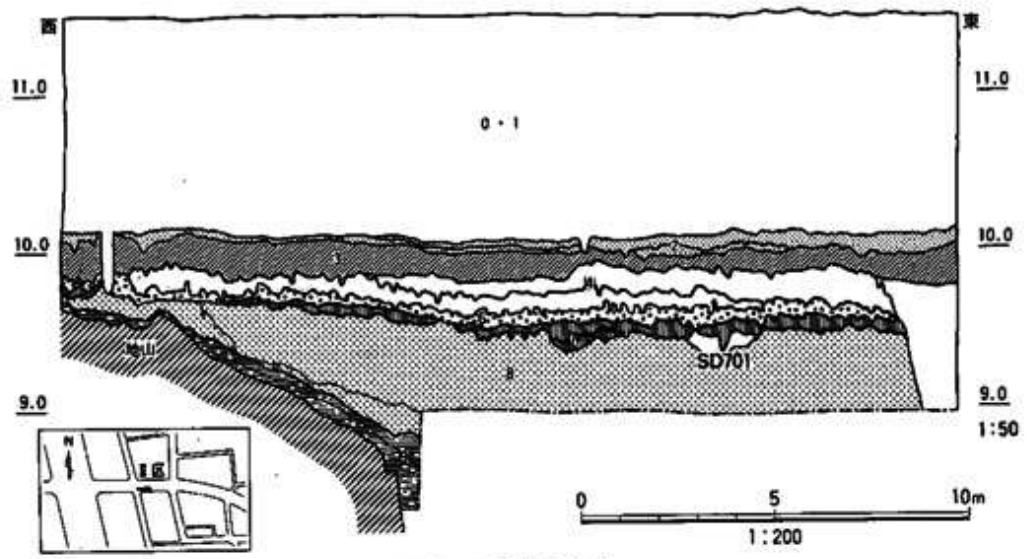


図52　Ⅱ区地層断面

長原６層：褐色(10YR4／6)シルト質粘土およびにぶい黄褐色(10YR4／3)砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後ある。本層はⅠ区のB区以南に分布しており、上面および下面で人や偶蹄類動物の足跡が見つかった。６世紀後半から７世紀初頭の土器が少量出土した。長原6A層に相当する。

長原7B層：オリーブ褐色(2.5Y4／6)砂礫混りシルトで、層厚はわずか２～３cmである。B区のみに分布していた。古墳時代の土師器を含む。土器埋納ピットSP701・土壙SK701・井戸SE701などは本層下面の遺構である。

長原8A層：黒褐色(10YR4／6)～褐灰色(10YR4／1)シルト質粘土で、層厚は10cm前後あり、水成層である。

長原8B層：黒褐色(2.5Y3／2)～褐灰色(10YR4／2)シルト質粘土で、層厚は10cm前後ある。B区以南に分布しており、上面で乾痕や草木類の根痕などが確認されたことから、ある一時期に地表面であったことがわかる。

長原8C層：黄褐色(10YR5／4)砂質シルトおよび砂礫を基調とする水成層である。B区に位置する流路SD801内から南部にかけて分布する。層厚は流路の近くでは50cm以上あるが、離れるにしたがって徐々に薄くなり、堆積物も砂礫から極細粒砂質シルトに移行する。

長原9A層：黒褐色(10YR3／1)シルト質粘土を基調とし、層厚は10cm前後ある。本層は途切れながらも調査個所のほぼ全域に分布している。B区の下面で溝SD901を、C区では本層の上部で焼土塊SX801と小穴群および畿内第Ⅰ様式の弥生土器甕が見つかった。

長原9B層：黒褐色(7.5YR3／1)シルト質粘土を基調とする水成層で、層厚は10cm前後ある。本層も長原9A層と同様に調査個所のほぼ全域に分布していたが、一部では上位の地層との境界が不明瞭であり、区分できなかった。

長原9C層：黒褐色(7.5YR1.7／1)細粒砂混りシルト～黄灰色(2.5Y4／1)シルト質粘土で、層厚は10～20cmある。本層は調査個所のほぼ全域に分布しており、上面はTP+9.7～10.0mで、調査個所の中央部が周辺部に比べてやや低い。B・C区で下面より樹木の根痕や倒木の痕と思われる土壙状の凹みを検出した。

長原10・11層：黄褐色(10YR5／6)シルトおよび黄灰色(2.5Y5／1)砂礫を基調とする水成層で、層厚は20cm前後ある。南部で徐々に層厚を増し、C区南端に位置する流路NR1201(古川辺川)内では最大1.9mとなる。

長原12A層：黄灰色(2.5Y6／1)～オリーブ黒色(7.5Y2／2)粘土質シルトで、調査個所のほぼ全域に分布している。層厚は5～10cmある。本層の上面には無数の乾痕がみられたほか、上部で縄文時代の石鏃が出土した。また、流路NR1201の北岸の近くで検出した杭群は本層準の遺構である。

長原12B層：灰黄褐色(10YR5／2)粘土質シルト～極細粒砂質シルトで、層厚は10cm前後あり、横大路火山灰のごく小さなブロックを含む。なお、本層は流路NR1201の南岸では約70cm堆積しており、下層の長原13A～15層の小さなブロックを含み、周辺部に比べて硬く締まっていた。ここでは地層の中ほどで地震によるものと思われるラミナの乱れが確認されたほか、礫とサヌカイトの剥片が出土した。

沖積層下部層

長原13A層：明黄褐色(2.5Y6／6)～褐灰色(10YR6／1)砂礫混り粘土質シルトで、層厚は20cm前後ある。本層の上面はTP+8.8～9.9mで、調査個所の南端部から流路NR1201を超えて微高地と浅い窪地を形成しながら北側に向って拡がっている。本層の上部では旧石器時代のナイフ形石器や剥片など、サヌカイト製の石器遺物が出土した。なお、B区では本層の下部に多量の砂礫の堆積がみられたが、砂礫と下位の地層(長原14・15層)との境界が不明瞭なため、これを長原13A層に含めるべきか否かについては検討する必要がある。

長原13B層：明緑灰色(7.5GY7／1)シルト質粘土～粘土混り砂礫で、層厚は10～20cmある。本層は上位の長原13A層との境界が不明瞭である。

長原14層：オリーブ灰色(5YG7／1)砂礫混りシルト質粘土を基調とするが、A区では明緑灰色(5GY7／1)粘土混り砂礫が厚く堆積している。

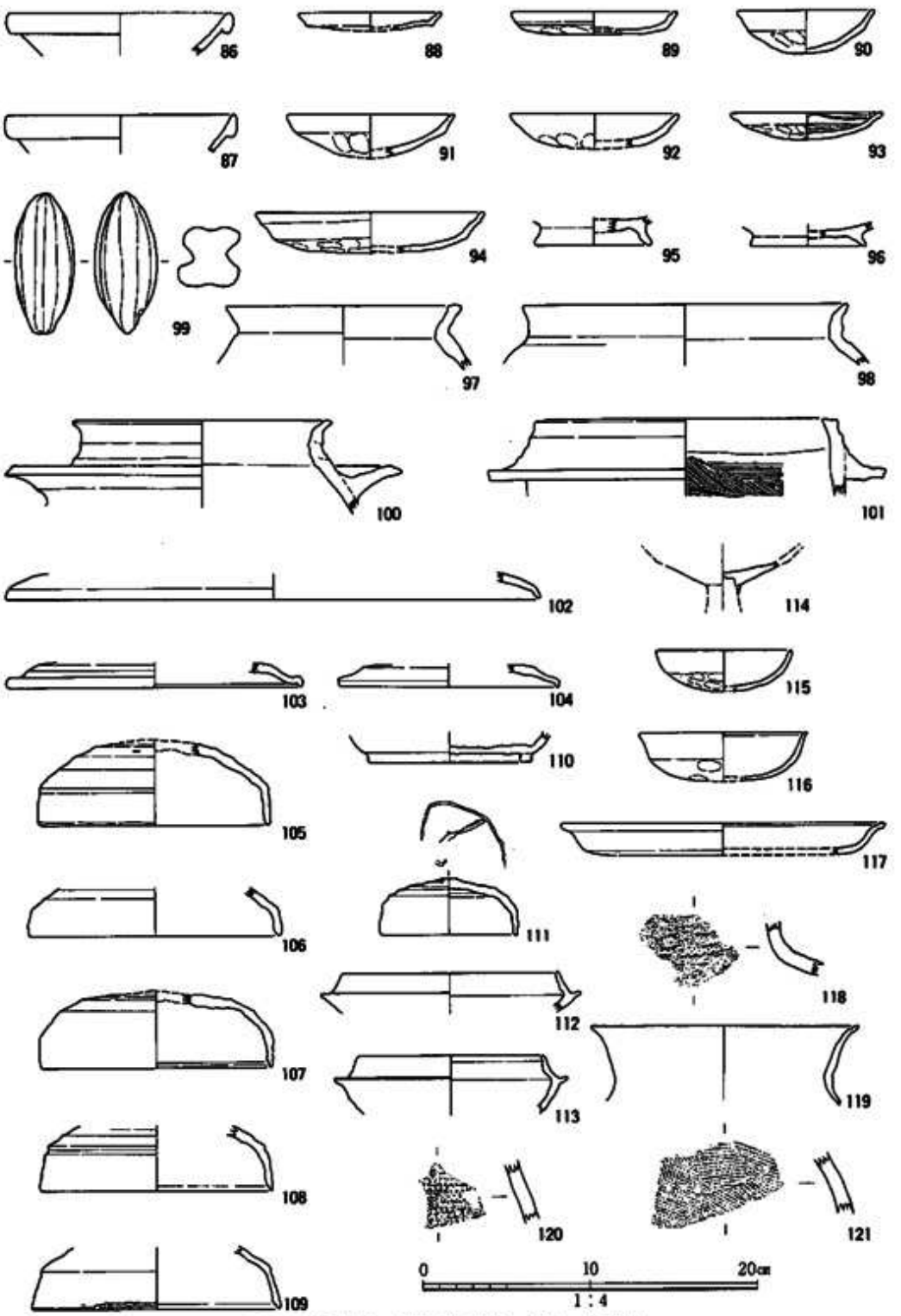


図53　各層出土の遺物(陶磁器・土器・土製品)

長原15層：暗緑灰色(5G4／1)粘土～青灰色(5BG6／1)砂礫混り粘土で、全体によく締まっている。TP+9.2m以下に分布している。

2)各層出土の遺物

長原2～13層から陶磁器・土器・瓦・土製品・石器などが出土したが、多くは細片であり図化できたものは少ない。ここでは各層ごとにおもな出土遺物を説明するが、長原12層以下の石器遺物は次項「旧石器～縄文時代中期の遺構と遺物」で説明する。

長原2層出土遺物(図53、図版26)

121は外面に縄席文タタキメを施した陶質土器甕の体部である。内面はナデている。

長原3層出土遺物(図53、図版25)

89は土師器皿で、口縁に2段のヨコナデを施している。120は器表面を3㎜大の格子目を施したタタキで整形した須恵器甕の体部である。古墳時代のものであろう。

長原4層出土遺物(図53・54、写真7、図版25～27・34)

86・87は口縁部を玉縁におさめた白磁碗で、色調はともに灰白色を呈しており、輸入磁器である。88・91・92・94は口径8.6～13.8cmの土師器皿である。94は口縁に2段のヨコナデを行い、ほかのものは1段のヨコナデを施している。色調はにぶい黄橙～黄褐色で、胎土中に長石・石英・チャート粒を含む。95は高台の径が7cmの土師器椀の底部で、高台の端部はやや開く。97・98は土師器甕である。口縁部は97がく字状になり、98は直立したあと端部の近くで開く。100は土師器羽釜で、口縁部は頸部から直立したあと短く開く。頸部の下端に

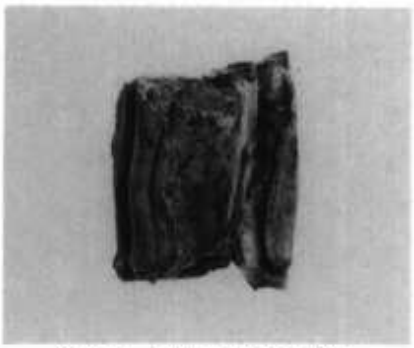


写真7　Ⅱ区出土のウマの歯

表4　長原遺跡東南地区各層出土の遺物

地区	地層	遺物番号
Ⅰ区	長原2層	121
	長原3層	89・120
	長原4層	86・88・90・91・92・93・94・95
		96・97・98・100・101・102・103
		104・105・110・122・124・129
	長原6層	106・107・108・111・112・116・117
		118・123・125・126・127・128
	長原7B層	114・119
	長原8層	130
	長原9層	131・132・134
	長原10・11層	133
	長原12A・B層	142・143・144・145・146・147・148
		149・150・151・152・153・154・155
		156・157・158・159・160
	長原13A層	135・136・137・138・139・140・141
Ⅱ区	長原4層	87・99・211
	長原7層	109・113・115

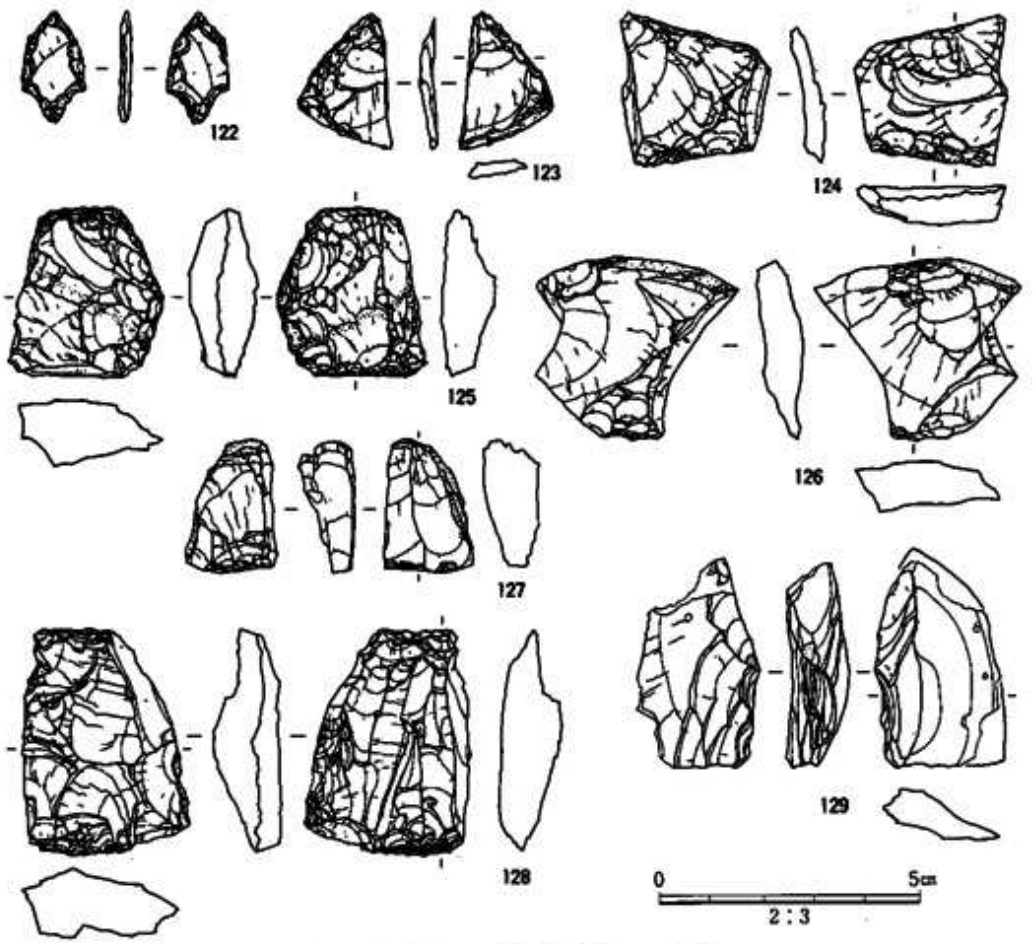


図54　Ⅰ区出土の石器遺物(長原４・６層)

やや上向きの鍔を貼付けている。96は高台の径が７cmで、内面に炭素を吸着させた黒色土器Ａ類の椀の底部である。90は高台のない瓦器椀である。内外面とも暗文はない。93は瓦器皿である。体部の外面にユビオサエを施しており、内面にはやや粗い暗文が巡る。101は瓦質土器羽釜で、口縁部は体部から直立したあと、わずかに内傾する。体部の内面は横および左上がりのハケメで調整されており、口縁部の外面には強いヨコナデが巡っている。15世紀代に属するものであり、上位の地層からの混入品と思われる。99は長さ8.4cm、幅3.6cm、重さ94.0gの土師質の工字形土錘である。縦方向に２対の溝があり、紐は深い方の溝にかけたと考えられる。平面形は杏仁形で上下端は尖っている。色調は黄褐色で胎土中に長石・チャート・石英粒を含む。102～105は須恵器である。102は大型の盤の蓋と思われる。103～105は杯蓋で、103の口縁部は天井部からいったん水平に開いたあと折り曲げており、104はつまみ上げて形成している。105は口縁部と天井部の境界の稜は鈍く、天

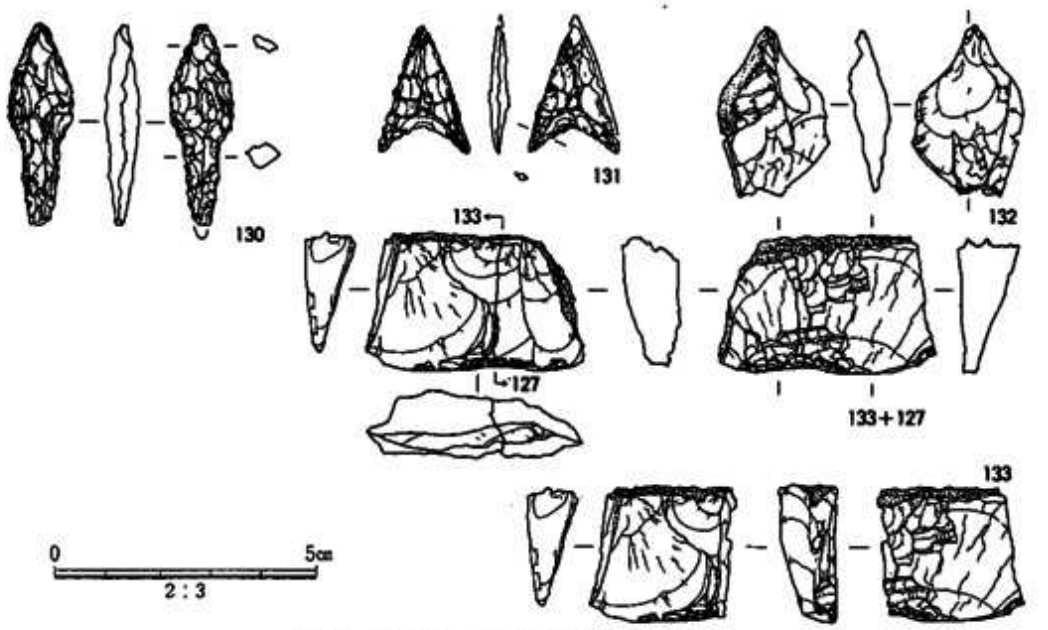


図55　I区出土の石器遺物(長原8～11層)

井部の約2／3をヘラケズリで調整している。110は杯身の底部である。高台は直径9.8cmで、体部の外縁近くに貼付ける。以上の須恵器のうち、TK10型式の105以外は平安時代の初期のものである。

122はサヌカイトの凸基有茎式石鏃である。体部と基部の境が外側に張出す。表裏面とも細部調整が浅く、素材の面を広く残している。切っ先角は80°である。弥生時代中期のものである。124はサヌカイトの2次加工がある剥片である。下縁の両面に細部調整を行って刃部を作り出している。上縁には深い段差をもつ階段状の剥離面がある。また、左右側縁の面は垂直割れ面であることから、クサビとして使用された可能性がある。129はサヌカイトのナイフ形石器である。有底の剥片を素材とし、背面には同一方向の先行剥離面が3面みられる。刃部の欠損は著しいが、背部には大きめの調整加工が認められる。211(図65)の石錐は本層出土の資料であるが開析谷の遊離資料として「4)縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物」で取上げる。

写真7はウマ(*Equus caballus* Linaeus)の左第1後臼歯M^1である。歯根を欠損している。歯冠幅は24.6mm、歯冠高は約30mm。性別は不明、年齢は10～15才くらいと推定される。

長原6層出土遺物(図53・54、図版25～28)

116は土師器杯である。口縁端部を細くつまみ上げ、体部の下半をユビオサエで整えている。飛鳥Ⅱ期に属するものである。117は土師器盤である。口縁部は緩やかに外反しており、

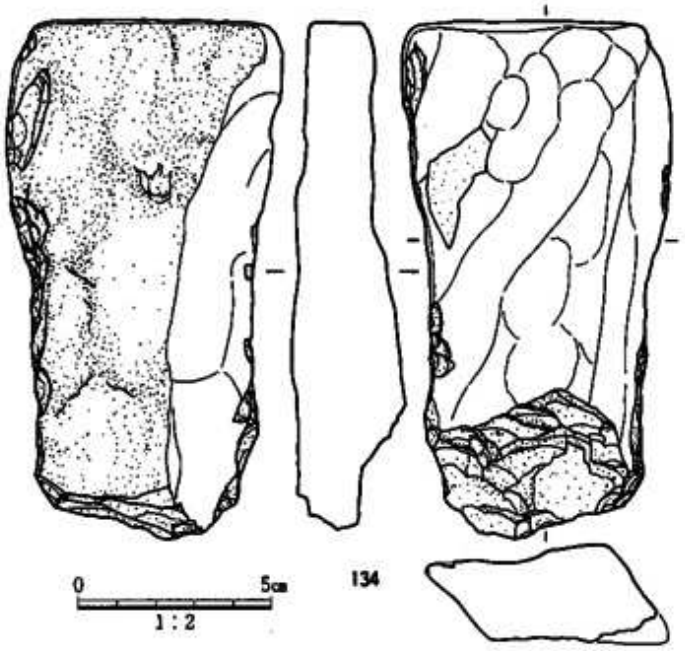


図56　Ⅰ区出土の石器遺物(長原9C層)

端部の内面はわずかに段をなす。平城京Ⅲ期に属する。118は外面に竹管による連続刺突文を施した古式土師器壺の頸部である。色調は黄褐色で胎土中に長石・石英・チャート粒を含む。106～108は須恵器杯蓋である。口縁端部は106がまるく、107・108はわずかに内傾している。106・107の天井部と口縁部の境はまるくおさめられており、108にみられるような稜線はない。111は須恵器短頸壺の蓋と思われる。口縁端部はまるく、天井部はヘラ切りのままでヘラ記号を刻んでいる。112は須恵器杯身で、立上がりは内傾しており口縁端部もまるくおさめている。これらの須恵器のうち111はTK217型式、106・112はTK209型式、107・108はTK10～MT85型式である。型式から判断して、本来は長原7A層あるいは7B層に帰属するものと考えられる。

123はサヌカイトの石鏃未製品である。右図の主剥離面は末端で折れている。細部調整の順序は、右図右側縁→左図左側縁→左図右側縁までわかる。そのあと下端の調整にとりかかった際に折れて放棄されたと考えられる。125～128はサヌカイトのクサビである。125は右図の右側縁に縦方向の向い合う加撃によってできた垂直割れ面がある。また、上縁にもクサビ特有の加撃による潰れがあり、側縁にも加撃による潰れがある。このことから、まず、図の左右を刃縁として用い、そのあと90°持ち替えて使用した結果、垂直割れ面ができたと考えられる。126は上縁に残った自然面を打縁としたクサビである。下縁に刃部を作っている。左図の右縁に垂直割れ面がある。128は右図の右側縁に垂直割れ面があり、上下縁にも対向する縦方向の加撃による潰れがみられる。また、それに切られる潰れが左側縁にあることから、図の側縁をクサビの打縁または刃縁として用い、そのあと90°持ち替えて加撃していることがわかる。127は133と接合するため、「長原10・11層出土遺物」で述べる。

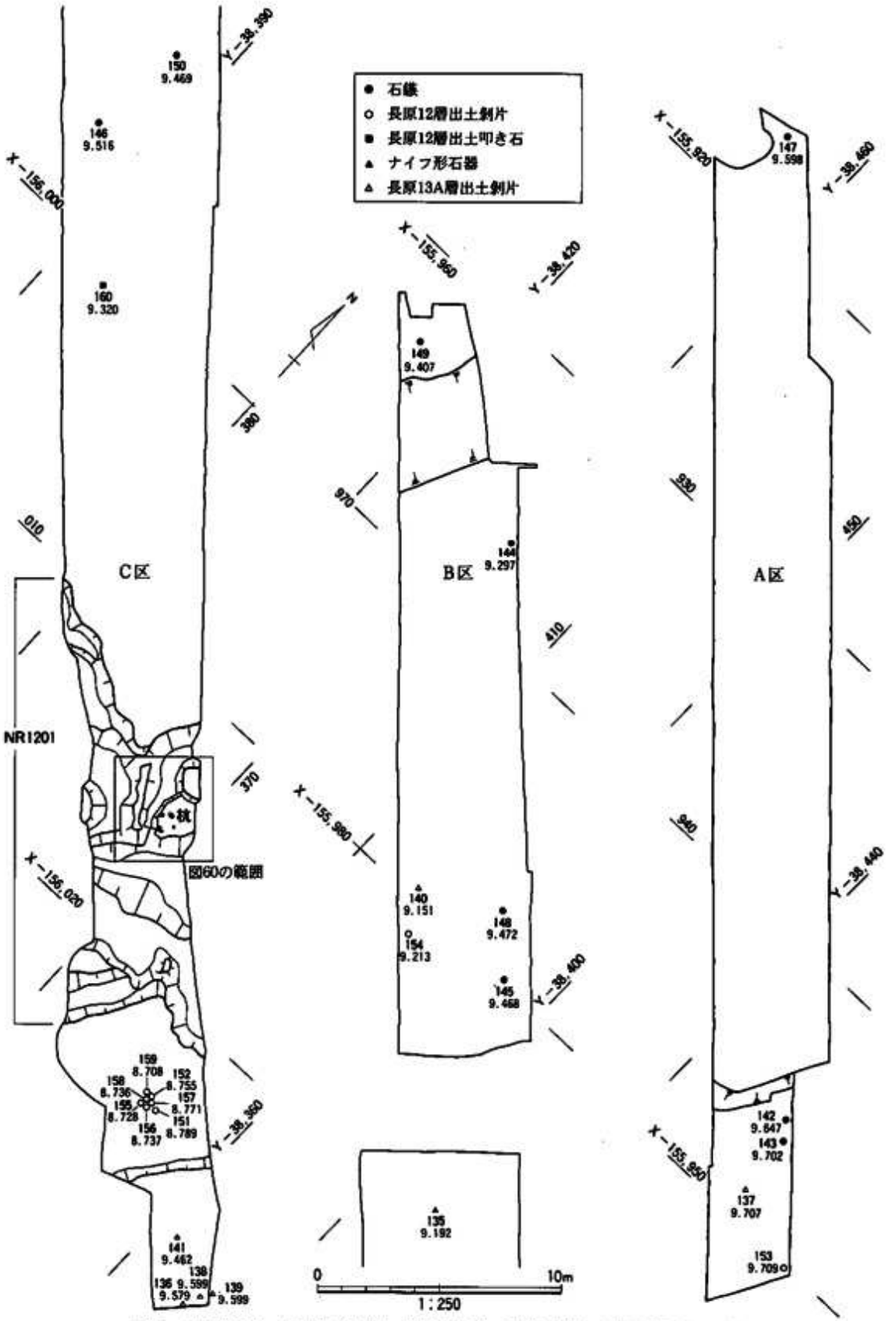


図57　I区旧石器～縄文時代中期の遺構と遺物の位置（数字は遺物番号とTP値）

長原７層出土遺物(図53、図版26)

115は土師器杯である。119は土師器甕で口縁部は頸部から外へ開いたあと端部の近くで短く外反する。これらは古墳時代後期に属するものであろう。114は土師器高杯の杯部で脚柱部内面の中央に棒状工具による穴がある。109・113は須恵器杯蓋と身である。109は口縁端部の外面をカキメを施すような工具で斜め方向にこすっている。ともにTK10型式に相当する。

長原８層出土遺物(図55、図版28)

130はサヌカイトの凸基有茎式石鏃で、身部と基部の長さを同じに作る。身部の幅は狭く肉厚で、横断面は菱形になる。切っ先角は45°である。基部の先端を古い折れによって欠損する。弥生時代中期のものである。

長原９層出土遺物(図55・56、図版28)

131はサヌカイトの凹基無茎式石鏃である。基部の両端は尖り、側縁は直線的である。尖端と右図の右側縁を新欠で失う。製作順序は右図の右側縁→左側縁→左図の右側縁→左側縁→右図の基部→左図の基部である。切っ先角は約40°である。132はサヌカイトの剥片である。左図の左側縁に自然面をもつ。主剥離面は対向する末端から逆方向の剥離が起っている。これらは同時に形成されている。また背面にも同様の対向する剥離面がみられることから、これはクサビからはじけた剥片と考えられる。134は板状の泥岩を用いた砥石である。下部を欠損する。左図の左側縁に並ぶ剥離面は、はじめに砥石の形を整えるために人為的に打ち欠かれたものである。砥面は４面で、もっとも多く使用しているのが右図の正面にある広い面である。小さな単位で10個所以上砥っている。

長原10・11層出土遺物(図55、図版28)

133はサヌカイトのクサビである。左図の右側縁にある截断面に127が接合する。もとの素材は２辺に自然面を残す板状の剥片で、長い方の自然面を打縁として用いている。

３)旧石器～縄文時代中期の遺構と遺物(図57)

ｉ)Ｉ区長原13A～12層の石器遺物

石器遺物出土状況(図57、図版12)

長原遺跡東南地区ではこれまでにも長原13A層および12層準の石器集中部が検出されているため、Ｉ区についても後期旧石器～縄文時代前期の石器製作に係わる遺構や遺物が見つかると予想した。しかし、流路NR1201の南側で後期旧石器時代に属する小規模な石器集

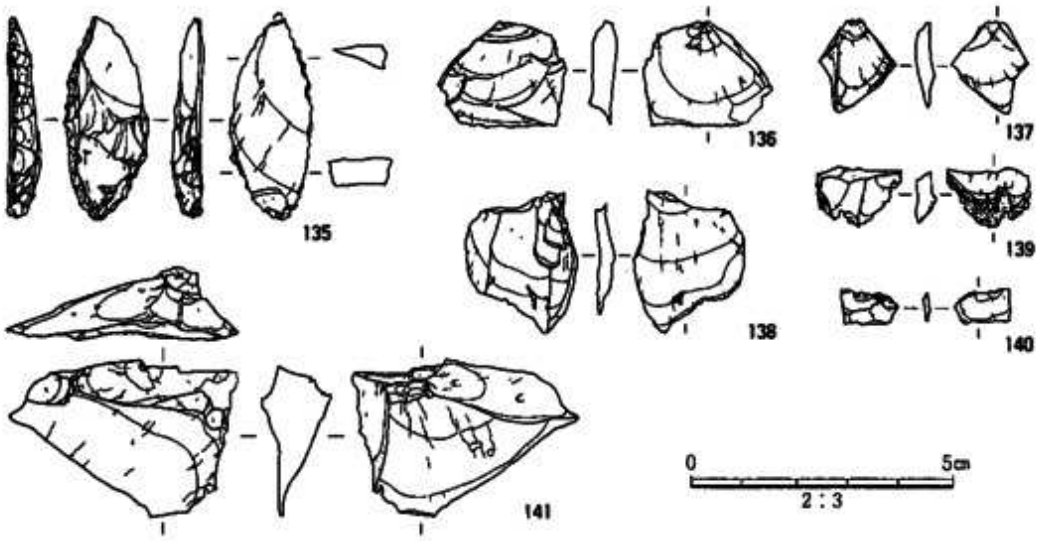


図58　Ⅰ区長原13A層出土の石器遺物

中部を検出した以外、さしたる遺構・遺物はみられなかった。また、旧石器時代の道具としての石器は、流路NR1201の北方に約35m離れた地点から出土したナイフ形石器１点のみであった。以下、Ⅰ区のC区南端で検出した石器集中部について説明する。

Ⅰ区のC区南端に位置する流路NR1201の南岸部は、長原遺跡東南地区でも屈指の後期旧石器時代の石器集中部が発見された88－69・89－37次調査地に隣接する場所である。そのためⅠ区の南端を拡張して調査した。精査の結果、長原13A層の上部から４点のサヌカイトの剥片が出土したほか、流路内に堆積した長原12B層準の暗灰黄色(2.5Y4／2)極細粒砂質シルトからサヌカイトの剥片７点がかたまって出土した。さらに流路内の土壌を水洗篩別したところ、総重量1.17g、58点のサヌカイトの微細剥片を補集した。このような石器遺物の分布は、そこが石器製作の場の一角に当ることを示すものといえるが、出土点数が少ないことから水の流れによって二次的に堆積したものとも考えられる。このほか、A・B区からも長原13A層から２点の後期旧石器時代のサヌカイトの剥片が出土している。

長原13A～12層出土の石器(図58・59、写真８、図版28～30)

長原13A層からは後期旧石器時代の石器遺物が７点出土した。石材はすべてサヌカイトである。**135**は横長剥片を用いた２側縁加工のナイフ形石器である。C区北端で出土した。素材の背面は複数の剥離面からなる。細部調整は背部・刃縁側の下半部とも主剥離面を打面としているが、基部の末端はそこに施された細部調整によって作られた面を打面として主剥離面を打ち欠いて基部の厚さを薄くしている。尖端部は古い折れによって欠損してい

るため、復元による切っ先角は約60°である。137は剥離の際に打面が欠損した縦長剥片である。A区南端で出土した。140は点状の打面が残る横長剥片である。B区で出土した。これらはいずれも調整剥片と考えられる。

136・138・139・141はC区南端の石器集中部から出土した。これらは同一母岩の可能性が高く、一時に形成されたものと考えられる。141を除いてすべて調整剥片である。136は剥離面打面の横長剥片で、背面に主剥離面と同方向の先行剥離面がある。138は剥離の際に横方向の傷から打面が欠損した縦長剥片である。背面に主剥離面と同じ方向の先行剥離面が6枚ある。141は剥離の際に打面が破砕した横長剥片である。右図の左上にある横方向の傷に打撃の力が加わり、右図にみえるすべての面が同時に形成されたと考えられる。背面の下半部には大きなネガティブな面があり、その右上に石核の面が残る。また、背面の上部に残る縦1.0cm、横2.8cmの横長のネガティブな面はこの剥片ができたあとに剥離されていることから、この剥片は石核として使用された可能性がある。

長原12A層からは12点の石器遺物が出土した。石鏃9点、剥片2点、叩き石1点である。石材は叩き石を除いてすべてサヌカイトである。A～C区にかけて散在して出土した。

142～150は凹基無茎式石鏃である。142は側縁が不揃いな大きさの細部調整によって作り出され、尖端部に向けて緩やかに外湾している。基部は抉りが浅く末端をさらに細かな調整によって尖らせている。尖端部は古い折れによって欠いており、切っ先角は約60°である。143は側縁が直線的で、不揃いな大きさの細部調整によって薄く作り出されている。基部は抉りが浅く両端は丸味を帯びている。切っ先角は55°である。144は基部の抉りが深く、脚部を長く作っている。脚部の末端の平面形は四角形である。側縁は緩やかなS字形をなし、切っ先は細かな細部調整によって仕上げられている。切っ先角は70°である。145は片方の脚部を欠損する。側縁は緩やかに外湾し、切っ先角は60°である。146は細部調整がていねいで、全体的に薄く細長く仕上げられている。切っ先角は50°である。片方の脚部を欠損する。147は基部の抉りが深く、脚部の末端はまるい。尖端部は古い折れによって欠損している。148は大きめの押圧剥離を規則的に施したあとに細かな細部調整を行い、

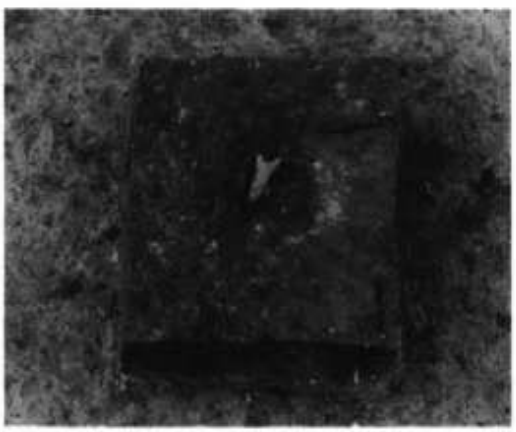


写真8　I区146の出土状態

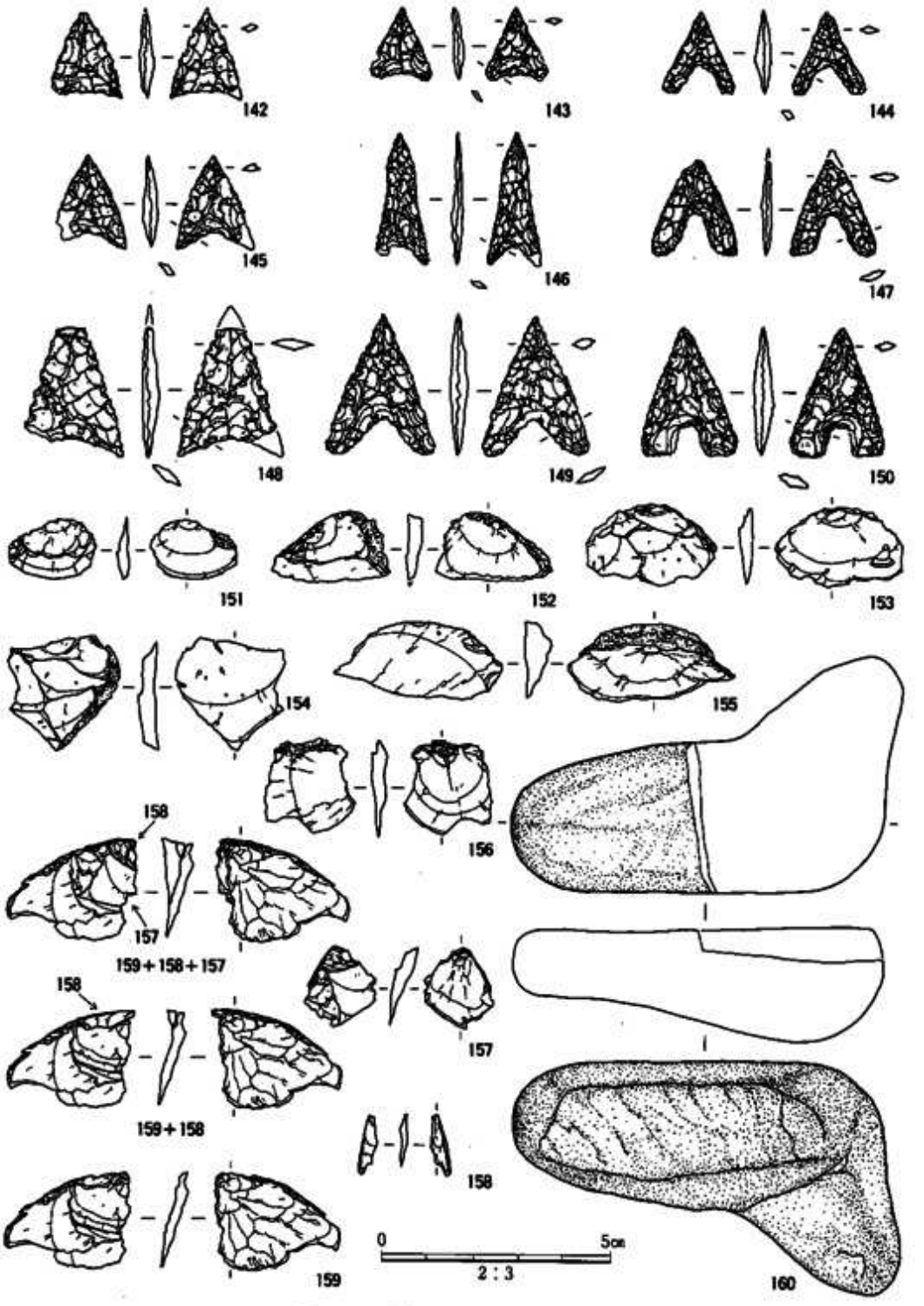


図59　Ⅰ区長原12層出土の石器遺物

側縁を直線的に仕上げている。基部は抉りが浅く、脚部の末端は尖っている。尖端部を古い折れによって欠損する。149は側縁が緩やかなS字状をなし、尖端部を細かな細部調整によって作り出している。基部は抉りが深く、脚部の末端はまるい。切っ先角は55°である。150は不揃いな大きさの細部調整によって側縁が直線的に作り出されている。基部は抉り・脚部末端ともに四角く作られている。切っ先角は50°である。以上はすべて縄文時代早期から中期にかけての石鏃である。

160は砂岩製の叩き石で、先端に敲打痕がある。片面の半分を欠損している。

153は自然面と剥離面の頂点を打点とした横長剥片である。背面には主剥離面と同じ方向の先行剥離面が4枚みられる。調整剥片である。154は加撃時に打点部が折れて欠損した剥片である。主剥離面の左側縁に自然面が残る。

長原12B層からは7点の石器遺物が出土した。すべてサヌカイトの剥片である。

151は自然面打面の横長剥片である。点状の打面を残し、剥離の末端はヒンジ・フラクチャーとなる。背面に底面と思われるポジティブな面をもつ。152は自然面打面の横長剥片である。背面にも自然面を打面としたネガティブな面があり、底面と思われるポジティブな面を切っている。調整剥片の可能性がある。155は自然面打面の横長剥片である。背面にはもとの石核のポジティブな面を大きく残している。調整剥片である。156は自然面打面の縦長剥片で、末端は折れている。背面は石核にあったポジティブな面だけからなる。157～159は接合資料である。157→158→159の順に剥離されており、158と159の間にはもう1枚小さな剥片が取られているが調査では見つからなかった。いずれも自然面打面の調整剥片である。また、不明の1枚を含む4枚とも打点の位置が近いことから、連続的に同じ場所を狙って加撃されたことがわかる。これら151・152・155～159は同一母岩の可能性が高い。また、接合資料を含むことからもこの石器集中部が同一時に形成されたといえる。

136・138・139・141と151・152・155～159は出土した層位が長原13A層と長原12B層で異なっている。流路NR1201を埋める長原12B層は、南方の長原13A層が流入して再堆積したと考えられるために、これらの石器遺物はすべて長原13A層に含まれる可能性も否定できないが、見た目では母岩が異なるため同一の石器集中部に含める決め手はない。

ii)流路(図57・60・61、図版13・28)

NR1201(古川辺川)

Ⅰ区の南端に位置する幅10m、深さ2m前後の流路である。流路は調査地域の南方から北上してⅠ区のあたりでいったん東に曲ったあと、またすぐに北に曲って流れている。流路

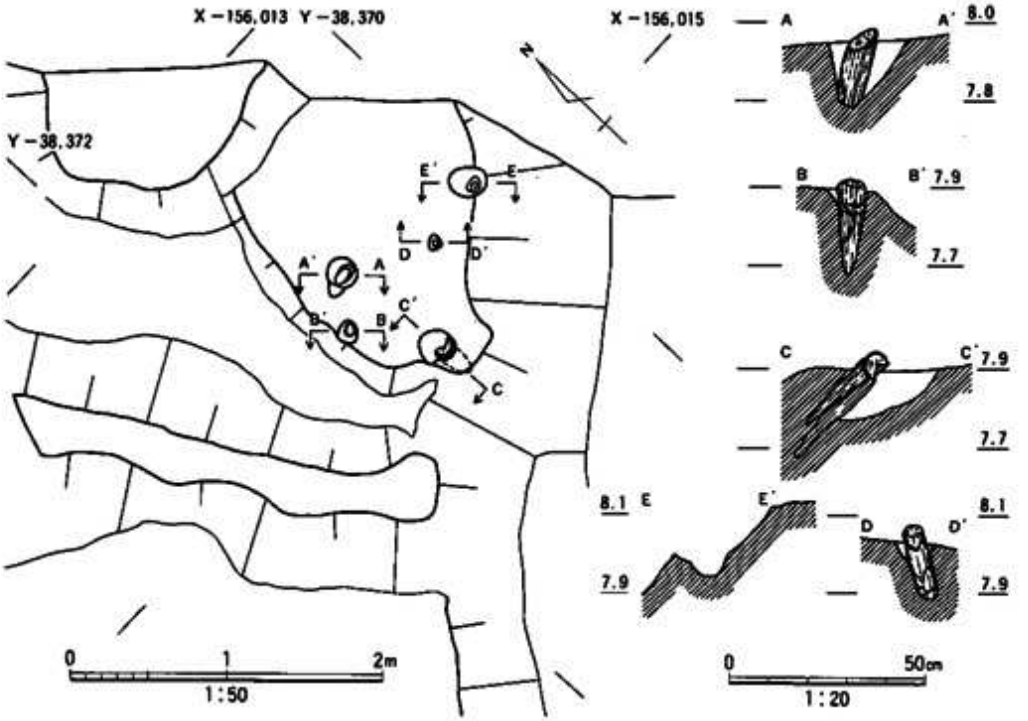


図60　Ⅰ区NR1201と杭

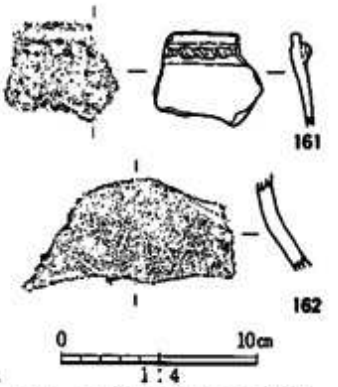


図61　Ⅰ区NR1201出土の遺物

内には長原12A・B層準の灰色(5Y4／1)粘土質シルト・極細粒砂質シルトが堆積した上に、長原10・11層準の黄褐色(10YR5／6)砂質シルト・にぶい黄褐色(10YR5／3)砂礫を主体とする水成層が堆積しており、層厚は前者が約0.8m、後者は最大1.9mあった。北岸は南岸に比べて、長原12層準の堆積物を運んだ流水による侵食が進んだために複雑な地形となっており、流路の底から約0.7m高い位置で長原12層に打込まれた杭が５個所で見つかった。ほぼ１ｍ四方の中に0.3～0.6m間隔に打込まれているが、そのうち杭木が残っていたのは４個所である。杭の先端の加工は総じて粗く、１本は半裁されていたが、残りの３本は皮付の丸太であった。樹種はすべて落葉樹のクヌギ・ナラ材である。杭が打たれた時期は、これを覆う長原10・11層の堆積年代が縄文時代中期から後期以前であることから縄文時代後期以前である。なお、南岸から流路内に向って堆積した長原12B層の灰黄褐色(2.5Y6／2)極細粒砂質シルトには、地震によるものと思われるラミナの乱れが観察された。調査地域では本例と同様なラミナの変形が複数の地点で観察されていることから、今後、噴砂を含めた詳

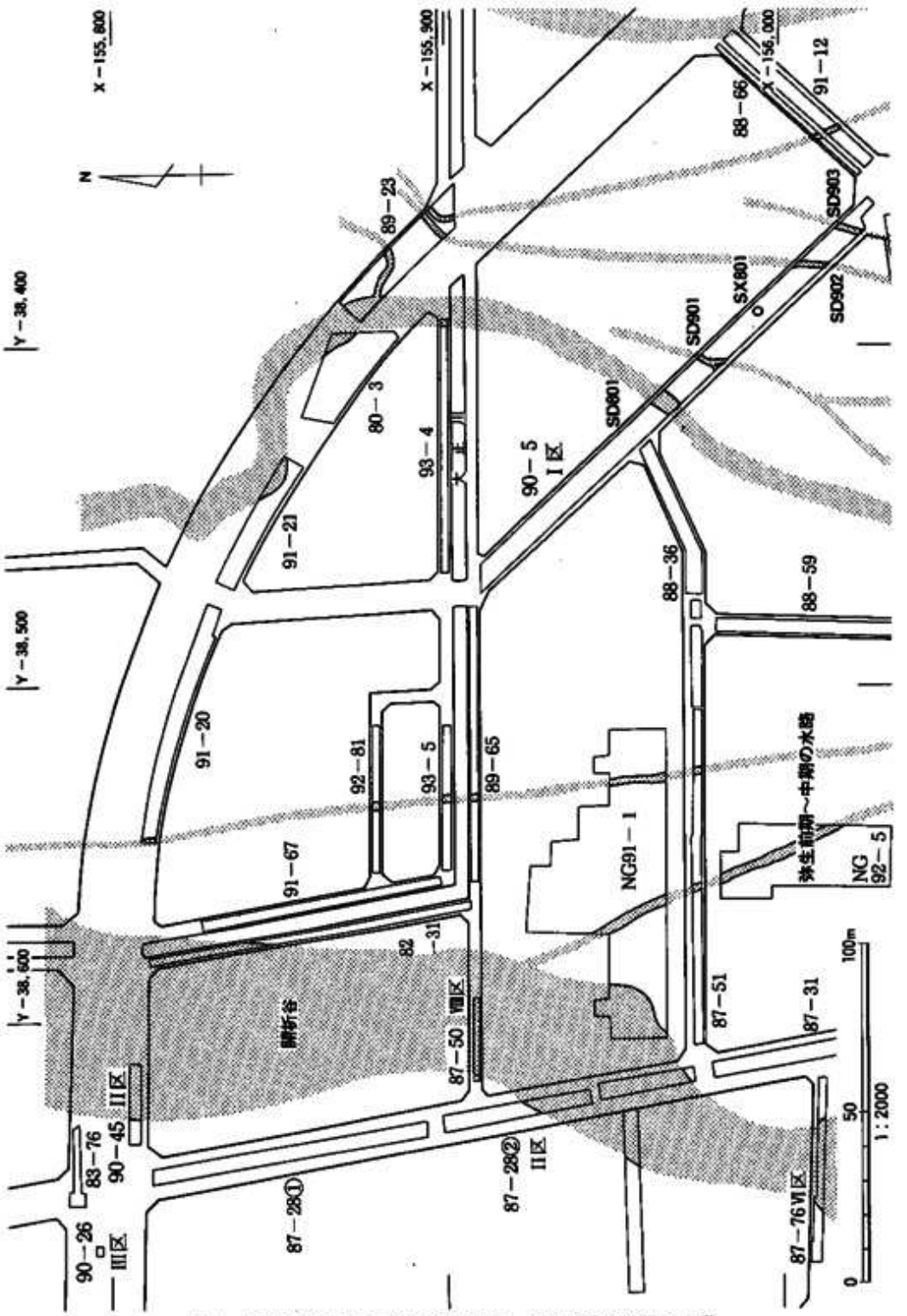


図62　長原遺跡東南地区縄文時代晩期～弥生時代の遺構の配置

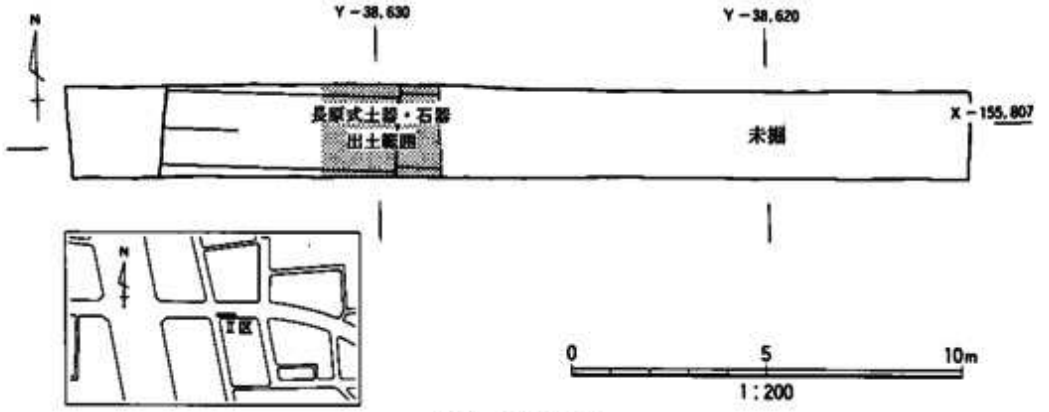


図63　Ⅱ区開析谷

細な調査を実施すれば地震の年代や規模が判明するものと思われる。

流路NR1201の年代を示す遺物は、黄灰色(2.5Y5／1)砂礫および長原9C層基底面に相当する暗褐色(10YR3／4)細粒砂混りシルトから出土した縄文土器の細片161・162のみである。161は口縁端部より1㎝下方に、断面三角形の突帯が巡る深鉢の細片である。口縁端部を面取りし、突帯のキザミはD字形である。色調は灰白色で、胎土中に2㎜大の長石粒を多く含む。縄文時代晩期後半の滋賀里Ⅳ式と思われる。162は頸部の破片と思われるもので、内外面の調整は粗いナデである。色調は黒～灰黄褐色で、胎土中に長石・石英粒を含む。内面を条痕調整しており、縄文時代後期のものであろう。

4)縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物(図62)

i)開析谷(図63)

Ⅱ区で開析谷の西岸を検出した。谷のようすは過去の調査によって、長原遺跡東南地区の南西から北東方向に拡がってゆき、内部に長原10・11層から長原8層にかけての地層が厚く堆積していることがわかっている[大阪市文化財協会1994]。Ⅱ区付近での谷の東西幅は、82－31次調査との位置関係から約60mと推定できる。谷の底は87年度調査のⅥ区ではTP+9.5m、Ⅱ区ではTP+8.6m、Ⅷ区ではTP+8.7m以下と、北になるほど深さを増している。本年度調査のⅡ区は87年度調査のⅧ区の北方に位置することから谷はさらに深くなるようである。調査面積の制約により底を完掘することはできなかったが、TP+8.3mまで掘下げて長原9層を確認したので、谷の底がさらに深いことは明らかである。この谷を埋める地層は長原8・9層である。長原9層はオリーブ色(7.5Y3／1)シルトで、谷の西斜面に沿って流れ込むように堆積していた。本層からは多量の長原式土器と石器遺物が出土した。い

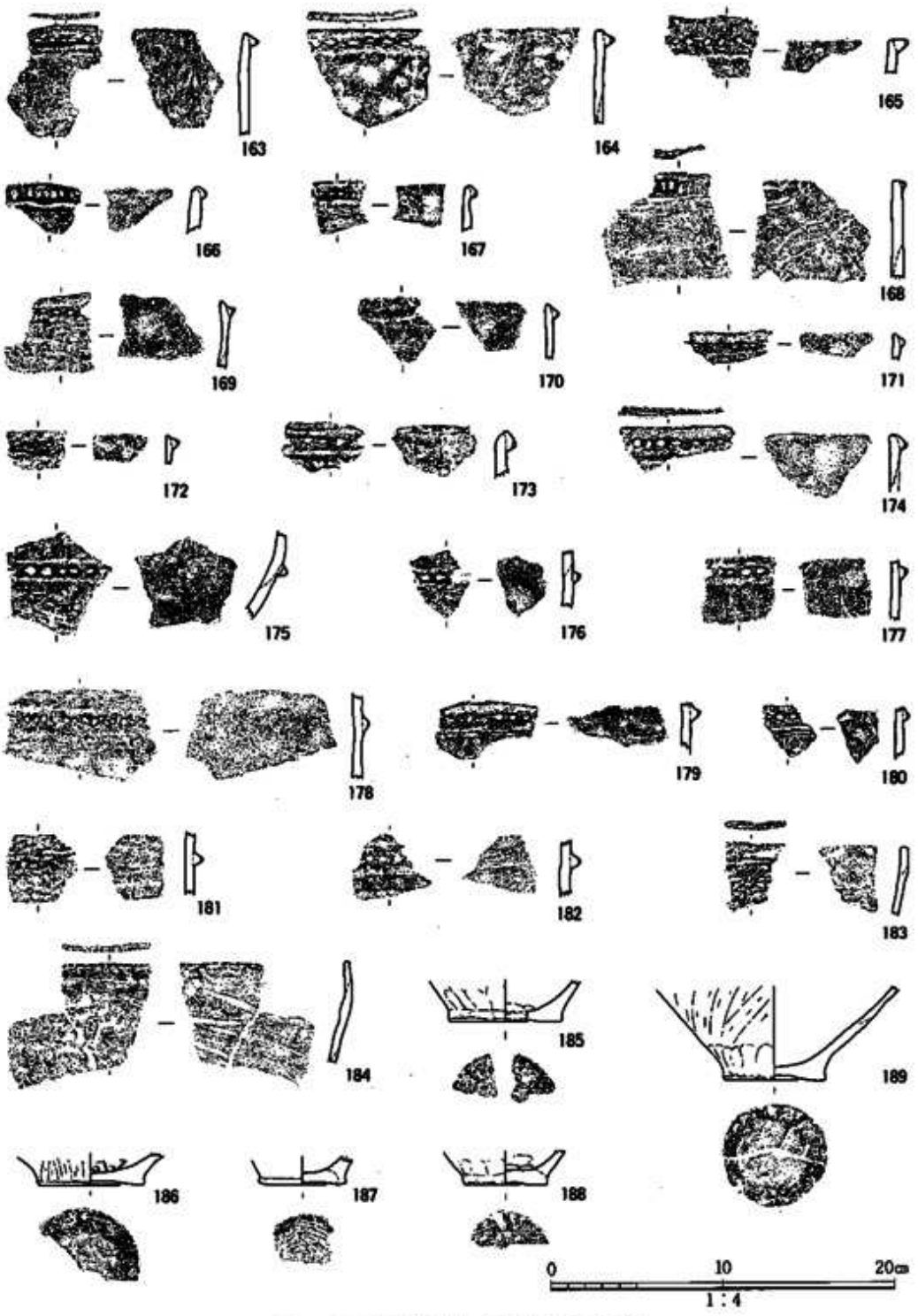


図64　Ⅱ区開析谷出土の遺物(長原式土器)

ずれも接合するものはわずかで、原形を復元できるものは少ないため、原位置をとどめていないと考えられる。長原8層は灰黄褐色(10YR4／2)粗粒砂の水成層で、TP+9.5mまで谷を完全に埋めている。

ii)開析谷出土の遺物

長原式土器(図64、図版30～32)

多くは細片であり図示できたものは163～189の27点にすぎない。163～174は口縁端部に貼付け突帯がある深鉢である。163・165～168・172～174は口唇部に、164・169～171は口唇部からわずかに下がった位置に突帯が付けられている。その断面形はまるみを帯びた166・167以外は三角形である。突帯に施されたキザミの形状はD字あるいはO字状で、小さく乱れたものが多い。168の突帯は途中で切れているが、突帯がないところにも口縁部に連続してヘラ状の工具でキザミを施している。なお、163・168の突帯の下端には浅い断面U字状の沈線が横方向に押さえ付けるように施されている。163・164・169は頸部の外面調整はナデで、168は粗いナデのあと横方向の細いヘラミガキを施している。175～182は突帯のある体部片で、突帯のキザミの形状はD字またはO字状である。175・176は突帯の下方を斜方向のヘラケズリで調整し、180は断面U字状の沈線で横方向に調整している。

185～189は深鉢の底部である。いずれも平底で中央部が浅く凹んでおり、187は粗いハケメ状の条痕がみられる。185・186・189の外面の調整は縦方向のケズリである。

183・184はやや小型の浅鉢で、わずかに内傾した口縁部の上端を面取っている。184の内面は横方向の粗いナデを施している。

以上の土器は長原式に属するものであるが、口縁端部を面取るものや突帯の位置が口唇部から下がったものは長原式土器でも古相と思われる。色調は173・185がにぶい黄橙色、189は灰白色で、これら以外は暗褐色を呈している。胎土中に長石・雲母・チャートを含む173・185以外は、長石・角閃石を多量に含む生駒西麓産の土器である。全体では524点、総重量2,971g出土したが、そのうち重量の比率をみると生駒西麓産の胎土をもつ土器は約85%、それ以外の胎土をもつものは約15%を占めている。

表5　開析谷出土の石器遺物

		個数	重　量
図あり	190～210・212～302	112	368.08g
図なし	0.10g未満	169	7.43g
	0.10g以上0.50g未満	66	15.26g
	0.50g以上1.00g未満	18	12.84g
	1.00g以上10.00g未満	23	52.90g
	10.00g以上20.00g未満	2	33.63g
	合　　計	390	490.14g

石器遺物(図65～72、図版32～41)

石鏃・石鏃未製品・石錐・クサビ・剥片などが出土した。合計数390点、総重量

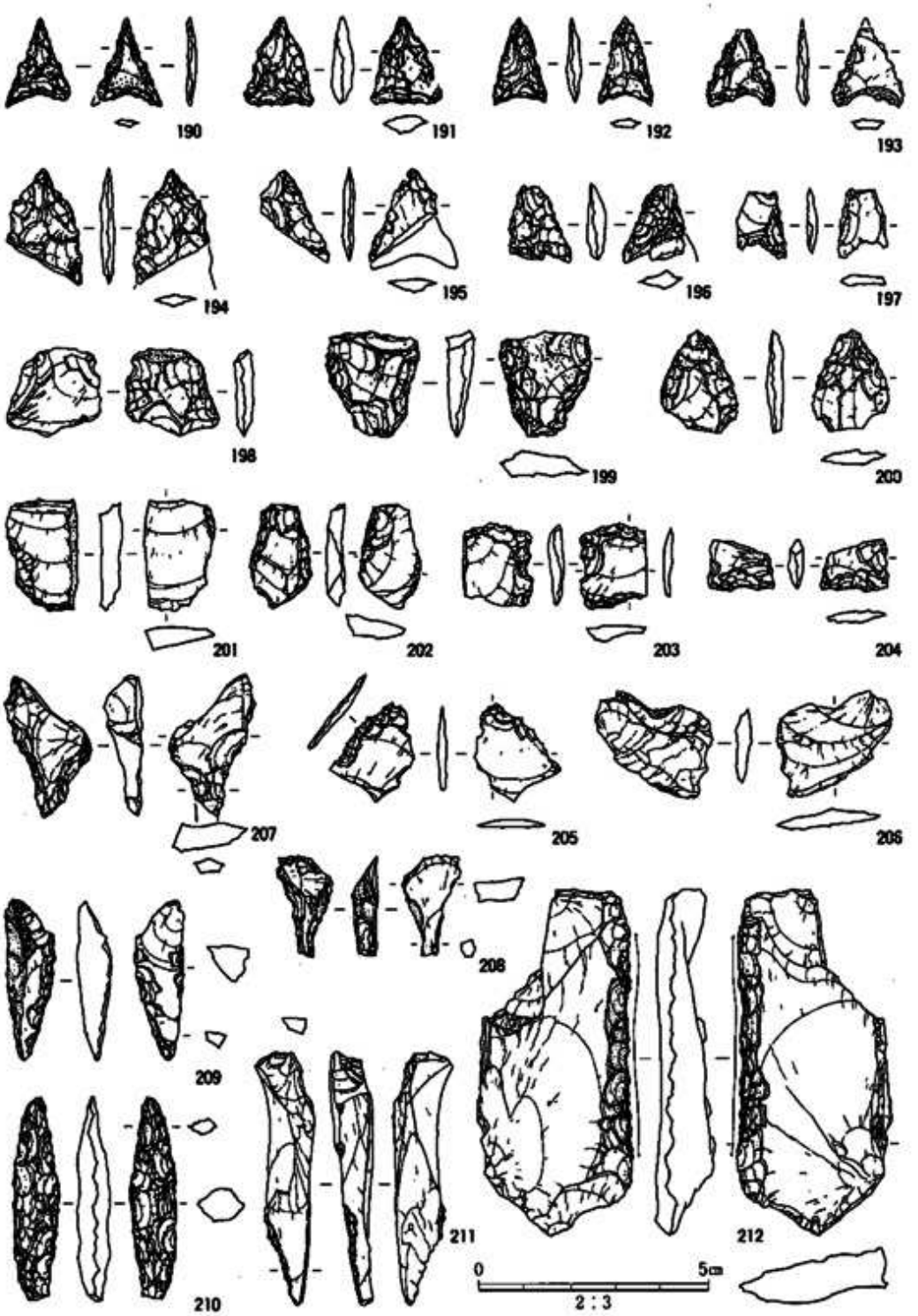


図65　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物(211は長原４層出土)

約490gで、そのうち約80%が1.0gに満たないものである。ここでは図示した112点を説明する。個別的に説明しない剥片の数量は表5に記した。また、長原4層から出土した石錐211も開析谷の遊離資料としてここで報告する。

190～206・210は、未製品を含む石鏃および2次加工がある剥片である。190は薄い凹基無茎式石鏃である。右図の細部調整は浅く、素材の主剥離面が広く残っている。平面形は三角形であるが、側縁の中ほどに細部調整で小さな段状の平面形を作り出す。基部の抉りは浅く、脚部の片方を古い折れによって欠損している。切っ先角は40°である。191は平面形が五角形の平基無茎式石鏃である。素材となった剥片の主剥離面側は細部調整が浅い。背面側の細部調整は深いが自然面を残している。全体的に細部調整が粗いため、未製品の可能性がある。切っ先角は55°である。192は薄い凹基無茎式石鏃である。尖端部はさらに緻密な細部調整によって鋭く作り出されている。基部の抉りは浅い。切っ先角は約55°である。193は凹基無茎式石鏃の未製品である。剥離の順序は左図基部→右図基部→右図左側縁→左図右側縁→右図右側縁→左図左側縁である。尖端部は左図の左側縁を整形した際に折れている。これらの整形は大きさが不揃いなことや主剥離面側にほとんど施されていないことから、最終的な細部調整の前段階の粗い整形と考えられる。194は薄い石鏃の未製品である。下半部を古い折れによって欠損している。側縁には比較的大きな細部調整の剥離面が並ぶ。切っ先角は70°である。195は薄い凹基無茎式石鏃の未製品である。剥離の順序は右図左側縁→左図右側縁→右図右側縁→左図左側縁である。下半部は左図の左側縁を整形した際に折れている。左図左側縁の尖端部は未調整のままである。現状の切っ先角は75°である。196は石鏃未製品である。下半部を古い折れによって欠損している。197は2次加工がある剥片である。198は2次加工がある剥片である。素材は自然面打面の横長剥片を用いている。細部調整剥離の順序は主剥離面→背面であるが、さしたる欠損もないまま細部調整は中断されている。199は表裏両面に2次加工がある剥片である。末端に自然面を残す。石鏃にしては調整が粗く、輪郭もでこぼこしている。また、上半部を折れによって欠損しており、折れ面にも細かな剥離を行っている。200は石鏃未製品と考えられる。素材の主剥離面と背面には同じ方向の剥離面が並ぶ。細部調整は粗く不揃いである。尖端部・基部を古い折れによって欠損する。201は2次加工がある剥片である。上半部を折れによって欠損するが、素材の主剥離面・背面ともに同じ方向から剥離されていることがわかる。背面側の右側縁に自然面を残す。202は両側縁に2次加工がある剥片である。素材となった剥片は末端に自然面を残し、主剥離面が平坦である。203は2次加工がある剥片である。素材となっ

た剥片は、主剥離面・背面ともに同じ方向の加撃による剥離面からなり、薄い。細部調整の剥離の順序は右図左側縁→左図右側縁→左図上縁→右図上縁→右図下縁で、最終的に右側図から右半部が折れている。右図の左側縁を基部の粗い調整とみるならば、この剥片は石鏃未製品の可能性がある。204は石鏃未製品である。素材となった剥片は薄い。細部調整の剥離順序は、左図下縁→右図下縁→右図左側縁→左図右側縁→左図左側縁→右図右側縁である。上半の最後の折れは、右図右側縁の細部調整からはじまっている。205は2次加工がある剥片である。素材となった剥片は点状打面で薄いものである。主剥離面の右端に自然面を小さく残す。背面には主剥離面と逆方向の加撃によるポジティブな剥離面がある。細部調整の順序は右図右側縁→左図左側縁である。剥片の末端は不規則に3個所で折れている。206は2次加工がある剥片である。素材となった剥片は、主剥離面に強いステップがあることから無理な方向に加撃して割取られていることがわかる。背面にはそれと逆方向のネガティブな面がある。2次加工は右図の上縁が主剥離面を打面として、左側縁が背面を打面として行っている。下縁には刃こぼれ状の小さな剥離面がある。210は細身の凸基有茎式石鏃である。全体に粗い細部調整を施して素材の面を完全に取去っている。横断面は菱形で厚いが、中央の稜は明瞭でない。弥生時代中期の混入品と考えられる。

207～209・211は石錐である。207は大きなつまみ状の頭部と長い錐刃部をもつ。錐刃部の先端は古い折れによって欠損している。素材となった剥片は自然面をもち、末端を頭部に用いている。調整は左図右側縁→右図左側縁→右図右側縁→左図左側縁である。208はつまみ状の頭部と長い錐刃部をもつ。素材となった剥片は自然面をもち、打面側を錐刃部としている。整形はすべて主剥離面を打面とし、垂直に近い角度で施している。錐刃部の横断面は台形である。209は石錐未製品である。素材となった剥片は自然面打面の縦長剥片である。打面は点状でリングが発達している。横断面は三角形である。表裏両面の細部調整は主剥離面側の右側縁に施されている。ほかの側縁はすべて1方向からの剥離である。211は自然面打面の縦長剥片を用いている。剥片の下部が断面三角形で、そのうち2縁に細部調整を加えて錐刃部を作り出している。末端はわずかに摩滅している。出土層位は長原4層であるが、明らかに縄文時代の遺物であるため、開析谷の遊離資料として取上げた。

212は使用痕のある直刃削器である。その形態は従来、打製石庖丁と呼ばれてきたものである。素材は板状の横長剥片で、主剥離面・背面ともに自然面を打面として同じ方向の加撃によって割取られている。主剥離面の上部には、先行する加撃によって生じたバルブのヒビを取込んでいる。剥片の末端は規則正しい細部調整で、6.5cmにわたって刃部を作り出

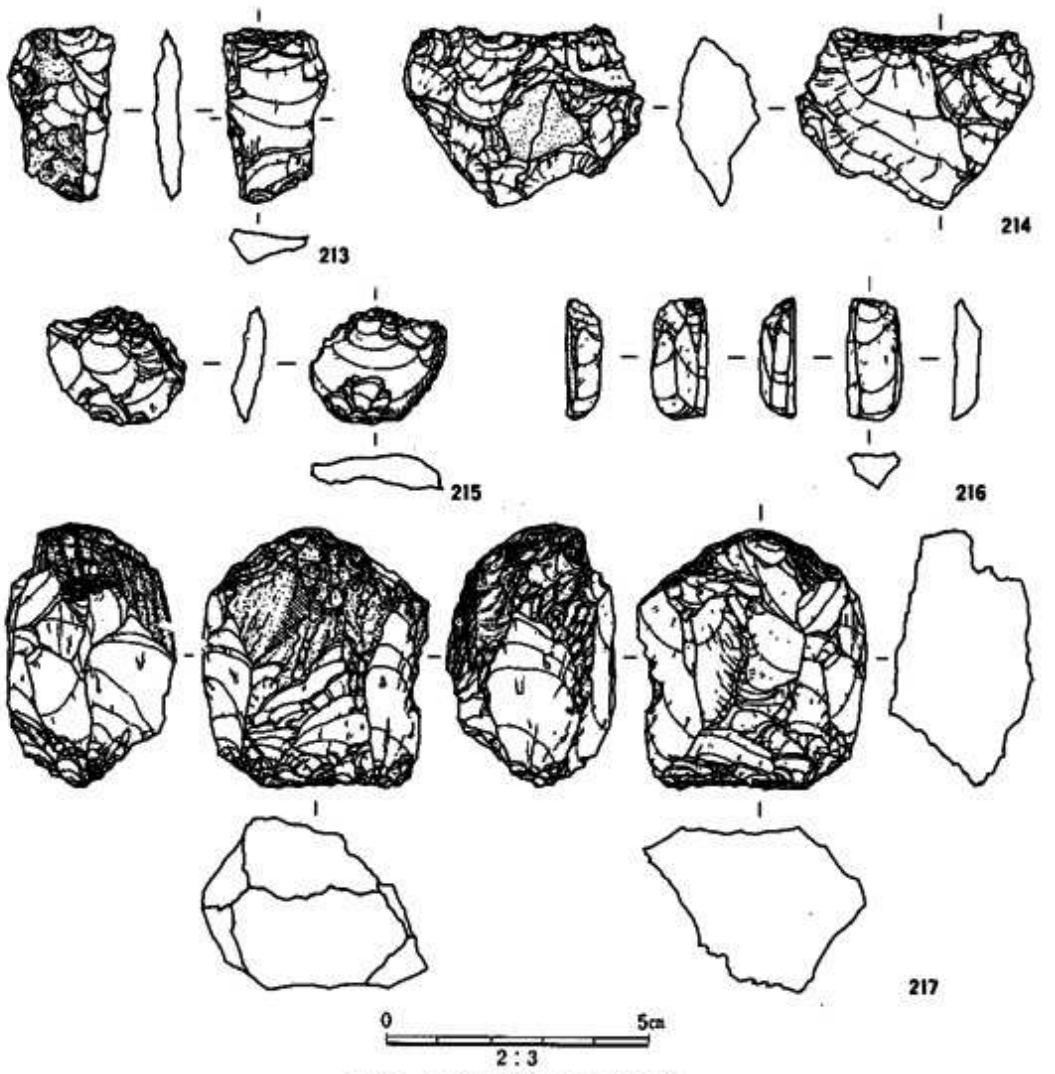


図66　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

している。木や骨など堅い物に使用したらしく刃部は摩滅しており、特に背面側の細部調整面の中央部は著しい。右図の右側縁に幅0.5cmの小さな２次加工が２個所ある。

213～230は１方向のみ使用されたクサビである。213の素材は背面に自然面がある板状の剥片である。主剥離面の打面側と末端側には両極打法による対向する剥離面が認められる。図の上縁を打縁、下縁を刃縁として使用しており、いずれの側にも階段状の不規則な剥離面が並んでいる。214の素材は図の上部に小さな自然面と背面に古い剥離面を残すこと以外、原形をとどめないほど使用されている。まず左図の左斜下を打縁として加撃したあと、持ち替えて上縁を打縁として使用している。刃縁は破砕しており残っていない。215の

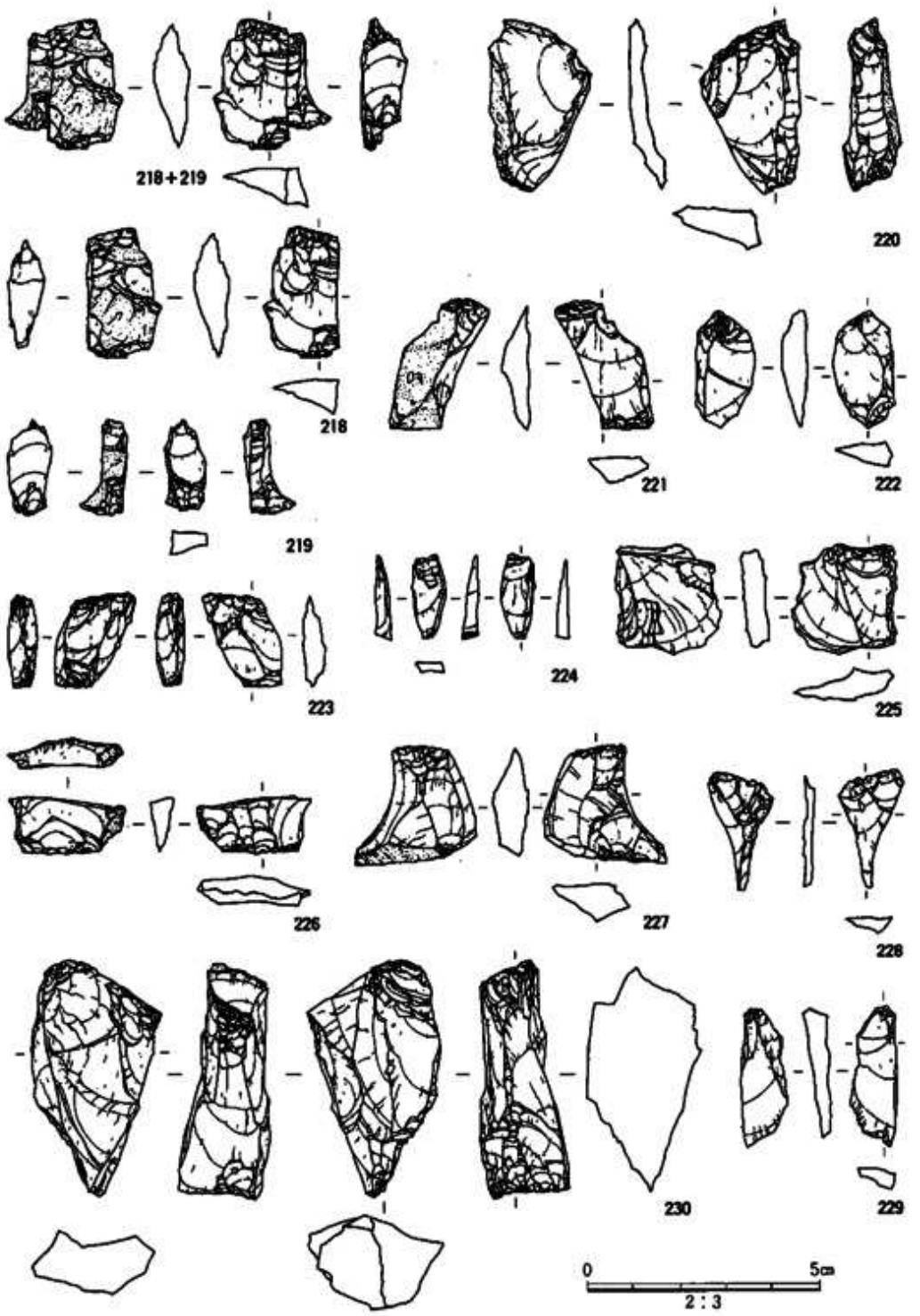


図67　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

素材はリング・フィッシャーが発達した横長剥片である。剥片の末端を刃縁として、打面側を打縁として使用している。216はクサビの残片である。自然面が右図の右縁に細く残る。7面ある縦方向の剥離面はすべて上端の打点からはじまるネガティブな面である。217の素材は背面がほとんど自然面の、厚い剥片である。主剥離面は使用のためにすべて失われている。上縁の自然面を打縁とし、下縁の剥離面に刃部を作って刃縁としている。その結果、打縁には潰れが顕著で、刃部には階段状の不規則な剥離面が並んでいる。さらに、打縁と刃縁の間には縦方向にぶつかる剥離が生じている。これは、薄い剥片を取るための石核の可能性もある。218・219は接合資料である。素材は背面が古い剥離面からなる板状の剥片である。図の上縁を打縁とし、下縁を刃縁として使用している。その結果、垂直割れが起り、218と219に分裂している。さらに、219には反対側にもう1枚垂直割れ面があることから、このクサビは使用によって3枚以上に割れたことがわかる。220の素材は背面に自然面をもつ剥片である。クサビとしての加撃の方向は図の縦方向だけであるが、上縁と下縁の向きがねじれている。221の素材は背面に自然面をもつ板状の剥片である。上縁を打縁、下縁を刃縁とし、左図の右側縁で垂直割れを起している。222は使用の結果、素材の面をなくしている。223の素材は図の上縁に自然面を残す板状の剥片である。上縁を打縁とし、下縁を刃縁とする。垂直割れによって左右を欠損し、幅が狭くなっている。224は加撃によって縦に薄くはがれたクサビである。両面に垂直割れ面がある。225は板状の剥片を素材として使用している。上縁の打縁は残っているが、刃縁は破砕している。226は背面に自然面をもつ板状の剥片を使用している。図の下縁が刃縁である。上半部は刃縁からの垂直割れが左図の左側縁から横方向に回り込んで欠損している。227は自然面打面の板状の横長剥片を用いている。図の上縁が刃縁で、下縁が打縁である。打縁には敲打の際の潰れがみられる。主剥離面・背面ともにクサビ特有の対向する剥離面がある。右図の右側縁の面が最後の垂直割れである。228は背面に自然面をもつ剥片を素材としている。左図の左側縁が最後の垂直割れである。229は224と同様の縦に薄くはがれたクサビの一部である。クサビの元の面は右図の右側縁に細くみえる面と、左図右側縁の小さな自然面である。上縁を打縁としている。230は大きな打縁部に比べて刃縁部が鑿状に細いクサビである。打縁は図の上縁で、小さな自然面とそれを切る三角形のネガティブな剥離面の周囲に、クサビ特有の潰れと階段状の剥離面がみられる。また、全面に対向する縦方向の剥離面がある。

231～242・250・295は使用方向が2方向以上認められるクサビである。231は剥離面打面の縦長剥片を用いている。上下、左右に対向する階段状の小さな剥離面がある。232はク

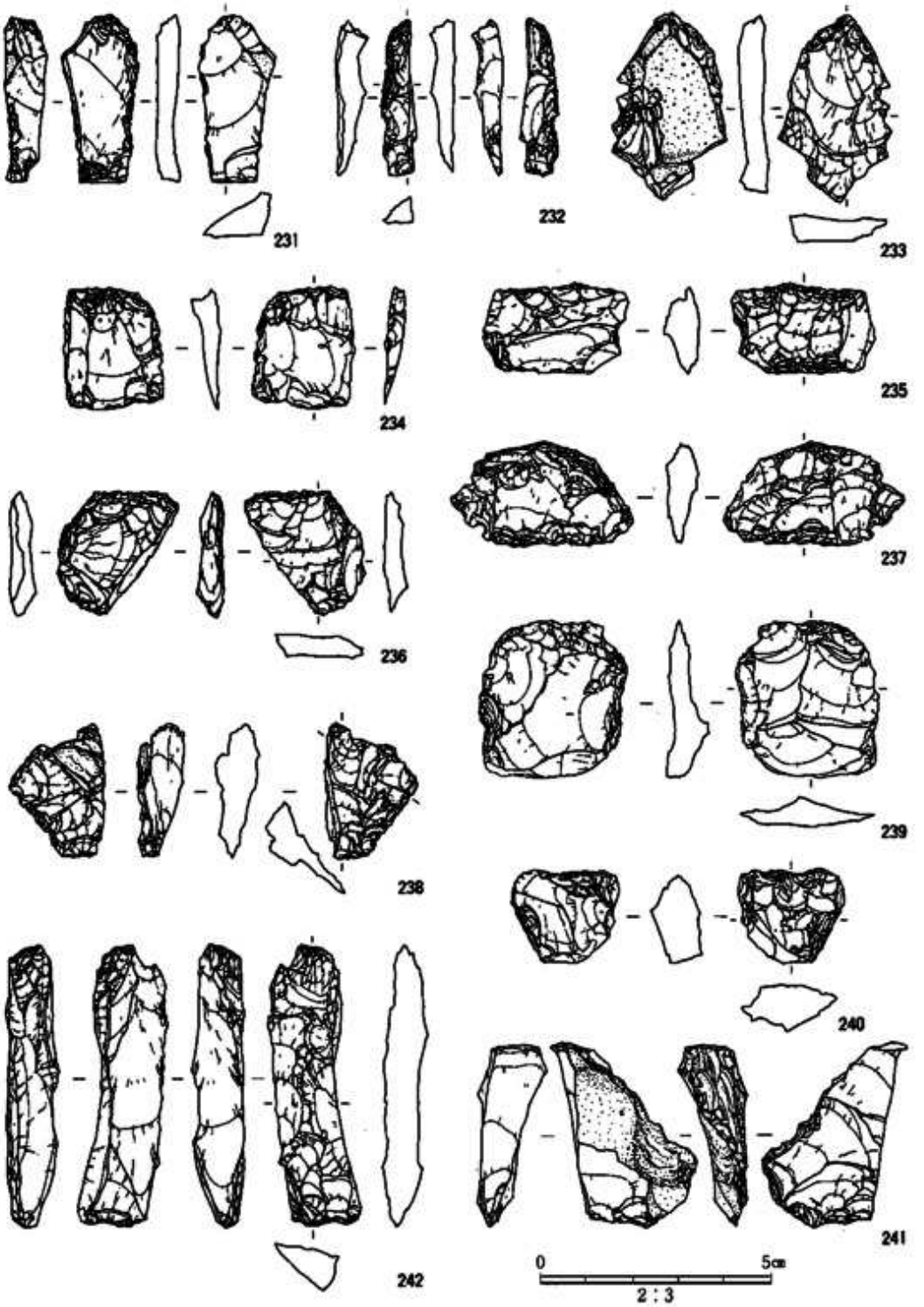


図68　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

サビの側縁部分である。横方向に並ぶ剥離面は、最初にクサビとして使用した際の打縁と考えられる。90°持ち替えて図の下縁を刃縁として使用しはじめたが、垂直割れが生じて側縁部が残ったと考えられる。233は背面が自然面の板状の剥片を素材としている。素材の剥片は自然面打面で、垂直割れによって剥離されている。左図の左側縁と上縁を加撃しているが、対応する刃縁は欠損している。234は板状の四角い剥片を素材としている。右図の左側縁を打縁または刃縁として使用したのち、90°持ち替えて加撃している。250は背面に自然面をもつ板状の剥片を素材としている。図の側面を打縁または刃縁として加撃したのち、90°持ち替えて自然面側を打縁としている。最後に生じた垂直割れが右図の右側縁にみえる。上縁が打縁で左図の左側縁にある細長い剥離面は垂直割れ面である。235は四角い板状の横長剥片を素材としている。左右の側縁を加撃したのち、上縁・下縁を刃縁もしくは打縁として用いており、クサビ特有の階段状の剥離面がある。236は四角い板状の剥片を素材としている。まず、図の横方向から加撃したのちに、下縁を刃縁として使用している。その際に起った垂直割れ面が左図の左側縁にみえる。さらに、垂直割れ面を刃縁として使用しており、都合3回持ち替えてクサビとして使用している。237は板状の剥片を素材としている。まず、図の横方向を加撃し、90°持ち替えて使用している。打縁は上縁、刃縁は下縁である。238は自然面をもつ厚めの剥片を素材としている。まず、図の横方向を加撃し、次に持ち替えて自然面の残る図の上縁を打縁として使用している。その際に生じた垂直割れが右図の左側縁にみえる。垂直割れ以後は使用されていない。239は背面に自然面をもつ四角い板状の剥片を素材としている。まず、左図の左側縁を打縁として加撃し、90°持ち替えて自然面が残る上縁から加撃している。ところが、右図の左にある縦方向の剥離が奥まで進んだことによって刃縁を失っている。240は自然面をもつ厚めの剥片を素材としている。まず、図の横方向に自然面の側を打縁として加撃し、90°持ち替えて縦方向に加撃している。図の上縁が打縁である。その際に起った垂直割れによって下半部を失っている。241は背面が自然面を打縁としているのがわかる。次に持ち替えて、図の上縁を打縁、下縁を刃縁として加撃している。その際に垂直割れが起り、使用をやめている。242は使用によって素材の面がすべて失われている。クサビとしては図の縦と横の2方向から使用されている。図の左の3面はすべて縦方向の垂直割れ面である。右図には縦方向の対向する剥離面に切られる横方向の剥離面が残っている。295は上縁を打縁とし、下縁を刃縁として加撃している。そのときに生じた垂直割れによって主剥離面の右半部を欠損している。

243～249・251～254は、2方向から加撃された痕跡を残す、クサビからはがれた剥片で

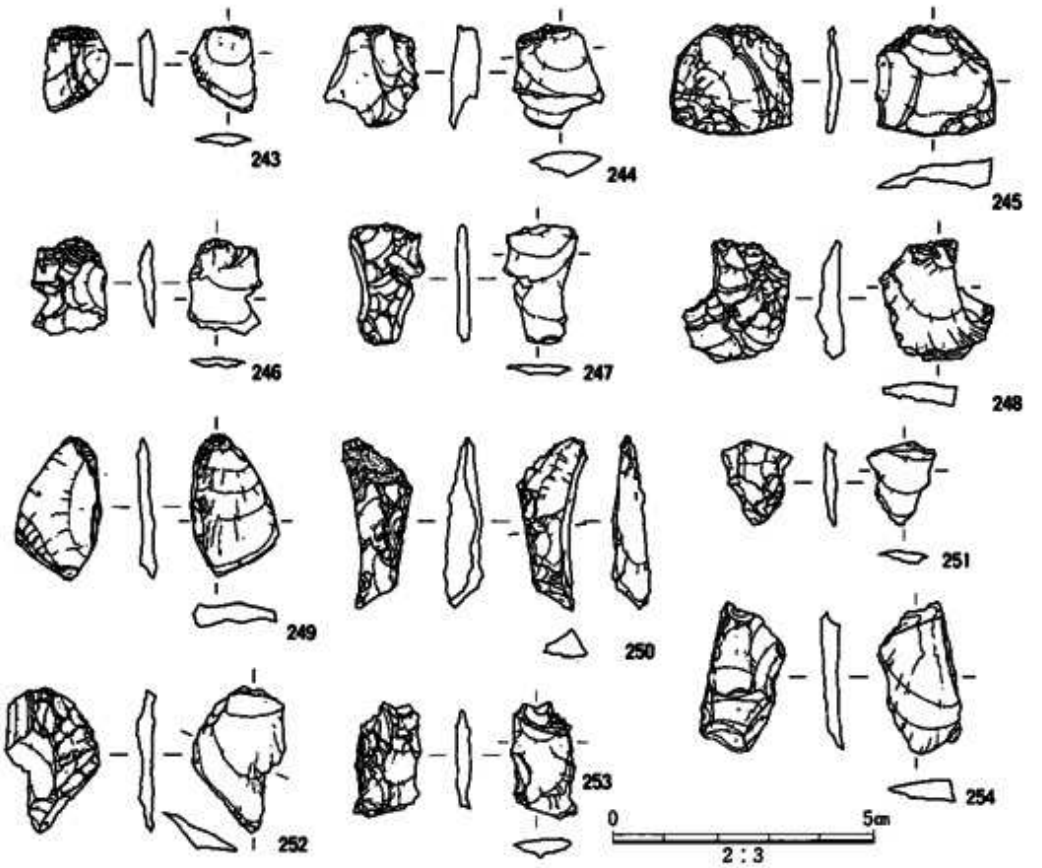


図69　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

ある。最後に剥離された原因となった打点側を上に図示してある。243は背面に2方向の加撃による剥離面をもつ。主剥離面には点状の打面を残し、主剥離面の末端はヒンジ・フラクチャーとなる。244は自然面打面の縦長剥片である。主剥離面のリングが発達し、中ほどで大きな段になる。背面には横方向の対向する先行剥離面がある。245は主剥離面に上下から対向する剥離面がある。また、背面ではそれと直行する方向の剥離面がみられる。この剥離面は末端でステップを起している。246は点状の打面が残る縦長剥片である。背面にはクサビ特有の潰れと、主剥離面の加撃の方向と直交する、対向する剥離面がある。247は点状の打面が残る縦長剥片である。末端は折れている。背面にはクサビ特有の潰れと、対向する剥離面がある。248は点状の打面が残る縦長剥片である。末端はフィッシャーが発達し、主剥離面側の右半分は垂直割れによって欠損している。背面には対向する縦方向の剥離面とそれに直交する剥離面がある。249は点状の打面が残る縦長剥片である。主剥離面の末端はフィッシャーが発達し、ヒンジ・フラクチャーを起している。また、右半分は剥離時に

同時に割れて欠損している。背面には主剥離面の加撃の方向と直交する、大きな対向する剥離面がある。251は打点側が剥離の際に欠損している。背面には主剥離面の加撃の方向と直交する、対向する剥離面がある。252は打点側が剥離の際に欠損している。リング・フィッシャーが発達している。背面には主剥離面と直交する、対向する剥離面がある。253は打点が剥離の際に欠損した縦長剥片である。末端も折れている。背面にはそれと直交する方向の、クサビ特有の潰れをともなう階段状の剥離面が多数認められる。254は打点が剥離の際に欠損した縦長剥片である。主剥離面の右側に自然面をもつ。背面には主剥離面と同じ方向の剥離面と、それに先行する直交方向の剥離面がある。以上の剥片はいずれも打点や背面に垂直割れや潰れた痕跡を残しており、クサビから剥落した剥片と考えられる。

255～294・296は1方向だけ使用したクサビから剥落した剥片である。255～257は点状の打面を残す横長剥片である。打点付近の背面側には同じ方向の階段状の剥離がある。258は点状の打面を残している。主剥離面の左半分と末端は折れている。背面にはもとのクサビの面が残る。259は上下から同時に起った加撃によって剥離している。右図の右半分は同時に起った垂直割れで欠損する。背面には主剥離面と同方向の階段状の剥離面が対向して認められる。260は剥離の際に打面が欠損している。背面には主剥離面と同方向の剥離面が並ぶ。261は点状の打面が残る。末端は折れている。背面には自然面が残る。262は点状の打面を残す横長剥片である。リングが発達し、末端はステップとなって折れている。背面には同じ方向の階段状の剥離面が並んでいる。263は末端がステップとなって折れている。背面には同じ方向の縦長の剥離面が並んでいる。264は打面が粉砕された横長剥片である。末端はリングが発達している。背面には同じ方向の階段状の剥離面が並んでいる。265は主剥離面剥離の際に同時に起った細かな剥離が打点部に密集する剥片である。末端はヒンジ・フラクチャーを起して折れている。右半分は剥離の際に垂直割れによって欠損している。266は主剥離面剥離の際に同時に起った細かな剥離が打点部に密集する剥片である。背面にも同じ方向の階段状の剥離面が並んでいる。267は点状の打面を残す剥片である。末端は折れている。背面はもとのクサビの面が右半部に残る。268は背面が自然面の縦長剥片である。自然面の頂点を打面とし、末端は折れている。打点付近に敲打による潰れが認められる。269は点状の打面を残す剥片である。主剥離面・背面ともに同方向のリングが発達している。主剥離面の右半部は垂直割れによって欠損する。270は主剥離面剥離の際に同時に起った細かな剥離が打点部に密集する横長剥片である。主剥離面の両側は折れている。背面にはもとのクサビの面と、主剥離面と同方向の階段状の剥離面がある。271は剥離の際に打点部が

図70　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

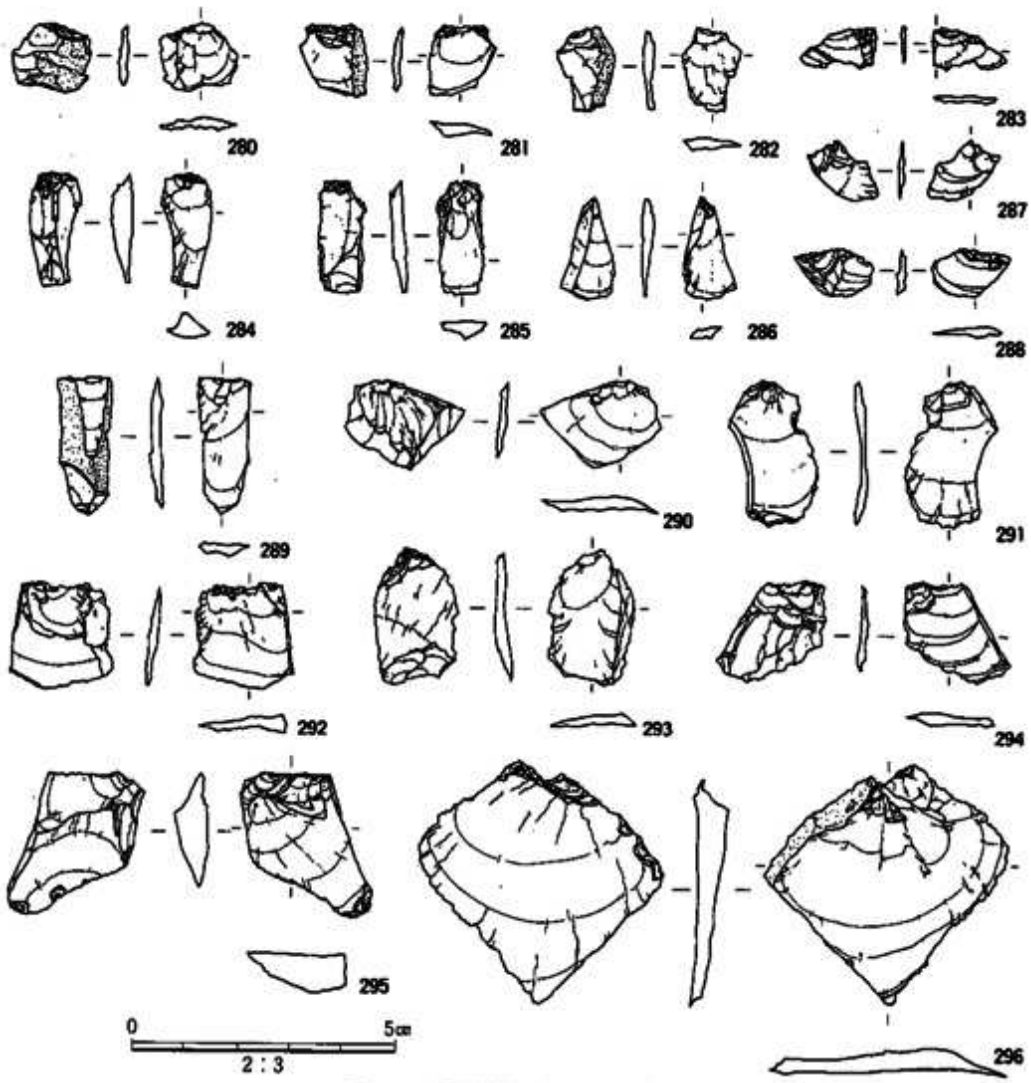


図71　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

折れている。端部には対向する小さな階段状の剥離面があり、背面も同様である。272は剥離の際に打点部が折れている。端部には対向する階段状の剥離面がある。背面には主剥離面と同方向の剥離面が並んでいる。273は剥離の際に打面部が欠損した横長剥片である。リングが発達している。背面にも同方向の剥離面がある。274は末端がステップとなる縦長剥片である。打面部は新しい欠けによって失われている。背面には縦長の剥離面が並んでいる。275は剥離の際に打面部が欠損した横長剥片である。左側縁に自然面を残し、末端はヒンジ・フラクチャーを起している。背面には同方向の先行剥離面があり、打点は自然面付近を用いている。276は点状の打面を残す縦長剥片である。末端は折れている。主剥離面・

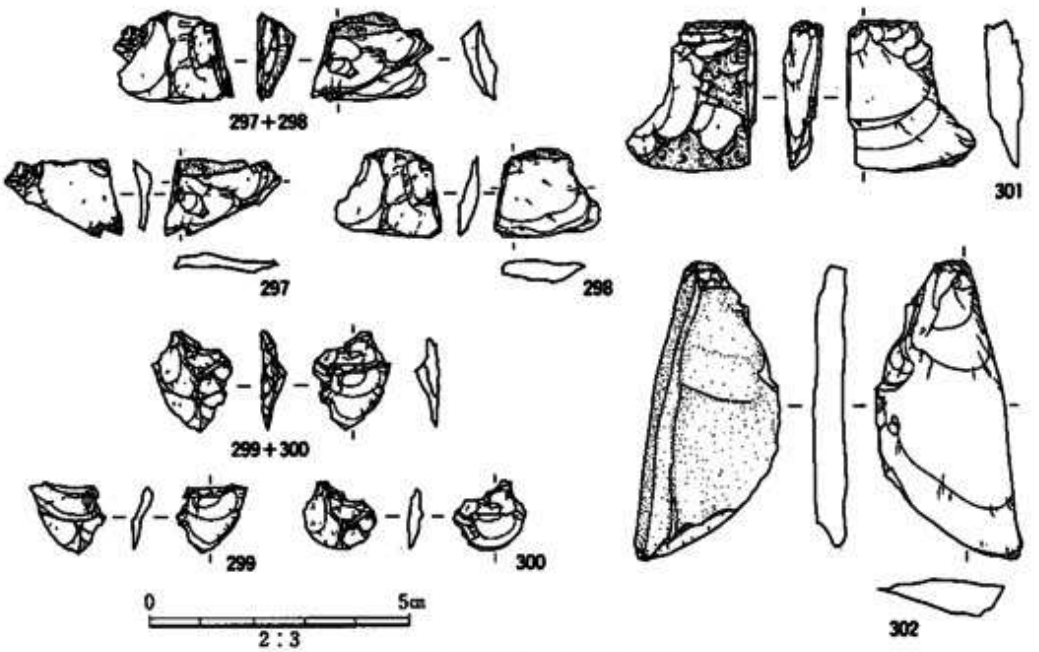


図72　Ⅱ区開析谷出土の石器遺物

背面とも縦方向の対向する剥離面が並び、打点部にはクサビ特有の潰れがある。277は打点部・末端ともに折れている薄い剥片である。主剥離面のリングは発達しており、背面には元のクサビの面が残る。278は剥離の際に打面部が欠損した縦長剥片である。左側縁に自然面をもつ。末端には対向する小さな剥離面があり、背面には先行するネガティブな面がある。279は剥離の際に打面部が欠損した剥片である。末端・右側縁ともに同時に折れている。背面には上下から対向する剥離面があり、中央でぶつかっている。280は点状の打面を残す横長剥片である。背面には自然面とクサビ特有の潰れを示す階段状の剥離面がある。281・282は点状の打面を残す縦長剥片である。末端はヒンジ・フラクチャーとなる。背面には主剥離面と同方向の階段状の細かな剥離面と自然面がある。283は剥離の際に打面部が欠損した横長剥片である。リングが発達している。背面には自然面とそれを切る主剥離面と同方向の剥離面が並んでいる。284は点状の打面を残す縦長剥片である。フィッシャーが発達しており、末端は折れている。背面には素材のポジティブな面と、それを切る縦方向の対向する階段状の剥離面が並んでいる。285は自然面打面の縦長剥片である。末端の背面側には対向する階段状の剥離面がある。背面の大きな面はもとの素材のポジティブな面である。286は自然面打面の縦長剥片である。末端は折れている。背面には素材のポジティブな面と、それを切る縦方向の剥離面がある。287は点状の打面を残す横長剥片である。リング・フィッ

シャーが発達し、末端は波打っている。背面には素材の面と、それを切る階段状の小さな剥離面がある。288は主剥離面の打点部に、同時に起ったと考えられる細かな剥離が密集する横長剥片である。リングが発達して末端はヒンジ・フラクチャーとなる。右半部は折れている。背面には主剥離面と同方向の階段状の剥離面が並んでいる。289は点状の打面を残す縦長剥片である。背面には自然面とそれを切る対向する縦方向の剥離面がある。290は自然面打面の横長剥片である。背面には主剥離面と同じ方向の剥離面がある。291は点状の打面を残す縦長剥片である。フィッシャーが発達している。末端の背面側には対向する小さな階段状の剥離面が並んでいる。292は主剥離面の打点部に、同時に起ったと考えられる細かな剥離が密集する剥片である。リングが発達しており、剥離面は波打っている。背面にも素材の元の面と、それを切る主剥離面と同方向の剥離面がある。293は点状の打面を残す縦長剥片である。背面には素材の面とそれを切る対向する方向の剥離面がある。294は剥離の際に打面部が欠損した縦長剥片である。リングが発達し、主剥離面は波打っている。右半部は古い折れ面である。背面には主剥離面と同方向の階段状の剥離面が並んでいる。296は先行する加撃によって生じたヒビ割れを取込んだ横長剥片である。そのために打点が複合している。左側縁に自然面をもつ。リング・フィッシャーが発達し、末端はヒンジ・フラクチャーとなる。背面には主剥離面と同方向の大きなネガティブな面と、それを切る階段状の剥離面が並んでいる。299・300は接合資料である。剥離面打面で連続して取られた剥片で、両方とも横長剥片である。打面となった剥離面は平坦でない。300の背面には主剥離面と同方向から加撃された階段状の剥離面があることから、クサビの使用によってはじけた剥片と考えられる。

297・298は接合資料である。自然面を打面とし、同一方向から打点を奥にずらしながら連続して剥離している。2片とも加撃の際に打点から垂直割れが生じ、主剥離面側の左半部を欠損している。また、末端はヒンジ・フラクチャーを起している。298の背面には、主剥離面と同方向のネガティブな先行する剥離面が2面ある。これらは調整剥片と考えられる。301は自然面打面の剥片である。これのみ風化が著しい点で、ほかの石片と様相を異にしている。打点から垂直割れが起り、左半部を欠損している。背面には自然面と、それを薄くはぐような剥離面がある。調整剥片と考えられる。302は自然面の頂点を打面とした縦長剥片である。末端はヒンジ・フラクチャーを起している。背面はすべて自然面である。自然面を取去るための調整剥片と考えられる。

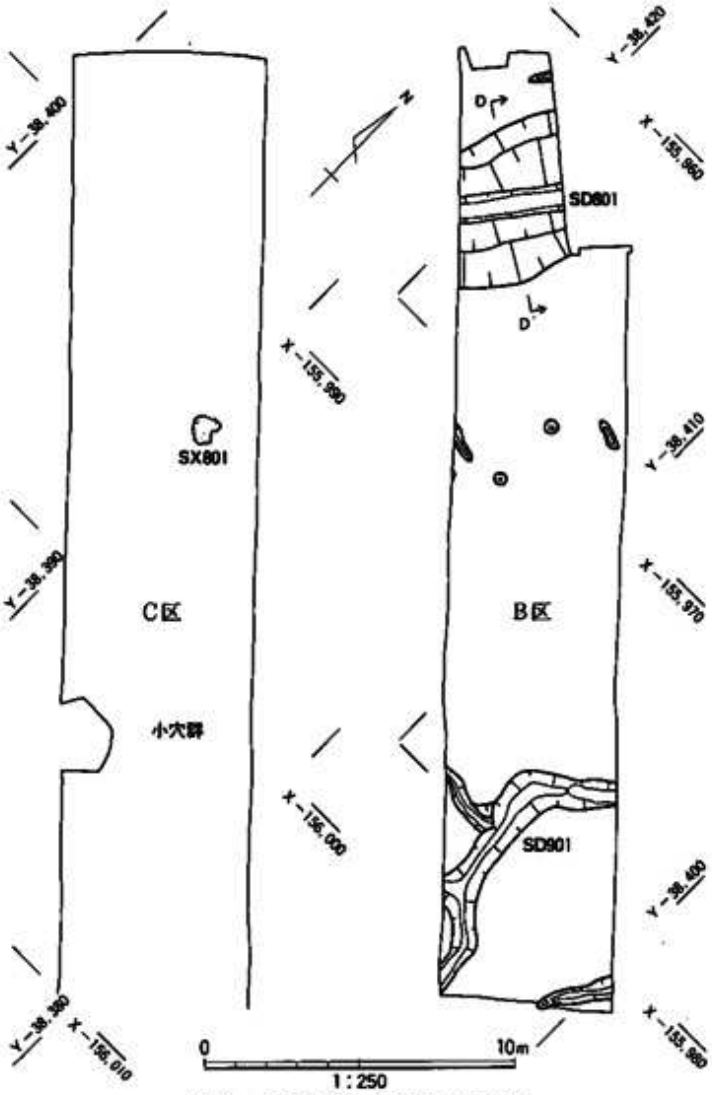


図73　I区SD901・SD801・SX801

iii)溝

SD901(図73・74、写真9、図版14)

I区のB区南端に位置する断面がU字状の溝である。長原9B層下面で検出した。B区内で西からきた3本の溝が合流して東に向って流れている。幅0.6～1.5m、深さ0.4～0.9mで、東端のA断面付近が一段深くなっている。内部には長原9B層準の粗粒砂を主体とした水成層と灰色(7.5Y4／1)～黒褐色(10YR3／1)シルト質粘土が堆積し、最終的に長原9A層の赤黒色(2.5YR1.7／1)粘土質シルトで埋っている。このことから弥生時代前期に機能していた溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

SD902(図51・62)

I区のC区中央に位置する溝である。上位に重なる溝SD301の撹乱によって、平面的には検出できなかったが、図51のC・D断面において確認した。埋土は黄褐色(2.5Y4／1)シルト質極細粒砂である。位置的に、88－69次調査のSD911a[大阪市文化財協会1995]につながることから長原9A層上面の遺構と判断した。底のレベルはTP+9.5mである。

SD903(図51・62)

I区のC区南部に位置する溝である。現代耕土の撹乱によって平面的には検出できなかったが、図51のD断面で確認した。位置的にみて88－69次調査のSD910[大阪市文化財協会1

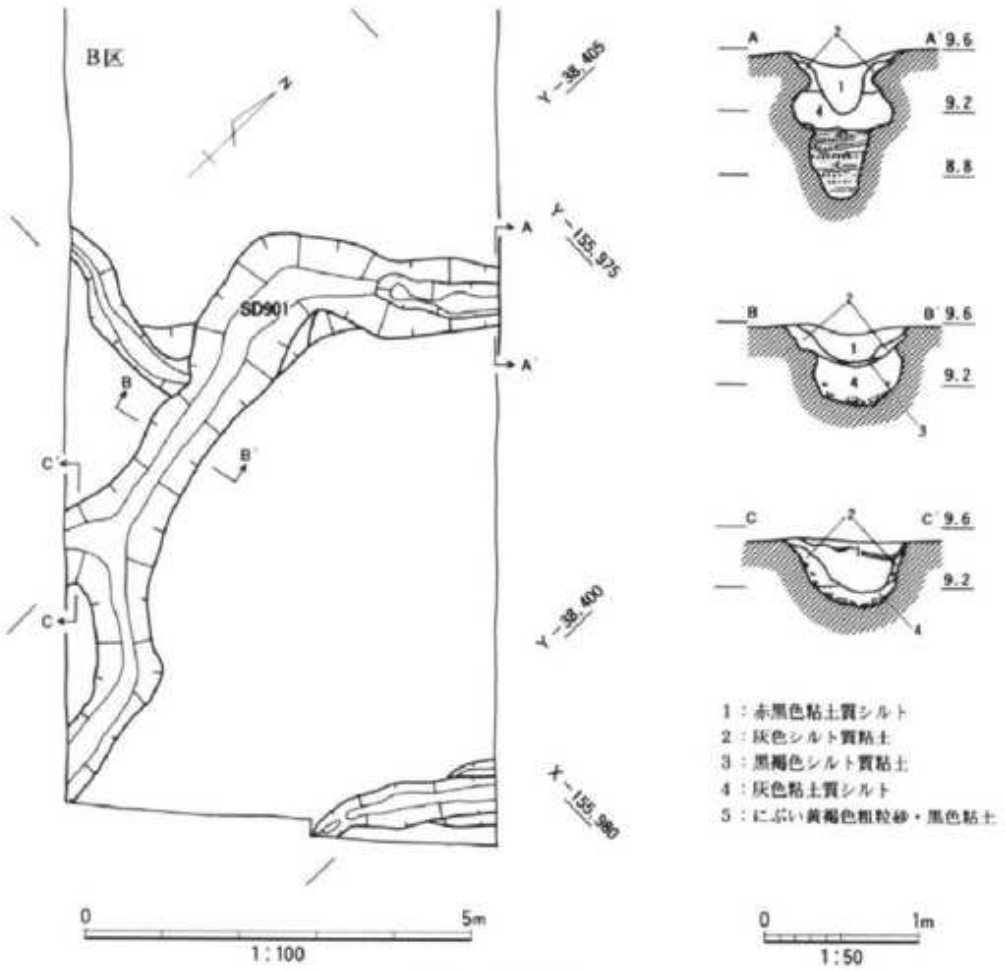


図74　I区SD901

995]につながることから、長原9A層上面の遺構と判断した。内部にはにぶい黄褐色(10YR4／3)砂礫・暗灰黄色(2.5Y 4／2)シルト混り砂礫の水成層が堆積している。

SD801(図73・75、図版15)

I区のB区北端にある幅4.3～5.0m、深さ約2.0mの流路で、溝内には長原8C層準の黄褐色砂礫～細粒砂、黄褐色砂質

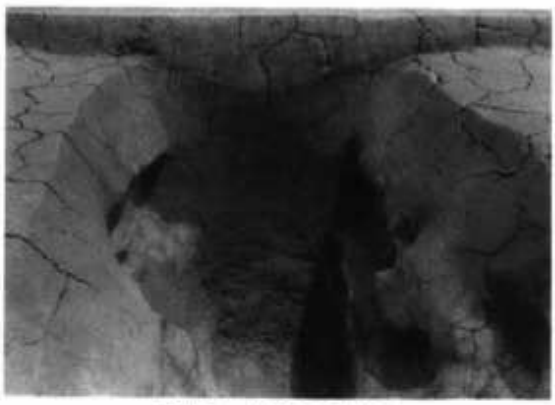


写真9　SD901のA断面

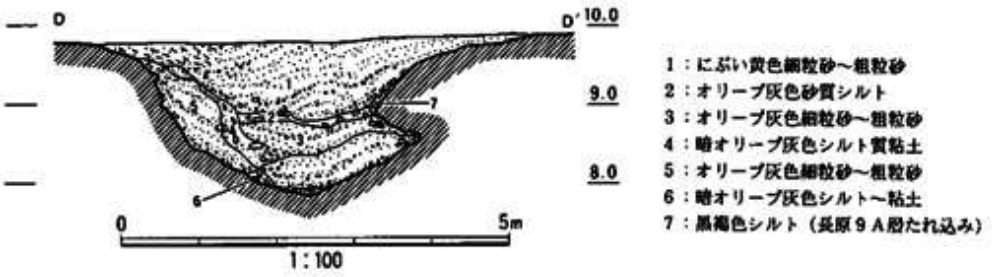


図75　Ⅰ区SD801の断面

シルトが堆積していた。遺物は出土しなかったが、両岸から流路内にたわむように堆積した長原9A層準の黒褐色(10YR3／1)シルト質粘土や灰色(5Y4／1)～暗オリーブ灰色(5Y5／3)極細粒砂質シルトには落葉広葉樹の葉や枝をはじめ、ドングリや草木類の種子などが含まれていた。

本流路はこれまでに実施された長原遺跡東南地区の調査の結果、長原9A層が旧表土であったころに調査地域の南方から北流しており、Ⅰ区の中央部あたりで東に曲ったあと、再び北に方向を変えることが判明している。また、調査地域の南東部では長原8C層準の水成層で埋没した弥生時代中期初頭の水田が検出されており、流路はこの水田の用水として機能していたのだろう。

ⅳ)その他

SX801(図73・76、図版15)

Ⅰ区のC区北端に位置する性格の不明な遺構である。東西1.5m、南北1.4mの範囲内に、真土のような焼土塊がかたまった状態で出土した。出土層準は長原８層(長原8A～8C層一括)の基底面であるが、一部の焼土塊は下層の長原9A層内に混入していた。また、焼土塊の周辺には溝や土壙、柱穴などの付随施設と思われる遺構は確認されなかったほか、遺物も出土しなかった。焼土塊の中には緩やかにカーブする面をもつもの

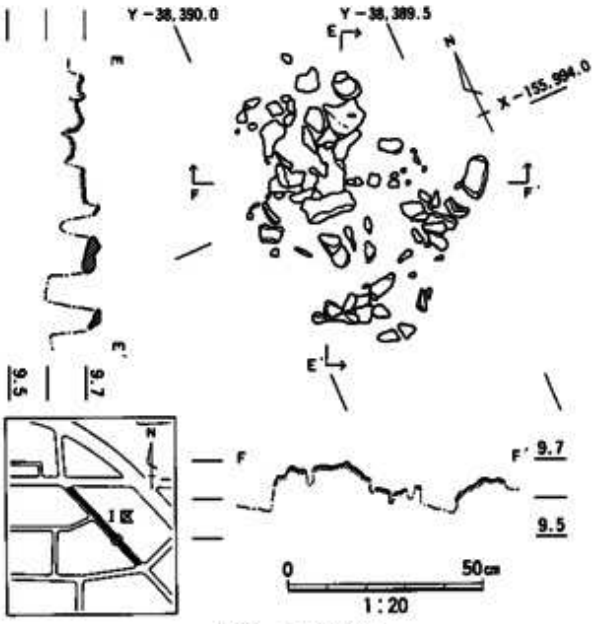


図76　Ⅰ区SX801

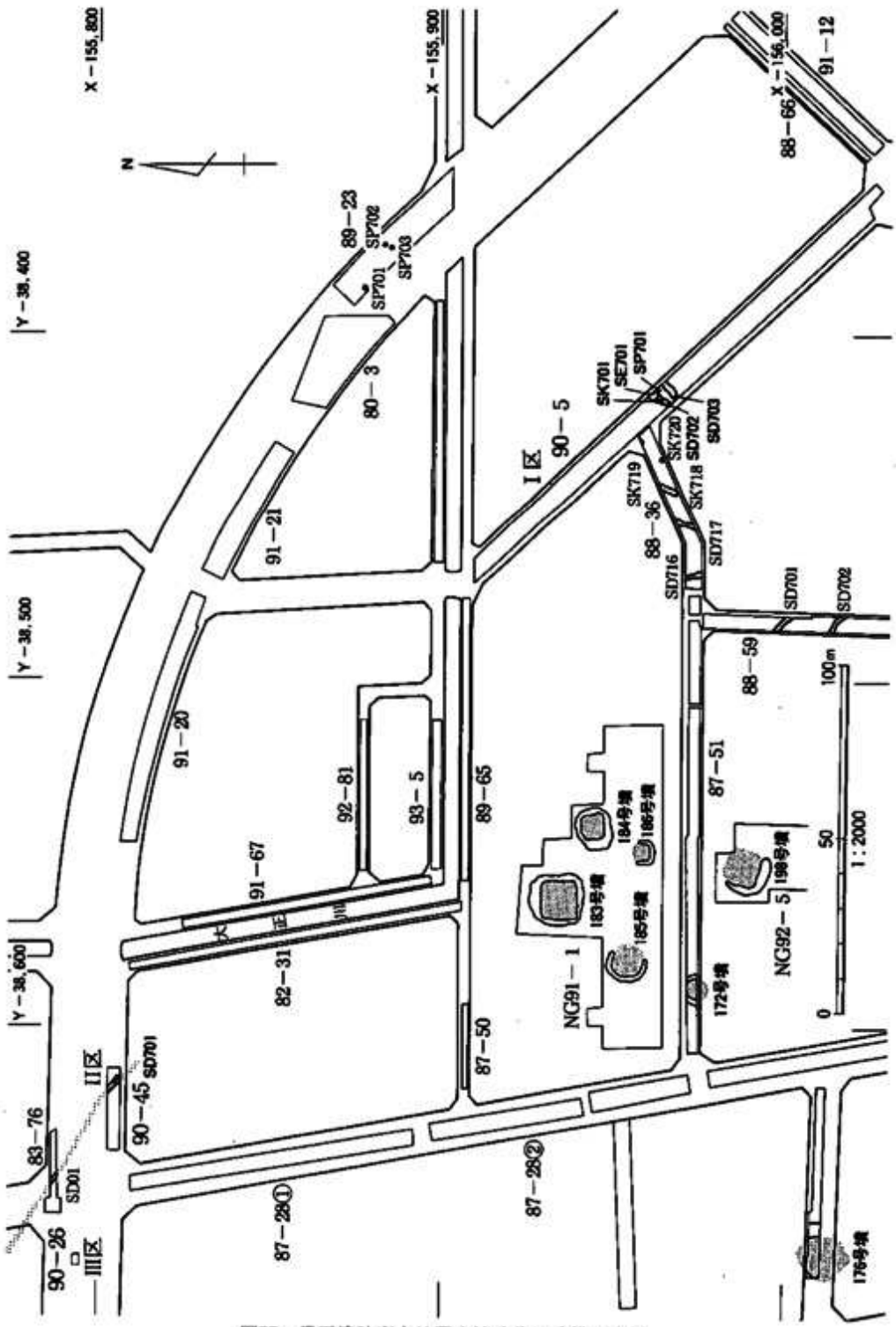


図77　長原遺跡東南地区古墳時代の遺構の配置

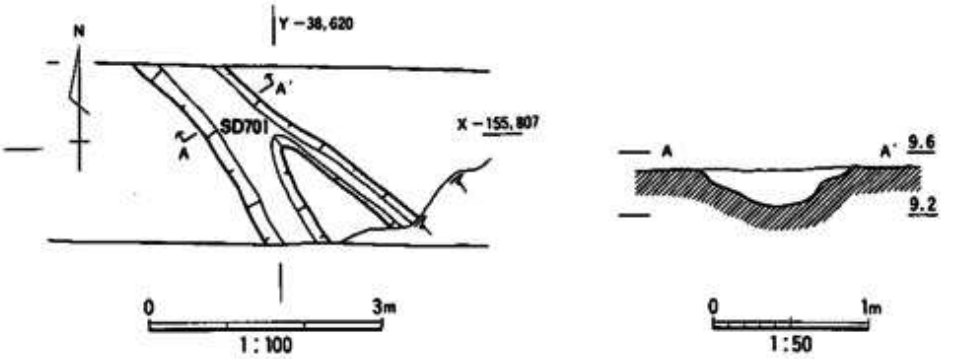


図78　Ⅱ区SD701

や平坦なものがあるが、表裏面とも線刻などの加工はなかった。焼土塊は真土に酷似していることから、近くに鋳造に係る遺構が存在する可能性がある。遺構の時期は出土層位から判断して、弥生時代中期中葉から後葉に属するものと考えておきたい。

小穴群(図73、図版14)

長原9A層上面で多数の小穴を検出した。直径は5～10cmで、深さは2～10cmである。1㎡あたり10～25個分布している。埋土はにぶい黄褐色(10YR5／2)シルト質粘土で、長原8C層に相当する水成層である。平面形は円形だが、深さや断面形がまちまちなことから、人為的なものではなく、植生痕と考えられる。

5)古墳時代の遺構と遺物(図77)

i)溝

SD701(図78、図版16)

Ⅱ区の東部に位置する南東から北西方向の溝で、長原7層下面で検出した。幅0.8m前後、深さは約0.2mある。溝は途中で2本に分かれており、溝内には黒色(2.5Y2／1)シルト質粘土が堆積している。遺物は出土しなかったが、層準から判断して古墳時代の溝と思われる。

SD702(図79・80、図版16・42)

Ⅰ区のB区北端に位置する南北方向の溝で、長原7B層下面で検出した。幅0.8～1.6m、深さは0.2mあり、溝の北部をSK701・SE701に切られている。溝の東部は1段低くなっているが、切合い関係については明らかにできなかった。溝内には黒色(2.5Y2／1)粘土質シルトが堆積しており、須恵器303が出土した。303は杯蓋で、天井部と口縁部の境界にはにぶい稜線が巡り、天井部の2／3をヘラケズリで調整している。口縁端部は内傾しており、天井部の内面には同心円文の当て具痕が残る。TK10型式のものであろう。

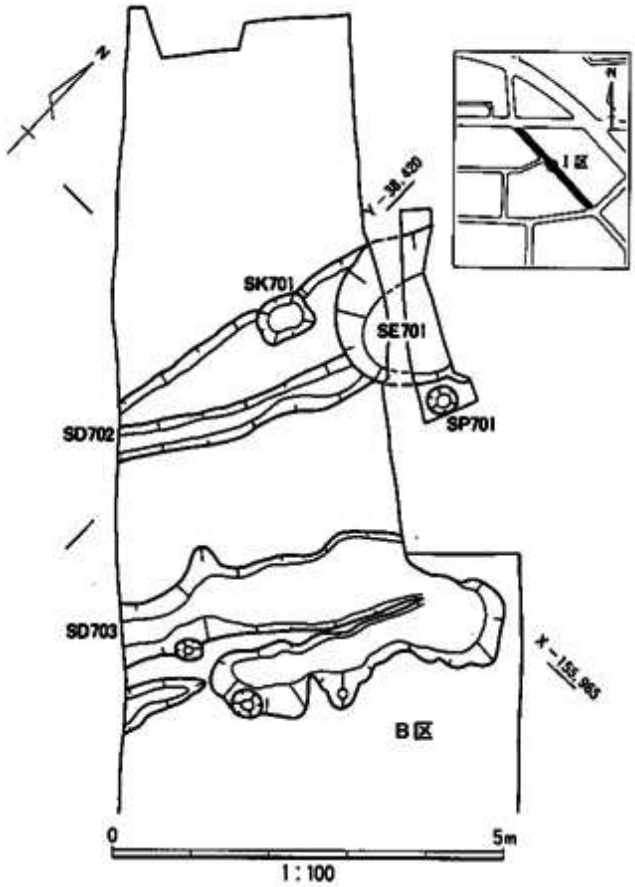


図79　I区古墳時代の遺構

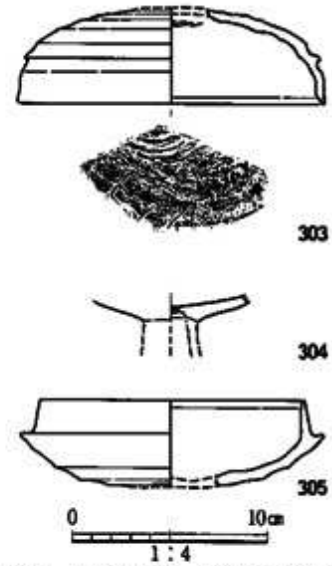


図80　I区SD702・703出土の遺物

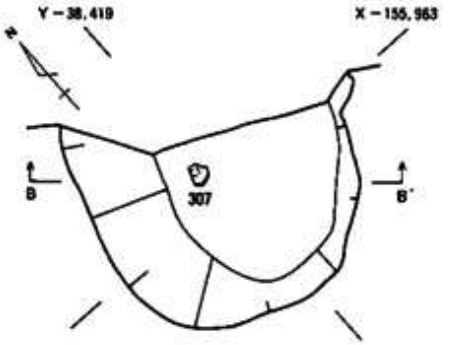
SD703(図79・80、図版16・42)

SD702の東に位置する南北方向の溝の痕跡で、長原7B層下面で検出した。幅は1.5～2.0mある。深さは約0.05mしかなく、溝の北部で途切れているが、検出時の平面の形状から判断して本来は幅0.5～1.0m前後の2本の溝であったものと思われる。溝内にはオリーブ褐色(2.5Y4／3)粘土質シルトが堆積しており、須恵器305と土師器高杯の小片304が出土した。305は杯身である。立ち上がりはほぼ垂直で、口縁端部はわずかに内傾している。体部の約1／3をヘラケズリで調整している。TK10型式に属するものであろう。

ii)井戸・土壙

SE701(図79・81・82、図版16・42)

I区のB区北端に位置する平面形が円形の素掘りの井戸である。長原7B層下面で検出した。直径約1.8m、深さ約0.8mで、内部には水成構造がある黒色(10YR1.7／1)～黒褐色(10YR1.7／1)シルト混り砂礫・粘土が堆積している。上部から土師器および須恵器が出土した。306は土師器高杯の杯部で、外面にタテハケメを密に施している。308は壺の頸部片で、内外面を粗いハケメで調整しており、口縁部の下端には太めの突帯が巡る。309は甕



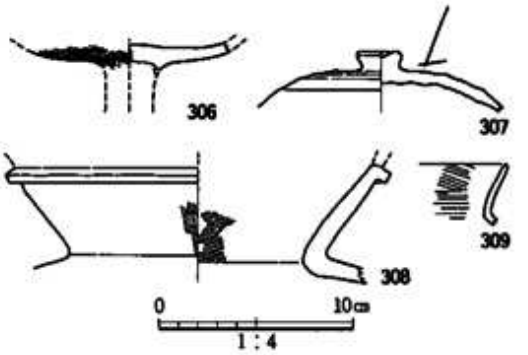


図82　Ⅰ区SE701出土の遺物

図81　Ⅰ区SE701

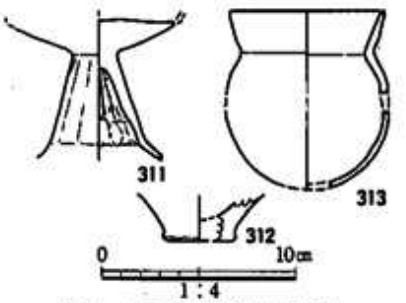
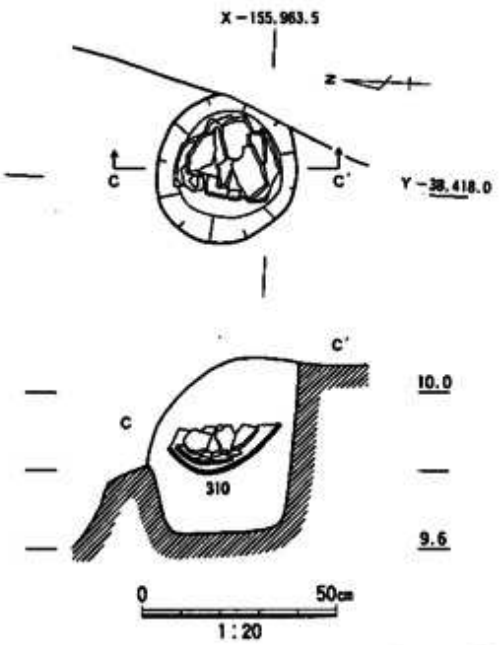


図84　Ⅰ区SK701出土の遺物



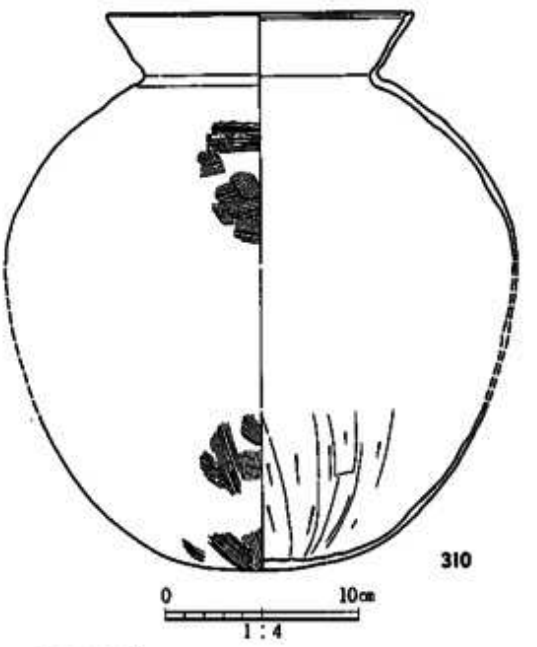


図83　Ⅰ区SP701と出土遺物

の口縁部の細片で、端部をまるくおさめており、内面にはヨコハケメを施している。307は中央が凹むつまみを付けた須恵器有蓋高杯の蓋で、ヘラ記号がある。以上の土器のうち、307はTK10～MT85型式のものである。土師器は出土層準が下層であることや形態や製作手法などからみても須恵器より先行する時期と思われる。

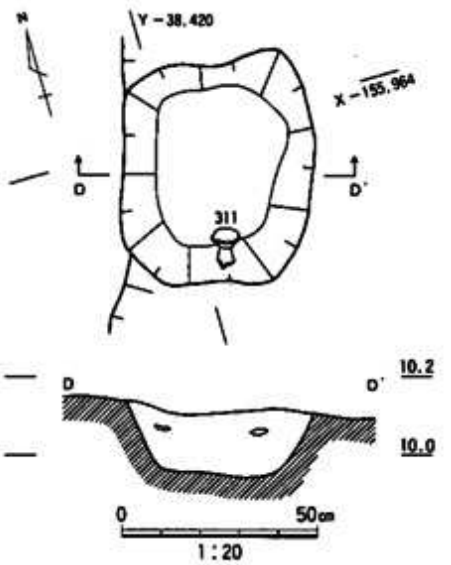


図85　I区SK701

SP701(図79・83、図版17)

井戸SE701の西側に近接する長径0.35m、深さ0.45mの土壙で、長原7B層下面で検出した。埋土は粗砂を多く含む砂質シルトである。位置的にみて井戸に付属する施設の可能性がある。土師器甕310が出土した。布留式の新しい段階のものである。

SK701(図79・84・85、図版17・42)

井戸SE701の南側に位置する、平面形が隅丸長方形で短辺0.5m、長辺0.6m、深さ0.2mの土壙である。長原7B層下面で検出した。遺構内には黒褐色(2.5Y3／1)砂質シルトが堆積しており、上部から古式土師器311～313が出土した。311は高杯の杯部から脚部にかけての破片である。312は甕の底部片で外面をユビナデで調整している。313は丸底の壺である。体部の内外面をナデで調整している。以上の土器のうち、庄内式に属する312以外は布留式の新しい段階のものと思われる。

6)室町時代の遺構と遺物(図86)

i)溝

SD301(図87、図版43)

I区のC区南端に位置する幅1.5m前後の南北方向の溝である。長原3層下面で検出した。内部にはにぶい黄色(2.5Y6／4)～黄褐色(10YR5／6)砂礫が堆積していた。この溝は何度か改修されており、東岸には直径15cmの杭が50～70cm間隔で19本並んでいた。上位の新しい埋土から16世紀代の青花・瀬戸美濃焼が、下位の古い埋土からは13～14世紀代の瓦器椀が出土した。溝は方向や位置からみて、江戸時代以前に坪境に掘られた用水路と考えられる。

314は玉縁状の口縁をもつ白磁碗である。315は口縁部が頸部から直立したあと、端部の

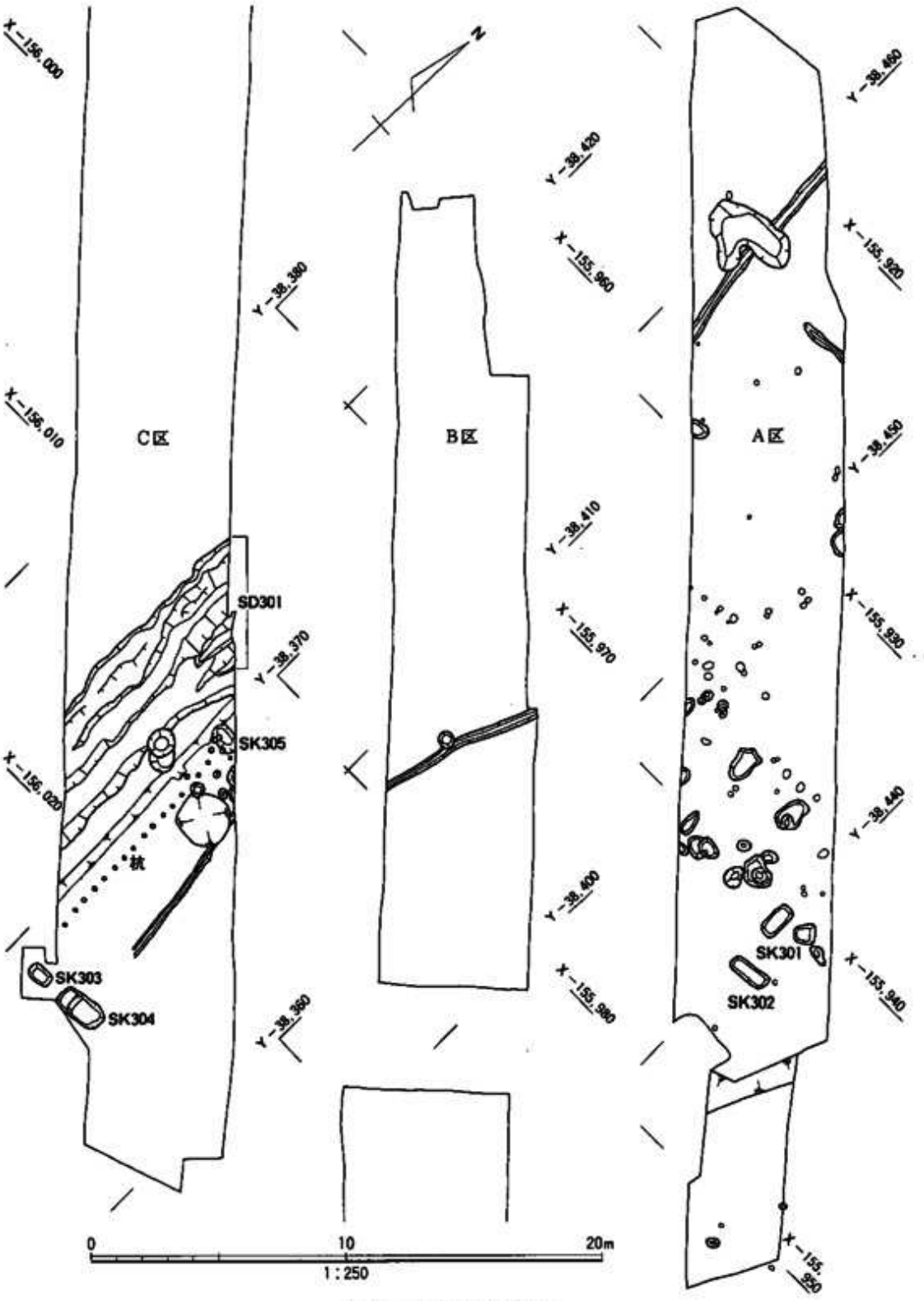


図86　Ⅰ区室町時代の遺構

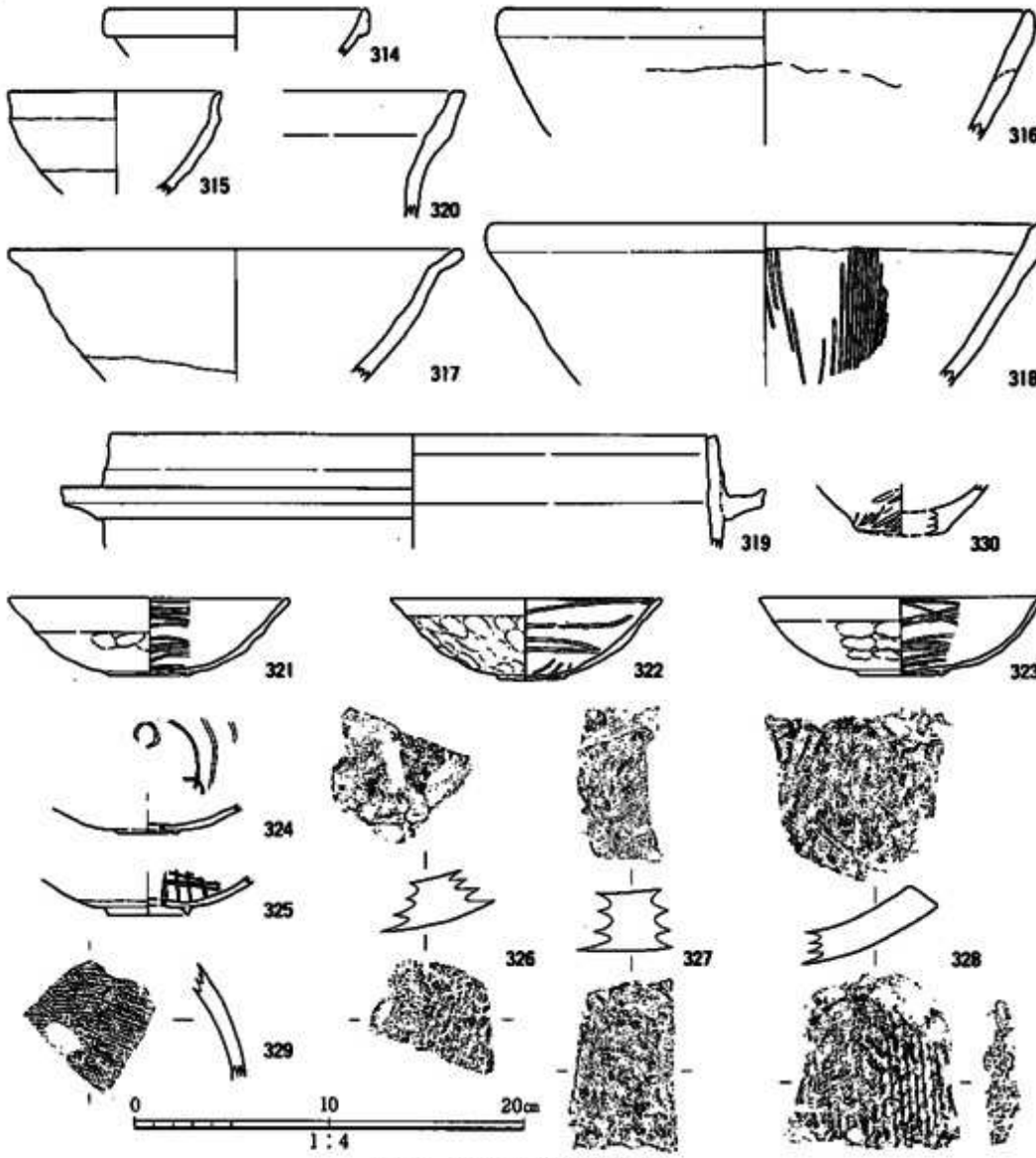


図87　Ⅰ区SD301出土の遺物

近くでわずかに開く瀬戸美濃焼天目碗である。黒褐色釉がかかる。317は唐津焼碗である。内外面には浅い黄色の釉薬がかけられているが、外面の下半部は露胎である。316は口縁部が体部から大きく開いた土師器鉢である。体部の外面を斜めおよび横方向のヘラケズリで調整している。318・320は瓦質土器である。318は鉢で体部の内面には粗い擂り目がある。319は口縁部が頸部から直立する土師器釜である。頸部にはやや上向きの鍔を貼付けている。320は鍋の口縁である。321～325は瓦器椀で、体部内面に施された暗文は粗い。324・325

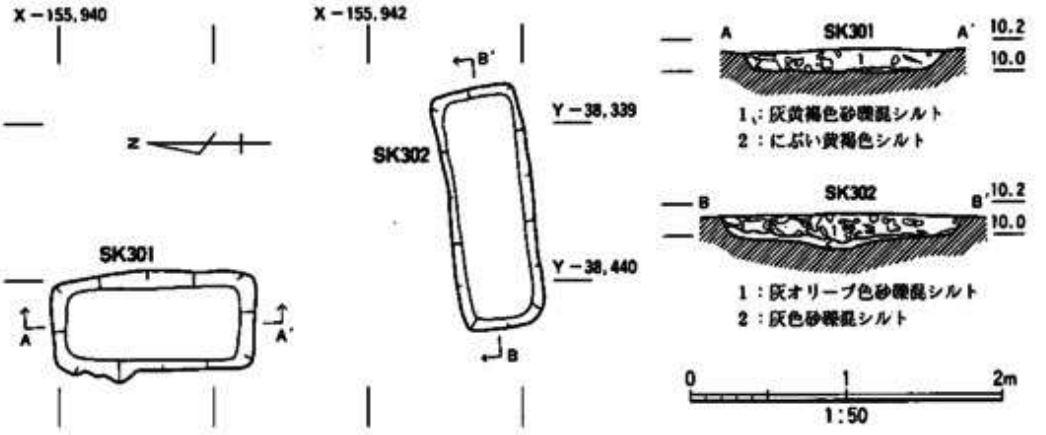


図88　Ⅰ区SK301とSK302

は瓦器椀の底部片で、高台の径は3.3～4.2cmである。見込の暗文は324が螺旋状で、325は格子状に施している。329は外面に細筋の縄席文タタキメが施された陶質土器と思われる壺の体部片である。内面はていねいなナデ調整が施されている。330は古式土師器甕の底部である。粗い平行タタキメが残る。326～328は外面に粗い縄目が残る瓦片である。

以上の遺物のうち、315・317は17世紀のもの、318～320は15～16世紀のもの、それ以外はおおむね13世紀代に属するものと思われる。したがって13世紀代の遺物は溝が掘られた時期の上限を、17世紀代の遺物は溝が機能していた時間の下限を示すものと考えられる。

ii)土壙

SK301(図86・88、図版18)

Ⅰ区の北部に位置する土壙である。長原3層下面で検出した。平面形は長方形で、幅0.6m、長さ1.3m、深さは0.2mあり、内部は長原13A層の黄褐色(10YR5／8)粘土質シルトをブロック状に含む灰黄褐色(5YR6／1)砂礫混りシルトで埋戻されていた。土壙の主軸は南北正方位で、SK302の主軸に直交しており、形態や埋土から土壙墓の可能性がある。遺物は出土しなかった。なお、本遺構の北西には平面形がやや不整形な浅い土壙群があるが、両者の関係については不明である。

SK302(図86・88、図版18)

SK301の南側に位置する土壙である。長原3層下面で検出した。平面形は長方形で、幅0.5m、長さ1.5m、深さは0.2mあり、長原13A層をブロック状に含む灰オリーブ色(5Y6／2)砂礫混りシルト、灰色(5YR6／1)砂礫混りシルトで埋戻されていた。土壙の主軸は東西正方位で、遺物は出土しなかったが形態や埋土からみてSK301と同じく土壙墓の可能性がある。

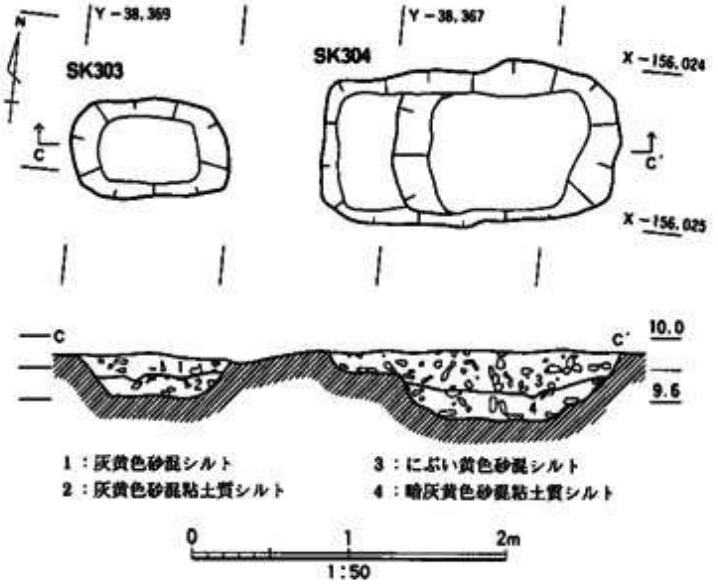


図89　Ⅰ区SK303とSK304

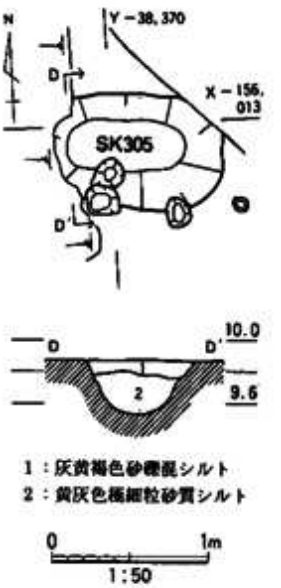


図90　Ⅰ区SK305

SK303(図86・89、図版18)

Ⅰ区のC区南端に位置する幅0.6m、長さ約1.0m、深さ0.3mの隅丸長方形の土壙である。長原3層下面で検出した。内部は長原10・11層のブロックを含む灰黄色(2.5Y7／2)砂混りシルト、灰黄色(2.5YR6／2)砂混り粘土質シルトで埋戻されている。出土遺物はないが土壙墓の可能性がある。

SK304(図86・89、図版18)

SK303の東方に直列する幅0.9m、長さ1.9m、深さ0.5mで、平面形が隅丸長方形の土壙である。長原3層下面で検出した。内部は長原10・11層のブロックを含むにぶい黄色(2.5YR6／3)砂混りシルト、暗灰黄色(2.5YR5／2)砂混りシルトで埋戻されていた。遺物は出土しなかったが、主軸がSK303とともに東西正方位であり、埋土も似ていることから土壙墓の可能性がある。

SK305(図86・90)

SD301の東岸に位置する短径0.70m、長径1.10m、深さ0.35mで、平面形が楕円形の土壙である。長原3層下面で検出した。内部は酸化第2鉄やマンガン粒を含む黄灰色(2.5Y5／1)砂礫混りシルト、灰黄褐色(10YR6／2)極細粒砂質シルトで埋戻されていた。

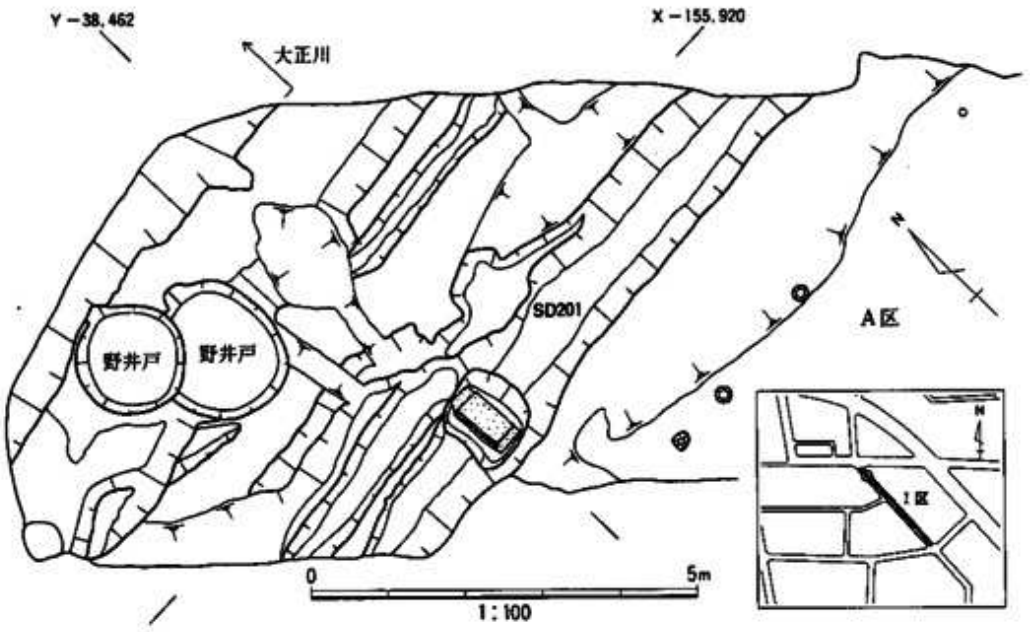


図91　I区江戸時代の遺構

7)江戸時代の遺構と遺物

i)溝

SD201(図91)

I区のA区北端に位置する幅1m前後の東西方向の溝で、長原2層下面の遺構である。断面観察によって何度か掘直されていることが確認された。溝内のやや西寄りには幅0.9m、長さ約1.0mで、不整形な土壙内に、幅0.4m、長さ約1.0mの花崗岩の板石を敷き、周囲に板を立てた施設があった。溝内には下から灰色(7.5Y6／1)～灰白色(10Y7／1)砂礫混り粘土が堆積しており、18世紀後半代の伊万里焼や丸・平瓦片が出土した。溝は方向や位置からみて江戸時代以降に坪境に掘られた用水路と考えられる。

8)小結

検出した遺構のうち、古川辺川(NR1201)・開析谷・SD902・SD801・SD701などは過去の調査で見つかっていた遺構につながるものである。SD701は埋土のようすと方向からみて83－76次調査のSD01と同一の溝のようである。かつては一辺60m強の方形区画を想定していた[大阪市文化財協会1994]が、南西辺が延びて二股に分かれることによって区画としての存在が疑問となる。

新たに見つかった遺構はSX801とした弥生時代中期の焼土塊である。焼土の質がきめ細かいことや、一部に平らな面があることから鋳型の可能性がある。しかし、このほかに直接鋳造作業を裏付ける材料は見つからなかった。室町時代の土壙SK301～304は方位を意識して長方形に掘られ、人為的に埋められていることから、意図的に作られた土壙といえる。土壙墓の可能性がある。

遺物は長原12・13層や開析谷から多量の石器遺物が出土した。特に、開析谷の長原9層からは、調査面積が狭いにもかかわらず石鏃やクサビに係わる石片が多く出土している。谷の斜面に沿って長原式土器と共に見つかったことから、縄文時代晩期のまとまった石器資料として重要である。

第Ⅲ章　まとめ

本年度の調査は長原・瓜破遺跡の4地区で行った。そのうち本報告書で取上げた3地区の調査についてまとめておく。

1)瓜破遺跡東南地区

地形的には南北に延びる「馬池谷」[京嶋覚1992]の西岸で、瓜破台地の東端に当る。地区の大部分をカバーする調査区を設定したにもかかわらず、古代にさかのぼる遺構やそれに伴う遺物はほとんど検出されなかった。地山の標高は7世紀代の建物群が造営された西部はTP+13.0m前後であるのに対し、Ⅶ区の東端ではTP+11.0mとなり、東側の谷に向って低くなってゆくことがわかる。つまり、7世紀代においては低い場所に建物はなく、耕作地が拡がっていたと考えられる。耕作は長原6層段階の作土が確認できたため飛鳥時代には始まっていたとわかるが、それに伴うはずの水路は今のところ見つかっていない。

2)長原遺跡中央地区

長原6B層段階の水田を検出した。水路を伴う畦畔は南北、東西方向をとる。これらは長原6A層準の水成層で埋没しており、上面において人の足跡などの耕作当時の状況を生々しく保存していた。飛鳥時代の水田経営を知る資料である。

3)長原遺跡東南地区

旧石器時代では古川辺川と石器遺物を検出した。古川辺川は過去の調査から流れの軌跡がある程度復元されており[趙哲済・大阪市石器研究会1994]、今回もそれを裏付ける場所で流れを横断するかたちで検出した。さらにその南岸で剥片を中心とした石器集中部が見つかったことは、長原遺跡東南地区での旧石器製作の場の範囲を考える上で重要である。88−69次調査で検出した石器集中部LC1304[大阪市文化財協会1995]は南西約10mの位置にあり、これらの石器集中部は同じ時期に形成された可能性が高い。

縄文時代では明確な遺構は見つからなかった。遺物では開析谷内の長原９層から出土した縄文時代晩期の長原式土器と石器が注目される。長原式土器は大半が生駒西麓産の土で作られていた。重量の割合は生駒西麓産が約85％、それ以外の白っぽい胎土のものが約15％であった。これは1987年に調査した開析谷内の長原式土器の割合と一致する[大阪市文化財協会1994]。

石器遺物はすべてサヌカイト製である。石鏃・石錐などの定形化した製品類を除いて圧倒的な量を占めるのがクサビに関する資料である。クサビは１方向を使用したものと２方向を使用したものとがある。２方向使用のばあいはほぼ直交する方向を加撃しており、最初から使いやすいように四角い板状の素材が用意されていたと考えられる。使用中にクサビからはじけた剥片も、背面側に１方向使用・２方向使用の痕跡を残すものがある。石鏃はほとんどが未製品、あるいは欠損品であった。特に未製品は製作工程が復元できる良好な資料である。さらに、石鏃の素材については通常の剥片取得と異なる方法を用いて剥離されている可能性がある。細部調整に切られている素材の剥離面の観察から、それらがもとは点状打面から割取られた薄い平らな剥片であったことがわかる。つまり両極打法的な手段によって割取られた剥片といえる。これは大多数を占めるクサビに関係する資料の存在と切り離せない事実である。本稿でクサビあるいはクサビからはじけた剥片と分類したものが、薄い平らな素材を得るための石核および割りくずであったならば、長原遺跡の縄文時代晩期における剥片生産技術の解明に対してまとまった資料を提供することとなろう。ただし、ここではその可能性を指摘するにとどめる。

別　　表

別表1　遺物一覧（陶磁器・土器・埴輪など）

口径・底径は復元値、
器高は現存値を示す

番号	地　区	区	層位・遺構	種　類	器　形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備　考
1	瓜破遺跡東南地区	V	2層	青磁	碗	15.0	2.3	－	竜泉窯系
2	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	3層	白磁	碗	16.0	3.5	－	
3	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	3層	青磁	碗	17.0	3.0	－	
4	瓜破遺跡東南地区	V	4層	青磁	碗	16.8	2.4	－	
5	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	2層	伊万里焼	染付碗	9.8	4.8	－	
6	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	4層	高麗青磁	盞	7.5	5.0	－	
7	瓜破遺跡東南地区	V	4層	白磁	碗	15.0	2.0	－	
8	瓜破遺跡東南地区	V	2層	丹波焼	擂鉢	33.4	3.8	－	
9	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	2層	土師器	土風炉	17.3	5.7	－	
10	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	3層	瓦質土器	三足釜(足部)	－	－	－	足の直径2.2cm
11	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	3層	瓦器	椀	15.9	3.3	－	
12	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	3層	瓦器	椀	16.6	3.0	－	
13	瓜破遺跡東南地区	V	4層	瓦器	椀(底部)	－	1.9	4.0	
14	瓜破遺跡東南地区	V	4層	土師器	皿	12.0	2.9	－	
15	瓜破遺跡東南地区	V	4層	土師器	小皿	7.2	1.4	－	
16	瓜破遺跡東南地区	V	4層	土師器	小皿	6.4	1.2	－	
17	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	3層	瓦器	小皿	8.4	2.0	－	
18	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	6層	須恵器	杯蓋	8.0	1.5	－	飛鳥Ⅱ期
19	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	6層	須恵器	杯身	10.0	1.7	－	TK217型式
20	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	6層	須恵器	杯身	9.7	1.2	－	TK217型式
21	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	3層	須恵器	杯身	－	3.0	－	TK209型式
22	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	7層	須恵器	杯身	11.4	3.2	－	TK23型式
23	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	4層	須恵器	甕(口縁部)	23.0	2.7	－	
24	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	3層	須恵器	把手付椀	10.4	4.2	－	TK23～47型式
25	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	7層	須恵器	短頸壺(肩部)	刺12.2	5.5	－	TK43型式
26	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	7層	須恵器	高杯形器台(杯部)	－	3.2	－	TK43型式
27	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	4層	須恵器	高杯(脚部)	－	4.5		TK47型式
28	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	7層	須恵器	無蓋高杯(脚部)	－	10.2	8.7	TK10型式
29	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	6層	土師器	高杯(脚部)	－	7.0	－	
30	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	2層	土師器	把手付鍋(把手)	－	－	－	
31	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	6層	土師器	甑(底部)	－	－	－	
32	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	4層	埴輪	円筒	－	16.0	14.0	川西編年Ⅴ期
33	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	4層	埴輪	人物(腕)	－	－	－	
34	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	2層	瓦	平	－	－	－	
35	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	3層	鉄	鏃	－	－	－	
									36～39は別表2参照
40	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SK801	弥生土器	壺(底部)	－	4.7	9.3	
41	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	SK601	須恵器	甕(肩部)	－	5.0	－	
42	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	SD601	須恵器	無蓋高杯(脚部)	－	1.1	9.2	飛鳥Ⅴ期
43	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	SD601	須恵器	無蓋高杯(脚部)	－	2.7	10.0	飛鳥Ⅴ期
44	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SK401	須恵器	壺(口頸部)	15.8	4.0	－	ON46型式
45	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SK401	須恵器	甕(体部)	刺12.1	7.1	－	ON46型式・当て具痕
46	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD404	須恵器	杯蓋	－	4.0	－	TK23～47型式
47	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD404	須恵器	杯蓋	12.3	3.2	－	TK23～47型式
48	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD404	須恵器	高杯(脚部)	－	6.2	10.4	TK23～47型式
49	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD404	須恵器	高杯(脚部)	－	5.0	8.2	TK23～47型式
50	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	SD301	瓦質土器	甕(口縁部)	23.6	4.5	－	

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
51	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD302	土師器	甑(把手)	−	−	−	
52	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	SD202	唐津焼	皿(底部)	−	2.1	4.0	目痕・高台内に墨書
53	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	SD202	唐津焼	碗(底部)	−	2.6	4.5	
54	瓜破遺跡東南地区	Ⅳ	SD202	白磁	皿(底部)	−	0.8	6.6	
55	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	青花	壺	−	−	−	
56	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	伊万里焼	染付碗	−	1.9	4.9	
57	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	唐津焼	皿	−	1.5	4.6	内面に目痕
58	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	白磁	碗	−	2.0	4.7	
59	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	弥生土器	壺(頸部)	−	7.2	−	写真6
60	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	木製品	樋	−	−	−	
61	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SD203	鉄	釘	−	−	−	木樋60の釘
62	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SE211	伊万里焼	染付碗	10.8	4.5	−	
63	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SE211	京焼	碗	−	3.3	4.6	
64	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SE211	伊万里焼	染付碗	−	3.0	3.6	
65	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	SE211	京焼	碗	9.5	5.5	5.3	
66	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4A層	土師器	小皿	8.8	1.4	−	
67	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	土師器	小皿	9.2	1.6	−	
68	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	土師器	皿	11.4	2.2	−	
69	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	土師器	皿	13.8	3.7	−	
70	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4A層	土師器	小皿	9.8	1.9	−	
71	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	土師器	小皿	9.6	1.6	−	
72	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	土師器	皿	12.4	2.2	−	
73	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	土師器	椀	15.0	3.0	−	
74	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	瓦器	椀	14.1	5.0	−	
75	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	瓦器	椀(底部)	−	2.0	5.0	
76	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Bi層	瓦器	椀(底部)	−	1.4	5.6	
77	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4Biii層	黒色土器	椀(底部)	−	1.4	5.0	
78	長原遺跡中央地区	Ⅰ	4A層	土師器	羽釜	28.4	5.8	−	
79	長原遺跡中央地区	Ⅰ	6Bi層	土師器	甑(把手)	−	−	−	
80	長原遺跡中央地区	Ⅰ	6Bi層	須恵器	杯蓋	14.0	4.6	−	TK10型式
81	長原遺跡中央地区	Ⅰ	6Bi層	須恵器	杯身	10.2	3.2	−	TK47型式
82	長原遺跡中央地区	Ⅰ	6Bi層	埴輪	朝顔(肩部)	−	4.7	−	
83	長原遺跡中央地区	Ⅰ	6Bi層	埴輪	円筒	−	7.0	−	
84	長原遺跡中央地区	Ⅰ	SD701	土師器	甕	19.7	21.5	−	
85	長原遺跡中央地区	Ⅰ	SK701	須恵器	杯蓋	13.6	4.5	−	TK209型式・当て具痕
86	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	白磁	碗	13.2	2.5	−	
87	長原遺跡東南地区	Ⅱ	4層	白磁	碗	13.6	2.3	−	
88	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	皿	8.6	1.0	−	
89	長原遺跡東南地区	Ⅰ	3層	土師器	皿	10.0	1.4	−	
90	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	瓦器	椀	8.6	2.6	−	
91	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	皿	10.0	2.5	−	
92	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	皿	10.2	2.0	−	
93	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	瓦器	皿	9.2	1.6	−	
94	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	皿	13.8	2.4	−	
95	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	椀(底部)	−	1.6	7.0	
96	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	黒色土器	椀(底部)	−	1.4	7.0	
97	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	甕	14.0	3.5	−	
98	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	甕	19.4	3.5	−	

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
99	長原遺跡東南地区	Ⅱ	4層	土師質	土錘	－	8.5	－	工字形・厚さ3.5cm
100	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	土師器	羽釜	15.5	5.5	－	
101	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	瓦質土器	羽釜	18.0	4.2	－	
102	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	須恵器	大型盤の蓋	32.0	1.5	－	
103	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	須恵器	杯蓋	17.6	1.4	－	
104	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	須恵器	杯蓋	13.0	1.3	－	
105	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	須恵器	杯蓋	13.6	4.9	－	TK10型式
106	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	須恵器	杯蓋	15.2	3.0	－	TK209型式
107	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	須恵器	杯蓋	13.8	4.4	－	TK10～MT85型式
108	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	須恵器	杯蓋	14.0	3.9	－	TK10～MT85型式
109	長原遺跡東南地区	Ⅱ	7層	須恵器	杯蓋	14.8	3.8	－	TK10型式
110	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	須恵器	杯身(底部)	－	1.5	9.8	
111	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	須恵器	短頸壺の蓋	8.0	3.5	－	TK217型式・ヘラ記号
112	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	須恵器	杯身	12.7	2.4	－	TK209型式
113	長原遺跡東南地区	Ⅱ	7層	須恵器	杯身	11.0	3.5	－	TK10型式
114	長原遺跡東南地区	Ⅰ	7B層	土師器	高杯(杯部)	－	1.5	－	
115	長原遺跡東南地区	Ⅱ	7層	土師器	杯	8.0	2.5	－	
116	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	土師器	杯	10.0	2.9	－	飛鳥Ⅱ期
117	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	土師器	盤	19.4	1.9	－	平城京Ⅲ期
118	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	古式土師器	壺(頸部)	－	3.3	－	
119	長原遺跡東南地区	Ⅰ	7B層	土師器	甕	16.0	4.8	－	
120	長原遺跡東南地区	Ⅰ	3層	須恵器	甕(体部)	－	3.5	－	
121	長原遺跡東南地区	Ⅰ	2層	陶質土器	甕(体部)	－	3.7	－	縄席文タタキメ
									122～160は別表2参照
161	長原遺跡東南地区	Ⅰ	NR1201	縄文土器	深鉢	－	4.6	－	滋賀里Ⅳ式
162	長原遺跡東南地区	Ⅰ	NR1201	縄文土器	(頸部)	－	5.0	－	
163	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	5.8	－	生駒西麓産
164	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	5.3	－	生駒西麓産
165	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	2.0	－	生駒西麓産
166	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	2.7	－	生駒西麓産
167	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	2.7	－	生駒西麓産
168	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	5.7	－	生駒西麓産
169	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	4.0	－	生駒西麓産
170	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	3.2	－	生駒西麓産
171	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	1.6	－	生駒西麓産
172	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	1.7	－	生駒西麓産
173	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	2.8	－	
174	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢	－	3.3	－	生駒西麓産
175	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	5.3	－	生駒西麓産
176	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	3.4	－	生駒西麓産
177	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	3.5	－	生駒西麓産
178	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	4.8	－	生駒西麓産
179	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	3.0	－	生駒西麓産
180	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	3.1	－	生駒西麓産
181	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	3.7	－	生駒西麓産
182	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	(体部)	－	3.4	－	生駒西麓産
183	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	浅鉢	－	4.1	－	生駒西麓産
184	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	浅鉢	－	5.9	－	生駒西麓産

番号	地区	区	層位・遺構	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
185	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢(底部)	−	2.5	6.7	
186	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢(底部)	−	1.9	6.1	生駒西麓産
187	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢(底部)	−	1.7	5.0	生駒西麓産
188	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢(底部)	−	2.0	5.0	生駒西麓産
189	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷	長原式土器	深鉢(底部)	−	5.6	6.0	生駒西麓産
									190～302は別表2参照
303	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD702	須恵器	杯蓋	15.8	4.8	−	TK10型式・当て具痕
304	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD703	土師器	高杯	−	1.4	−	
305	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD703	須恵器	杯身	13.5	4.3	−	TK10型式
306	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SE701	土師器	高杯(杯部)	−	1.4	−	
307	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SE701	須恵器	有蓋高杯の蓋	−	3.1	−	TK10～MT85・ヘラ記号
308	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SE701	古式土師器	壺(頸部)	−	6.0	−	
309	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SE701	土師器	甕(口縁部)	−	3.1	−	
310	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SP701	古式土師器	甕	15.7	28.6	−	布留式
311	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SK701	古式土師器	高杯	−	7.2	−	布留式
312	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SK701	古式土師器	甕(底部)	−	2.4	3.8	庄内式
313	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SK701	古式土師器	丸底壺	7.8	9.2	−	布留式
314	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	白磁	碗	13.2	2.3	−	
315	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瀬戸美濃焼	天目碗	11.0	5.2	−	
316	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	土師器	鉢	27.0	6.5	−	
317	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	唐津焼	碗	23.2	6.8	−	
318	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦質土器	鉢	28.0	8.3	−	
319	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	土師器	釜	31.2	5.3	−	
320	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦質土器	鍋	−	6.4	−	
321	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦器	椀	14.4	4.0	4.0	
322	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦器	椀	14.0	4.2	3.5	
323	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦器	椀	14.6	4.0	4.2	
324	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦器	椀(底部)	−	1.5	3.0	
325	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦器	椀(底部)	−	2.0	4.2	
326	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦		−	−	−	厚さ2.5cm
327	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦		−	−	−	厚さ3.2cm
328	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	瓦		−	−	−	厚さ1.8cm
329	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	陶質土器？	壺(体部)	−	−	−	縄席文タタキメ
330	長原遺跡東南地区	Ⅰ	SD301	古式土師器	甕？(底部)	−	2.5	4.8	

別表2　遺物一覧（石器遺物）　　（　）は欠損品を示す

番号	地区	区	層位・遺構	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石器登録番号
36	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	3層	サヌカイト	円基無茎式石鏃	4.10	1.78	0.62	3.48	90CI 61
37	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	2層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(1.65)	(1.05)	0.30	(0.39)	90CG26
38	瓜破遺跡東南地区	Ⅶ	2層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.00	1.59	0.35	0.80	90CI 24
39	瓜破遺跡東南地区	Ⅲ	3層	サヌカイト	平基無茎式石鏃未製品	2.15	1.60	0.45	1.18	90CG48
122	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	サヌカイト	凸基有茎式石鏃	2.08	0.90	0.21	0.55	90CC68
123	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	サヌカイト	石鏃未製品	2.58	1.84	0.35	1.58	90CC161
124	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	サヌカイト	2次加工がある剥片	2.90	2.90	0.71	6.35	90CC185
125	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	サヌカイト	クサビ	3.14	2.89	1.35	11.47	90CC161
126	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	サヌカイト	クサビ	3.45	3.90	0.80	12.01	90CC159
127	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	サヌカイト	クサビ接合資料	2.59	1.74	0.99	5.01	90CC161
128	長原遺跡東南地区	Ⅰ	6層	サヌカイト	クサビ	4.29	3.04	1.32	19.46	90CC161
129	長原遺跡東南地区	Ⅰ	4層	サヌカイト	ナイフ形石器	(3.94)	(2.42)	1.02	(8.21)	90CC179
130	長原遺跡東南地区	Ⅰ	8層	サヌカイト	凸基有茎式石鏃	(3.80)	1.25	0.68	(2.54)	90CC15
131	長原遺跡東南地区	Ⅰ	9層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(2.40)	(1.70)	0.38	(0.84)	90CC186
132	長原遺跡東南地区	Ⅰ	9層	サヌカイト	クサビ剥片	3.20	2.05	0.85	4.22	90CC222
133	長原遺跡東南地区	Ⅰ	10・11層	サヌカイト	クサビ接合資料	2.64	2.75	1.20	9.67	90CC216
127+133	長原遺跡東南地区	Ⅰ	－	サヌカイト	クサビ接合資料	2.64	4.16	1.00	14.68	
134	長原遺跡東南地区	Ⅰ	9層	泥岩	砥石	(13.15)	7.04	2.84	(313.08)	90CC221
135	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	ナイフ形石器	(3.85)	1.60	0.55	(3.69)	90CC225
136	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	調整剥片	1.98	2.43	0.48	2.56	90CC238
137	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	調整剥片	1.75	1.49	0.39	0.76	90CC99
138	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	調整剥片	2.68	2.10	0.36	1.79	90CC237
139	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	調整剥片	1.15	1.60	0.44	0.68	90CC236
140	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	調整剥片	0.63	1.04	0.11	0.08	90CC91
141	長原遺跡東南地区	Ⅰ	13A層	サヌカイト	石核？	2.89	4.39	1.41	9.97	90CC234
142	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(1.85)	(1.50)	0.34	(0.65)	90CC100
143	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	1.55	1.40	0.25	(0.32)	90CC98
144	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	1.78	1.53	0.33	0.42	90CC93
145	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.00	(1.50)	0.35	(0.68)	90CC81
146	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.84	(1.12)	0.24	(0.49)	90CC224
147	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(2.05)	1.88	0.22	(0.56)	90CC102
148	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	(2.90)	(2.20)	0.40	(1.67)	90CC82
149	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	3.00	2.40	0.35	1.65	90CC92
150	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	2.80	2.12	0.45	(1.59)	90CC223
151	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	調整剥片	1.05	1.92	0.20	0.51	90CC227
152	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	調整剥片	1.48	2.58	0.40	1.33	90CC229
153	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	調整剥片	1.76	2.82	0.32	1.62	90CC101
154	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	サヌカイト	剥片	2.34	2.44	0.41	2.32	90CC90
155	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	調整剥片	1.65	3.64	0.62	2.51	90CC231
156	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	縦長剥片	2.10	1.96	0.38	0.89	90CC232
157	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	調整剥片接合資料	1.76	1.56	0.44	0.76	90CC226
158	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	調整剥片接合資料	1.42	0.40	0.20	0.08	90CC230
159	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12B層	サヌカイト	調整剥片接合資料	2.09	2.59	0.47	1.89	90CC228
160	長原遺跡東南地区	Ⅰ	12A層	砂岩	叩き石	5.00	8.47	(2.53)	(90.78)	90CC278
159+158+157	長原遺跡東南地区	Ⅰ	－	サヌカイト	調整剥片接合資料	－	－	－	2.73	
159+158	長原遺跡東南地区	Ⅰ	－	サヌカイト	調整剥片接合資料	－	－	－	1.97	
190	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	1.90	(1.40)	0.20	(0.41)	90CN243

番号	地区	区	層位・遺構	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石器登録番号
191	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	平基無茎式石鏃	1.87	1.50	0.43	1.12	90CN242
192	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃	1.83	1.15	0.29	0.42	90CN241
193	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃未製品	(1.65)	1.81	0.25	(0.58)	90CN240
194	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石鏃未製品	(2.40)	(1.72)	(0.30)	(1.11)	90CN131
195	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	凹基無茎式石鏃未製品	(1.93)	1.50	(0.23)	(0.41)	90CN218
196	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石鏃未製品	(1.63)	1.18	(0.38)	(0.64)	90CN122
197	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	1.45	1.87	0.23	0.33	90CN235
198	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	1.85	2.07	0.39	(1.76)	90CN141
199	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	2.27	2.04	0.57	2.77	90CN72
200	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石鏃未製品	2.17	1.46	0.33	1.11	90CN90
201	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	2.38	1.55	0.55	2.23	90CN215
202	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	2.20	1.35	0.40	1.16	90CN113
203	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	1.77	1.28	0.28	0.89	90CN200
204	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石鏃未製品	(1.10)	1.50	0.30	(0.53)	90CN127
205	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	2.05	1.82	0.13	0.54	90CN185
206	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	2次加工がある剥片	1.84	2.62	0.41	1.93	90CN157
207	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石錐	(3.00)	1.65	0.75	(2.52)	90CN144
208	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石錐	(2.23)	1.23	0.55	(1.21)	90CN231
209	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	石錐未製品	3.53	1.08	0.75	2.13	90CN152
210	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	凸基有茎式石鏃	4.37	1.02	0.76	3.59	90CN239
211	長原遺跡東南地区	Ⅱ	4層	サヌカイト	石錐	5.55	1.10	0.90	4.34	90CN6
212	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	直刃削器	7.47	3.40	0.93	29.13	90CN238
213	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.32	1.91	0.59	3.92	90CN146
214	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.29	4.50	1.58	16.93	90CN169
215	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.19	2.65	0.70	3.85	90CN147
216	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.28	1.05	0.67	2.02	90CN249
217	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	4.97	4.32	3.23	78.12	90CN154
218	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ接合資料	2.74	1.63	0.78	2.92	90CN145
219	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ接合資料	1.98	1.14	0.94	1.12	90CN186
218+219	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ接合資料	2.74	2.62	0.96	2.92	
220	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.62	2.17	1.05	6.45	90CN149
221	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.78	2.14	0.74	2.69	90CN158
222	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.45	1.37	0.59	1.45	90CN78
223	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.02	1.70	0.56	1.84	90CN212
224	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	1.77	0.79	0.31	0.40	90CN201
225	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.34	2.26	0.71	4.33	90CN174
226	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	1.11	2.48	0.68	1.63	90CN229
227	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.55	2.75	0.84	4.67	90CN167
228	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.54	1.31	0.38	0.65	90CN204
229	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.92	1.01	0.53	1.39	90CN182
230	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	5.02	1.84	2.89	23.36	90CN156
231	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.55	1.79	1.00	4.96	90CN172
232	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.30	0.78	0.63	1.16	90CN76
233	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.96	2.46	0.68	6.39	90CN143
234	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.68	2.18	0.77	3.81	90CN26
235	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	1.89	3.18	0.86	5.70	90CN23
236	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.62	2.61	0.50	3.76	90CN74
237	長原遺跡東南地区	Ⅱ	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.16	3.94	0.80	6.51	90CN151

番号	地区	区	層位・遺構	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石器登録番号
238	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.82	2.01	0.96	4.15	90CN170
239	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.34	3.09	0.93	8.18	90CN155
240	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.04	2.36	1.05	5.60	90CN178
241	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	4.08	3.11	1.46	10.87	90CN173
242	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	6.08	2.05	1.16	11.05	90CN153
243	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.57	1.25	0.30	0.55	90CN28
244	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.62	1.92	0.50	1.43	90CN137
245	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.07	2.26	0.58	2.00	90CN245
246	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.78	1.47	0.28	0.58	90CN115
247	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.12	1.41	0.22	0.67	90CN89
248	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.22	2.22	0.53	2.02	90CN166
249	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.70	1.69	0.40	2.03	90CN181
250	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	3.27	1.35	0.71	2.25	90CN168
251	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.55	1.32	0.19	0.30	90CN234
252	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.70	1.80	0.46	1.61	90CN175
253	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.18	1.29	0.42	0.96	90CN213
254	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.79	1.60	0.45	1.81	90CN159
255	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.11	1.33	0.20	0.25	90CN191
256	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.10	1.56	0.23	0.32	90CN92
257	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.13	1.35	0.15	0.24	90CN68
258	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.46	1.15	0.16	0.27	90CN65
259	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.42	1.50	0.38	1.07	90CN199
260	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.43	1.55	0.18	0.34	90CN223
261	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.70	1.36	0.22	0.40	90CN61
262	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.15	1.68	0.29	0.48	90CN140
263	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.22	2.24	0.28	1.19	90CN138
264	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.37	1.97	0.23	0.57	90CN32
265	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.25	1.23	0.19	0.61	90CN51
266	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.62	2.19	0.22	0.84	90CN184
267	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.69	2.18	0.25	1.04	90CN60
268	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	3.11	2.74	0.72	5.34	90CN164
269	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.10	1.61	0.28	0.73	90CN55
270	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.82	2.23	0.20	0.64	90CN211
271	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.12	1.44	0.18	0.29	90CN33
272	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.32	0.84	0.24	0.24	90CN225
273	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	0.73	1.56	0.18	0.17	90CN103
274	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.75	0.92	0.38	0.51	90CN187
275	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.37	3.19	0.32	1.54	90CN183
276	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.67	1.27	0.40	0.85	90CN210
277	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.33	1.55	0.13	0.36	90CN80
278	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	3.73	3.11	0.72	6.00	90CN163
279	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.44	2.30	0.50	2.32	90CN148
280	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.25	1.49	0.20	0.39	90CN125
281	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.32	1.28	0.26	0.51	90CN30
282	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.54	1.14	0.20	0.35	90CN116
283	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	0.74	1.42	0.13	0.11	90CN67
284	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.10	0.98	0.39	0.65	90CN59
285	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.09	0.90	0.43	0.63	90CN205

番号	地区	区	層位・遺構	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石器登録番号
286	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.90	0.99	0.20	0.26	90CN189
287	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.04	1.43	0.17	0.15	90CN66
288	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	0.88	1.48	0.16	0.21	90CN110
289	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.56	1.02	0.25	0.68	90CN228
290	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.64	2.27	0.19	0.67	90CN29
291	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.70	1.71	0.21	0.94	90CN222
292	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.98	1.89	0.30	0.88	90CN195
293	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	2.57	1.60	0.23	1.04	90CN198
294	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.88	2.02	0.25	0.78	90CN58
295	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ	2.70	2.50	0.84	4.41	90CN161
296	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	4.50	4.68	0.68	9.38	90CN165
297	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	調整剥片	1.40	2.26	0.34	0.85	90CN135
298	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	調整剥片	1.62	2.04	0.36	1.28	90CN132
297+298	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	調整剥片接合資料	−	−	−	2.13	
299	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.31	1.40	0.19	0.29	90CN114
300	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	クサビ剥片	1.24	1.35	0.30	0.38	90CN124
299+300	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	調整剥片接合資料	−	−	−	0.67	
301	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	調整剥片	2.80	2.48	0.67	4.22	90CN150
302	長原遺跡東南地区	II	開析谷9層	サヌカイト	調整剥片	5.67	2.79	0.66	10.48	90CN244

引 用・参 考 文 献

大阪市文化財協会1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1993、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

大阪市立東洋陶磁美術館1996、『珠玉の高麗陶磁小品展』

京嶋覚1992、「瓜破台地の考古学的環境」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

島地謙・伊東隆夫1982、『図説木材組織』地球社

趙哲済・大阪市石器研究会1994、「長原遺跡における旧石器調査の現状」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』

趙哲済1995、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された７世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』８号

あ と が き

「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」も10冊を数え、当協会の報告書作製業務もようやく軌道にのりつつある。埋蔵文化財の調査は発掘だけに止まらない。報告書を公刊し、資料を共有の財産としてはじめて成果となり、一定の評価が得られるものである。これに研究が加わって、調査がより盤石なものとなるのは言うまでもない。しかし、ほとんどの埋蔵文化財担当者が直面しているように、行政発掘にはおのずと制限がある。その中で調査し、報告書を作らねばならない。どこまで納得ゆく研究ができるか、さまざまな制約の中で担当者は常に葛藤している。一方で、報告書の刊行を待ち望む人がいることを忘れてはならない。そのためにもより早く資料を一般化する必要があろう。本書がひとつでも多くの研究の俎上にのり、そこから新たな学問研究が生まれることを願ってやまない。

（永島暉臣慎）

索　引

遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞を合わせて収録した。

M　MT85型式　48,81
O　ON46型式　20
T　TK10型式　36,47,48,50,78,79,81
TK23型式　12,14,15,24
TK43型式　15
TK47型式　12,14,24,36
TK209型式　14,37,48
TK217型式　14,48
あ　朝顔形埴輪　36
浅鉢　59
足跡　33,34,37,39,42,89
飛鳥Ⅱ　14,47
飛鳥Ⅴ　17
当て具　16,20,37,78
暗文　12,35,46,83,84
い　鋳型　87
生駒西麓産　59,90
井戸　3,4,17,32,42,79,81
伊万里焼　12,29,32,33,86
う　ウマ　47
え　円基無茎式石鏃　14
円筒埴輪　14,36
お　凹基無茎式石鏃　12,50,52,61
か　開析谷　47,57,59,61,62,86,87,90
灰釉　25
瓦器　7,12,14,18,23,24,25,33,35,46,81,83,84
カキメ　16,20,50
瓦質土器　12,24,33,46,83
鎹　14
片切彫　12
釜　83
甕　14,16,23,24,36,42,45,50,79,81,84
唐津焼　25,29,83
川西編年Ⅴ期　14
官衙　3,32
き　器台　15
京焼　32
く　杭　43,55,81
クサビ　47,48,50,59,63,65,67,68,69,72,73,87,90
け　畦畔　28,34,37,38,89
こ　洪水層　38
高麗青磁　14
古川辺川　43,54,86,89
黒色土器　33,35,46
小皿　12,14,34,35
碪　14,24,36
古式土師器　48,81,84
さ　砂岩　54
櫓　3
サヌカイト　12,14,43,47,48,50,51,52,54,90
皿　14,25,29,35,45,46
三足釜　14
し　滋賀里Ⅳ　57
七ノ坪古墳　5
刺突文　20,48
小穴群　42,78
焼土塊　42,76,78,87
庄内式　81
縄文土器　57
人物埴輪　14
す　水田　3,5,7,28,34,37,38,39,76,89
水路　32,38,89
スカシ孔　15,24
鋤溝　39
擂鉢　12
せ　青花　29,81
青磁　12,14,25
石核　52,54,65,90
石錐　47,59,61,62,90
石鏃　12,14,43,47,50,52,54,59,61,62,87,90
石鏃未製品　14,48,59,61,62,90
石器集中部　50,51,52,54,89
接合資料　54,65,73
瀬戸美濃焼　81,83
蓋　14
線刻　78

そ 染付 7,12,25,29,32,33
た 高杯 14,24,50,79,81
高廻り1・2号墳 5
叩き石 52,54
タタキメ 16,45,84
縦長剥片 52,54,62,65,68,69,71,72,73
タテハケメ 36,79
短頸壺 15,48
丹波焼 12
ち 柱穴 18,19,76
沖積層下部層 12,43
沖積層上部層 7,33,34,39
調整剥片 52,54,73
直刃削器 62
沈線 29,59
つ 杯 47,50
杯蓋 14,24,36,37,38,46,48,50,78
杯身 14,15,36,38,47,48,50,79
堤状の盛土 28
壺 16,20,29,48,79,81,84
坪境 81,86
坪境溝 39
て 泥岩 50
鉄釘 29,30
天目碗 83
と 砥石 50
陶質土器 45,84
土器埋納ピット 42
土壙 15,16,19,20,32,34,37,42,76,79,81,84,85,86,87
土壙群 5,84
土壙墓 84,85,87
土錘 46
凸基有茎式石鏃 47,50,62
把手 12,24,36,38
把手付鍋 12
把手付椀 14
土風炉 12
な ナイフ形石器 43,47,51
長原143号墳 5
長原154号墳 38
長原式土器 57,59,87,90
ね 粘土紐 14
は 羽釜 35,45,46
白磁 12,14,25,29,45,81
剥片 43,47,50,51,52,54,59,61,62,63,65,67,68,69,71,72,73,89,90
ハケメ 37,46,79,81
波状文 14,20
鉢 20
盤 29,46,47
ひ 平瓦 12,86
ふ 深鉢 57,59
蓋 46,48,81
布留式 81
へ 平基無茎式石鏃 14,61
平城京Ⅲ 48
ヘラ記号 48,81
ヘラ切り 48
ヘラケズリ 20,47,59,78,79,83
ヘラミガキ 59
ほ 墨書 25
掘立柱建物 3,5,18
ま 丸瓦 86
み 水口 38
溝 4,5,7,17,23,24,25,28,29,32,33,34,36,37,38,39,42,74,75,76,78,79,81,84,86
む 無蓋高杯 15,17
も 木樋 28,29,30,32
や 弥生土器 16,29,42
ゆ 有蓋高杯 81
ユビオサエ 35,46,47
よ 用水路 39,81,86
横大路火山灰 43
横長剥片 51,52,54,61,62,65,67,69,71,72,73
ヨコナデ 14,35,45,46
ヨコハケメ 81
ら 雷文 14
り 竜泉窯 12
流路 42,43,50,51,54,55,57,75,76
わ 椀 12,14,35,45,46,81,83,84
碗 12,14,25,29,32,45,81,83

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume X

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1990

March 1997

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building
SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SP : Pit or Posthole
NR : Natural stream
SX : Other features

CONTENTS

Preface
Explanatory notes

Chapter I Excavation of Nagahara and Uriwari Sites 1
S.1 The outline of excavations in 1990 1
1) Excavations 1
2) Procedure of publishing of this report 2
S.2 Outline and progress of research work 3
1) South-eastern sector of the Uriwari Site 3
2) Central sector of the Nagahara Site 5
3) South sector of the Nagahara Site 5
4) South-eastern sector of the Nagahara Site 5

Chapter II Results of research 7
S.1 South-eastern sector of the Uriwari Site 7
1) Stratigraphy at the Research area 7
i) Introduction 7
ii) Stratigraphy 7
2) Finds from each stratum 12
3) Features and finds of the Yayoi Period 15
i) Pit 15
4) Features and finds of the Asuka Period 16
i) Pit 16
ii) Ditch 17
5) Features and finds of the Kamakura Period 17
i) Well 17
ii) Postholes and Building 18
iii) Pits 19
iv) Ditches 23
6) Features and finds from the Muromachi to Edo Periods 24
i) Ditches 24
ii) Wells and Pits 32
7) Conclusion 32
S.2 Central sector of the Nagahara Site 33
1) Stratigraphy at the Research area 33
i) Introduction 33
ii) Stratigraphy 33
2) Finds from each stratum 34

3) Features and finds of the Kofun (Tumulus) Period 36
i) Ditch 36
ii) Pit 37
4) Features and finds of the Asuka Period 37
i) Paddy field 37
5) Conclusion 38
S.3 South-eastern sector of the Nagahara Site 39
1) Stratigraphy at the Research area 39
i) Introduction 39
ii) Stratigraphy 39
2) Finds from each stratum 45
3) Features and finds from the Late Palaeolithic to Middle Jomon Periods .. 50
i) Excavation condition of lithic remains and Stone artefacts from Nagahara Stratum 12/13A 50
ii) Stream 54
4) Features and finds from the Final Jomon to Middle Yayoi Periods 57
i) Gorge 57
ii) Finds from Gorge 59
iii) Ditches 74
iv) Others 76
5) Features and finds of the Kofun Period 78
i) Ditches 78
ii) Well and Pit 79
6) Features and finds of the Muromachi Period 81
i) Ditches 81
ii) Pit 84
7) Features and finds of the Edo Period 86
i) Ditches 86
8) Conclusion 86

Chapter III Conclusion 89
1) South-eastern sector of the Uriwari Site 89
2) Central sector of the Nagahara Site 89
3) South-eastern sector of the Nagahara Site 89

Tables 91

References and Bibliogrohy 100

Postscript and Index

English Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

Introduction: development and excavation

This report details the achievements of the excavations carried out at the Nagahara and Uriwari sites, situated in the south-eastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan, in the fiscal year of 1990 (beginning April 1st).

The Nagayoshi-Uriwari area, in which these sites are situated, is one of the few remaining locations within Osaka city in which farmland can still be found. Improvements in the main road and subway service from the City to this area has been followed by rapid residential growth. As a result of this growth, there has been an increasing demand for water and sewerage services. The sites lie within the land being rezoned to accommodate the development of these services.

Though emergency research prior to the rezoning project has been conducted since 1981, many other excavations at these sites have been carried out, almost continuously, over the last twenty years, prior to public or private development in the area. In particular, at the Nagahara site, three hundred and sixty-seven excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to 160,597 m², covering 4.5% of the whole site. This large accumulation of fieldwork has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites following a slope down to a plain, in which discoveries belonging to between the Upper Palaeolithic and the Early Modern eras, have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period.

The strata representing each period at the sites is well preserved, and research has been carried out on each layer, though all excavation areas were characteristically long and thin as they lie beneath land designated for roads. The strata have been identified according to the stratigraphical standard of the Nagahara site.

This excavation report is the tenth volume in the series and covers thirteen excavations. The total excavated area extend 3,099 m². The dates of discoveries fall between the Upper Palaeolithic and the medieval periods (spanning the 12th to 16th C. AD). The results of research are summarized as follows:

Results of previous research

The Uriwari site has been found to have been occupied between the Palaeolithic and Muromachi periods, though, one of its most important features are the remains of 7th century ***hottatebashira*** style buildings, found in the Southeastern area of the site. They are believed to have been the residences of local officiators.

The Nagahara site adjoins the eastern part of the Uriwari site and features remains from between the Palaeolithic and the Early Modern periods. Lithic-factory sites for the production of backed-blades (using sanukite from Mt. Nijo) have been found,

dating to the Palaeolithic period. These factory remains were distributed on the relatively high ground in the southeastern part of the site. A settlement and cemetery was established during the latter, or final stage, of the Jomon period, as people first became sedentary. Rice impressions on the surface of the Nagahara type pottery, well known as the latest form of Jomon period pottery, has gain a lot of attention as it demonstrates that this was the pottery of the transitional period between Jomon and Yayoi. During the Yayoi period, numerous paddy fields and irrigation works were constructed and the settlement stretched northward. Yayoi period buildings, including lithic factory and pit dwellings with water drainage, as well as numerous stone debris and incomplete tools, have also been found.

Representing the Kofun period is the Nagahara Tomb Cluster, totaling 206 tombs as of 1995. These tombs were build during the late 4th - early 6th century, and are characterized by an abundant amount of *haniwa*. The boat shaped *haniwa* found at Takamawari Tomb 2 were designated as important nation properties in 1993. The tomb builders' settlement is located in the northwest of the site. Pottery unearthed at the village site includes not only the traditional variety of the period, but also Korean pottery. This may be indicative of international exchange.

During the Asuka/Nara period the settlement was enlarged. The number of irrigation works increased, demonstrating possibly, a stabilizing life environment. Evidence of extensive flooding in the Nagahara area, resulting in a massive deposit of sand over the paddy fields, was uncovered. Despite the devastating floods, the district shows signs of redevelopment during the ninth century, and later a settlement was established during the Heian period, continuing through the Kamakura and Muromachi periods, up until the modern period.

Discoveries at the Uriwari site

Excavation was carried out in the vicinity of the 7th century official buildings, however, few features or artefacts associated with that period were found (fig. 40). Cultivation in this area commenced during the Asuka period, and later, during the medieval and early modern periods, many ditches, wells and associated features for irrigation were constructed.

Discoveries at the Nagahara site

Excavation was conducted mainly in the southeastern sector of the site. A Lower Palaeolithic site, featuring small lithic concentrations and presumed to be part of a lithic factory was found (fig. 57). A similar concentration was found 10 metres southwest of this site in 1988 and it is highly probable that these lithic clusters were made simultaneously. Although there were no Jomon period archaeological features found, on the slope of a buried valley, many lithic tools and Late Jomon Nagahara style pottery and were discovered. An analysis of pottery by mass revealed that 85 percent was produced using clay from a local source (extracted from the western foothills of

Mt Ikoma) ; the remaining 15 percent being produced with extraneous clay.

After arrowheads and awls, the most common stone tool type excavated was the *kusabi*, believed to be a stone wedge. The wedges have no regular shape and usually have striking platforms on a number of surfaces. However, several incomplete arrowhead were found which appear to have been formed from a *kusabi* flake, and brings the classification of the *kusabi* into question. It may be that some *kusabi* were actually cores used for the production of the thin flakes used for arrowhead production. If this is true this data will be useful to determine the flake production techniques employed during the final Jomon period at the Nagahara site.

A piece of burnt clay dating to the Yayoi period (SX801) was found and is considered to be part of a mold, due to its flat surface. The remains of Kofun and later periods' ditches and pits were found, but associated building features were not. It is believed that the settlement lies outside the present excavation area.

Further Reading

Aikens, C. M. and T. Higuchi,

1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer (eds),

1996 *Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory*. Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., (ed.)

1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Studies, Tokyo.

1992 *Archaeological study of Japan*. Acta Asiatica 63. The Institute of Eastern Culture.

Tsude H.,

1988 Land exploitation and stratification of society: a Case Study in Ancient Japan. *Studies in Japanese Language and Culture*, Joint Research Report No. 4, pp 107-30. Faculty of Letters, Osaka University , Japan.

1990 Chiefly lineages in Kofun-period Japan: political relations between centre and region. *Antiquity* 64, pp. 923-31.

The Osaka City Cultural Properties Association

1989-96 *Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-IX, Osaka. (With English summaries except for Vols. I-III)

The Osaka City Cultural Properties Association

1978-92 *Archaeological Reports of Nagahara sites* Vols. I-V, Osaka. (In Japanese)

報告書抄録

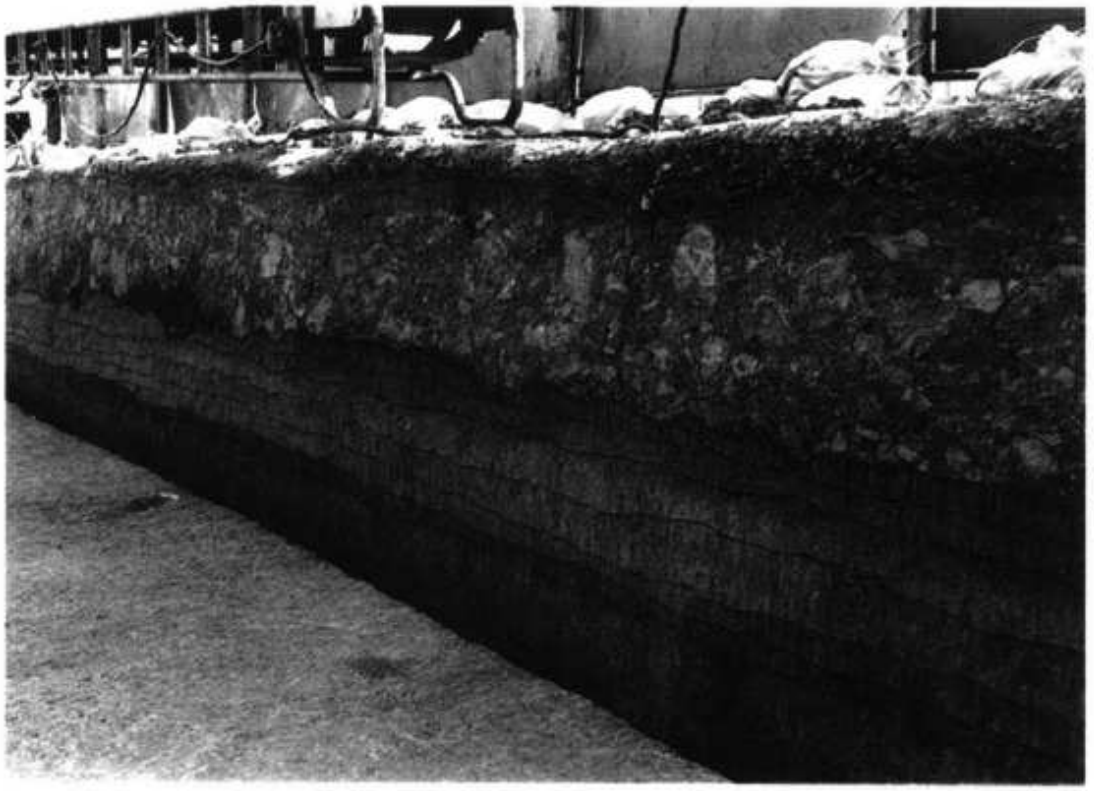
ふりがな	ながはら・うりわりいせきはっくつちょうさほうこく10
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告X
副書名	1990年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松本百合子・田中清美・久保和士・岡村勝行・永島暉臣慎
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540　大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35　TEL　06-943-6833
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長原遺跡	大阪市平野区 長吉長原3丁目 ～ 長吉川辺3丁目	27126	—	34° 35′ 40″	135° 34′ 50″	1990.4.24 ～ 1991.1.8	1,352㎡	土地区画整理事業（長吉瓜破地区）施行に伴う調査
瓜破遺跡	大阪市平野区 瓜破東8丁目	27126	—	34° 35′ 45″	135° 33′ 55″	1990.6.4 ～ 1991.2.22	1,747㎡	土地区画整理事業（長吉瓜破地区）施行に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物
長原遺跡	その他	旧石器～縄文時代中期	石器集中部？	石器・縄文土器
		縄文時代晩期～弥生時代中期	開析谷	石器・長原式土器
			溝	
			焼土塊	
	集落	古墳時代	溝	須恵器・土師器
			井戸	須恵器・土師器
			土壙	須恵器・土師器
	田畑	飛鳥時代	水田	
	集落	室町時代	溝	陶磁器・瓦器・土師器
			土壙（墓？）	
		江戸時代	溝	
瓜破遺跡	集落	弥生時代	土壙	弥生土器
		飛鳥時代	溝	須恵器
		鎌倉時代	井戸	
			掘立柱建物	
			土壙	須恵器
			溝	須恵器
		室町～江戸時代	溝	木樋・陶磁器
			井戸	陶磁器

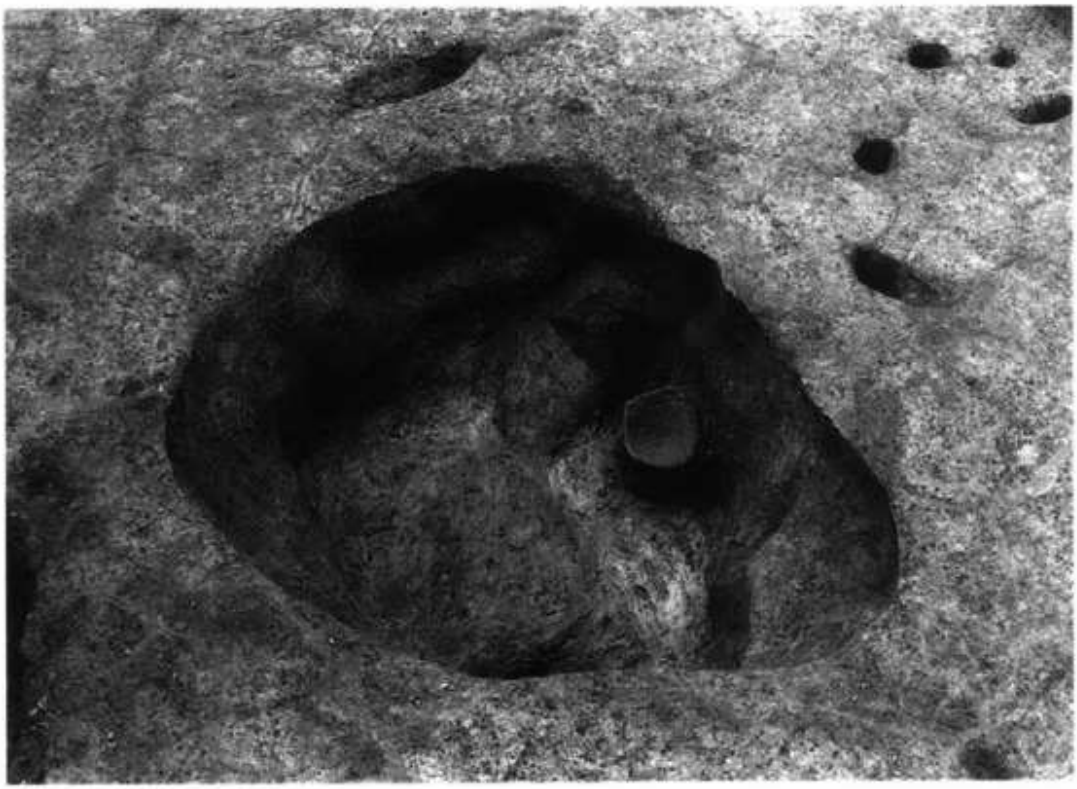
図　　版

図版一　瓜破遺跡東南地区　地層断面



Ⅴ区　東壁地層断面

Ⅶ区　南壁地層断面



Ⅷ区　SK801（南東から）

Ⅳ区　SD601（東から）

図版三　瓜破遺跡東南地区　鎌倉時代の遺構

Ⅴ区　SK402・403（南から）

Ⅷ区　SK401・SD404（東から）

Ⅷ区　SB401（北から）

図版四　瓜破遺跡東南地区　室町時代の遺構

Ⅶ区　SD302（東から）

Ⅶ区　SD302断面

Ⅲ区　SD201（東から）

Ⅳ区　SD202（北から）

Ⅶ区　SD302とSD203（西から）

Ⅶ区　SD203（東から）

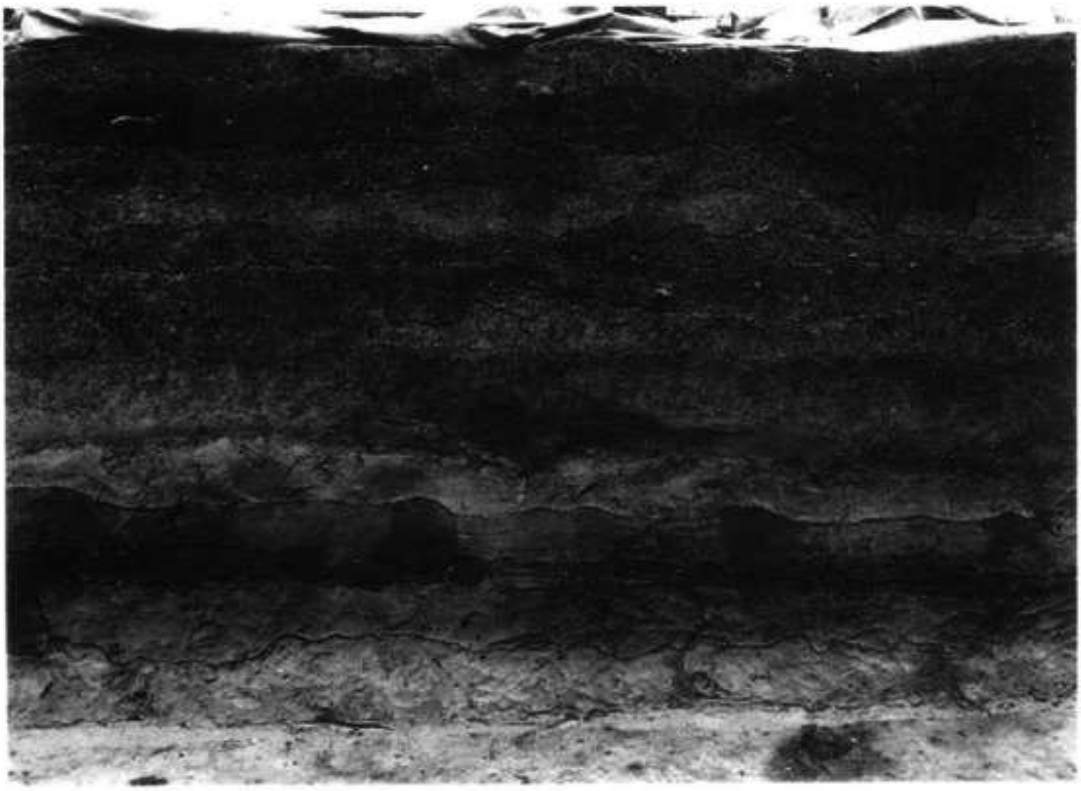
Ⅶ区　SD204・205 断面

Ⅶ区　SD203 断面

Ⅷ区　SD203内の木樋（南から）

Ⅷ区　SD203内の木樋（東から）

図版八　長原遺跡中央地区　地層断面・古墳時代の遺構



I区　東壁地層断面

I区　SK701（南から）

I区　SD701検出状態（東から）

I区　SR601・SD601（北から）

I区　SR601・SD601断面

図版一〇　長原遺跡東南地区　地層断面

I区　C地層断面（北から）

I区　A地層断面（北から）

図版一一　長原遺跡東南地区　地層断面

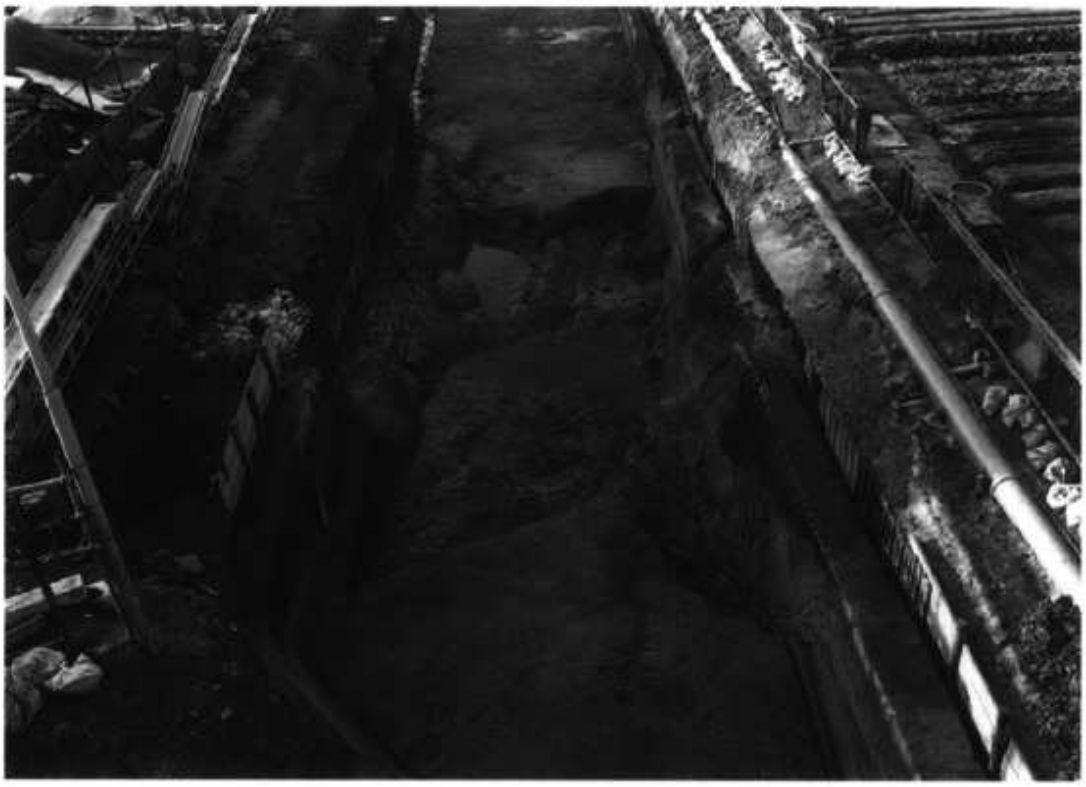
I区　D地層断面（南端）

II区　北壁地層断面

図版一二　長原遺跡東南地区　石器検出状態

I区　長原13・12層石器検出状態（南東から）

I区　長原12層石器検出状態（南から）



I区　NR1201（南東から）

I区　NR1201内の杭検出状態（西から）

I区　長原９A層上面検出小穴群（北西から）

I区　SD901（南東から）

1区　SX801（東から）

1区　SD801（北西から）

II区　SD701（西から）

I区　長原7層下面の遺構（北西から）

I区　SE701（南西から）

I区　SP701（西から）

I区　SK701（南から）

図版一八　長原遺跡東南地区　室町時代の遺構

I区　長原3層下面の遺構（北西から）

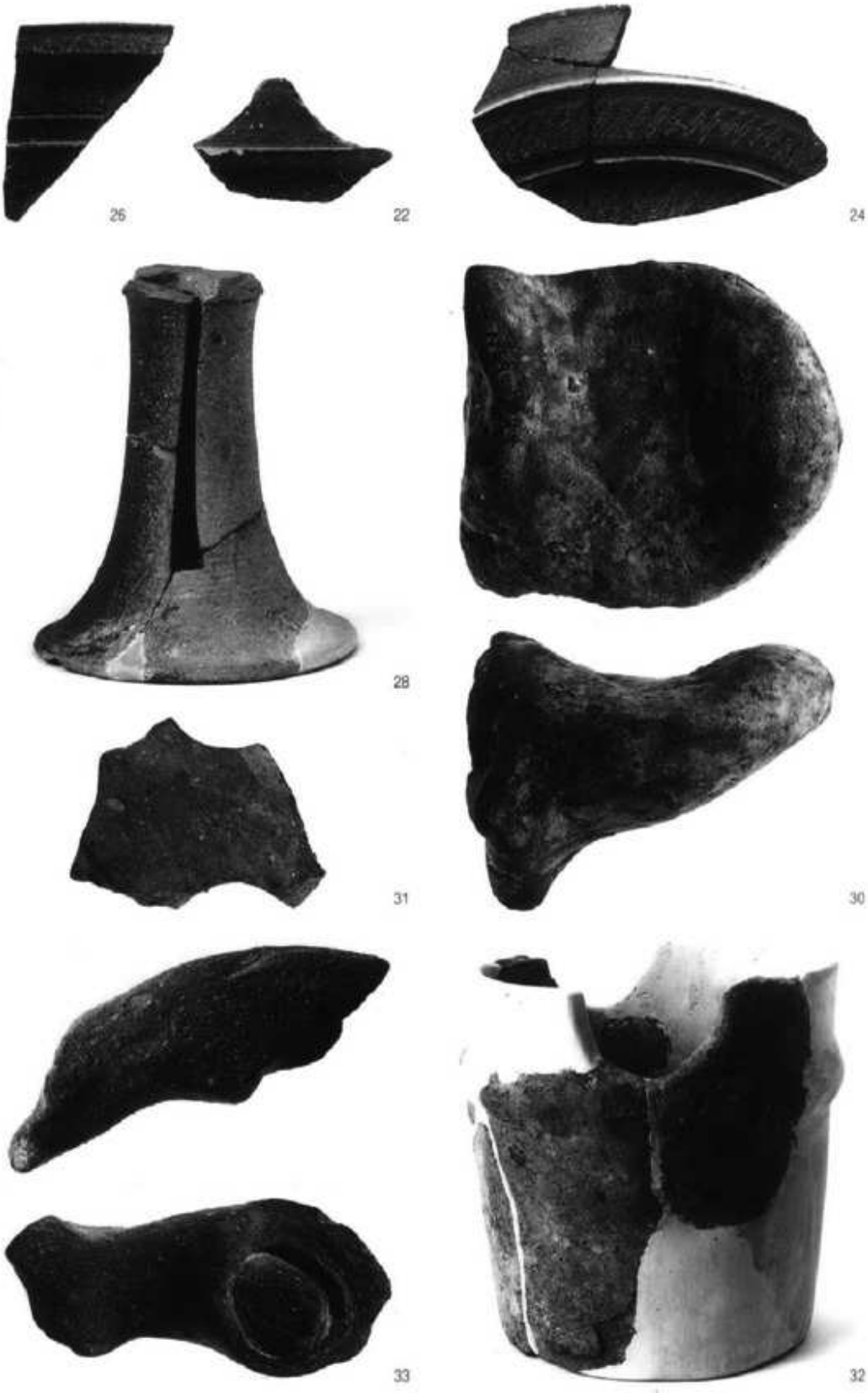
I区　長原3層下面の遺構（南東から）

I区　SK303・304（北から）

図版一九　瓜破遺跡東南地区　各層出土の遺物

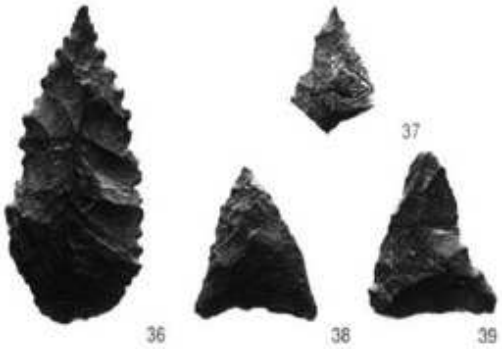
長原2層(1・9)　長原3層(2・3・10・17)　長原4層(6・7・14・15・16)　長原6層(18・19)

図版二〇　瓜破遺跡東南地区　各層出土の遺物



長原2層(30)　長原3層(24)　長原4層(32・33)　長原6層(31)　長原7層(22・26・28)

図版二一　瓜破遺跡東南地区　各層と遺構出土の遺物



長原2層(37・38)　長原3層(35・36・39)　SK801(40)
SK601(41)　SD601(42・43)　SK401(44・45)　SD302(51)

図版二二　瓜破遺跡東南地区　遺構出土の遺物

49

48

50

61

52

55

56

53

57

63

65

64

62

SD404 (48 · 49)　SD301 (50)　SD202 (52 · 53)　SD203 (55 ~ 57 · 61)　SE211 (62 ~ 65)

図版二三　長原遺跡中央地区　各層出土の遺物

70

67

72

66

73

71

69

76

75

77

長原4A層(66・70)　長原4Bi層(67・69・71～73・75・76)　長原4Biii層(77)

図版二四　長原遺跡中央地区　各層と遺構出土の遺物

78

80

79

82

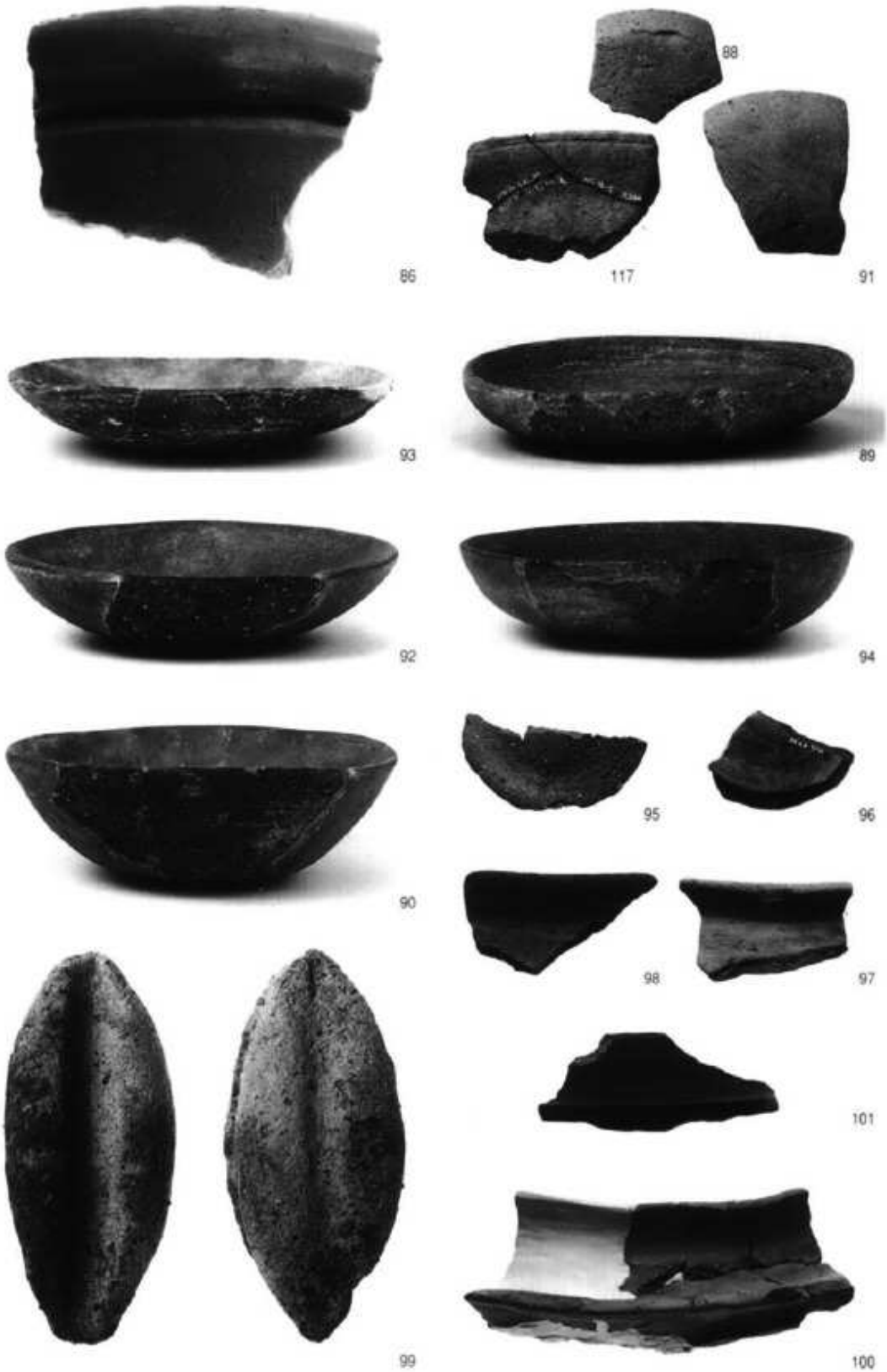
85

83

84

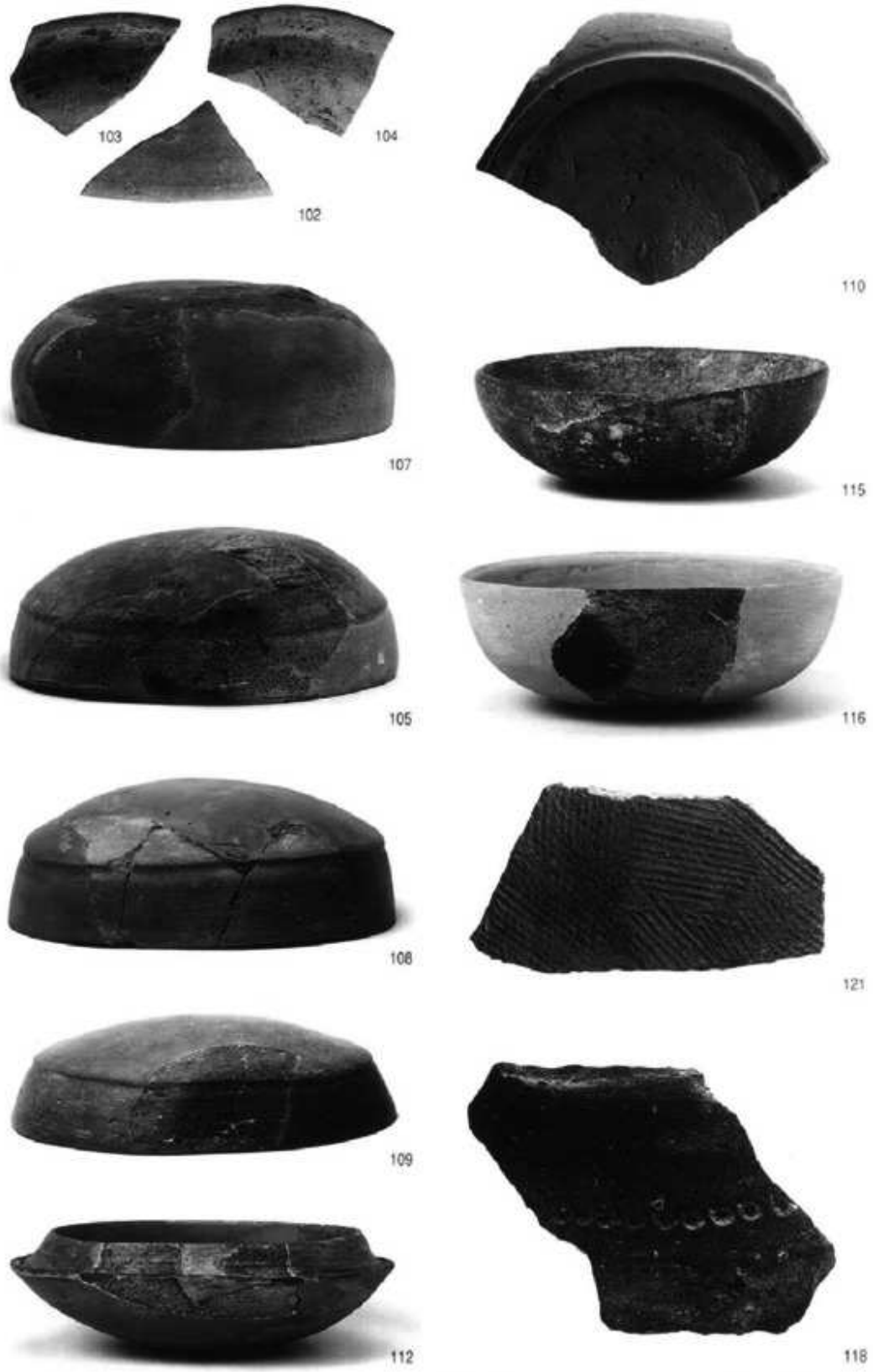
長原4A層(78)　長原6B層(79・80・82・83)　SK701(85)　SD701(84)

図版二五　長原遺跡東南地区　各層出土の遺物



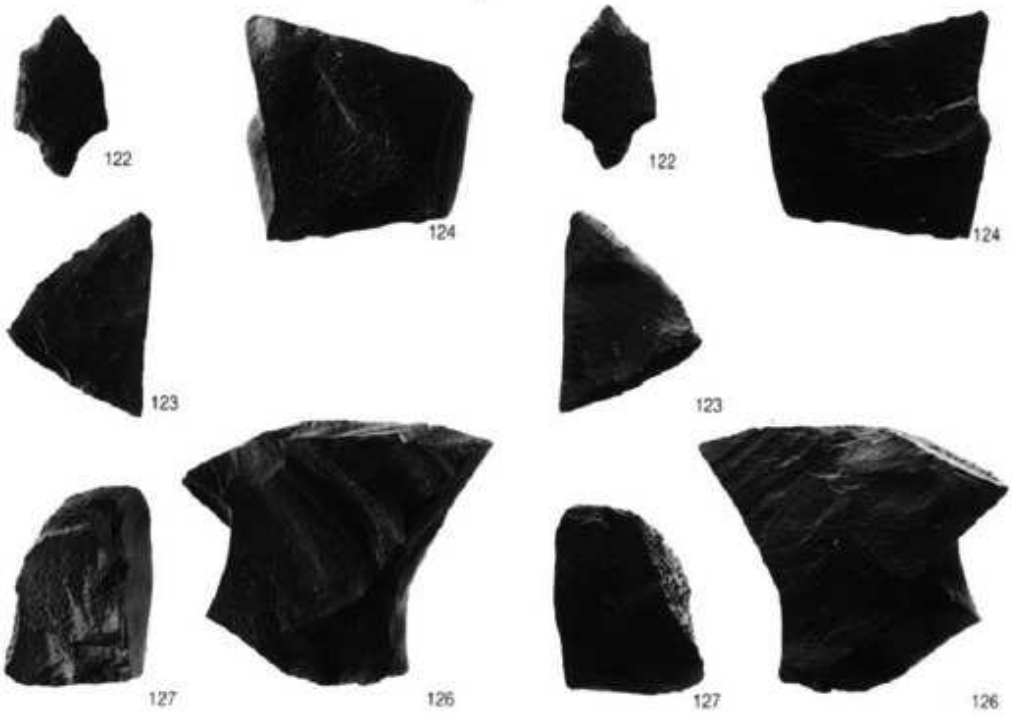
長原3層 (89)　長原4層 (86・88・90～101)　長原6層 (117)

図版二六　長原遺跡東南地区　各層出土の遺物

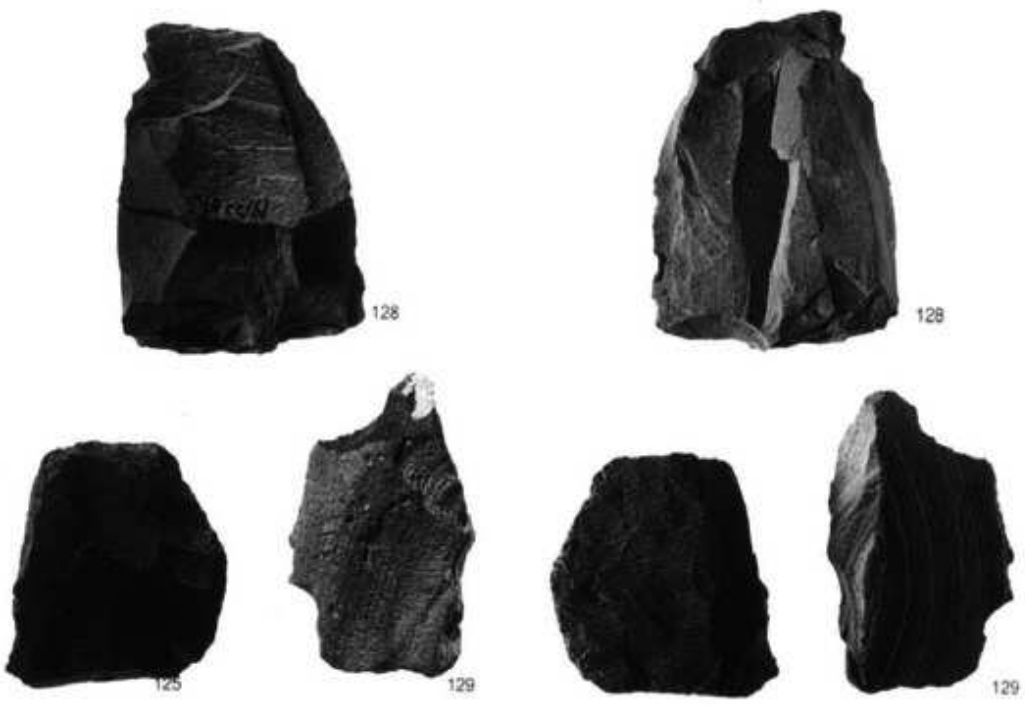


長原2層(121)　長原4層(102～105・110)　長原6層(107・108・112・116・118)
長原7層(109・115)

図版二七　長原遺跡東南地区　各層出土の遺物

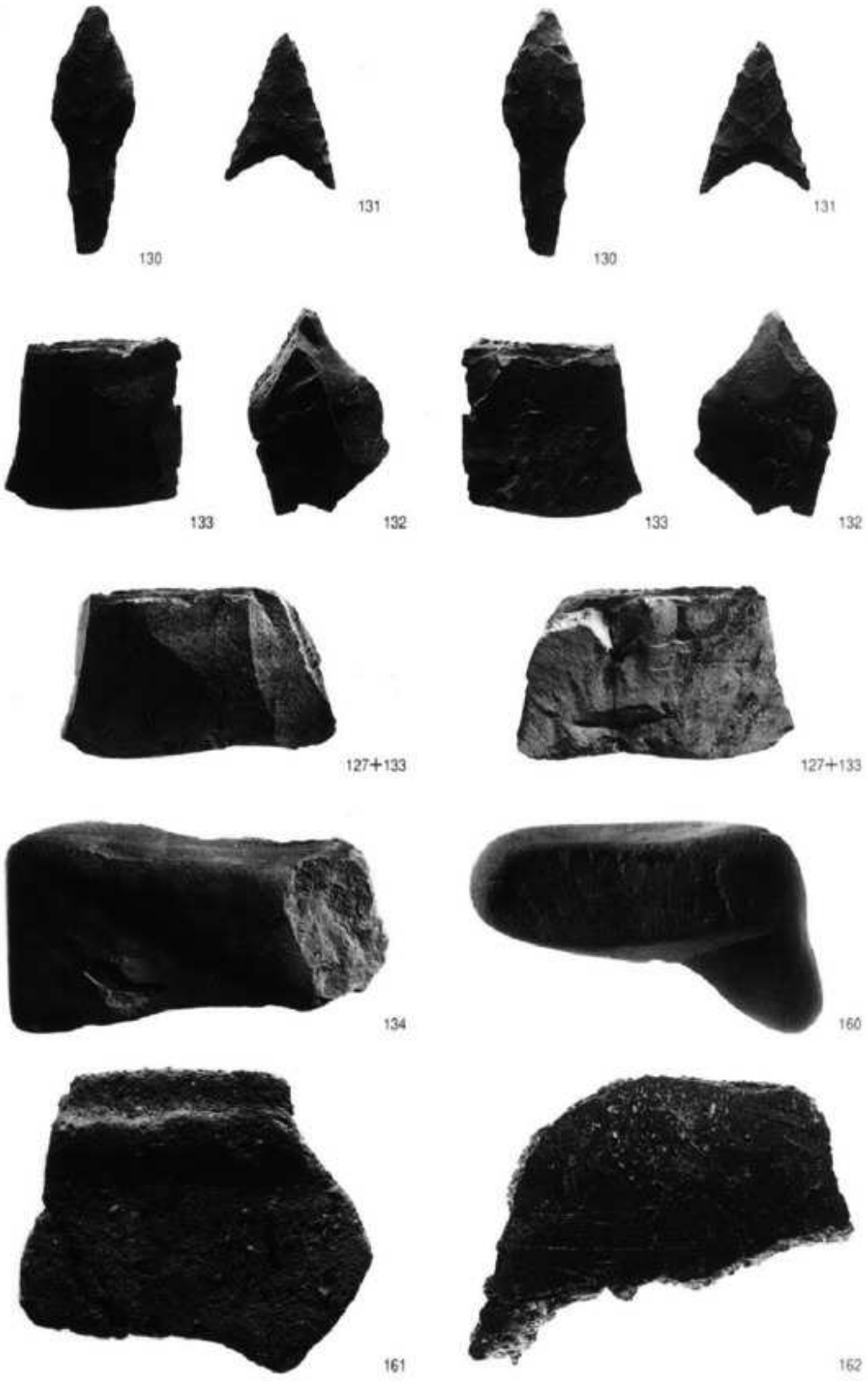


長原4層（122・124）　長原6層（123・126・127）



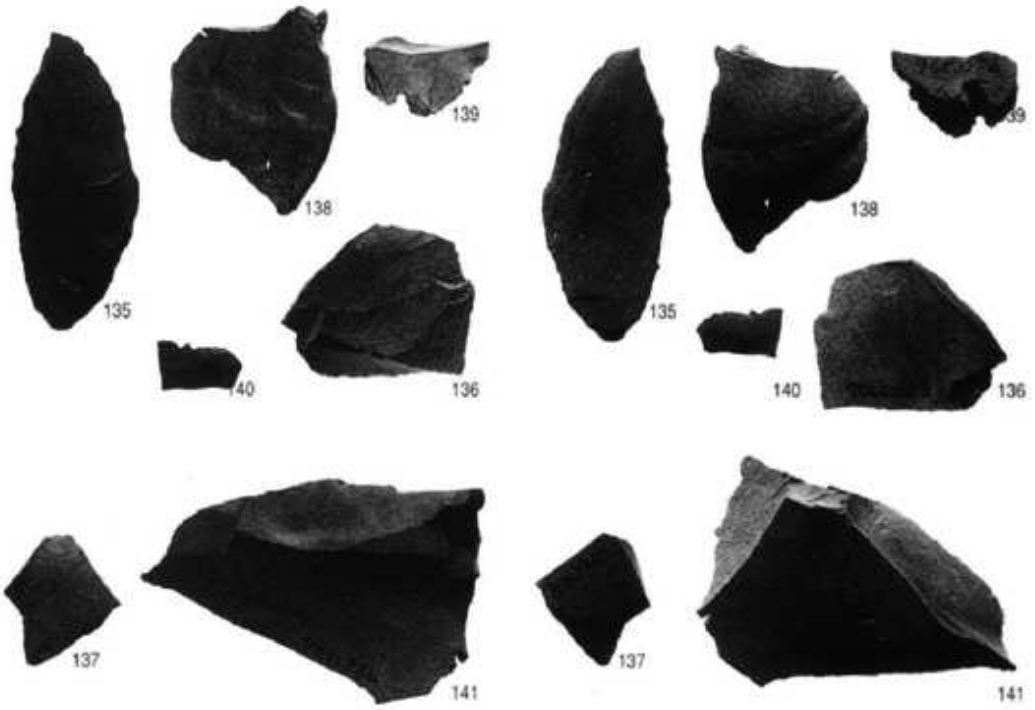
長原4層（129）　長原6層（125・128）

図版二八　長原遺跡東南地区　各層と流路出土の遺物

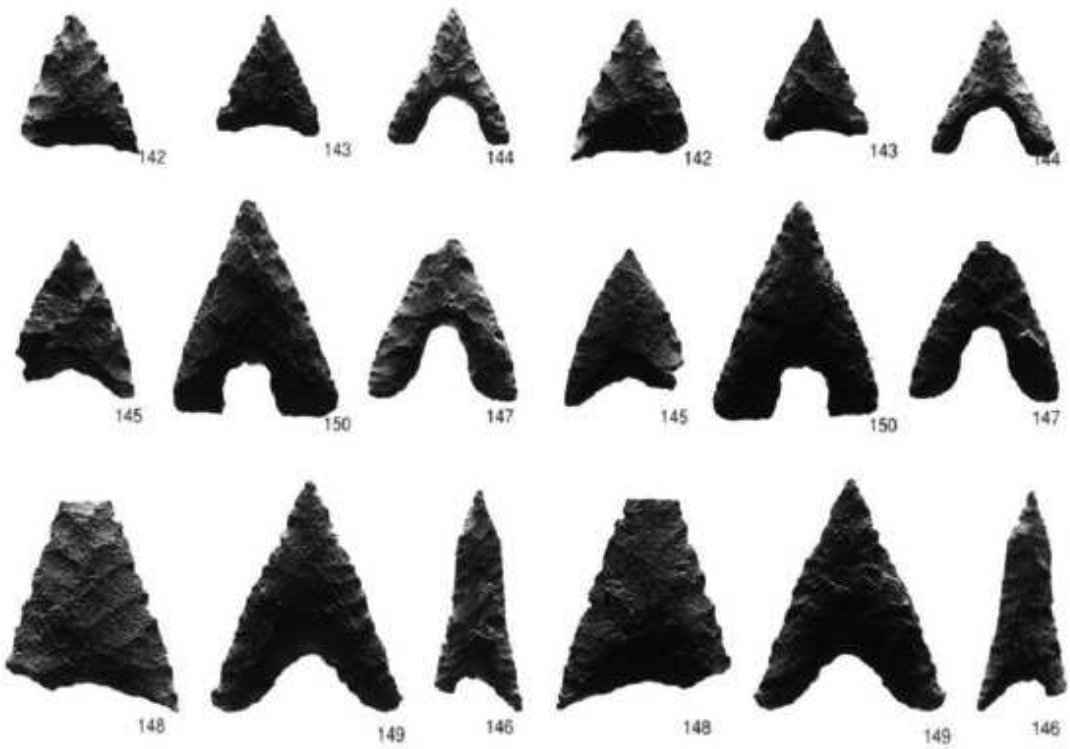


長原6層(127)　長原8層(130)　長原9層(131・132・134)
長原10・11層(133)　長原12A層(160)　NR1201(161・162)

図版二九　長原遺跡東南地区　各層出土の遺物

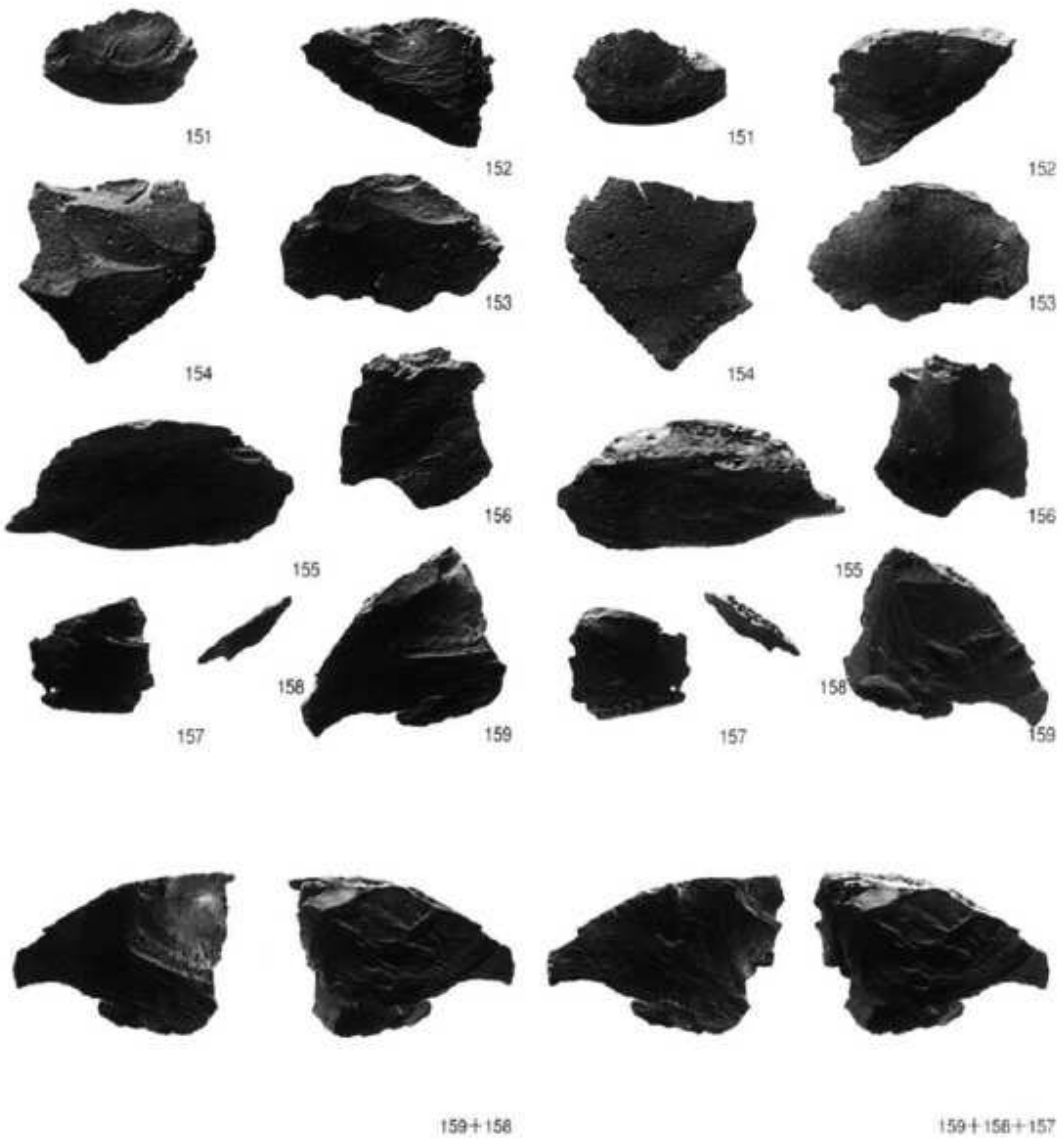


ナイフ形石器・剥片：長原13A層（135 ～ 141）

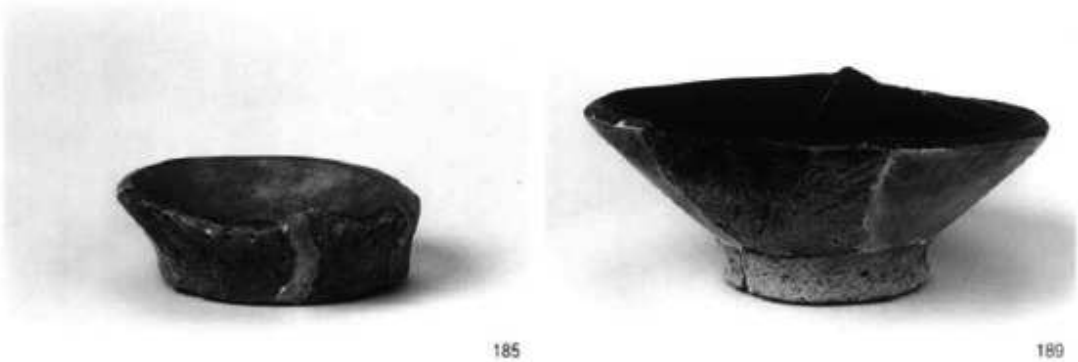


石鏃：長原12A層（142 ～ 150）

図版三〇　長原遺跡東南地区　各層と開析谷出土の遺物

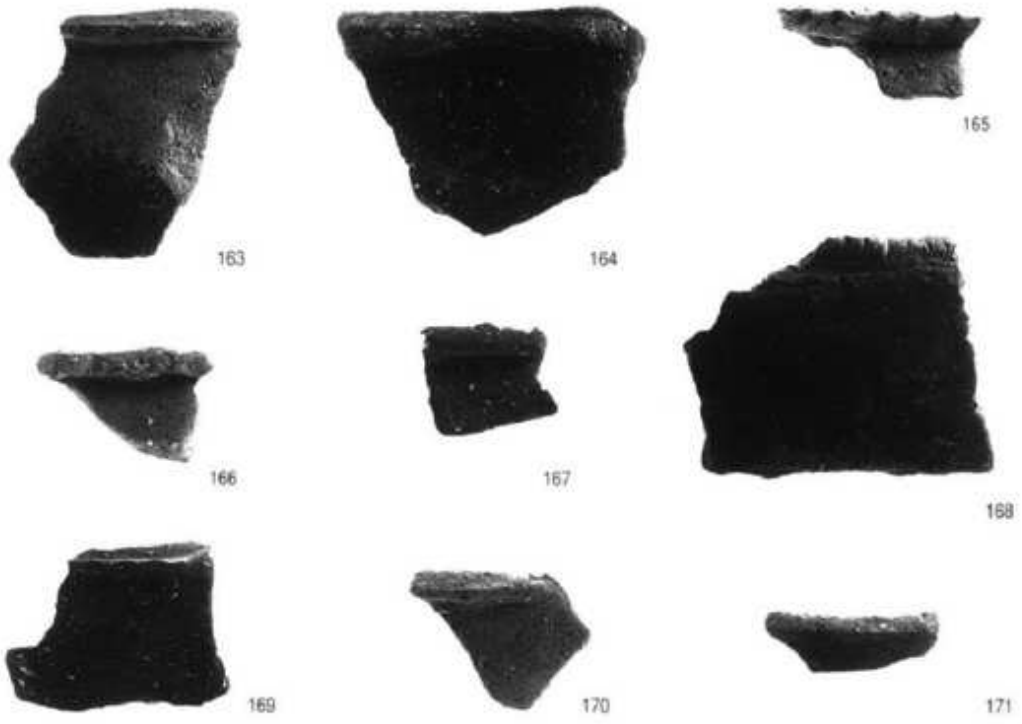


剥片：長原12A層（153・154）　長原12B層（151・152・155～159）

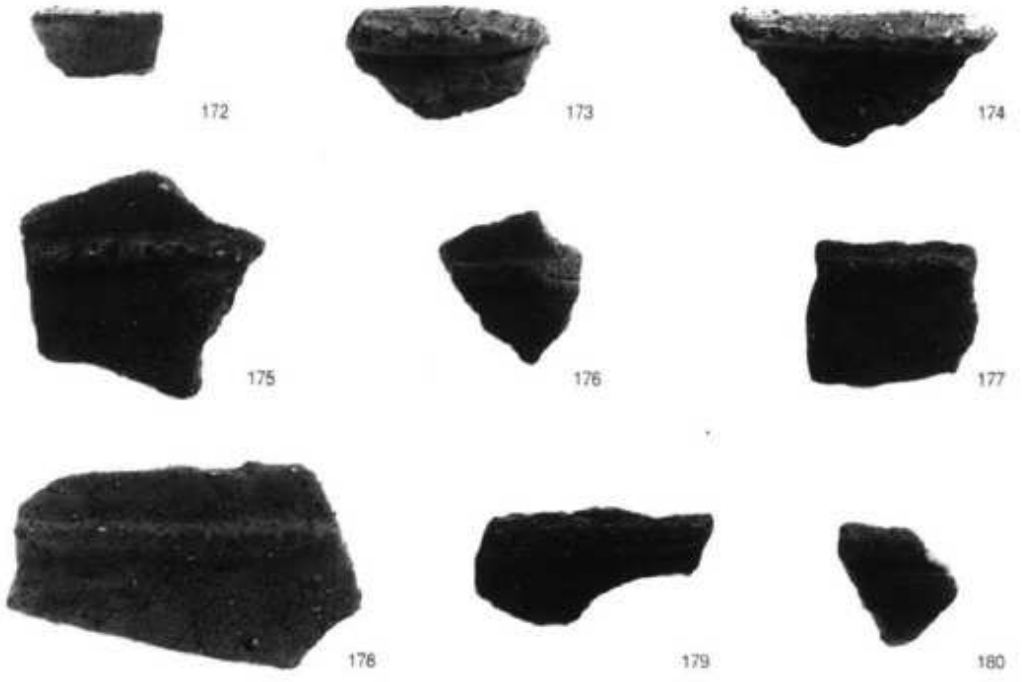


長原式土器：長原9層（185・189）

図版三一　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

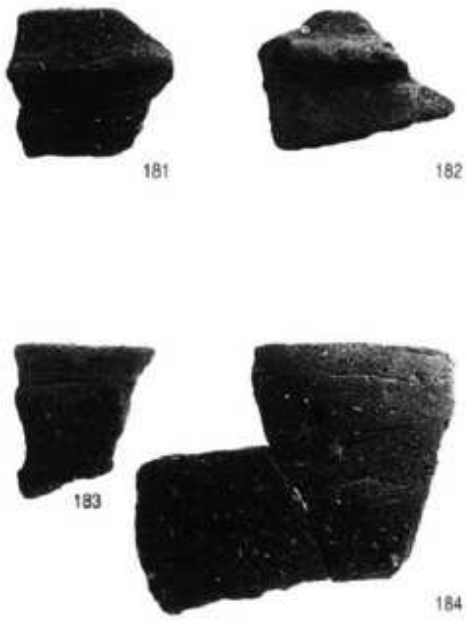


長原式土器：長原9層（163 ～ 171）

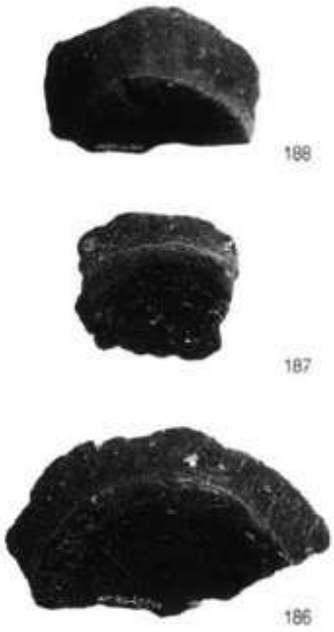


長原式土器：長原9層（172 ～ 180）

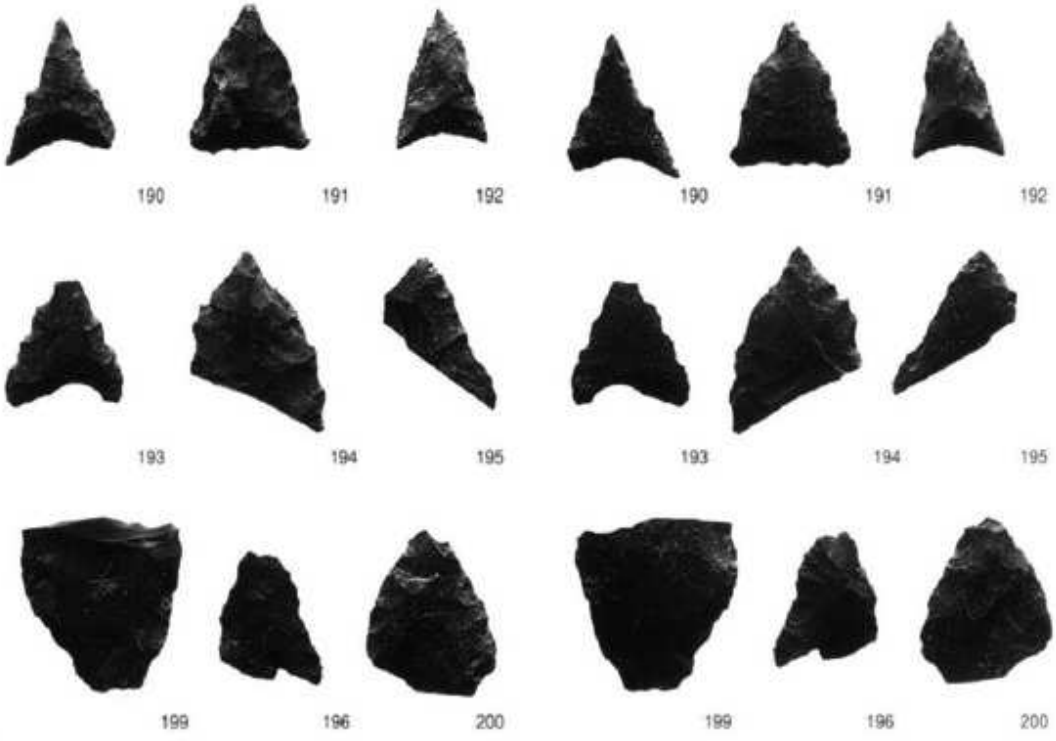
図版三二　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物



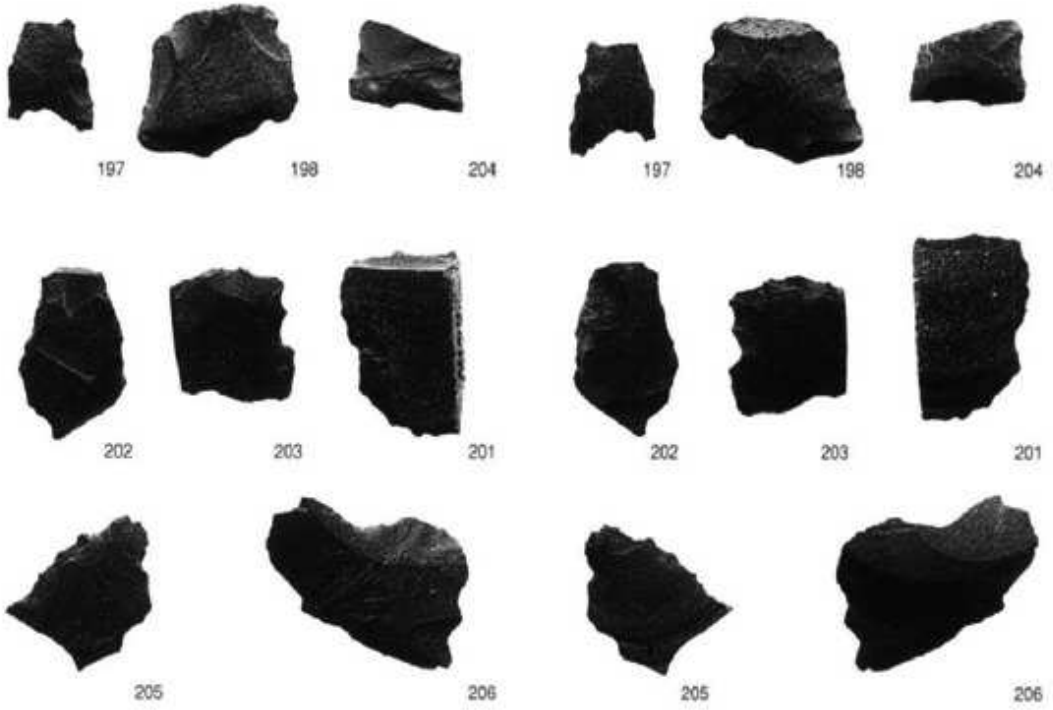
長原式土器：長原9層（181 ～ 184）



長原式土器：長原9層（186 ～ 188）



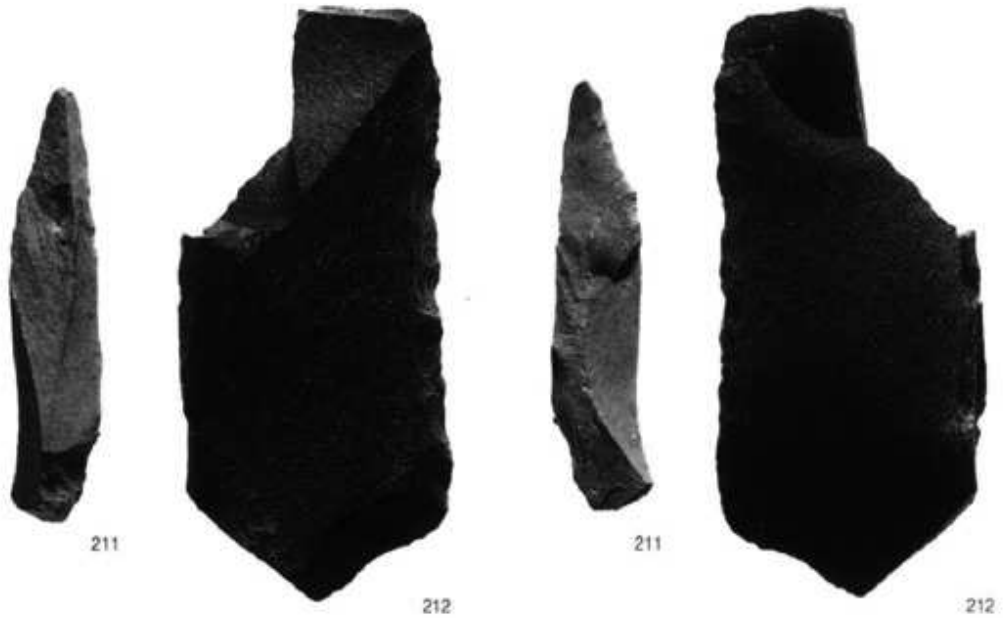
未製品を含む石鏃・2次加工がある剥片：長原9層（190 ～ 196 ・ 199 ・ 200）



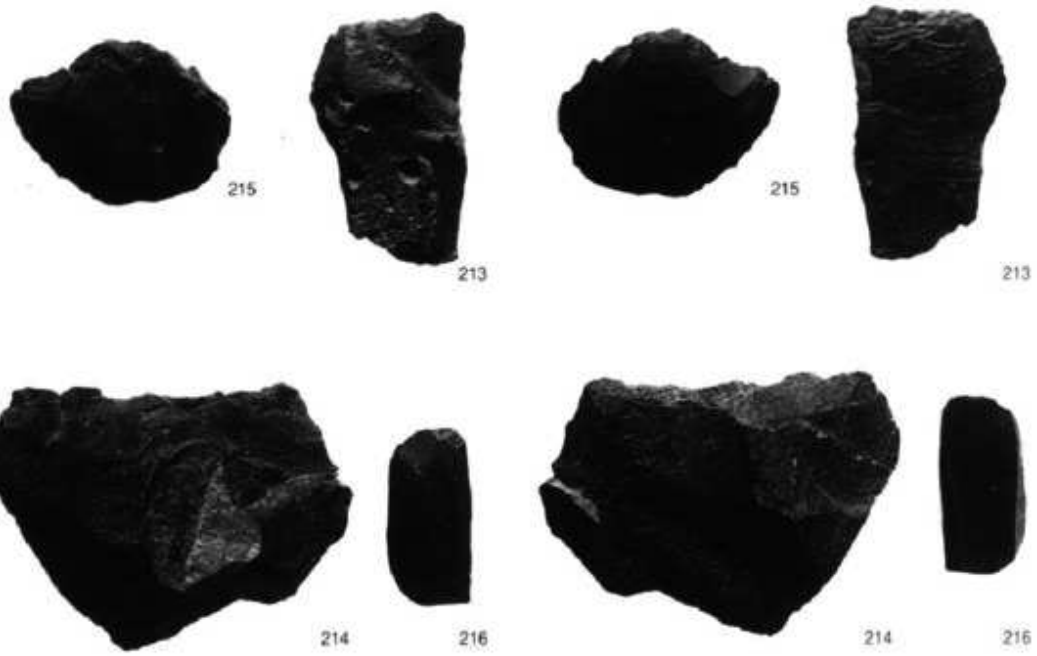
石鏃未製品・2次加工がある剥片：長原9層（197・198・201～206）

未製品を含む石錐・石鏃：長原9層（207～210）

図版三四　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

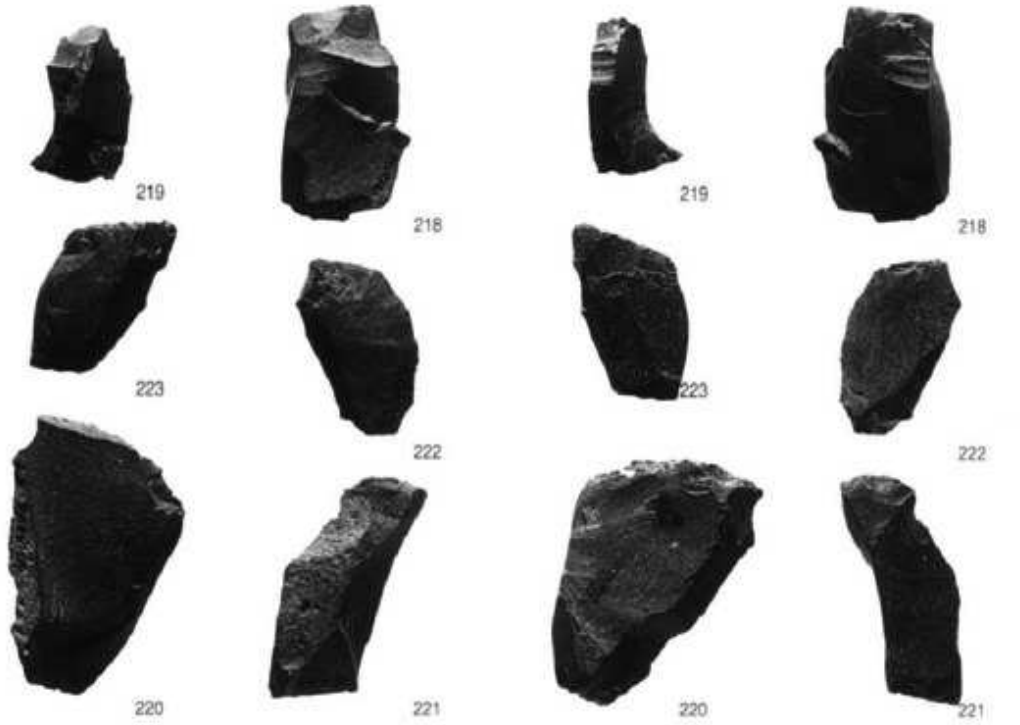


石錐：長原4層（211）　直刃削器：長原9層（212）

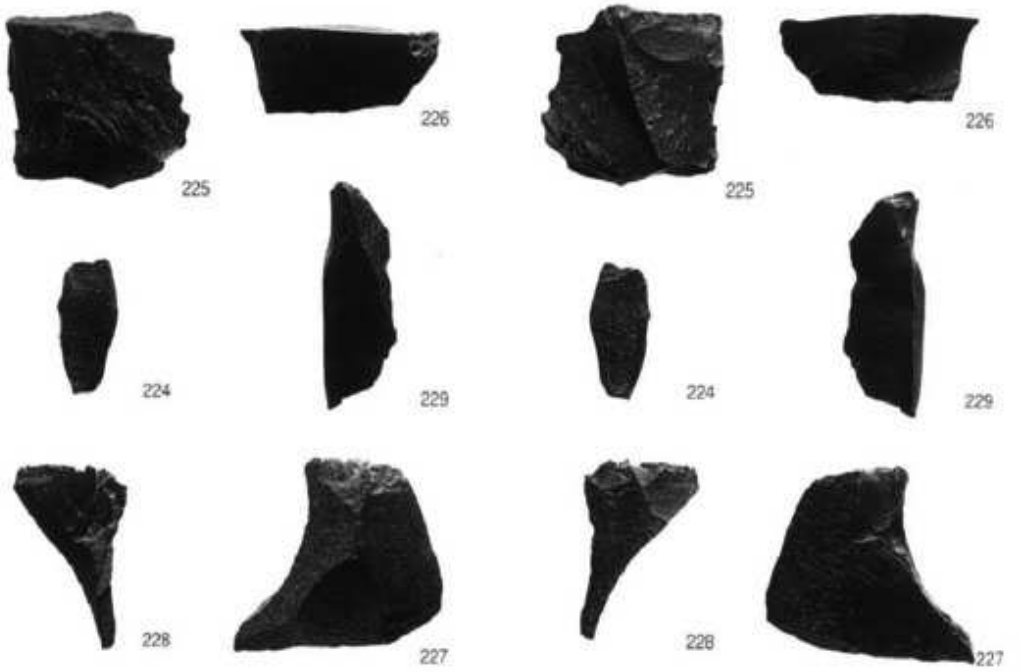


クサビ：長原9層（213 ～ 216）

図版三五　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

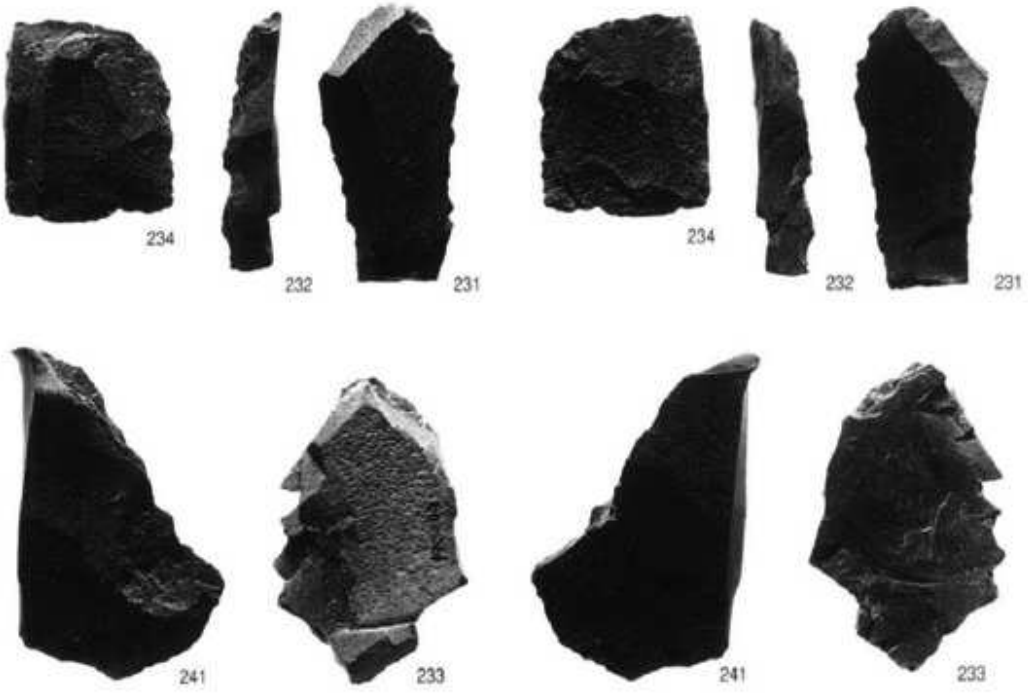


クサビ：長原9層（218 ～ 223）

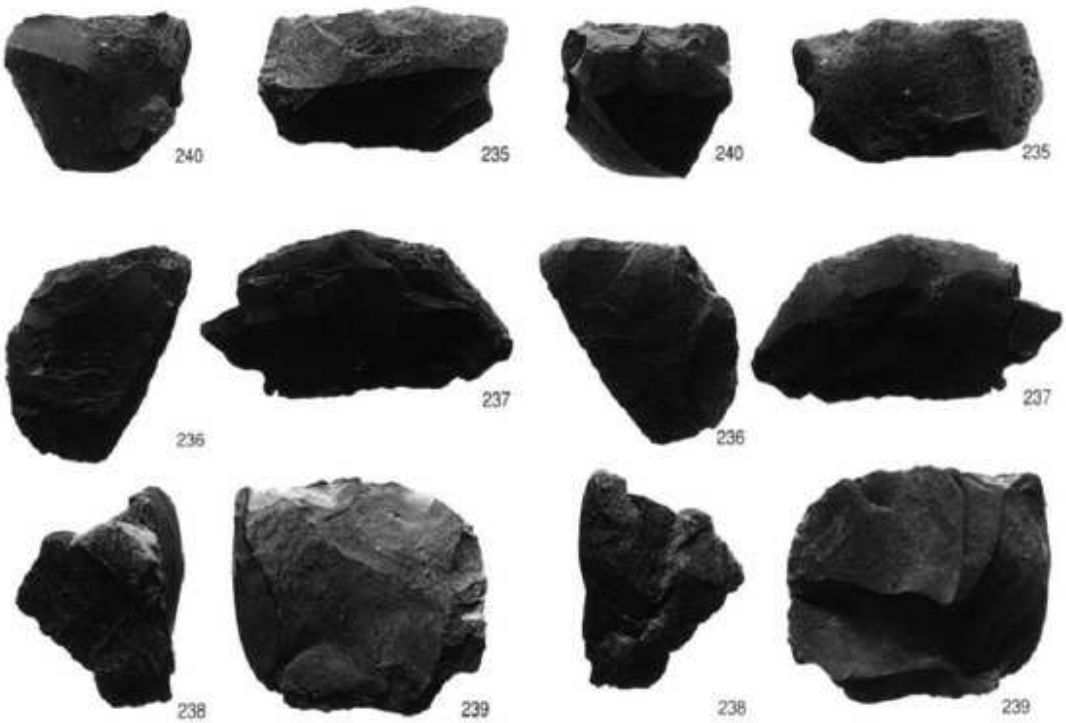


クサビ：長原9層（224 ～ 229）

図版三六　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

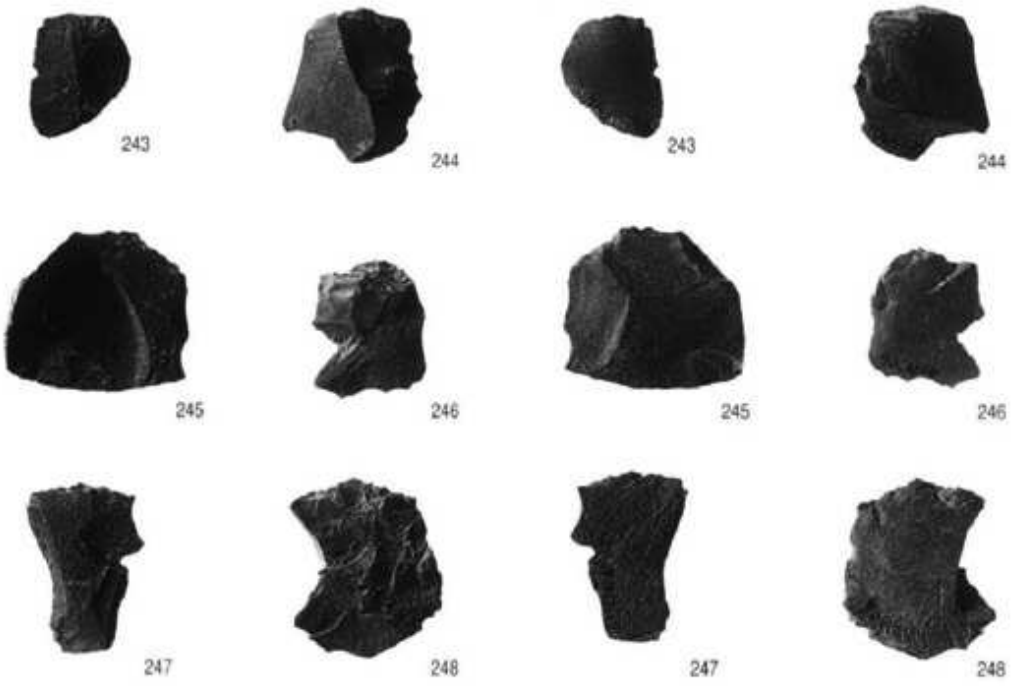


クサビ：長原9層（231～234・241）

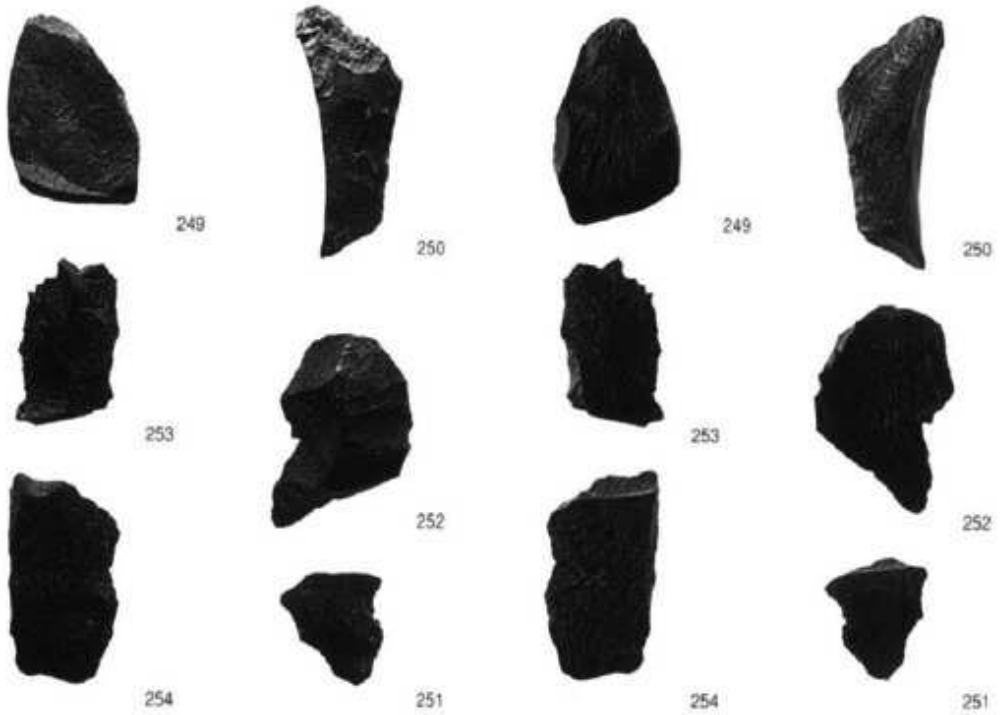


クサビ：長原9層（235～240）

図版三七　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

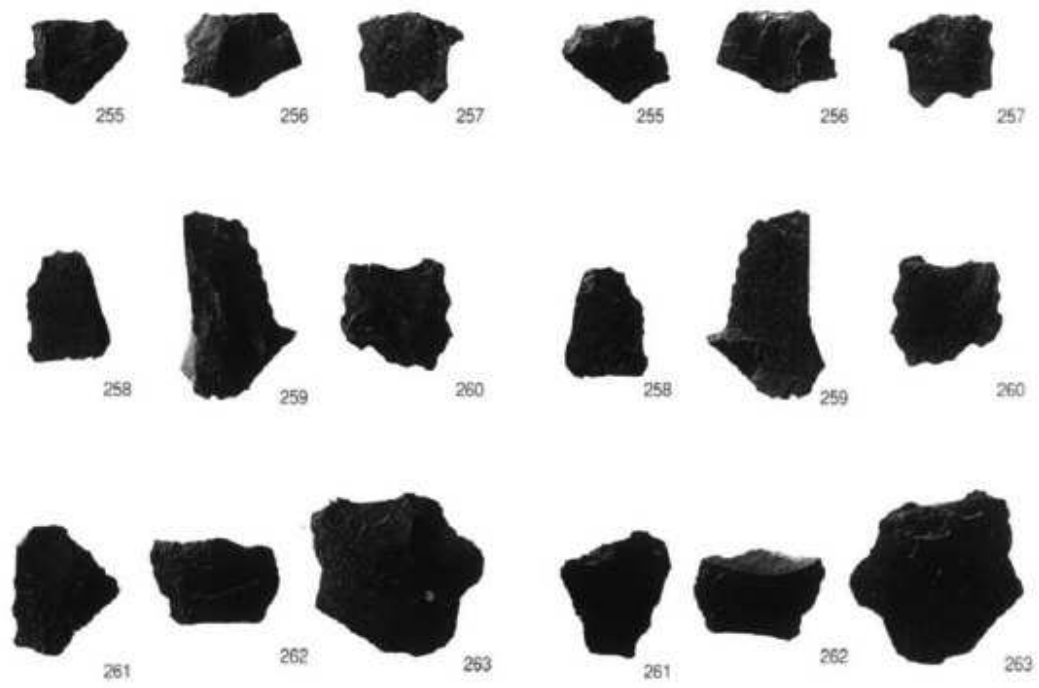


クサビ剥片：長原9層（243 ～ 248）

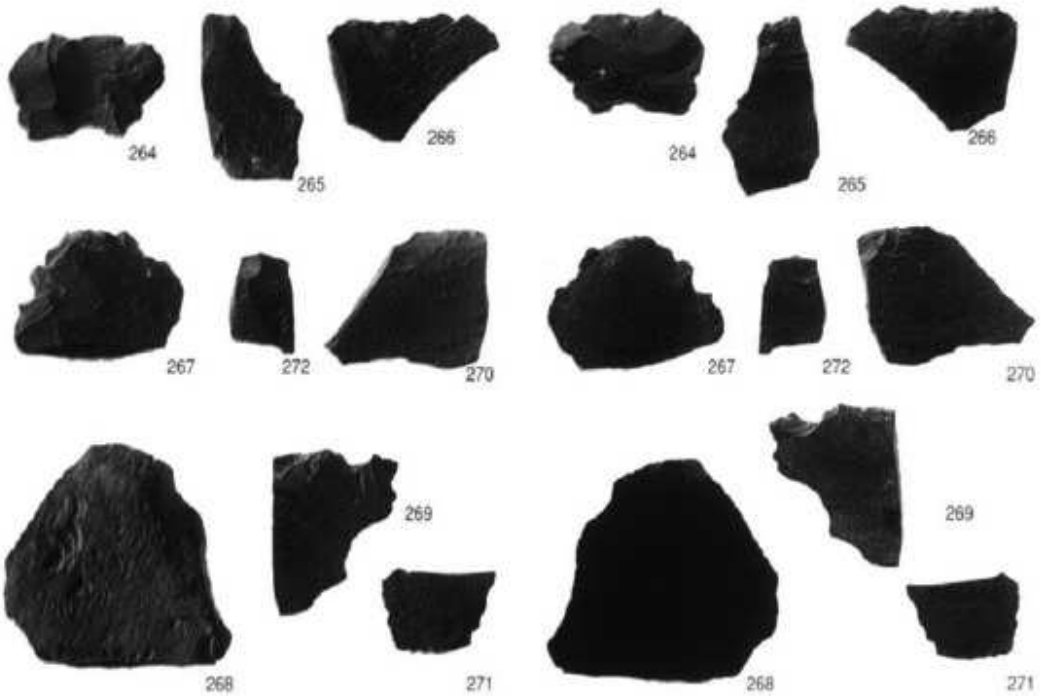


クサビ・クサビ剥片：長原9層（249 ～ 254）

図版三八　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

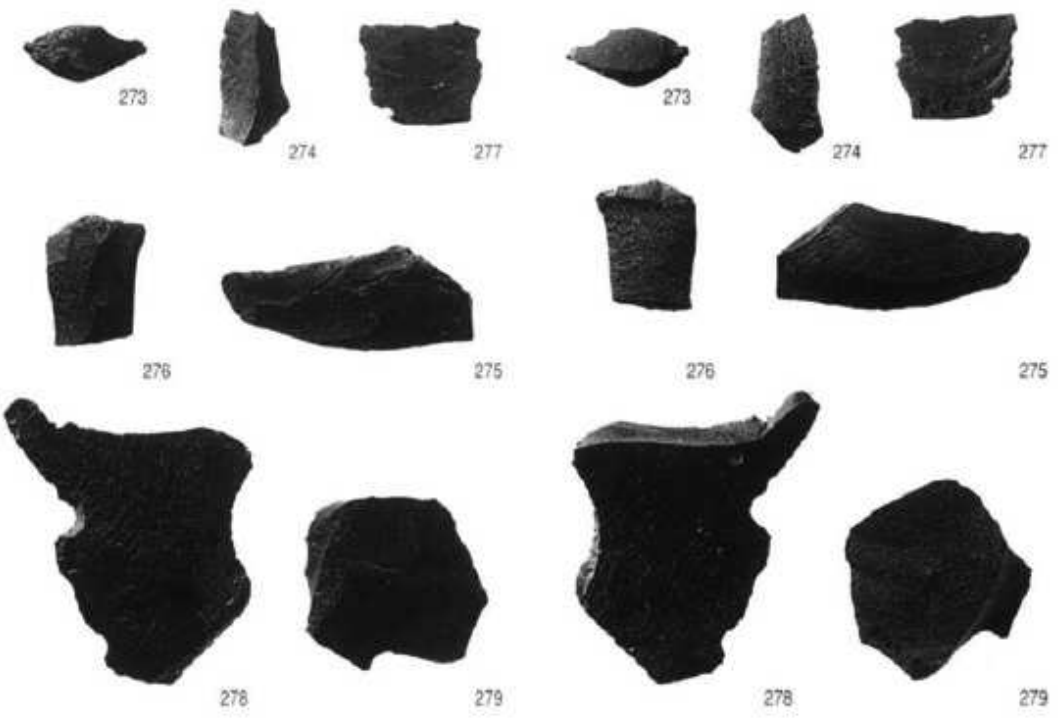


クサビ剥片：長原9層（255 ～ 263）

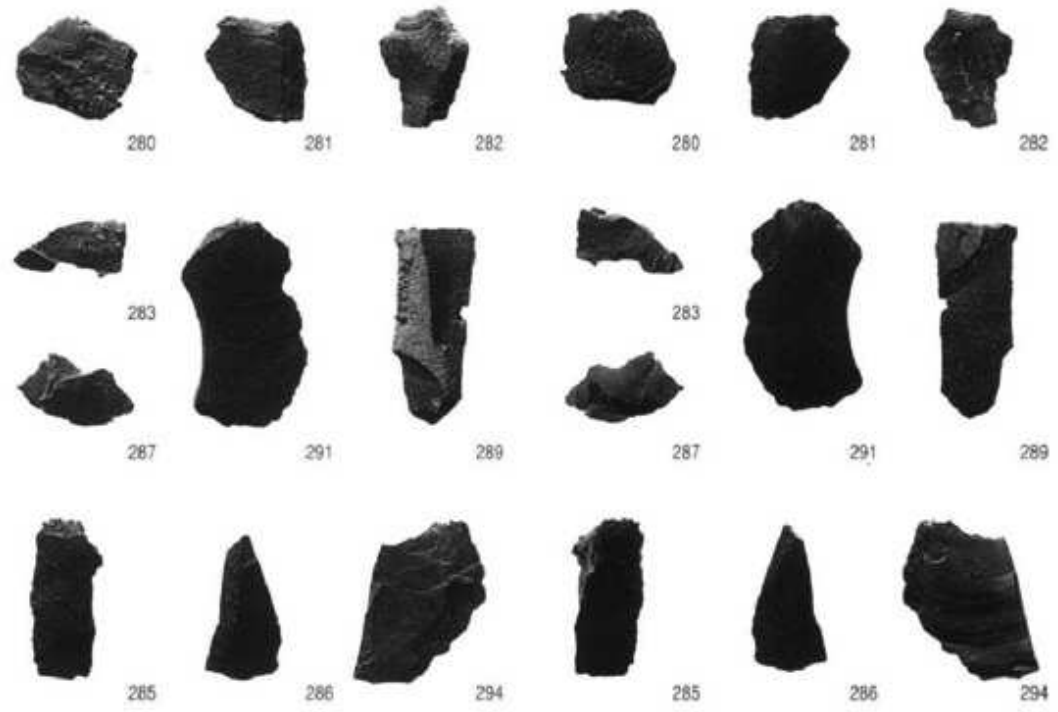


クサビ剥片：長原9層（264 ～ 272）

図版三九　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物

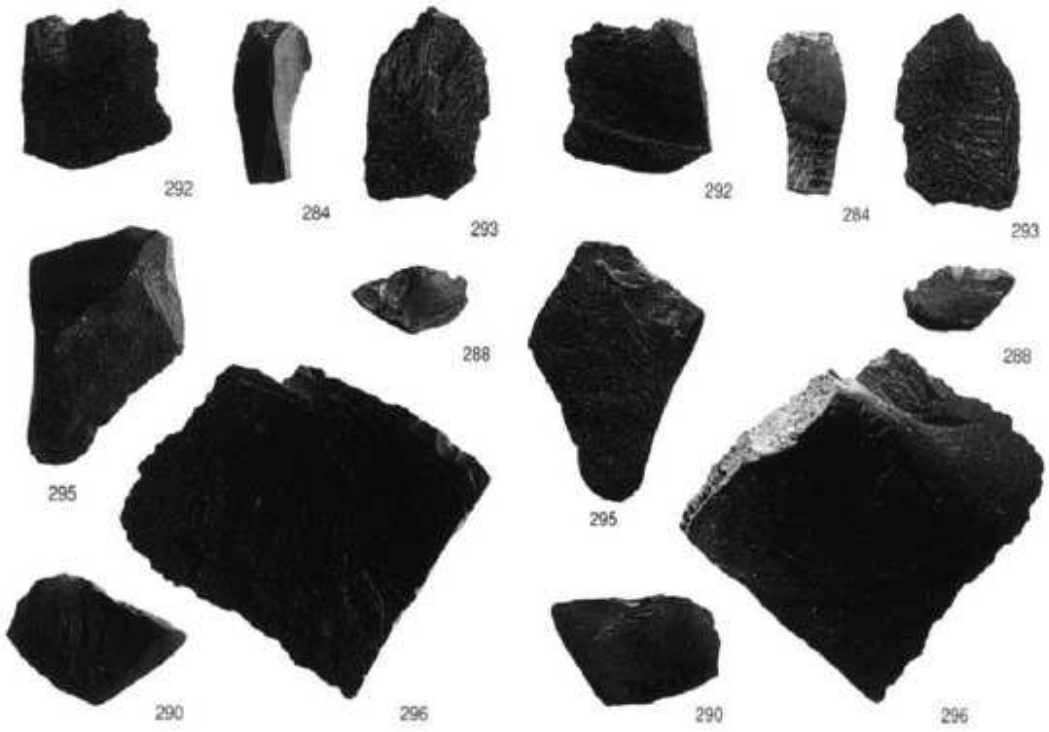


クサビ剥片：長原9層（273～279）

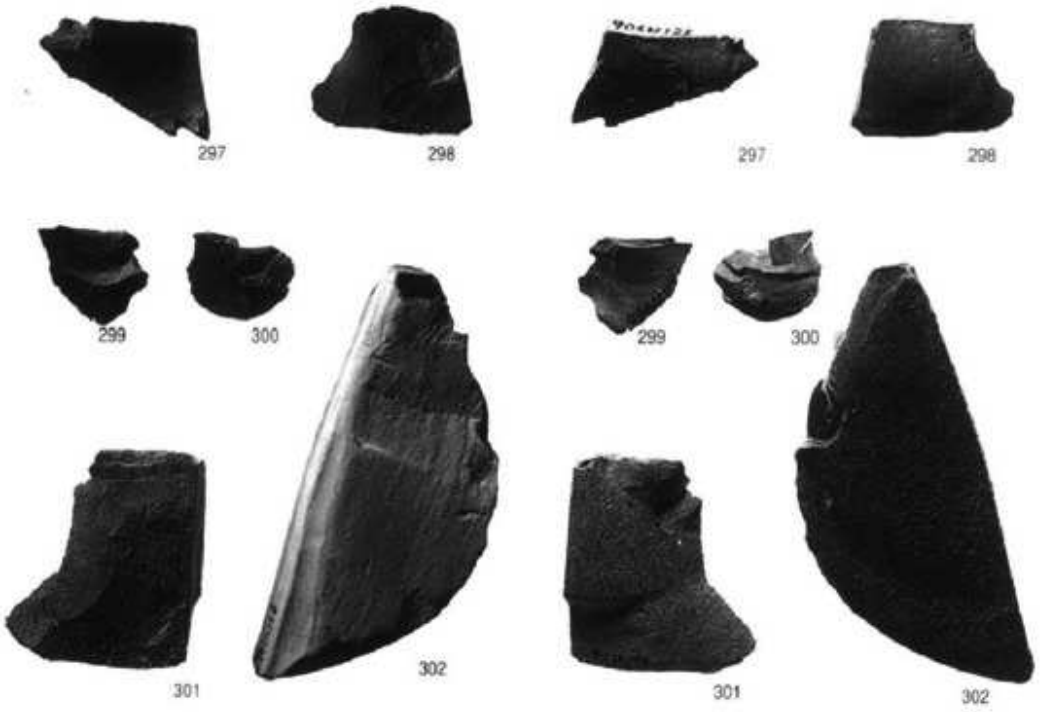


クサビ剥片：長原9層（280～283・285～287・289・291・294）

図版四〇　長原遺跡東南地区　開析谷出土の遺物



クサビ・クサビ剥片：長原9層（284・288・290・292・293・295・296）



調整剥片・クサビ剥片：長原9層（297～302）

219+218

218+219

297+298

299+300

接合資料：長原9層（218・219・297～300）

297+298

299+300

217

242

230

クサビ：長原9層（217・230・242）

図版四二　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物

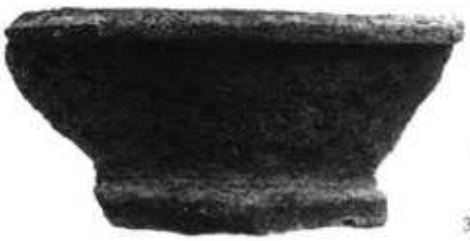
303

305

304

306

307


308

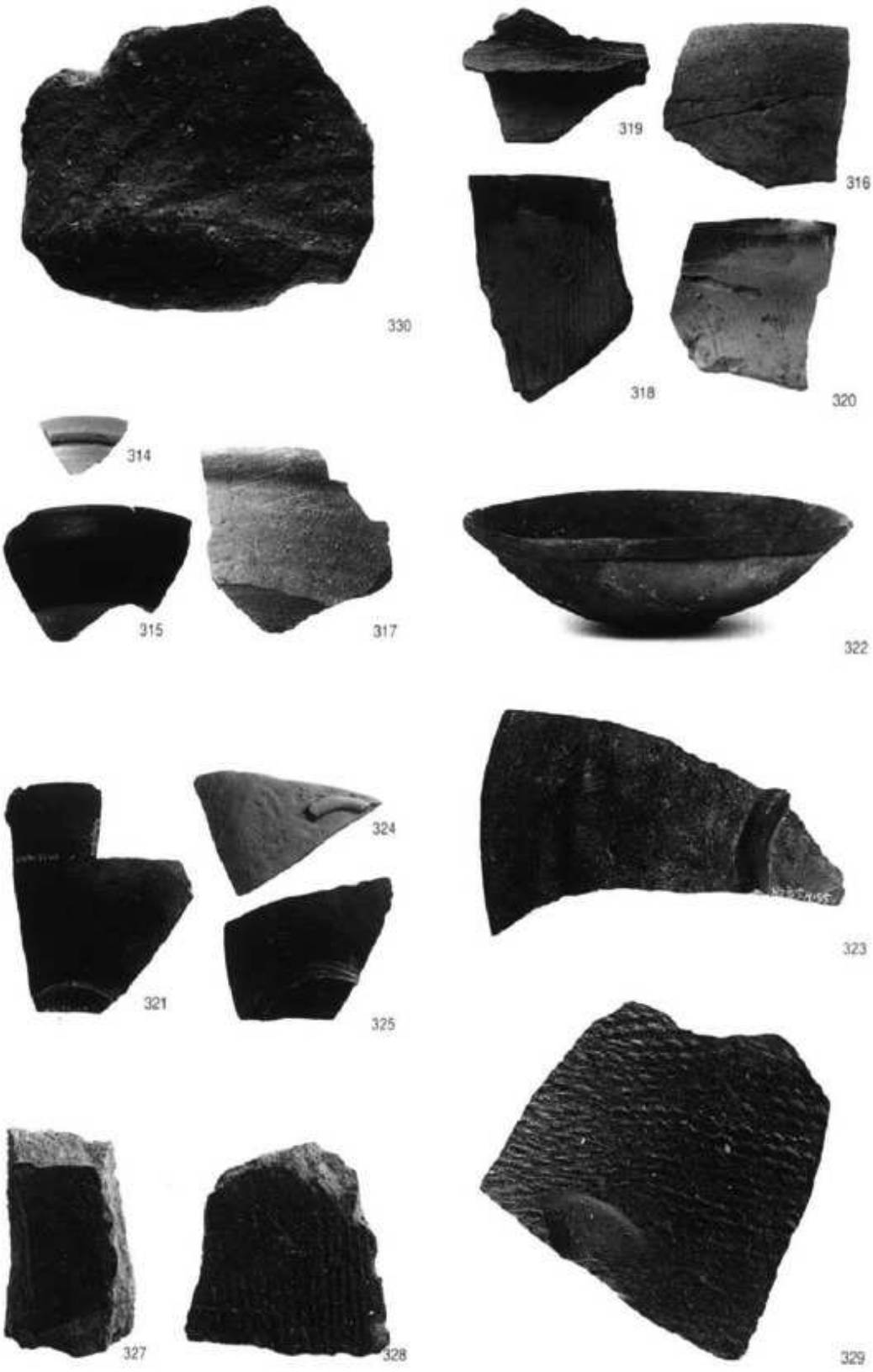
309

313

311

SD702 (303)　SD703 (304 · 305)　SE701 (306 ~ 309)　SK701 (311 · 313)

図版四三　長原遺跡東南地区　遺構出土の遺物



SD301 (314 ~ 325 · 327 ~ 330)

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告X

ISBN4-900687-16-2

1997年3月31日　発行©

編集・発行　財団法人 大阪市文化財協会

〒540　大阪市中央区法円坂1-1-35

（TEL 06-943-6833　FAX 06-920-2272）

印刷・製本　株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537　大阪市東成区深江南2-6-8

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume X

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1990

March 1997

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume X

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1990

March 1997

Osaka City Cultural Properties Association